

山形県埋蔵文化財調査報告書第16集

熊ノ前遺跡

発掘調査報告書

1979

山形県教育委員会

くま の べ
熊ノ前遺跡

発掘調査報告書

昭和 54 年 3 月

序

馬見ヶ崎川に沿う千歳山のふもとに新生山形を期し、県庁舎新築移転が策定されたのは、昭和43年9月の第二次総合計画であります。

昭和48年に着工、3ヶ年をついやして、昭和50年9月に完成いたしました。以来新県庁舎は5年目を迎え、周囲の環境も自然と調和した縁豊かな新らたな県部として見事に変貌いたしました。

本報告は、山形県教育委員会が昭和50年4月～6月、及び昭和53年5月～7月の二次にわたる、県道滑川～須川橋線に係る「熊ノ前遺跡」の発掘調査報告書であります。

熊ノ前遺跡は、山形県内でも有数な縄文時代中期の大集落跡であることが、発掘調査によって明らかにされました。その間、山形市教育委員会による発掘調査も二次にわたりて実施され、計4次の調査によって莫大な資料が得られました。

この結果、郷土「山形の歴史」とりわけ先史時代の空白の一ページを飾ることができました。この成果は、一重に御協力と御理解をいただいた関係機関各位をはじめ炎天下のもと直接発掘調査に従事された方々に心から感謝の意を表します。

埋蔵文化財は、近年大規模開発とのかかわりの中で、遺跡の発掘調査も増え大規模化の傾向にあります。県民の安定生活の向上と、国民共有の財産である埋蔵文化財の保護との間には、多くの問題が山積みされており、県教育委員会においてはこの間の調整に銳意努力を続けております。又、本報告書を通して、埋蔵文化財に対する理解と、今後の研究の一助となれば幸いです。

終りに本調査に長期間参加された調査員はもとより、多大の御協力と御指導を賜った関係各位に対し、衷心から重ねて謝意を表します。

昭和54年3月

山形県教育委員会

教育長 吉村敏夫

例　　言

1 本報告書は第II次・第IV次調査の二度に亘る発掘調査報告書である。第II次調査は山形県新庁舎建設設計画に伴い、造園・一部道路整備工事に係るため山形県教育委員会が主体となり、昭和50年4月から6月まで調査が行なわれた。第IV次調査は県庁北東側に山形市立第一中学校が建設され道路取付工事に係るため、山形県教育委員会と山形市教育委員会が主体となり、合同調査団を編成し昭和53年5月から7月まで調査を実施した。

2 二度の調査に亘っては、山形県新庁舎建設事務所・山形県総務部管財課・山形市総務部管財課並びに山形県警察本部などの諸関係機関の協力を得て調査が行われ、ここに記して感謝を申し上げる。

3 調査体制は下記の通りである。

第II次調査　調査員 佐藤鎮雄・野尻 侃・佐藤正俊（山形県教育庁文化課）

第IV次調査　団長 柏倉亮吉（山形大学名誉教授）

　　調査員 佐々木洋治・佐藤正俊・佐藤義信（山形県教育庁文化課）

　　横戸昭二（山形市教育委員会社会教育課）

協力員 赤塚長一郎（山形県教育庁指導課）・相田俊雄（山形市立千歳小学校）・山口和夫（山形市立第四中学校）

補助員 安部 実・工藤ふたば

4 採図縮尺は、遺構では1/2・1/3とし、遺物は土器の実測は1/4・1/6を原則とし、拓影図は1/3とし、石器の実測図は石鎌・石匙等を1/2、磨製石斧・磨石・凹石等を1/3、石棒は1/4とし、それぞれにスケールを示した。採図の記号は、S T—住居跡・E L—炉跡・E P—柱穴・E D—周溝・S K—土壙・K U—土壤埋設土器・S M—配石遺構となり、住居跡・炉跡・土壙は全体にそれぞれ一連番号を付け、柱穴・周溝は各採図毎一連の数字で示した。

5 本報告書の作成は、佐々木洋治・佐藤正俊・横戸昭二が中心に執筆し、手塚 孝・野尻 侃・佐藤義信が補佐し、安部 実が補助した。本書の編集は佐々木洋治・名和達朗・茨木光裕が担当した。石器の実測は山形大学生諸君の協力を得、記して感謝する。

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の経過	2
(1) 第II次調査の経過	2
(2) 第IV次調査の経過	4
II 遺跡の位置と環境	
1 遺跡の立地	7
2 馬見ヶ崎扇状地の遺跡群	7
III 遺跡の概観	
1 遺跡の層序	10
2 遺跡の分布	10
3 遺物の出土状況	12
IV 遺構と遺物	
1 遺構	14
(1) 住居跡	14
(2) 炉跡	41
(3) 土壙・配石遺構	46
2 遺物	52
(1) 土器	52
a 土器片の分類	52
b 土器口縁部の分類	60
c 土器底辺部の分類	64
(2) 土製品	66
(3) 完形土器	88
(4) 石器の分類	112
V 総括	
1 遺跡について	143
2 遺構各説	144
(1) 住居跡	144

(2) 炉跡	146
(3) 土壇・配石遺構	146
3 遺物各説	147
(1) 繩文式土器	147
(2) 石器	150

挿図目次

第1図 遺跡概要図	3
第2図 調査地区全体図	5
第3図 遺跡位置・分布図	9
第4図 遺構配置図	11
第5図 土器出土分布図	13
第6図 103・104・102号住居跡	17
第7図 105・106・107号住居跡	19
第8図 108・109・110・111号住居跡	21
第9図 112号住居跡	25
第10図 121・122号住居跡	27
第11図 123・124・129・130号住居跡	31
第12図 125・126号住居跡	33
第13図 127・128・131・132号住居跡	37
第14図 各住居跡 炉跡(1)	43
第15図 各住居跡 炉跡(2)	44
第16図 各住居跡 炉跡(3)	45
第17図 3~12号土壇	47
第18図 14号土壇・配石遺構	49
第19図 101号住居跡出土土器(1)	53
第20図 101号住居跡出土土器(2)	55
第21図 101号住居跡出土土器(3)	57
第22図 102号住居跡出土土器(1)	59
第23図 102号住居跡出土土器(2)	61

第 24 図	103 号住居跡出土土器 (1)	63
第 25 図	103 号住居跡出土土器 (2)	65
第 26 図	105 号住居跡出土土器	67
第 27 図	106 号住居跡出土土器 (1)	69
第 28 図	106 号住居跡出土土器 (2)	71
第 29 図	107 号住居跡出土土器	72
第 30 図	108 号住居跡出土土器 (1)	73
第 31 図	108・109 号住居跡出土土器	74
第 32 図	110・111・112 号住居跡出土土器	75
第 33 図	121・122 号住居跡出土土器	76
第 34 図	123・124 号住居跡出土土器	77
第 35 図	125・130・131 号住居跡出土土器	78
第 36 図	127 号住居跡出土土器	79
第 37 図	127・128・132・133 号住居跡出土土器	80
第 38 図	129 号住居跡出土土器	81
第 39 図	口縁部実測図	82
第 40 図	底部拓影図 (1)	83
第 41 図	底部拓影図 (2)	84
第 42 図	底部拓影図 (3)	85
第 43 図	土製品実測図・土偶・その他	86
第 44 図	円盤状土製品拓影図	87
第 45 図	完形土器実測図 (1)	89
第 46 図	完形土器実測図 (2)	91
第 47 図	完形土器実測図 (3)	93
第 48 図	完形土器実測図 (4)	95
第 49 図	完形土器実測図 (5)	97
第 50 図	完形土器実測図 (6)	99
第 51 図	完形土器実測図 (7)	101
第 52 図	完形土器実測図 (8)	103
第 53 図	土器文様構成図 (1)	105
第 54 図	土器文様構成図 (2)	106
第 55 図	土器文様構成図 (3)	107

第56図 土器文様構成図(4)	109
第57図 土器文様構成図(5)	110
第58図 土器文様構成図(6)	111
第59図 石鎚実測図	113
第60図 石錐実測図	115
第61図 石匙実測図(1)	117
第62図 石匙実測図(2)	119
第63図 削器実測図	121
第64図 挖器実測図	123
第64図 簾状石器実測図	125
第66図 磨製石斧実測図	127
第67図 凹石実測図	129
第68図 線刻縄・砥石・磨石・石皿実測図	131
第69図 石棒実測図	133
第70図 石器出土分布図	134
 付表1 石鎚計測一覧表	134
付表2 凹石計測一覧表	136
付表3 簾状石器計測一覧表	138
付表4 石錐計測一覧表	138
付表5 石匙計測一覧表	140
付表6 挖器計測一覧表	141
付表7 削器計測一覧表	142

図版目次

図版 1	遺跡全景（第IV次調査時）	遺跡近景（第IV次調査時）
図版 2	遺跡近景（第II次調査時）	発掘区全景（第II次調査時）
図版 3	発掘風景（第IV次調査）	発掘風景（第II次調査）
図版 4	発掘区全景（第IV次調査）	発掘区全景（第II次調査）
図版 5	103号住居跡全景	E L 02 近接
図版 6	103・120号住居跡全景	E L 07 近接
図版 7	106号住居跡近接	E L 03 近接
図版 8	E L 03 近景	106号住居跡・2号土壤全景
図版 9	108号住居跡全景	108号住居跡近景
図版 10	109・111号住居跡全景	E L 05 近接
図版 11	109号住居跡・1号土壤全景	112号住居全景
図版 12	121・122号住居跡・14号土壤全景	E L 08 近接
図版 13	123・124号住居跡全景	E L 09・10 近接
図版 14	125・126号住居跡全景	125・126号住居跡近接
図版 15	E L 11 近接	E L 11 石器出土状態
図版 16	E L 12 近接	E L 12 埋設土器
図版 17	125・126号住居跡土層セクション	同上立石・石棒・磨石出土状態
図版 18	127・128号住居跡全景	E L 13 近接
図版 19	E L 13 土層セクション	E L 13 埋設立土器
図版 20	127号住居跡土器出土状態	E L 14 近接
図版 21	E L 14 土層セクション	E L 14 埋設土器
図版 22	129号住居跡全景	E L 15 近接
図版 23	E L 15 検出状況	135・136号住居跡全景
図版 24	E L 17・19 全景	E L 27 近接
図版 25	E L 26 近接	E L 20・21・24 全景
図版 26	E L 24・28 近接	E L 22・23 近接
図版 27	E L 29 近接	E L 30 近接
図版 28	3～12号土壤全景	3～10号土壤近接
図版 29	甕棺出土状態（SK 3・5～9）	甕棺出土状態（SK 3・5・6）

図版 30	11号土壤近接	12号土壤近接
図版 31	13号土壤近接	14号土壤近接
図版 32	配石遺構全景	配石遺構近接
図版 33	住居跡出土土器（1）	住居跡出土土器（2）
図版 34	住居跡出土土器（3）	住居跡出土土器（4）
図版 35	住居跡出土土器（5）	住居跡出土土器（6）
図版 36	住居跡出土土器（7）	住居跡出土土器（8）
図版 37	住居跡出土土器（9）	住居跡出土土器（10）
図版 38	住居跡出土土器（11）	住居跡出土土器（12）
図版 39	住居跡出土土器（13）	包含層出土底辺部
図版 40	包含層出土底辺部	包含層出土底部
図版 41	土偶	円盤状土製品
図版 42	完形土器（1）	
図版 43	完形土器（2）	
図版 44	完形土器（3）	
図版 45	完形土器（4）	
図版 46	完形土器（5）	
図版 47	石鎌	石錐
図版 48	石匙（表）	石匙（裏）
図版 49	削器（表）	削器（裏）
図版 50	搔器（表）	搔器（裏）
図版 50	箆状石器	使用痕のある剝片
図版 52	磨製石斧	小型磨製石斧・線刻縞・砥石・その他
図版 53	凹石・磨石・石皿	
図版 54	石棒・砥石・石皿	

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

山形市の郊外、千歳山のふもとに新生山形を期して新県庁舎の新築工事が開始されたのは昭和48年7月である。勿論、新県庁舎敷地を中心とする道路づくりも同時にはじめられた。

山形県教育委員会は、これらの状勢から昭和48年8月、県庁舎敷地内における遺跡確認の分布調査を実施した。その結果、広範囲に踏査したにもかかわらず、遺物・遺構は検出できなかった。

明くる昭和49年3月、県道滑川一須川橋線の道路に面する小白川・あこや町付近の土地区画整理事業の作業中、多量の土器・石器などが、作業員・児童・生徒・学生・研究者などによって発見採集された。県教育委員会は、事態の緊急且つ重要性から遺跡を新規登録し、同年4月20日に現地調査を実施した。又、同月の22日から正確な遺跡の範囲及び包含層の確認調査を行なった結果、縄文時代の大集落跡(4,500~5,000年前頃)であることが判明した。

又、一方県教育委員会は県庁舎建設事務所・山形市・山形市教育委員会・その他関係各機関との協議を重ね、年次計画による発掘調査が実施されることになった。

遺跡の範囲は、約4万平方メートルと広大で、昭和49年から53年の5年間に県教育委員会・山形市教育委員会による単独又は合同による計4次の調査を行なった。詳細は夫々次のとおりである。

第Ⅰ次調査

主 体 山形市教育委員会・調査対象区域約900平方メートル

期 間 自昭和49年7月30日～至昭和49年8月25日

第Ⅱ次調査

主 体 山形県教育委員会・調査対象区域約400平方メートル

期 間 自昭和50年4月15日～至昭和50年6月18日

第Ⅲ次調査

主 体 山形市教育委員会・調査対象区域約400平方メートル

期 間 自昭和51年7月18日～至昭和51年9月1日

第Ⅳ次調査

主 体 山形県教育委員会・山形市教育委員会・調査対象区域約600平方メートル

期 間 自昭和53年5月8日～至昭和53年7月28日

2 調査の経過

(1) II次調査の経過

熊ノ前遺跡は昭和49年、県庁舎建設移転計画に伴い、山形市東部あこや地区にその建設工事が開始された。開始と共に敷地周辺に多量の土器・石器が発見され、県教育委員会では遺跡の範囲・時期・性格を決定すべき分布調査を同年4月に実施した。その結果、遺跡は敷地東部よりさらに東側へ大きく範囲が広がり、県庁舎と併設される県道と区画整備道路部分の発掘調査を昭和50年4月15日から同年6月18日まで延47日間にわたり実施した。

調査方法は区画整備道路 $6 \times 20\text{ m}$ と県庁舎庭園部に $2 \times 2\text{ m}$ グリッドを最小単位とする調査区を設定し、坪掘りで遺構・遺物の検出状況に応じて随時拡張していく方法をとった。グリッドの呼称はX軸（南北）を東から1・2・3……14、Y軸を北から1・2・3……10、とし、各グリッドはX軸から先に「3—5」グリッドと呼称する。

調査の全般的な経過は以下の通りである。

4月15日～4月20日

1—1グリッドから南北に1—10グリッドにかけてトレンチ状に遺構・遺物の分布と包含層の確認のため粗掘りを行なう。1—5～9グリッドのII・III層にかけて多量の土器片や石器が検出し、またIII層上面で遺構の掘り込みを考えられる落ち込みがグリッド内で発見され、X軸2・3列にかけて拡張精査し、遺構を追究。一方1—6から東西に12—6グリッドへ粗掘り作業を行ない、8～10—6グリッドにおいてII層下部から掘り込みが始まる遺構を確認し、8～10—4・5グリッドを拡張する。

4月22日～4月27日

1—5グリッドのIII層上面からコブシ大以上の大きな石が列をなして検出、炉の可能性があるため周囲のグリッドを掘る。他のグリッドでは同様に遺構が検出されたが、遺構が複雑な重複関係にあるため、調査は2～5—4～10グリッドにかけて広い範囲に粗掘り作業を行なう。また一部では先に発見された遺構の精査を行ない、遺構番号と100番代の101号から名付け精査を進める。一方調査区内の土層セクションを測図し、基本層序の決定を行なった。また各グリッド共に一括土器や石器の出土が多いため、それらの出土状況の撮影を行なう。遺構の切り合い等の確認のため残しておいたグリッドの境界壁を取りはずし、遺構・遺物の面的精査を行なう。各遺構には完形土器や一括土器、石器の発見や、S T 101～103、S T 106には複式炉が発見された。

4月30日～5月11日

初めの週は本考古学協会の開催で、調査員が不足となり、調査は小休止の状態となった。8～10—4～6グリッド内で検出された遺構は住居跡となり、S T 112と名付け、精査終



第1図 遺跡概要図

了後、測図・写真撮影を行なった。

5月13日～5月25日

確認された各遺構に調査員を配し、重複関係や柱穴の確認等、精査作業を進めた。一部では複式炉の平面測図や遺物の取り上げ、写真撮影を行なう。S T 101で検出された炉はS T 102によって破壊され、S T 102も複式炉の石が抜け、上面に遺構の存在が考えられたが、上部は耕作土となり、不明である。

5月27日～6月2日

各遺構の精査を続行する。この頃より遺構・遺物の最終確認を行なう。S T 106では三軒の重複を確認。S T 102・104・109にはS K 1が重複、しかしS T 109の複式炉は埋設土器部だけ発見、未掘部分に燃焼部がある。3—5グリッドでは大型の鉢形土器が伏せられ、底部を欠き偏平な石をのせた土壙墓を発見、7基の重複である。

6月4日～6月18日

検出された遺構の平面測図、写真撮影、レベリング作業を行なう。また同時に埋設土器の取り上げと未精査部分及び土壙墓群に砂を入れ、次回の発掘に残すことにした。調査は18日で終了したが、調査区域外には多数の遺構が残されており、縄文時代中期集落跡の全体解明が今後の課題として残った。

(2) 第IV次調査の経過

発掘調査は、山形県教育委員会・山形市教育委員会とが主体となり、関係諸機関と協議のうえ、昭和53年5月8日～7月28日までの延59日間にわたって実施した。

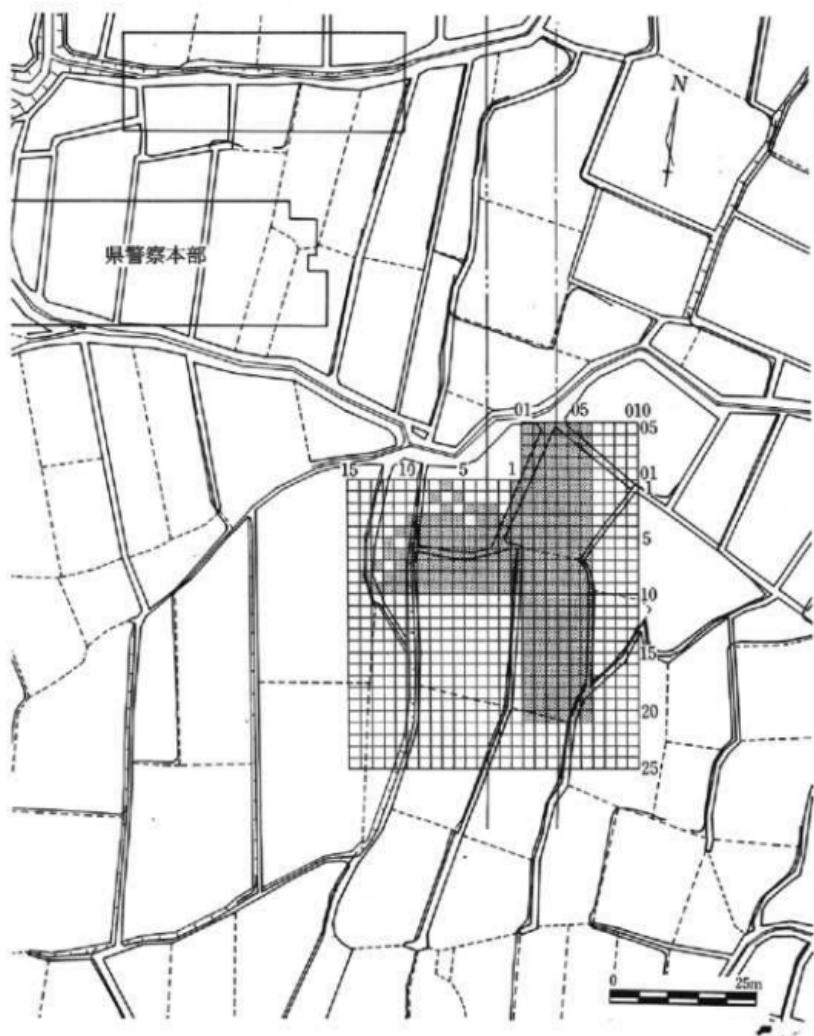
今回の調査の対象となったのは、山形市立第一中学校建設敷地の西、須川橋～滑川線に通じる県庁東側道路新設に係る路線敷、約600m²である。

調査区は、遺跡の中心地より北西側に位置し、東西12m、南北50mの限定された調査区で、2×2mを一単位とするグリッドを設定し座標軸、X軸方向を東西、Y軸方向を南北に置き、第II次調査から方法を継承した。第I段階として、これまでに実施された第II次・III次調査からの層位的な関係を十分に検討したうえで、重機械(ブルドーザー)を使用し、30～40cmの厚さをもつ表土を、遺構が確認可能な面まで削除した。

次に、第2段階として、重機によって掘りさげた面をさらに、調査区の中央部から北側と南側の方向に10～15cm、人力によって掘り下げて、遺構(住居跡・土壙)の平面形を確認する事に主眼をおいた。方法的には新しい型式の住居跡を掘り下げ、精査の後、古い形式の住居跡を掘り進める経過をたどった。調査の全般的な経過は次のとおりである。

5月8日～5月19日

現地にて鍵入れ式をおこない、調査の安全を祈る。その後、第III次調査のX・Y軸の方



第2図 調査地区 全体図

向を基準に調査区の中心をなす、大杭を打ち、おおまかなグリッドを設定する。路線敷地の東西側にそれぞれ 50 cm の全体セクションをとるためのベルトを残す。重機使用前に、4ヶ所ほど層序の確認のため、坪掘りを実施する。5月 10 日にはいり、重機を使用し、表土の粗掘り作業を開始する。5月 11 日によく、機材の運搬が可能となり、プレハブ・テントの設営をし、一応の調査体制ができあがる。重機による粗掘りは、本日にて終了。12 日にはグリッド設定を主とし、攪乱されて不明である遺構面を明らかにするため、人力によって、10~15 cm ほど掘り下げる。その結果、複式炉らしき遺構が検出される。一部では、床面らしき箇所も認められる。各グリッドで次々と遺構が検出されはじめたため、それらの精査追究を行なう。住居跡のプランを追究するが不明である。遺物も多量に出土しはじめる。かたわらで作業風景等の写真撮影をする。5月 18 日にはいり、半円を描く住居跡と思われる落ち込みを検出する。作業員不足のため、詳細な精査ができず発掘作業が難行する。

5月 23 日～6月 9 日

これまでに確認された配石・住居跡のプランをさらに追究するため、各グリッドごとに作業員を配置し、精査をする。遺物の写真撮影を随時行なう。序々に遺構プランも明確になり、出土遺物も多くなってきたため、記録カードを作成し、綿密な記録をとる。5月 29 日に入り調査区域全体の見通しがついたため、それぞれの遺構に番号を付す。最初に第 215・216 号住居跡内覆土の掘り下げを始める。連日の晴天のため、土が乾燥し、明確なプラン検出困難となる。このため主要な部分に散水し、精査を行なう。住居跡の覆土除去を中心に行なうが、壁面や床面が判明せず、サブレンチを入れ精査する。土層セクションの写真撮影、土層セクションの測図をする。炉跡付近の床面精査・柱穴・周溝の有無等の検出作業を急ぐ。作業はようやく軌道にのる。

6月 12 日～6月 30 日

調査が進行するにつれて、住居跡がかなり重複している事がわかり、その新旧を判別するのが、非常に難しい状態である。住居跡の全景、複式炉の写真撮影、梅雨に入り、連日雨が降り、排水作業に終止する。調査区内泥土の状態となり、再度精査を実施。またもや数日雨降り、強雨となり、調査難行する。プレハブ内にて遺物洗浄。ネーミグ等を行う。

7月 3 日～7月 28 日

調査も終局にはいり、全体の様相がみえてくる。記録作業写真撮影に重点をおく。住居跡内覆土の除去ほぼ完了し、炉跡・柱穴検出をする。住居跡は殆んど完掘し、清掃作業をし、写真撮影をする。7月 18 日にてほとんどの作業を終え、19 日には、現地説明会が行われた。28 日には、実測作業および機材運搬を終え、多大な成果を得て調査を終了した。

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の立地

蔵王連峰の山ふところに源を発する馬見ヶ崎川は、急峻な山稜の間を西流し、やや蛇行をえがきながら、山形市の西部を流れる須川と合流する。この馬見ヶ崎川は妙見寺付近において、神尾地区下より流れ出づる支流、内山川とまじわる。そこを基点として、二つの地形をかたづくっている。上流域は河岸段丘による地形となり、下流域は山麓線に接しながら、序々に広がりをみせる扇状地となり、山形盆地の一角を形成している。山形市の霞城公園付近の高さのラインが、この扇状地の扇端部にあたると思われ、湧水地帯になっている。かなり以前からこの河川は、流路をかえながらかなり氾濫したらしく、その痕跡として大きな疊や、荒砂の堆積をいたるところでみると事ができる。

本遺跡は、その扇状地の扇頂部南寄り、約230m～280mの等高線上、周辺部とくらべてあまり比高差のない、舌状に発達した微高地に遺跡のはついている。現在では土地区画整理工事や種々の原因によって削平や盛土がなされ、原地形は全くみる事が出来ない。

遺跡範囲内に扇頂から西流する三本の小川があり、古くから農業用水に使用されている。遺跡そのものの広さは、現在では周辺に建築物や道路ができ、明確に把握する事は出来ないが、昭和48年の発見当時に行なわれた遺物の散布状況や、遺跡の範囲等を調べるために予備調査の結果では、約38,800m²の広さを有するものと推定された。

次に熊ノ前遺跡をとりまく環境にふれてみたい。現在は、前記したように環境が一変してしまったのであるが、数年前までは肥沃な水田地帯であった。おそらく熊ノ前遺跡が営まれた当時は、周辺一帯がうっそうとした山林や原野で覆われていたとみられ、その様ななかで、近接した集落（遺跡）との密切なかかわりをもちながら、人々の生活が営まれていたと推測される。

2 馬見ヶ崎川扇状地の遺跡群

馬見ヶ崎川によって形成された扇状地は、現在から昔にさかのぼる事約1万年前のいわゆる洪積世の終末期、それに続く沖積世にかけて、おおよその地形がかたづくられたと言われている。現在、盃山の山裾を通り西流する馬見ヶ崎川は、明治初期まで県都山形の中央をやや流路をかえながら流れていった。

さて、馬見ヶ崎川扇状地内には、図にも示したように数多くの遺跡が点在している（第3図）。これらの遺跡の中で最も古い時期に営まれた遺跡は、縄文時代早期の中墳から前期のはじ

めにかけてにのひやく寺遺跡である。この遺跡の立地する付近の地形をみると、少し山あいまで入りこんだやや複雑な地形をみせており、かなり早くから地形が安定した事をものがたっている。この遺跡に引き続く時期・繩文時代中期前葉～中葉にかけての主な遺跡としては、上端から熊ノ前遺跡・中桜田遺跡・松見町遺跡・山形西高遺跡という順序で並んでいる。熊ノ前遺跡については本文参照の事とし、以下の3遺跡について若干の説明を加える事にする。

中桜田遺跡は、扇状地の扇頂部と火山泥流の堆積によって形成された丘陵とが、ちょうど接するあたりに位置している。松見町遺跡は扇頂部より扇央部に移行するところに立地する。これらの遺跡は立地する地形こそ違うが、時期的にはあまりへだたりがない。この他、馬見ヶ崎川扇状地内には入らないが、上流域の段丘上に松留遺跡（繩文中期～晚期）、これより下ったところに下宝沢遺跡（繩文後期）がある。更に下った妙見寺集落より東の山間部に入ったところに千葉屋敷遺跡（繩文後期～晚期）がある。これらは集落跡と考えられる遺跡で、遺跡そのものの広さはまちまちである。

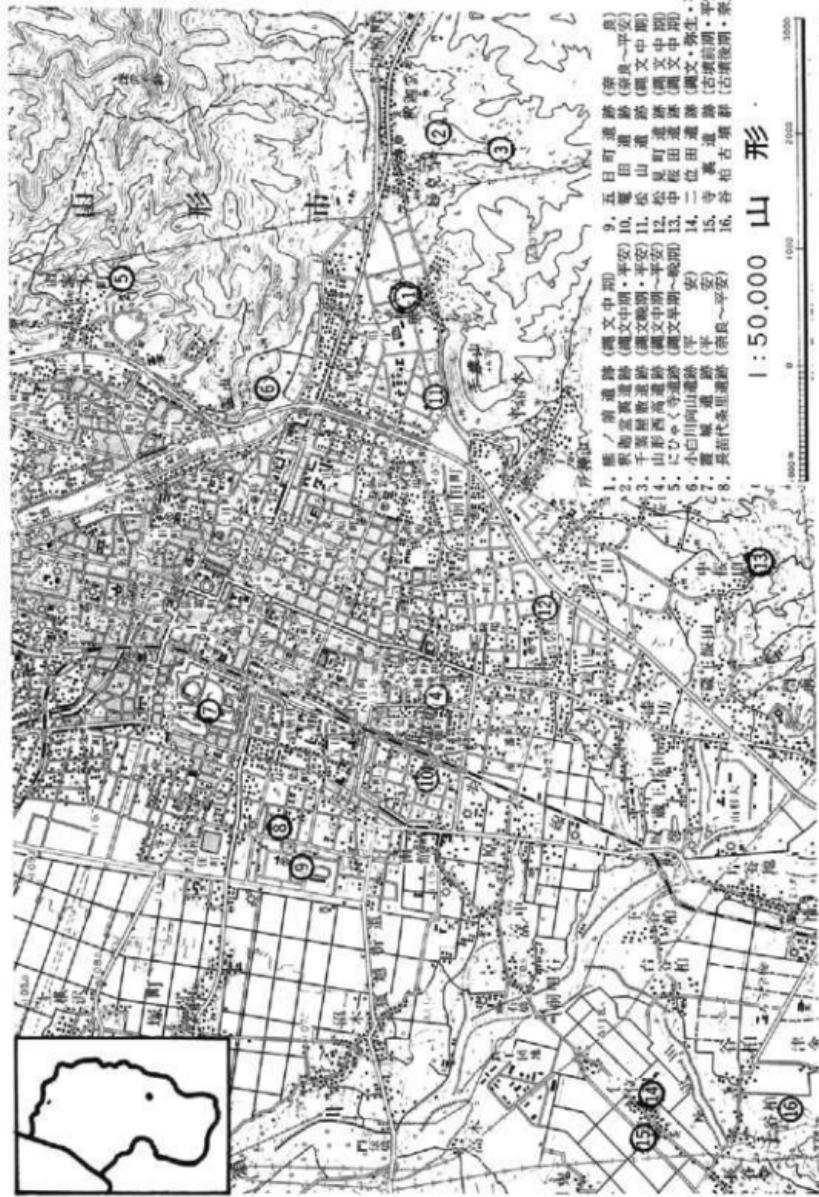
つぎに前述した項とかなり重なる部分があるが、山形市周辺の地形と地質について記述してみたい。山形市は、地理的にみて最上川流域に並列している山形盆地の南部に位置している。東西両側は山地、すなわち東側は、熊野岳・地蔵岳・刈田岳を主峰とする藏王連峰、いわゆる奥羽山脈と、西側は白鷹丘陵とに囲まれ、その間の低地に位置するのが、県都山形市である。地質学的にこの低地は、馬見ヶ崎川・立谷川扇状地と須川沿岸低地とに区別されている。山形盆地の表層をなす地形面がほぼ完成したのは、現在にいたる約10万年前から15万年の長い間で、幾度もの複雑な作用を繰り返しながら序々に形成された。

山形盆地にある3つの扇状地のうち、最も大きいものは乱川扇状地で、これに引き続いて立谷川扇状地・馬見ヶ崎川扇状地となり、開析の度合い（広がり）も、乱川が最も大きい広がりをみせ、馬見ヶ崎川扇状地が最も小さい広がりをみせている。

ところで、熊ノ前遺跡の立地する馬見ヶ崎川扇状地は、他の二扇状地に較べて面積は小さく、その割に傾斜がきつい。上流の河谷に発達した段丘は、下流になるにつれてその造成作用を弱め、ちょうど扇頂部にあたる松原貯水場付近で、沖積面下に没する。

最後に、この馬見ヶ崎川扇状地は、一本の河川のみによって形成された単純扇状地であり、数本の河川によって形成された複合扇状地とは、趣を異にしている。河川の水量もう多くはなく、そのため形成された扇状地も小規模といえる。

第3図 遺跡位置・分布図



III 遺跡の概観

1 遺跡の層序

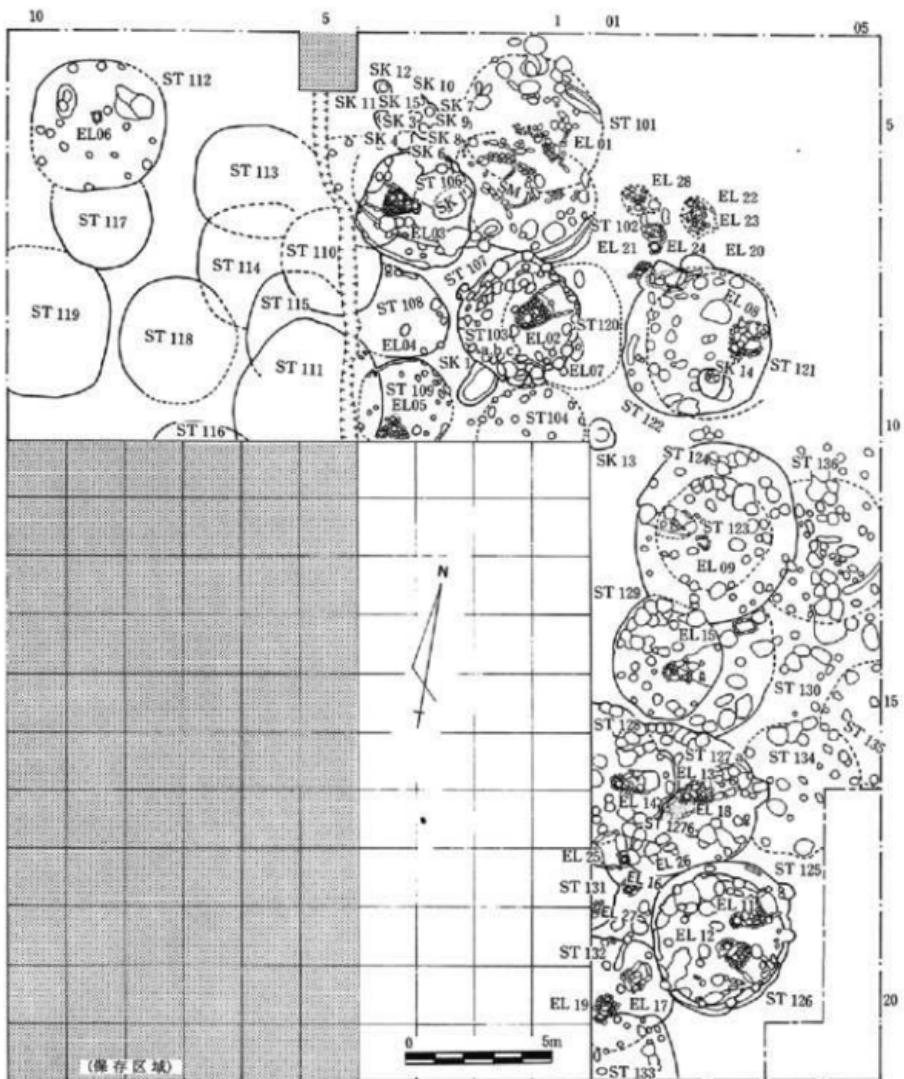
遺跡は扇状地の緩やかな微高地に在り西側へ全体として傾斜している。層序は I ~ IV 次調査の結果から多少の差異はあるが同様な層位がみられる。現在は水田・荒地・一部宅地になっている。調査の区域は水田・荒地の部分である。

- I 層 黒褐色土 耕作土で下部に酸化鉄が沈殿し紐状になっている。厚さ 15~20 cm
II a 層 黒色土 II b 層の上部層で多量に自然礫 (30~50 cm) を含む。礫に混り多量の土器が出土する。厚さ 10~20 cm
II b 層 黒色土 小砂礫・炭化粒子を含み、砂質性がありザラザラし硬くしまっている。
遺物包含層で中層から下層にかけて遺構の確認面となる。厚さ 15~25 cm
III 層 黄褐色土 小砂礫を多量に含み砂質性が強い。部分的に暗褐色土になっている。
遺構が掘り込まれ住居跡などの床面・土壤の壊底となる。厚さ 25~40 cm
IV 層 暗黒褐色土 微砂質の粘土層で軟らかく一部でグライ化している。厚さ 35~55 cm
V 層 黄褐色土 上部で砂層になり中・下部にかけて礫層。無遺物層である。

2 遺構の分布

第 II ・ IV 次調査で検出した遺構は、住居跡 47 (検出 30 ・ 炉跡のみ 10 ・ 確認 7) ・ 土壙 14 配石遺構 1 である。遺構群は遺跡の北西部やや傾斜地にあたり、標高約 201.55 m を計る地域に位置し、座標軸 1~11—1~10 グリッド (II 次) と 01~06—1~21 グリッド (IV 次) の調査区に検出された。確認面は第 II ・ III 層にかけて認められ、ほとんどの遺構は第 III 層黄褐色粘質微砂土を掘り込んで造られている。(第 4 図 図版 4)

分布の状態は、住居跡群では各式期にわたって重複あるいは近接しているものが多く、北西方向から南東方向にかけ帶状に集中し、中央部付近 121 号住居跡の南側および 124 号住居跡の西側である程度の空間地帯が認められる。調査区の X 軸方向 10 以西・ Y 軸方向 3 以北では遺物の散布がほとんどみられず、地形も傾斜が強くなり、住居跡の存在する可能性は薄い。北側の地区は、緩やかな傾斜地に位置し、103 号住居跡と 106 号住居跡の平面形が明瞭に検出され、一定の間隔がありいずれも複式炉の方向が正反対になっている。101・102 号住居跡の東側および 19~23・30 号炉跡は第 IV 層暗黒褐色土 (一部グライ化層) のため住居跡の平面形・柱穴等を検出することが出来なかった。調査区の中央から南側にかけては、ほぼ平坦な部分に在り、南側で特に重複関係がいちじるしいが、各住居跡ともほぼ明瞭に検出された。各住居跡の複式炉の方向はいずれも東西・北東・南西方向になってい



第4図 造構配置図

るが、126号住居跡内12号炉が北西・南東方向になっている。このように各住居跡は、調査区北側で201.00m・中央部から南側にかけて201.50mの等高線を中心として東・東南側へ分布している。

土壤は、調査区の中央部から北側にかけて遍在している。1号土壤は103号住居跡の南側で2号土壤は106号住居跡内にそれぞれ重複し、3~12号土壤は106号住居跡の北側に接して位置し、3~10号土壤はいずれも重複し大型深鉢形土器を倒立の状態で埋設して在り、それらの西側に11~12号土壤が単独で位置する。13号土壤は104号住居跡の東側に接し深鉢形土器を有し、14号土壤は121号住居跡に重複し大型深鉢形土器を倒立の状態で埋設し、住居跡よりも新しい。

配石遺構は、調査区北側の101~102号住居跡の下部で確認され、長軸を北西・南東方向になり、大形の河原石を使用し中央部を小礫で区画している。

ピット群は、04~05~11~17Gに在り、不整形のピットも集中するが、124~130~127号住居跡の関係および床面の状態・明確な規則性ある配列が認められ、住居跡群と考えられ、重複関係にあり124~127号住居跡よりいずれも既く、134号住居跡と135号住居跡では134号住居跡が新しい。

3 遺物の出土状況

今回の調査で出土した遺物は、整理箱に約170箱を数え、それらは縄文式土器（すべて中期中葉から末葉にかけて）・土製品・石器・自然遺物（クルミの炭化物1点）などに分けられる。遺物のほとんどは第IIb層の遺物包含層および住居跡内覆土層から出土している。

土 器：縄文時代中期 整理箱110箱（大木8式70%・大木9式25%・大木10式5%）

土製品：土偶（19）・円盤状土製品（58）・不明（2）

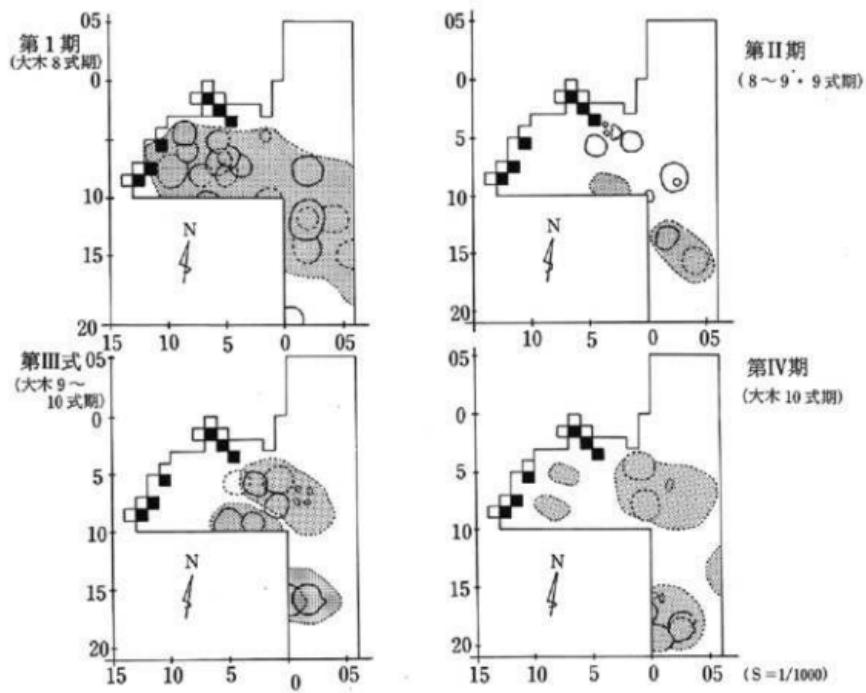
石 器：石器・剝片・碎片を合せて3,000点が出土

石鎌（73）・石錐（59）・石匙（60）・削器（82）・搔器（45）

笠状石器（19）・磨製石斧（19）・凹石（99）・磨石（27）・石皿（31）

石棒（7）・線刻疊（3）・砥石（1）・異形石器（1）・その他（2）

遺物の出土状況は、第II層中に最も多く出土し遺物総数の55%を示し、次いで遺構内から出土したもののが40%で、残りは第I層から出土している。包含層での土器の分布状況は、調査地区の中央北側から南側と東側で最も多く出土し、北側と西側で希薄になり遺構の分布状態と一致している。各式期別にみると、大木8式は西側の中央部付近より東南側にかけて帶状に分布を示しながら全体的に遍在しており、大木9式は調査区中央部に大きな広がりをもち集中し、大木10式は北側の中央西側寄りと南側に部分的に認められる。石器は、遺構内より出土したものが少なく、調査区の中央部でやや集中する程度で全体として散在



第5図 土器出土分布図

している。種別をみると、とくに日常生活用具（磨石・石皿）に比較し狩猟用具（石鎌・石匙）などの割合が多い。（第5・70図）

遺構内の出土状況は、各住居跡とともに覆土上層から中層にかけて多く出土し、ある一定方向から流れ込んでいる状態で、特に一括・半完形土器などの廃棄の現象が104・108・122~124・133号住居跡で顕著にみられる。床面直上からは全体的に少量であるが、101・103・106・109・125・127・128号住居跡で最も少ない。自然遺物は122号住居跡床面または粘土塊が覆土中からそれぞれ出土している。各土壤の覆土中から少なく、3・5・6~10・14号土壤では完形土器を倒立や押しつぶされた状態で検出され、11~13号土壤は深鉢形土器の口縁部・胴部のみを埋設している。2号土壤は自然縫をやや密集するように配している。配石遺構からは、覆土・床面とも土器片が散在している。

IV 遺構と遺物

1 遺構

(1) 住居跡

101号住居跡 (図版4)

調査区の中央北寄りの緩傾斜地、1・2・4~6グリッド内に位置し、102号住居跡と重複している。遺存状態は水田耕作により大部分破損されており良くない。確認面は第II b層中と考えられ、住居跡の構築は第II b層下部で床面を構成している。

平面形は不明であるが、大きさは柱穴の配列・複式炉の状態からみると長径約6mを計り面積28.26 m² (8.6坪) である。壁は北・南側壁の一部で若干認められるのみで、殆んど不明である。壁溝は北側に部分的に確認され幅10~30cm・深さ10~20cmでU字形に掘り込まれている。床面の状態は、ほぼ平坦であったとみられるが破壊をうけて殆んどわからぬ。柱穴は東側から西側にかけて12本検出され、主柱穴は2本で大きさ45~64cm・深さ53~67cm、支柱穴は4本で主柱穴をとりまくようにあり大きさ30~46cm・深さ27~37cm、壁柱穴は東・北・西側に一定の間隔でみられ大きさ26~32cm・深さ22~28cmである。

覆土の状態は、遺存状態が悪いため不明瞭ではあるが2層に区分される。1層黒褐色土で砂礫粒・炭化粒子を含み堅い。2層は黒褐色土で1層より色調が明るく炭化粒子を多く含み軟かい。土層の堆積状態は、中央部から北西側にかけて不明であるが南東側から流れ込むように、レンズ状に堆積している。

遺物の出土状況は、大半が覆土中より出土し床面からの出土は少ない。土器は土器片が多く、一括・完形土器などの投棄はみられない。石器は覆土中より石鏡3・石錐4・石匙10・石皿1・磨石1、床面からは石錐1・石匙1がそれぞれ出土している。

炉跡 (E L 01) は、住居跡中央部寄りから東南側にかけて在る複式炉である。全長180cm・最大幅130cm・基軸方向N-77°-Wを計る。平面形は不明瞭であるが先端部がやや丸く、中央部でくぼむV字形を呈する。構築の状態は、前庭部では不明確で、燃焼部では底面に25~30cmの偏平な河原石を2個敷きつめ囲りを同等な疊を使用し、約25~30cm掘り込んでいる。埋設土器部は、約15cmの疊を用い配列し、10cm掘り込み厚さ1cmの焼土がみられる。埋設土器は2個体有し深鉢形土器で、埋設土器部で胴下半部から底部、燃焼部で口縁部欠損でいずれも正位の状態であり、二次焼成を受けている。

本住居跡の時期は、炉跡の埋設土器・床面の土器片・検出状況を考慮したうえ、繩文時代中期大木10式期の所産である。

102号住居跡 (図版4)

調査区1・2-4-7グリッドに位置し、南側で103号住居跡・西側で106号住居跡と重複している。遺存状態は直上に101号住居跡が構築されているため余り良くない。確認面は、101・103号住居跡の床面精査の際検出された。第III層を掘り込んで造られている。

平面形は、南側で円形となり全体として不明瞭であるが、不整円形を呈すると考えられる。大きさは柱穴の配置状態からみて、長径約5mを計り・面積約 19.63 m^2 (5.9坪)である。壁は、東南側にかけて検出され、緩やかに掘り込まれ現存高が8~10cm程度である。壁溝は、東南壁でみられ103号住居跡に切られており部分的に2本となり、幅10~25cm・深さ15~30cmでU字形に掘り込んでいる。床面の状態は、壁溝付近で認められ第III層中位を床面とし、中央部に向けてやや傾斜をもち軟弱である。柱穴は16本検出され、主柱穴4本・大きさ32~55cm・深さ47~51cmで、支柱穴8本で壁際付近を内周し大きさ29~38cmである。炉跡は検出されなかった。出土遺物は、若干の覆土層より出土し、床面からは土器40片出土し、石鎌2・石錐1・石匙2・磨石1・凹石4などがいずれも覆土中より出土している。時期は出土遺物・重複関係からみて、縄文時代中期大木9式期と推定される。

103・120号住居跡 (第6図 図版5・6)

調査区の中央部の平坦地、01・1-3-7-10グリッド内に位置し、北側で102号住居跡・南側で104号住居跡・南西側では1号土壤と重複し、103・120号住居跡とも重複関係にある。確認面は103号住居跡で第IIb層下部で確認され、120号住居跡は103号住居跡覆土下層および床面を精査する際に検出された。いずれも第III層を掘り込んで造られている。遺存状態は東側の一部で水田耕作により擾乱されている他はほぼ良好である。

120号住居跡 平面形は柱穴の配列状態からみて不整圓丸方形を呈すると考られる。大きさは長・短径とも3.8mを計り面積は約 14 m^2 (4.3坪)である。壁は第IIb層中と考えられるが明確に検出することはできなかった。床面の状態は、炉跡西側及び北側では第III層を床としてやや起伏があり、東側では第IIb層が床面となっている。炉跡周辺部が堅く踏みしめられている他は軟弱である。柱穴は9本検出され東側では不明瞭で確認されなかった。主柱穴はE P 1で径32×40cm・深さ30cmで炉跡西側にあり、支柱穴はE P 2・5・9で径20~38cm・深さ20~110cm、壁柱穴はE P 3・4・6・7で径30~40cm・深さ33~50cmである。柱穴の覆土はいずれも黒褐色土で砂礫粒・炭化粒子を多量に含み軟らかい。

覆土は、土層が擾乱しているため1層のみ確認され、黒褐色土で炭化・小砂礫・風化礫を含み微砂質でやや軟らかく、ほぼ水平に堆積している。遺物は土器片が少量出土する。

炉跡(E L 07)は、擾乱されているため遺存状態が悪い。住居跡の中央部から南寄りに

かけて位置すると考えられる複式炉である。全長推定 1.9 m・最大幅 80 cm で基軸方向は不明である。石の配列は南側と中央部に 20~25 cm の偏平な河原石が若干認められ、先端部は礫が認められず 8~10 cm 挖り込み焼土が堆積している。埋設土器が 3 個体有しており、先端部で胴下半部・中央部で口縁部欠損の深鉢形土器がいずれも正位の状態で出土している。

本住居跡は、103・104 住居跡よりも新旧関係は新しく、時期は炉跡埋設土器からみて縄文時代中期大木 10 式期の所産である。

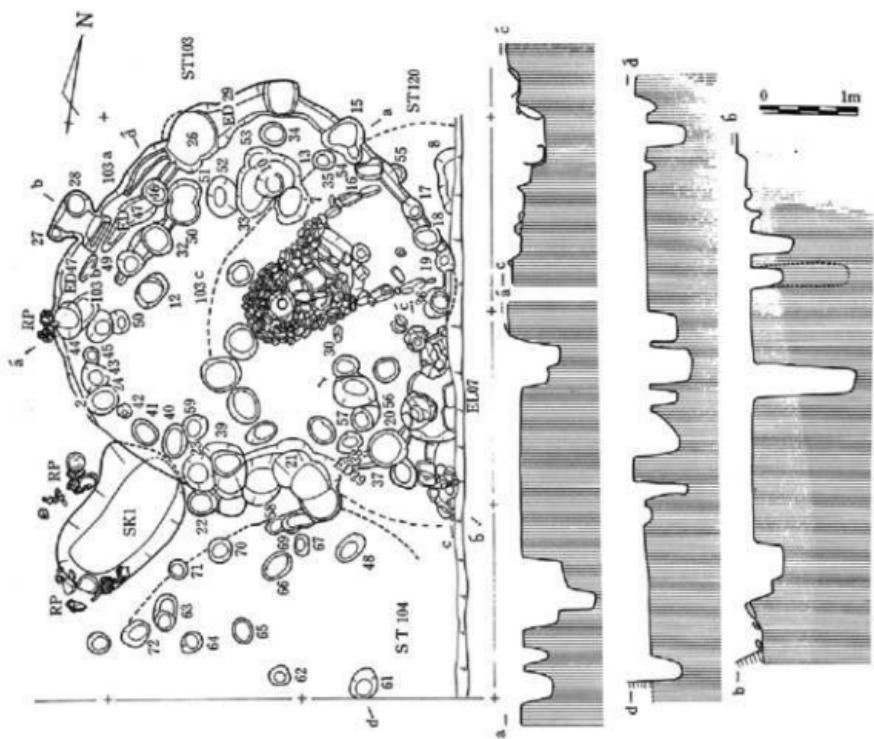
103 号住居跡 本住居跡は柱穴の配列および周溝の状態からみて三期にわたって拡張されたもので、新しいものから 103 a・103 b・103 c 号住居跡となり、E L 02 は 103 a 号住居跡に伴うものである。

103 a 号住居跡 平面形は、南東側が若干張り出す隅丸方形を呈し、北西壁西寄りで約 25 cm 突出している。規模は長・短径とも約 4 m を計り面積 16 m² (48 坪) で、確認面からの深さは 25 cm である。壁の状態は、北東から北西側にかけて確認されば垂直に掘り込まれ現存高は 10~15 cm であり、南壁は 120 号住居跡と重複し切られているため不明である。壁溝 (E D 19) は、北西側から南東側にかけて検出され、幅 12~20 cm・深さ 7~14 cm で U 字形に掘り込まれ、E P 14 と 26 の間は E D 47 と重複し E D 29 が新しい。床面は、若干の起伏が認められるがほぼ平坦で、炉跡周辺部・E D 47 付近が強く踏みしめられており、壁に近づくにしたがって軟弱である。柱穴は 19 本確認され、主柱穴は E P 10~13 で炉を中心 1.5~2.0 m の等間隔をもち 4 本認められ、径 25~40 cm・深さ 35~72 cm である。

支柱穴は E P 14・15・18・20・21・22・24・25 で径 30~55 cm・深さ 25~40 cm、各壁の辺と隅に等間隔で配置されている。壁柱穴は E P 16・17・19・23 で北東壁に集中し、径 20~40 cm・深さ 11~14 cm である。E P 27・28 は出入口の施設の一部と考えられる。

覆土は大別して 3 層に区分される。1 層は黒褐色土で多量に風化礫粒・炭化粒子を含み微砂質で堅い土質で、2 層は黒褐色土で炭化粒子を含み軟らかく、3 層は黒色土で 2 層に近似しさらに軟らかくなる。堆積状態は安定し水平になっている。遺物は覆土上層に土器片が多量にみられ、床面では少なくなる。石器は、覆土 1 层より石錐 1・石錐 1・石箆 2、床面から石箆 2・磨石 7・石皿 3・凹石 4 が出土している。

炉跡 (E L 02) (第 14 図) は、住居跡中央東寄りから北東部壁溝にかけて在る複式炉である。平面形は先端部が丸く中央部がややくぼむ、U 字形を呈する。全長 1.95 m・最大幅 1 m・基軸方向 N-130°-W を計る。構築の状態は、袖部の北側が内湾するが全体に規則的に礫が配置されている。前庭部では袖石に柱状になる 15~30 cm の自然礫を配し、床面より 6~10 cm 挖り込んでいる。燃焼部で底面は 15~25 cm の偏平な礫を敷きつめ、上部にいくにしだがって 5~20 cm の丸味のある礫を積み上げている。埋設土器部では 5~15 cm の小礫・磨



第6図 103・104・120号住居跡

石・凹石を内から外へ規則的に配している。埋設土器は1個体で、深形土器の胴下半部で正位の状態に埋設され、二次焼成を受けてもろくなっている。覆土は6層に分けられ、1層黒褐色土（E P 9）・2層黒褐色土（炭化粒子を多量に含む）・3層黒褐色土（2層より軟らかい）・4層黒褐色土（炭化材を含む）・5層黒褐色土（余り炭化粒子を含まず）・6層暗褐色土（炭化粒子を含み軟らかい）で、焼土は検出されず礫も全体的に焼けていない。

102 b号住居跡 平面形は南東側が張り出す不整隅丸方形を呈し、長径約4m・短径3.5mを計り、柱穴・周溝のみで検出された。柱穴は17本確認され、主柱穴はE P 30・31で径18~52cm・深さ25~40cmである。その他E P 34~46は支・壁柱穴の区別は不明確で、径20~26cm・深さ20~35cmである。周溝（E D 47）は幅10~20cm・深さ7~9cmでU字状に掘り込まれている。覆土はいずれも暗褐色土で黄褐色土ブロック・小礫を多量に含み堅い。

103 c号住居跡 平面形は北東・南西方向に長軸をもつ不整隅丸長方形を呈するものと考えられ、長径3.4m・短径3mを計り、柱穴・周溝のみで検出された。柱穴は12本検出

され、主柱穴は不明であり、支・壁柱穴の区別は不明確で E P 49~60 になり径 25~35 cm・深さ 20~35 cm であり、覆土は褐色土で黄褐色土ブロックが混り非常に堅い土質である。

本住居跡は E L 02を中心として二期にわたって拡張され、103b 号住居跡は隅丸方形になるように全体的に構築し、さらに 103 a 号住居跡は主に北西側の位置にずれるように拡張している。新旧関係は、120 号住居跡より旧く、104 号住居跡・1 号土壇よりも新しい。時期はいずれの住居跡とも炉跡の埋設土器からみて、縄文時代中期大木 9~10 式期の所産である。

104 号住居跡 (第 6 図)

調査区の中央部の平坦面、1・2-10・11 グリッド内に位置し、北側で 103・120 号住居跡と重複し、北西側で 1 号土壇・東側で 13 号土壇と近接している。103・120 号住居跡を精査している際に確認され、床面・柱穴のみで検出され、南側の約半分は未調査である。

平面形は、円形を呈すると考えられ、規模は不明である。壁は北側の中央部で約 5 cm 程確認され、掘り込みの状態は明瞭である。床面はほぼ平坦で全体的に軟弱である。柱穴は 12 本検出され、主柱穴は E P 61・62 で径 20~30 cm・深さ 20~30 cm であり、支柱穴は E P 63~68 で径 22~35 cm・深さ 15~20 cm で、壁柱穴は E P 69~72 で径 20~40 cm・深さ 12~25 cm である。覆土の状態は不明である。時期は縄文時代中期大木 8 式期の所産と推定される。

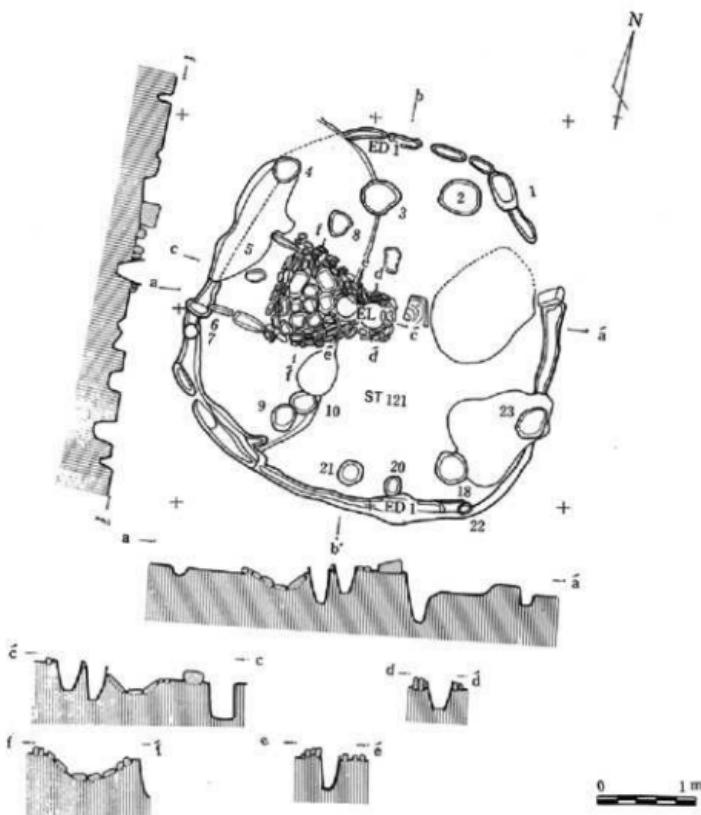
105・106・107 号住居跡 (第 7 図 図版 7・8)

発掘調査区の中央部西寄りにそれぞれが重複して検出された。検出区は 2~5-5~8 グリッドに位置している。

105 号住居跡 3~5-5~7 グリッド内で検出、106 号住居跡と東側一部で重複関係に在り、また南側では 107 号住居跡とも重複している。確認されたのは 106 号住居跡の E L 03 を精査中に床面がさらに一段掘り下げる様相を示しており、106 号住居跡を精査後に調査を行なった。

平面形は北部が未掘ではあるが、やや不整であるがほぼ円形を呈するものと思われる。壁は 106 号住居跡に東部を切られているが、現存している壁高は 10 cm で、ほぼ垂直な立ち上がりを示している。床面は若干の凸凹はあるが、平坦で堅く踏みしめられている。柱穴は E P 8・9・10 が本住居に伴うものと考えられる。径約 20 cm・深さ 40~50 cm で、ほぼ円形である。

住居跡覆土は 106 号住居跡の床面と E L 06 があるため不明である。106 号住居跡の床面は明褐色砂質土で堅く踏みしめられており、張り床と考えられる。



第7図 105・106・107号住居跡

出土遺物は600片程で、そのうち3分の1は床面直上のもので、大木9式の器片が多く、石器は石鎌2点、打製石斧・石匙・凹石1点ずつである。共に覆土中からである。

106号住居跡 3~4~6~7グリッドで検出、105号住居跡・107号住居跡を西側で切っている。確認面はIII層上面で、III層を約5~10cm掘り込んでいる。遺存状態は良好である。

平面形は円形を呈し、径約4mを測る。壁は南側で緩やかに立ち上がり、壁高5~15cmを測り、その他は明確でない。床面はほぼ平坦であるが、107号住居跡が南側で、2号土壙が北東部で重複しているため詳細は不明である。柱穴は23個確認出来たが、その内主柱穴はE P 2・3・9・18・21で、E P 1・4~7・20・23は壁柱穴の支柱穴と考えられる。

径は主柱穴で 38~44 cm、深さ 35~50 cm を測り、覆土は暗褐色粘質土に炭化物を多く含む。支柱穴は径 18~25 cm、深さ 22~31 cm を測る。炉 (E L 03) (第 14 図) は、住居中央部から西壁にかけて在り、複式炉である。全長 1.9 m、最大幅 1 m を測る。構築の状態は、前庭部で床面を 16 cm、さらに燃焼部では措鉢状に約 26 cm 堀り込み、石の配列は規則的に配置され、燃焼部は底面で偏平な河原石を用い、周囲には拳大の小砾を下部から積み重ねている。埋設土器は 2 個とも底部が欠損し、正位の状態になっており、二次焼成を受けた度合いが少なく底面でわずかの炭化物が堆積している。燃焼部の河原石は焼けており、焼土や炭化物が付着している。炉全体の覆土は、1 層暗褐色土で木炭片を多量に含む。2 層黒色土で炭化物や焼土粒子を多く含む。数片の土器片が出土した。周溝は幅 10~18 cm、深さ 12~20 cm で、比較的傾斜をもって堀り込まれ、底面では若干の起伏があるがおおむね平坦である。南半の周溝は幅 10~20 cm 位で長く一本に堀り込んでいるが、北半の周溝は幅 10 cm 位、長さ 30~40 cm に点々と弧を画くように堀り込まれ、その間には E P 1・4~7・20・23 の壁柱穴がある。住居跡北東部床面に 2 号土壤があり、本住居跡床面が 2 号土壤上部を覆っている。

出土遺物は住居跡覆土から多量に出土しており、破片 1,400 片、石鏃 5 点、石錐・石匙・凹石が 1 点、磨石 2 点である。床面直上からは土器片 465 片、石鏃 1 点、石皿 2 点である。本住居跡の時期は埋設土器等からみて大木 9~10 式期と併行するものと考えられる。

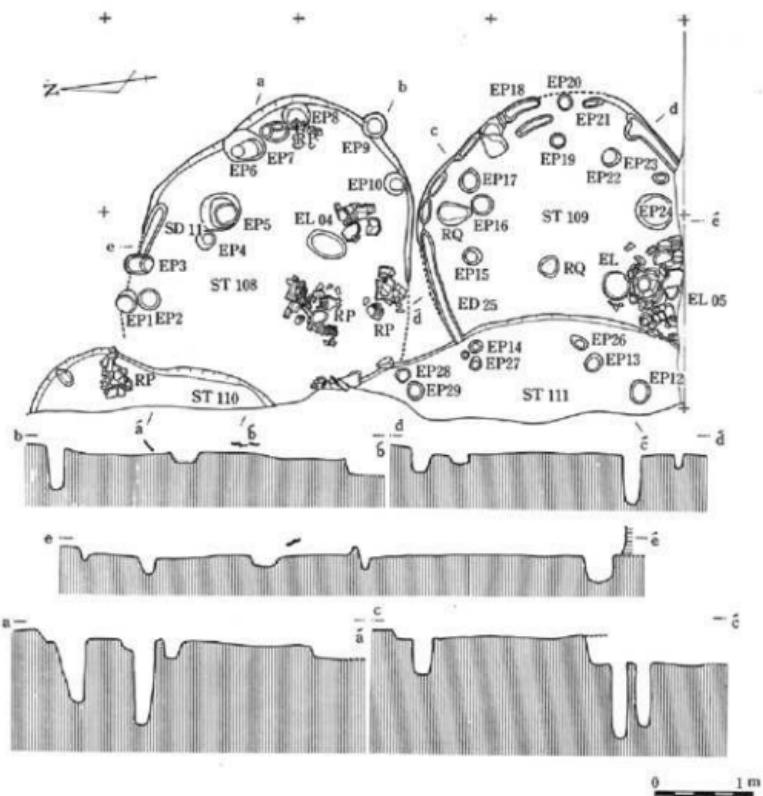
107 号住居跡 2~4・5~7 グリッド内で検出、106 号住居跡の南半床面を精査中に周溝を確認し、新たに 106 号住居跡の下に別の住居跡が営なまれていたものと考えられるが、大半が破壊を受けており、確認された周溝 (ED 2) と E P 14~16 を記述する。ED 2 は幅 20 cm、深さ 12 cm で、底面は平坦である。周壁は不明。柱穴は E P 14~16 共に壁柱穴で、径 16~20 cm、深さ 18~25 cm を測る。床面は不明である。

出土遺物は覆土より検出された土器片が少なかったが、大半が大木 9~10 式期と考えられるが、その詳細は不明である。

108 号住居跡 (第 8 図 図版 9)

調査区の中央部のやや平坦部、3・4・8・9 グリッド内に位置し、北・南側で 106 号住居跡・109 号住居跡と接し、西側では 110 号住居跡・111 号住居跡と重複している。確認面は第 III 層上面で、第 III 層黄褐色土中を掘り込んで造られている。遺存状態は、ほぼ良好であるが覆土上層で一部水田耕作により擾乱を受けている。

平面形は、西側で 110・111 住居跡に切られているがほぼ東西に長い橢円形を呈していると考えられ、大きさは短径 2.78 m を計るが長径は不明である。面積は推定 12.56 m² (3.8



第8図 108・109・110・111号住居跡

坪)となる。確認面からの深さは、北壁付近で8~10cm、南壁では10~12cmを計る。壁は北・東・南壁を確認し、全体として緩やかに掘り込まれている。壁溝（ED 11）は、幅10cm・深さ5~8cmでU字状を示し、北壁の一部で確認されたが全周はしないと考えられる。床面の状態は、ほぼ平坦であるが中央部南寄りにいくにしたがってやや高くなり、全体的に軟弱である。柱穴は10本検出され、主柱穴はEP 5で径41cm・深さ86cm、支柱穴はEP 2・4で径20~24cm・深さ15~20cm、壁柱穴はEP 1・3・6~10で径25~34・深さ23~25cmで、これら柱穴はいずれも円・不整円・椭円形になる。

覆土は2層に分けられ、1層では黒色土で炭化粒子を多量に含み微砂質で堅く10~15cm

の厚さである。2層は黒褐色土が斑点土に混り、炭化粒子を含むやや堅い土質であり7~12cmの厚さである。堆積の状態は南西側に流れ込むようにレンズ状に堆積する。

遺物は覆土1層に多く出土し、中央部から南西壁寄りに一括・半完形土器が廃棄されている。床面からの出土はあまりみられない。石器では1層より凹石1が出土している。

炉跡(EL04)は、中央南東寄に位置する地床炉である。平面形は梢円形を呈し、全長42cm・幅36cm・長軸方向はN-15°-Eを計る。構築の状態は、床面を5~10cm掘り込み東側がやや焼けている程度で、焼土の厚さは0.5~1.5cmである。

本住居跡と110・111号住居跡の新旧関係は、いずれの住居跡より古い。

住居跡の時期は、縄文時代中期大木8a式期の所産である。

109号住居跡（第8図 図版10・11）

調査区の中央部やや平坦面、3・4・9・10グリッド内に位置し、北側で108号住居跡と接し西側で111号住居跡と重複している。確認面は第III層上面で検出し、第III層を掘り込んで造られている。遺存状態は、ほぼ良好であるが西側覆土上層部が一部攢乱を受けている。南側は未調査である。

平面形は、北西側がやや張り出す不整隅丸方形を呈し、長径3.5m・短径3.2mを測り推定面積約14m²(4.2坪)である。壁の状態は、南壁・北壁が確認されながらかに10~13cm掘り込まれている。壁溝(ED25)は、幅10~12cm・深さ10~24cmでU字状に掘り込まれ、北西・東南側では一周するとみられるが、北東側で溝が所々切られ20~40cmの長梢円形になっている。床面は、ほぼ平坦であるが中央部寄りになると高くなり、西側では黒褐色土ブロックの貼り床で、全体的に軟弱である。柱穴は14本確認され、主柱穴はEP13・15・16・19・22・24で大きさ23~40cm・深さ52~90cmであり、住居跡の各辺に沿って在る。支柱穴はEP12・15~17・19・22~24で大きさ16~29cm・深さ40~50cmである。壁柱穴はEP14・18・20・21で大きさ15~21cm・深さ10~12cmである。

覆土は、大別して2層に区分される。1層は黒褐色土で風化蹠粒・炭化粒子を含み、やや堅い土質で微砂質である。2層は黒褐色土で色調がやや黒味が強く、炭化粒子が多く混入され微砂質で軟らかい。堆積の状態は、中央部に流れ込むようにレンズ状に堆積している。

遺物の出土状況は、大半が覆土上層に集中し土器片が出土し、床面ではあまり多く出土せず覆土中で円盤状土製品が1個出土している。

炉跡(EL05)(第14図)は、遺存状態がやや良好であり、燃焼部から前庭部にかけての南側半分が未検出である。住居跡の中央部から南寄りに位置すると考えられる。

複式炉である。全長は不明・最大幅約1m・基軸方向N-14°-Wを測る。構築の状態は、全体的に礫が散在的になっており、燃焼部では東側で15~25cmの自然礫をやや規則的に配しているが、西側は10~20cmの礫を使用し散在的である。底面は偏平なものを利用して約10cm掘りさげている。埋設土器部は、礫がほとんど配列されておらず土器の周囲が非常に良く焼け、内部も2~5cmの焼土の厚さがあり良く焼けて、床面より約8cm掘り下げている。埋設土器は3個体の深鉢形土器を有し、先端部では別個体の土器を合せて正位の状態になり、燃焼部では口縁部から頸部のみで正位の状態で検出されその周りの礫が焼けている。土器はいずれも二次焼成を受けている。覆土層は3層に分けられ、1層は黒色土で炭化粒子を多く含み軟らかい。2層は褐色土で炭化・焼土粒子を多量に含む。3層は黒褐色土で住居跡覆土2層に近似している。堆積状態はほぼレンズ状になっている。

本住居跡と108・111号住居跡との新旧関係は、いずれの住居跡よりも新しい。

住居跡の時期は、炉跡の埋設土器・床面からの出土土器を考慮したうえで、縄文時代中期大木9式期の所産である。

110号住居跡（第8図 図版9）

調査区の中央部やや北寄りの平坦面、5・6-7・8グリッド内に在る。西側4分の3は保存されるため東側の一部を検出する。北西側で113号住居跡で105・106号住居跡、西側では108号住居跡と各々重複している。106・108号住居跡の床面を精査・検出する際に確認され、第III層中位まで掘り下べて造られている。遺存状態は、水道管付設工事のため約50~60cmの溝幅で搅乱を受けている。

平面形は、不整円形を呈すると考えられ、規模などについては不明である。壁の状態は、ほぼ垂直に掘り込まれ壁高が4~5cmである。床面はほぼ平坦で軟弱である。壁溝・柱穴は検出されなかった。炉跡は未確認で柱穴などと共に西側に存在すると考えられる。

覆土は2層に分けられ、1層は黒色土で風化礫粒・炭化粒子の大粒を含みやや堅く、2層は黒褐色土で炭化粒子を多く含み軟らかい。全体的な堆積状態は不明瞭である。

遺物は、全体的に少量で東側壁中央部に一括土器が流れ込んでいる。石器は覆土中より石匙1・磨製石斧1が出土している。

新旧関係は、土器の出土状況から105・106号住居跡より旧く、層序関係から108号住居跡より新しい。本住居跡の時期は、縄文時代中期大木8式期と考えられる。

111号住居跡（第8図 図版10）

調査区の中央部の平坦部、4~6-9・10グリッド内に位置する。西側3分の2以上は

保存され東側の部分を検出する。東・北東側で 109・108 号住居跡で重複している。109 号住居跡の床面精査の際確認され、第III層中位まで掘り込まれている。遺存状態は、水道管付設工事のため約 50~60 cm の溝幅で擾乱を受け、上部に 109 号住居跡が造られているため遺存状態は良くない。

平面形は不整円形を呈すると考えられ、規模は不明である。壁の状態は、ほぼ垂直に掘り下げられ、北東壁で現存高約 10 cm・東壁で現存高は 10~20 cm である。周溝は検出されない。床面は、おおむね平坦であるが壁際が若干高くなり、中央部の方向へいくとくぼんでいる。柱穴は 4 本確認され、いずれも支柱穴 (E P 26~29) で大きさ 16~20 cm・深さ 20~25 cm で、主柱穴・壁柱穴は検出されなかった。炉跡は未検出である。

覆土は 2 層に分けられ、1 層は黒色土で炭化粒子を含みやや堅く微砂質であり、2 層は黒褐色土で炭化粒子が多く含み軟らかく、中央部から南側にかけて 109 号住居跡の床面となりやや堅くなっている。堆積の状態は、西側の方向へ流れ込むようにレンズ状に堆積している。遺物の出土状況は、住居跡の中央部・覆土中層より一括・半完形土器などの廃棄がみられ、石器では石錐 2・石匙 1 など出土している。

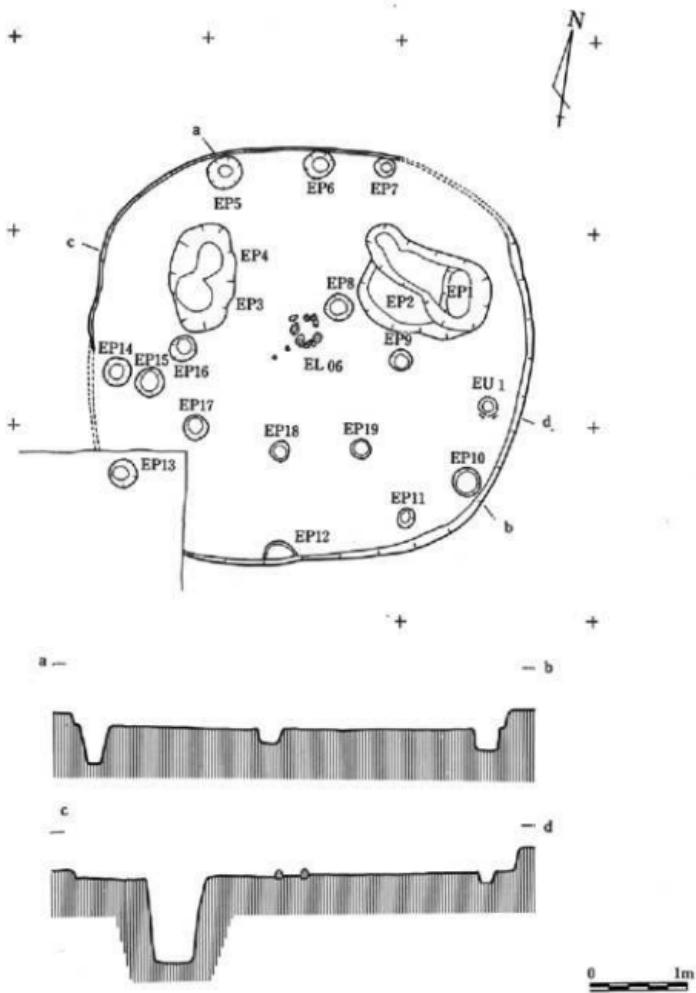
本住居跡の新旧関係は、109 号住居跡の床面状態からみて旧く、層序関係から 108 号住居跡より新しい。住居跡の時期は、出土遺物からみて縄文時代中期大木 8 式期とみられる。

112 号住居跡 (第 9 図 図版 11)

発掘調査区の西側、8~10—4~6 グリッドにあり、確認面は、III 層を 5~10 cm 程掘り込んでつくられている。遺存状態はおおむね良好である。

平面形は不整円形を呈し、長・短径とも 4.5 m を測る。壁は西側でやや直線的に立ち上がり、東側はそれよりも緩やかに傾斜している。確認面からの深さは西側で 5~10 cm、東側で 10~20 cm である。床面は若干の凸凹が認められ、東側から西側にかけてわずかに緩傾斜しているが、ほぼ平坦である。中央部の炉跡 (E L 06) 付近ではやや堅く踏みしめられている。ピットは 19 個確認出来たが、そのうち柱穴と思われるものが E P 5・6・7・10・11・12・13・14 の壁柱穴、E P 1・4・17~19 が主柱穴と考えられるが、北側にないのが不自然である。深さは壁柱穴が 24~38 cm、主柱穴が 30~45 cm、径 20~30 cm を測る。覆土は暗褐色の粘質土に炭化物を含み、床面に近くなるにつれ、砂質をおびてくる土質である。周溝は検出されなかった。

炉跡は住居中央部に径約 10~15 cm の橢円形をした河原石をほぼ方形に置きならべ、床面をわずかに掘り込んでいる。石の表面は焼けただれており、炉内部には焼土と炭化物が、若干堆積している。



第9図 112号住居跡

出土遺物は覆土からの出土だけで、床面に張りついて出土したものはなかった。しかし住居跡の東壁側床面には縁部と胴下半部を欠いた菱形土器（E U 1）が埋設されていた。また石器は覆土中から石錐 1・磨石 1・凹石 4 の出土である。

本住居跡の時期は覆土中の出土土器が最も多い大木 8 式期に併行すると考えられる。

121・122号住居跡 (第10図 図版12)

両住居跡は調査区北側よりの平坦面、01~04-7~10グリッド内に位置している。121号住居跡と122号住居跡とが、面積比にして約八割方重複した状態を呈する。121号住居跡のプラン確認面は、周辺部を数度にわたって面整理等の精査を試みたが、一部でそれらしき箇所を検出したものの、遺構の上部が重機による粗掘りの段階で削平されたらしく、明瞭なプランの検出は不可能であった。

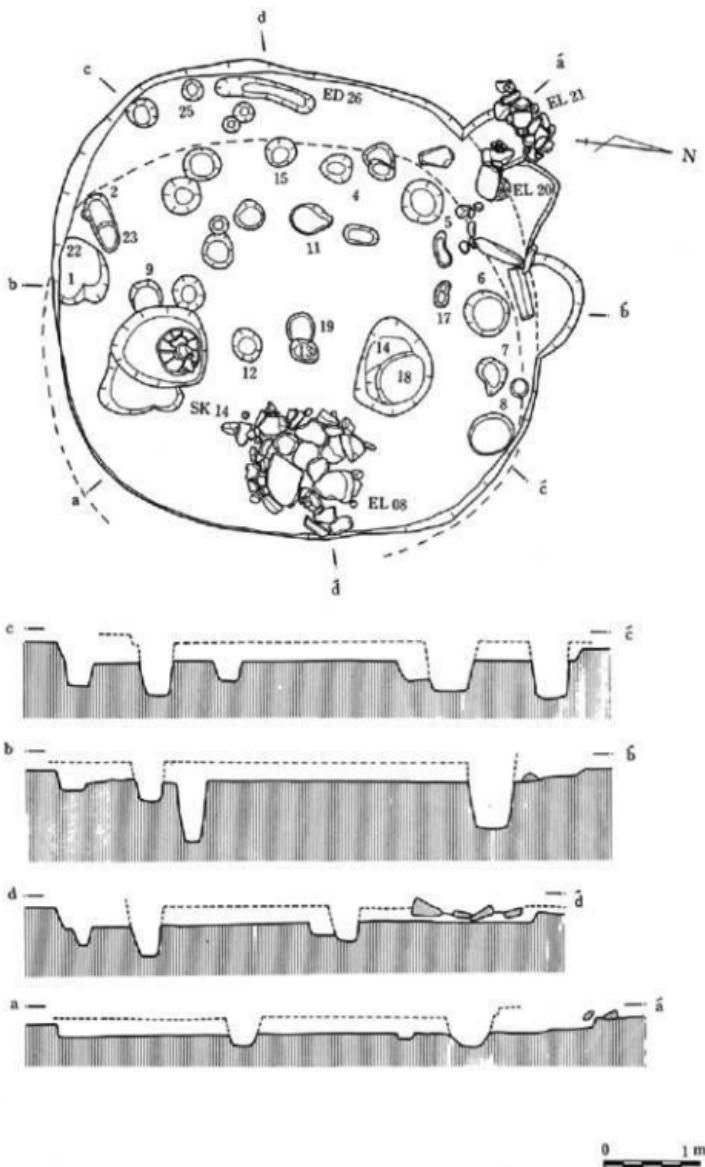
層位的な観察結果からすると、121号住居跡は第II b層から第III層の上面を掘り込んで構築されたらじく、その痕跡がセクション断面に認められる。122号住居跡は121号住居跡精査の際にプランが判明したもので、住居跡の西側半分の輪郭が明瞭になったものの、東側半分が非常に不明瞭であったがほぼその全体を明らかにする事が出来た。121号住居跡は遺存状態が悪く、122号住居跡もあり遺存状態は良好とはいえない。

121号住居跡 柱穴・炉跡のみが検出され、平面形・規模・壁の状態は不明である。周溝は検出されない。床はあまりはっきりしないが、東側で検出されたE L 08の袖石付近が比較的ハードな状態を呈しており、このレベルの面が床と考えられる。柱穴は14本確認され、E P 1~14でその形態は円・楕円形を呈し、径は20~48cm・深さ6~31cmである。炉跡(E L 08)は、SK 4の北東側に位置し、一部が破壊されているが推定全長1.6m・最大幅1.3mを計る複式炉と考えられる。炉石には大形の礫が用いられており、全体的にみて不規則な配列をなしている。埋設土器は横位の状態で設置され、大形の土器を用いている。

122号住居跡 確認された面は第III層で、ほぼ全体のプランが明確にされた。しかし、住居跡の構築された部分の土壤が非常に軟弱で、グライ化した青灰色粘質土と黄褐色微砂質土から成っており、住居跡の西側半分のプラン検出は比較的容易であったが、東側半分のプラン検出にはかなり困難を要した。

住居跡の平面形は隅丸方形で、規模は5.0×4.8m・面積は16m²・約5坪を計る。壁は全周し、北側に張り出しがみられる。現存高は5~16cmである。周溝(E P 26)は、西側壁直下で確認され幅20cm・深さ15~18cmでU字状に掘り込まれている。床面は、一部分固いところがみられるものの軟弱であり、ほぼ平坦である。柱穴は13本検出され、主柱穴と思われるものは7本で、E P 21で径40×38cm・深さ35cmである。支柱穴は6本で壁際よりにみられる。覆土は黒褐色土で微砂質・炭化物を含んでいる。遺物は覆土中より出土しており、特に石器が多く出土している。その内訳は、石鎌6・石匙6・磨製石斧1・凹石1となっている。

炉跡は不明であるが、住居跡中央部が焼けたような状態をしており、確實に存在したと思われるが、何らかの原因で除去されたと考えられる。



第10図 121・122号住居跡

122号住居跡の北側壁にあるE L 19とE L 20は、複式炉の一部分のみを残している。E L 19は袖部・E L 20は前庭部と考えられる。これら二つの炉は最も新しい時期につくられ、使用されたと考えられるが、その住居跡プラン等の構造については一切不明である。補足的になるが、122号住居跡内南寄りの位置に4号土壙が重複している。

121号住居跡と122号住居跡の重複関係は、122号住居跡がある程度埋没した段階で、その上部に121号住居跡が構築されたと推測される。E L 19とE L 20とは近接した時間帯に構築されたものと思われるが、その前後関係は判然としない。

新旧関係は新しいものから次のようになる。E L 19・20(炉跡)→4号土壙→121号住居跡→122号住居跡の順序である。

時期的にこれらの遺構をみてゆくと、いずれも縄文時代中期の所産である。122号住居跡は床面より出土した土器より大木8式期に比定され、記した遺構の中では最も古い。121号住居跡は覆土下部より出土した土器から大木9式期・4号土壙は、壙内より出土した大形深鉢型土器(甕棺)より大木9式期、E L 19・20(炉跡)は埋設土器からみて、大木10式期の時期に区別する事ができる。

つぎに家屋構造を考えるうえで、非常に重要な基礎資料となる主柱穴・支柱穴の形態や配置の仕方・規模等について補足的に説明を加えてみたい。121号住居跡の主柱穴は6本(E P 9~14)・支柱穴は8本(E P 1~8)を数える。主柱穴の配列は不規則で掘り込み自体は大きくなく、柱穴自体の深さもまちまちである。形態は円形もしくは不整円形を呈している。支柱穴は壁と推測されるラインに沿って、等間隔に配置されている。形態はやや不整なものも含まれるが大体が円形である。主柱穴と比較してみると掘り方そのものは大きい。121号住居跡の床面が明瞭でないため、正確な数値ではないが、各柱穴ごとに深さを明示してみる。10cm以内の深さを有するもの—E P 4、10~20cm以内のもの—E P 1~3・5・7・9・12~14、20~30cm以内のもの—E P 6・8・11となる。

122号住居跡の主柱穴は7本・支柱穴は6本検出されている。主柱穴は住居跡中央よりやや西側にずれた状態で、規則的な間隔をもって配列されている。形態は円形である。支柱穴は形態もまちまちで、統一性をもたず非常に不規則である。柱穴の深さは平均して20cm前後の数値を有するものが多い。121号住居跡と同様に各柱穴の深さを明示する。10cm以内の深さを有するもの—E P 16・22・29、10~20cm以内のもの—E P 24、20~30cm以内のもの—E P 15・18・23・25、30cm以上のもの—E P 17・20・21・28となる。

以上、住居跡内の柱穴について記述したが、121号住居跡・122号住居跡ともに、構造からすると全部の柱穴が確認されたと言い難く、柱穴間の組み合わせや配列等について再度吟味をする必要がある。

123・124号住居跡（第11図 図版13）

調査区の中央の平坦面、01～04-11～13グリッド内に位置している。東側では136号住居跡と接し、南側では129・130号住居跡とそれぞれ重複している。確認面は第II b層下部で、第III層中まで掘り込まれている。遺存状態は構築面の中央から北東部にかけては軟弱で悪く、全体的に良好な状態ではない。本住居跡は、柱穴の配列・炉跡の状態から、2軒の住居跡を確認し、上部に123号住居跡が在り、123号住居跡の床面精査をしている際に124号住居跡が検出された。

123号住居跡 壁・床面は不明である。平面形は不整円形を呈すると思われ、長径3.8m・短径3.5mで、面積は推定で9m²（2.7坪）を計る。

柱穴は21本確認され、E P 6～8が主柱穴で、E P 9～21が支柱穴である。現状において、主柱穴は径25～52cm、深さ19～41mで、不整円形を呈し、ほぼ垂直に掘り込まれている。支柱穴は、径26～40cm、深さ11～39cmで、円形または不整円形を呈し、円形状にめぐっている。炉（E L 09）は住居内中央より西側にかけて在り、平面形は方形を呈し、長軸55cm・短軸40cmで、偏平跡を割裂し、角柱状にした石をもって区画している。

124号住居跡 平面形はほぼ円形を呈し、長径5.80m・短径5.50m・深さ13cm、面積は20.0m²（6.1坪）を計る。壁は西南側の一部を除き、遺存状態は良好で、壁高は25～30cmで、ほぼ垂直に掘り込まれており、壁面はやや凸凹が認められたが壁溝は検出されなかつた。床面は第III層中位を底面として、北側が高く南に向けて緩やかに傾斜し、若干の凸凹があり、中央西南部においては茶褐色土を用い貼床を形成し堅くしまっている。しかし、全体的には軟弱である。

柱穴は22本検出され、主柱穴はE P 22～27で径30～56cm・深さ18～27cm、支柱穴はE P 29～31・33～34・37～43で径18～38cm・深さ13～34cm、壁柱穴はE P 28・32・35・36で径28～36cm・深さ13～26cmで、形状は円形・不整円形・梢円形を呈する。主柱穴は住居跡の中央寄りにほぼ垂直に掘り込まれ、さらにそれらを補助するようなかたちで外周している。

炉跡（E L 10）は、中央西寄りから西側に位置する。炉を形成する礫の抜き取り痕、焼土の範囲から確認されたものであるため、形状は不明であるが、使用された角柱状の礫が数点、炉跡内や、周辺に散在している。焼土の範囲が長径1.5m・短径1mであることから、炉の規模はそれに類似すると考えられる。

覆土は7層に区分される。1層は茶褐色土で、褐色・赤褐色・炭化物の粒子を若干含み、微砂質であり、2層は黒褐色土で含有物は1層に類似する。3層は暗黒褐色土で2層に類似するが砂質性をおび、4層は黒褐色土で、褐色・赤褐色の粒子を若干含み、粘性があり、

5層は茶褐色土で、褐色・赤褐色の粒子を若干含み、荒い砂粒が混りしまっている。6層は茶褐色土で、褐色の粒子を含み砂質性であり軟らかく、7層は明茶褐色土で、6層に類似するが、大粒の炭化物片を若干含む。堆積の状態は、ほぼ水平にレンズ状に堆積している。

出土遺物の量は極めて多く、石器類が顕著である。特に炉跡（E L 10）を中心にして、西側の覆土中より多数検出され、土偶胸部2・石錐3・笠状石器3・石匙1・磨石1・凹石9・磨製石斧3・搔器・削器類10・浅鉢1を数える。これに対し、床面直上からは笠状石器2・凹石1と、出土量は極めて減少する。特に検出された笠状石器・磨製石器が、先端部や基部を欠いていることから、廃棄された住居跡に使用不可能となった石器類を投棄したものと推測される。

123・124号住居跡の重複関係は、124号住居跡がある程度埋没した後、その上に123号住居跡が構築されたと考えられる。新旧関係は、新しいものから129号住居跡→130号住居跡→136号住居跡→123号住居跡→124号住居跡の順序である。

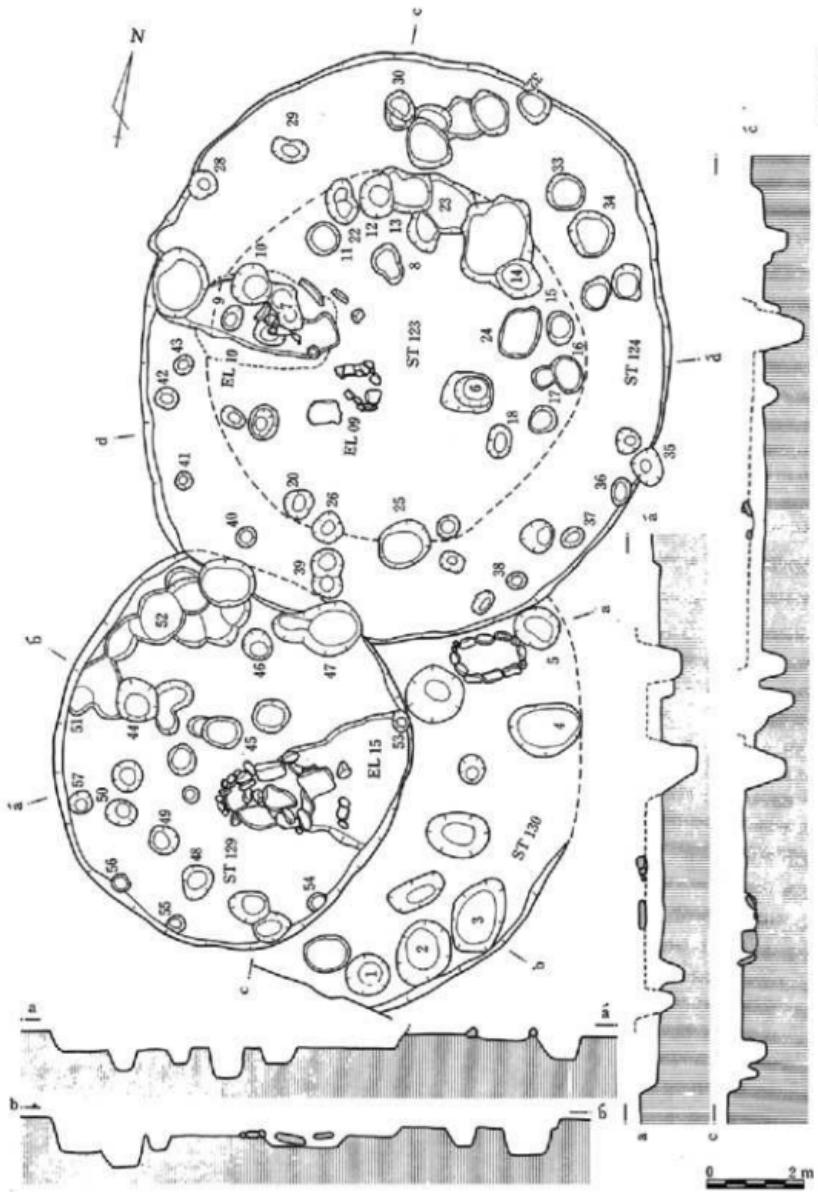
123・124号住居跡の時期は、重複関係および出土土器からみて、いずれも縄文時代中期大木8式期の所産である。

125・126号住居跡（第12図 図版14～17）

調査区の南側の平坦面、02～04～18～20グリッド内に在り、北側で127号住居跡・南西側では132号住居跡と重複している。確認面は125号住居跡で第IIb層中位で確認され、第IIb層下部・住居跡西側の一部で第III層上面を掘り込んで造られ、126号住居跡は125号住居跡の床面を精査している際3～5cm下部に検出された。遺存状態は良好である。

125号住居跡 平面形は、南西側がやや張り東側中央部が20cm東へ突出し張り出す不整隅丸方形を呈している。規模は長径4.76m・短径4.56mで確認面からの深さは約40cmになり、面積は14.5m²(4.4坪)を計る。壁は、東・北・西側で明確に確認され現存高20～30cmで北西側で緩やかに掘り込まれている他はほぼ垂直になっている。南側壁は黒褐色土中で突き堅められ緩やかになっている。床面は炉跡（E L 11）付近と東側中央張出部ではやや傾斜になりいずれも堅く踏みしめられており、他はほぼ平坦で壁際になると軟弱になっている。柱穴は15本確認され、主柱穴は6本でE P 1～6・径30～86cm・深さ35～51cmになり、円形状にめぐっている。支柱穴はE P 7・10～12で径22～38cm・深さ10～43cmで北側・東側・南西側壁に沿って配置されている。壁柱穴はE P 13で径24cm・深さ30cmで住居跡外に傾斜をもって掘り込まれている。その他E P 27・28は径12・15cm・深さ15cmで出入口の施設のための柱穴と考えられる。壁溝（E D 29）は北側の一部で認められ幅20cm・深さ5～9cmでU字形に掘り込んでいる。柱穴・溝の覆土は黒褐色土で軟らかい。

第11図 123・124・129・130号柱断面

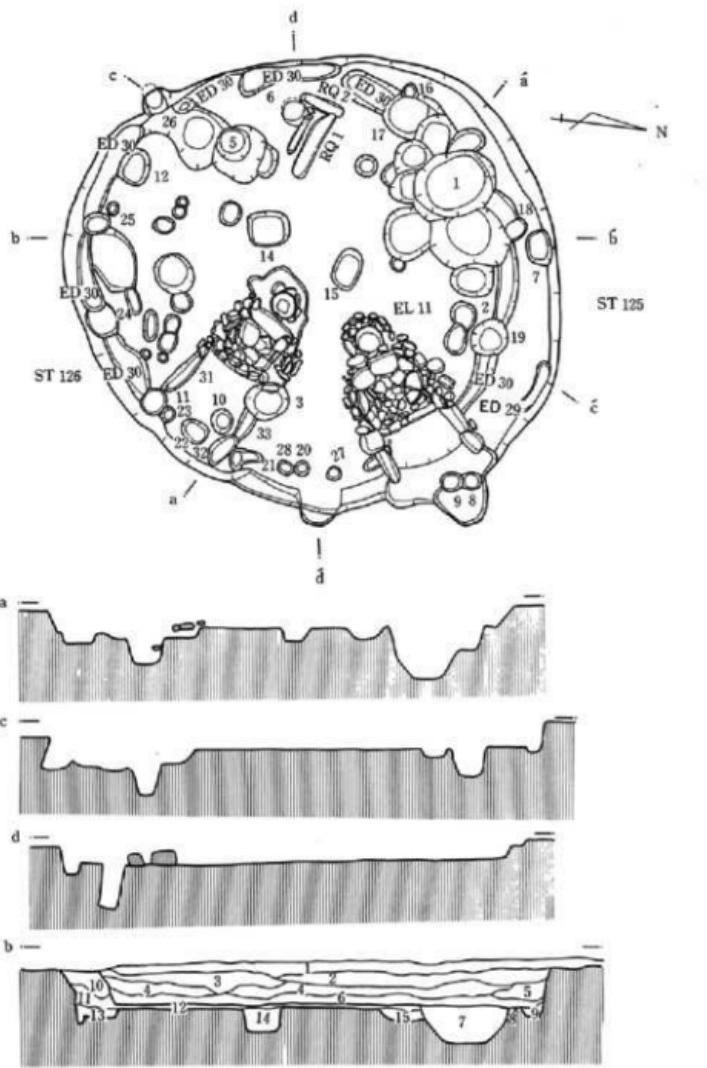


覆土は、大別して 6 層に区分される。1 層は黒色土で風化礫・砂礫粒を多く含み微砂質でやや堅くなり、2 層は黒褐色土で炭化粒子を多く含み微砂質でやや軟らかく、3 層は黒褐色土で 2 層より色調が明るく土質は近似しており、4 層は暗茶褐色土で炭化粒子を含む微砂質で軟らかく、5 層は褐色土で黄褐色土砂層が混り非常に軟らかい土質で、6 層は暗褐色土で粘質性があり炭化粒子を多量に含んで軟らかい。7・8・9 層はいずれも柱穴の覆土層で黒褐色である。堆積の状態は、ほぼ水平にレンズ状に堆積し、とくに 5 層は壁自体の崩落現象と考えられる。

出土遺物は、全体的に量は少なく住居跡中央部覆土 5 層に集中し、床面ではさらに少なくなる。5 層下部床面近くで土偶の胸部 1・石匙 2・磨石 3・凹石 4・石皿 2 が、床面直上より石鎌 2・磨石 3・凹石 1・石棒 2・立石 1 が出土している。立石 (RQ 1)・石棒 (RQ 2・3)・磨石 (RQ 4) の出土状態は、住居跡西側中央部の壁付近に RQ 1・3 はほぼ東西方向に、さらに西側へ RQ 2 がほぼ南北方向にそれぞれ横位の状態に検出され、その間に RQ 4 が在る。周辺にはピット・基壇などの施設はなく、床面も軟弱である。おそらく E P 6 の主柱穴に立掛けられ、埋没する過程でずり落ちたものと推測される。

炉跡 (E L 11) (第 15 図) は、住居跡北東側の中央部東寄りから壁付近にかけて在る複式炉である。平面形は先端部がコ字・燃焼部が U 字形をなし、全長 1.9 m・最大幅 1.08 m・床面からの深さは 10~38 cm で基軸方向は N-136°-W を計る。構築の状態は、前庭部では袖石が偏平な 20~35 cm の河原石を横位に使用し、燃焼部は底面に偏平な河原石 15~20 cm を 5~7 個使用し、小自然礫・磨石等で側面を固め規則的に配し、上部の礫が若干焼けている程度で底面は焼けていない。埋設土器部は、2 個体の土器を使用し 2~5 cm の厚さで焼土と灰が混り底面に認められ、小礫を一列にめぐらし配列している。埋設土器は別個体の深鉢形土器の頸部のみと胴下半部の 2 個を使用し正位の状態で、いずれも二次焼成を受けている。出土遺物は燃焼部の底面で石匙・磨石・磨製石製品がそれぞれ 1 点出土している。覆土は 8 層に分けられ、1 層暗褐色土(微砂質で炭化・焼土粒子を含む)・2 層茶褐色土(炭化・焼土粒子を含む)・3 層茶褐色土(2 層に近似し粒子などを多く含む)・4 層暗褐色土(炭化粒子を含む)・5 層暗褐色土(1 層に近似するがやや堅い)・6 層茶褐色土(灰が若干混る)・7 層焼土・8 層灰である。堆積の状態はレンズ状になっている。

126 号住居跡 平面形は、南側がやや張る不整隅丸方形を呈する。規模は長径 4.76 m・短径 4.46 m で確認面からの深さは 25~30 cm を計り、面積は 19.5 m² (5.9 坪) である。壁の状態は、西側中央部で 125 号住居跡壁と重複し、南・南東壁にかけて検出され、西壁ではほぼ垂直に南から南東壁ではゆるやかに掘り込まれ、現存高は 20~25 cm である。床面はほぼ平坦で、炉跡 (E L 12) 東南付近は堅く踏みしめられている他は軟弱である。柱穴は 13



第 12 図 125・126 号住居跡

本検出され、主柱穴は2本確認されE P 14・15で径44・42cm・深さ25cmで炉跡の北西部に並行して在る。支柱穴はE P 16~26で径15~14cm・深さ10~26cmで壁に沿うようにある程度の間隔で配列している。壁溝（ED 30）は東・西側で切れるが全周し幅20~25cm・深さ10~20cmでU字形に掘り込まれている。柱穴・壁溝の覆土は暗褐色土で炭化・風化礫を多量に含み堅く微砂質である。

覆土は大半が125号住居跡より切られ、南東側から南西側の一部で確認され4層に分けられる。10層は黒褐色土で砂礫粒を含み堅く、11層は暗褐色土で砂礫・炭化粒子を含み堅い土質で、12層は暗褐色土ブロックが斑点状に混り堅くしまり、13層は褐色土で黄褐色砂層・炭化粒子が混り軟らかい。

炉跡（EL 12）（第15図）は、住居跡の中央部か南東壁寄りに位置している複式炉で、平面形はEL 11の形状と同様と考えられる。全長2.08m・最大幅1mで床面からの深さは10~27cmで基軸方向はN-67°-Wを計る。構築の状態は、125号住居跡が造られる際に先端部の小礫と袖石が抜き取られ（EP 31~34）、小礫は東側の中央部にまとめて積上げられ、一部はEL 11に再利用されたものと考えられ、さらにEP 31の抜き取痕は大きさからみてRQ 2と合致している。燃焼部は比較的良好に遺存され、20~25cmの偏平な河原石を底面に敷き、大きさ15×50cmの礫を埋設土器部との仕切りとし良く焼けている。埋設土器は1個体使用し、深鉢形土器の胴部のみで正位の状態である。二次焼成を受け底面に5~7cmの厚さで焼土が認められる。覆土は8層に分けられ、1層暗褐色土（炭化粒子・小礫を含む）・2層褐色土（土質は1層に近似）・3層褐色土（炭化粒子・焼土粒子を含む）・4層暗褐色土（1層と近似し炭化粒子を多く含む）・5層褐色土（炭化粒子を含む）・6層褐色土（焼土・灰が混る）・7層焼土・8層暗褐色土（黄褐色土ブロック・小礫粒を含み堅い）で全体として微砂質で堅くしまっている。

125・126号住居跡の重複関係は、126号住居跡がある程度埋没する段階で125号住居跡が近接した時間帯に構築されている。新旧関係は新しいものから125号住居跡→132号住居跡→126号住居跡→127号住居跡の順序である。

125・126号住居跡の時期は、重複関係および炉跡（EL 11・12）の埋設土器からみていずれも縄文時代中期大木10式期の所産である。

127a・b・128号住居跡（第13図 図版18~21）

調査区の南側の平坦部、01~03-15~18グリッドに位置し、北側で129号住居跡と接し、130号住居跡・東側で134号住居跡・南側で125号住居跡・南西側でEL 25・26とそれぞれ重複している。127a号住居跡は第IIb層下部で確認され、128号住居跡は127a号住居

跡の床面精査の際検出され、さらに 127 b 号住居跡が確認され、いずれも第III層上面を掘り込んで造られている。遺存状態はほぼ良好である。

127 a 号住居跡 平面形は、西側が直線的になり東側で約 50 cm 張り出し部がある不整円形を呈している。規模は長径 5.05 m・短径 5 m で確認面からの深さは 15~20 cm 面積 17.6 m² (5.3 坪) である。壁は、北東側から南側で認められ緩やかに掘り込まれ、現存高は北側で 8~20 cm 東側で 10~17 cm 南側で 9~12 cm 計る。床面は炉跡 (E L 13) の南側・東寄りの周辺部が堅く踏みしめられ壁際に近づくにつれ軟弱であり、全体として平坦である。張り出し部は 65~90 cm の幅で突出し、底面は住居跡内の方向に傾斜し炉周辺部まで堅く踏みしめられ、出入口と考えられる。柱穴は 15 本確認され、主柱穴は 6 本で E P 25~30・径 32~60 cm・深さ 30~48 cm になり、炉跡先端を中心に方形状に 1.5~2.5 m の間隔で配置され、E P 26 が炉跡南側に在る。支柱穴は東側に 3 本・西側に 6 本づつ直線的に配列され、E P 31~39 で径 30~50 cm・深さ 15~29 cm である。周溝は検出されない。

覆土は 2 層に分けられ、1 層は黒褐色土で色調は黒味があり炭化粒子・砂礫粒を含みやや堅く、2 層では黒褐色土で 1 层に近似するが炭化粒子を多く含んでいる。堆積の状態はやや西側へ流れ込むようにレンズ状に堆積している。なお住居跡北東壁の覆土 1 層下部で石囲炉 (E L 29・図版 27) を検出する。炉跡の状態は 15~25 cm の礫をやや方形になるように配置し、長軸 70 cm (東西)・短軸 60 cm (南北) で礫上面からの深さは 10 cm で、底面に焼土・炭化材が 2~5 cm の厚さで堆積している。おそらく住居跡の埋没過程で構築した屋外炉として使用したと考えられる。

出土遺物は、覆土中で住居跡中央部南寄りに一括土器がやや集中する他は、床面からの出土状況は少ない。石器は覆土中より石錐 1・石錐 1・石匙 1 で、床面より石錐 1・磨石 1・凹石 3・磨製石斧 1 が出土し、石棒は出土口の床面より 1 点出土している。

炉跡 (E L 13) (第 15 図) は、住居跡中央東寄りから北東壁寄りに位置する複式炉である。平面形は先端部がコ字形で燃焼部から前庭部で U 字形になり、規模は全長 2 m・最大幅 1.20 m で床面からの深さは 12~20 cm で基軸方向は N-157°-W を計る。構築の状態は、前庭部で北側の袖石が抜き取られ (E P 46・47)、南側のみで径 35~45 cm の偏平な河原石を使用し、燃焼部で底面 25~45 cm の偏平な河原石を埋設土器との仕切りにも同様に用いており、上部には 15~20 cm の小礫や磨石・凹石などを積みあげている。埋設土器部は上部で 10~15 cm の角柱礫を用い二重にめぐらし、底面には焼土・灰などが認められない。全体に礫も焼けていない。埋設土器の状態は、深鉢形土器の胸中半部のみで正位の状態になっており、二次焼成を受けもろくなっている。覆土は 7 層に区分され、1 層暗褐色土 (小砂礫を含みやや堅い)・2 層黒褐色土 (炭化粒子を少量含む)・3 層茶褐色土 (小砂礫・炭

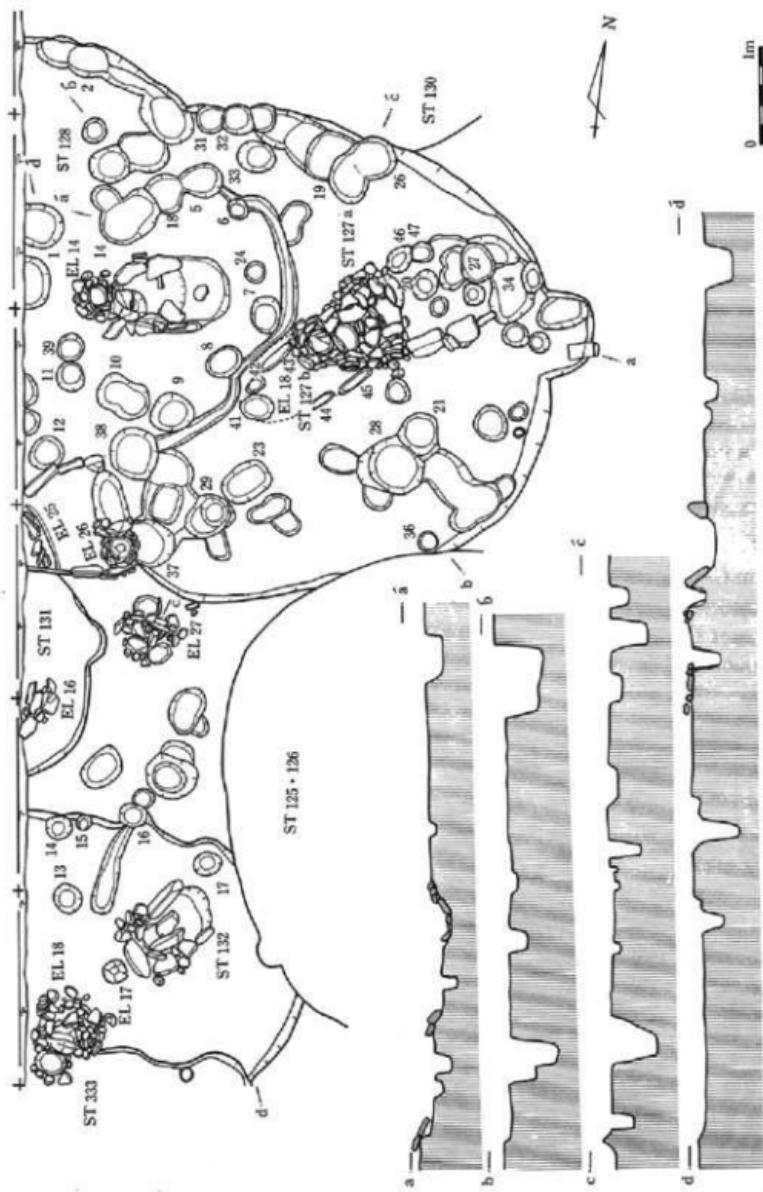
化粒子を若干含む)・4層黒褐色土(炭化粒子を若干含み桶質がある)・5層黒褐色土(土質は1層に近似)・6層黒褐色土(炭化粒子を若干含み軟らかい)・7層暗褐色土(6層に近似しさらに軟らかい)。

127 b号住居跡 柱穴・炉跡のみで検出され、平面形・規模・壁・床面の状態は不明であるが周溝は検出されない。柱穴は7本確認され、E P 18~24で円・橢円形を呈し径25~52cm・深さ10~34cmである。炉跡(E L 18)は、E L 13の南西側に位置し、推定全長1.5m・最大幅70cmを計る複式炉と考えられる。E P 41は径35cm・深さ15cmで土器の底部破片が埋設され、E P 42~45は径20~40cm・深さ6~8cmで、いずれも深鉢形土器や疊などが抜き取られ、おそらく127 a号住居跡の炉跡を構築する際に疊などが抜き取られ、再利用されたものと考えられる。底面は若干焼けている。

128号住居跡 東側約半分を検出する。西側は未調査のため平面形は不明であるが、おそらく東側で40~50cm・幅1.5mの張り出し部をもつ不整円形を呈すると考えられる。規模は現況で4.8m(南北方向)・面積は約1/2で9m²(2.7坪)を計る。壁は北側で認められれば垂直に掘り込まれ、現存高は15~20cmである。周溝(E D 40)は、東側の中央から南側で確認され幅7~15cm・深さ7~12cmでU字状に掘り込まれている。床面は、炉周辺部でやや堅くなり他は軟弱であり、ほぼ平坦である。柱穴は12本検出され、主柱穴は1本のみ確認されE P 1で径45cm・深さ30cmである。支柱穴は4本で炉跡周辺部に在り、径28~60cm・深さ20~22cmである。壁柱穴は7本在りE P 2・5~10・12で径22~38cm・深さ18~30cmになり、とくにE P 6~8は張り出し部の隅に位置している。

覆土は、黒褐色土で127 a号住居跡覆土1層より色調は明るく小疊を多量に含み炭化粒子を若干含み微砂質で堅い土質、ほぼ水平に堆積している。遺物はあまり出土せず、覆土上層に土器片が集中する程度で、石器は覆土中で磨石1、床面では石鎌1・石槍1・石皿片1・磨製石斧1が出土している。

炉跡(E L 14)(第16図)は、住居跡中央東側から張り出し部付近にかけて在る複式炉で、127 a号住居跡が構築される際に燃焼部が壊されている。規模は全長1.60m・最大幅85cmでN-97°-Wを計り床面からの深さは10~15cmである。構築の状態は、前庭部・燃焼部が壊され、袖石が抜き取られ、側壁に底面の偏平な河原石が移動されている。埋設土器部はやや遺存の状態が良く、径5~15cmの小疊・磨石などをやや不則に配している。埋設土器は、中形の深鉢形土器の胸中半以下を欠損し正位の状態になり、二次焼成を受けている。覆土は6層に区分され、1層暗褐色土(褐色土ブロック・小疊を含み堅く踏みしめられている、S T 127の床面)・2層黒褐色土(炭化粒子を若干含み堅い)・3層黒褐色土(小砂疊・風化疊粒が混りやや軟らかい)・4層焼土・5層灰褐色土(灰と焼土が混る)・6層灰である。



127 a・b・128号住居跡・E L 25・26の重複関係は、127 b号住居跡の埋没の過程で128号住居跡が造られ、さらに127 a号住居跡が同様に128号住居跡を切って構築し、それぞれの住居跡の南西・南側上面にE L 25が在り、E L 25を切ってE L 26が位置している。新旧関係は、新しいものからE L 26→E L 25→S T 127 a→S T 128→S T 127 bの順序となっている。時期は、127 a・b・128号住居跡とも炉跡埋設土器からみて縄文時代中期大木9~10式期にかけての所産である。

129・130号住居跡 (第11図 図版22・23)

調査の中央部やや南寄り平坦面、01~04-13~15グリッド内に位置し、北側で124号住居跡・南側で127号住居跡と129・130号住居跡とも重複している。確認面は129号住居跡で第II b層下部から第III層上面で認められ、130号住居跡は129号住居跡東側壁を精査している際に検出され、第III層を掘り込んで造られている。遺存状態はほぼ良好である。

129号住居跡 平面形は北西側が若干張る円形を呈する。規模は長径3.70m・短径3.64mで面積は9m²(2.7坪)を計り、確認面からの深さは15~20cmである。壁は緩やかに掘り込まれており、現存高が15~18cmである。周溝は認められない。床面はほぼ平坦で、全体的にやや堅く踏みしめられている。柱穴は14本検出され、主柱穴は7本あり西側に集約されるように2対(E P 44・46・47とE P 48~50)直線的に並べられ、炉跡北側に1本中心的(E P 45)に配置され、径35~55cm・深さ25~40cmである。支柱穴は壁および壁際沿うように7本配列しており、径23~55cm・深さ11~24cmである。

覆土は暗褐色土で炭化・小礫粒子を多量に含み軟らかい土質で、単一な層である。出土遺物は、土器・石器とも量は少なく住居跡中央部に若干集中する程度であり、石器は覆土中から石錐1・石匙1・凹石3が出土している。

炉跡(E L 15)(第15図)は、住居跡の中央部の南寄りから東側壁にかけてある石囲炉であり、同時期において一部抜き取られ壊されている。全長1.95m・最大幅85cm・基軸方向N-107°-Wで床面からの深さは11~18cmである。構築の状態は、複式炉と類似し1.95mの長さで逆U字状に掘り込んでいる。石組部では長軸1mを計り北・西・南側の側面に30cm程の偏平疊を置き、東側で25~30cmの梢円状の疊を使用しさらに東側と仕切りをしており、上部で北側から西側にかけて小礫・凹石を配しめぐらし、底面には石組部中央と東側にある25~45cmの偏平疊があったと考えられる。疊は非常に良く焼け焼土などが検出されている。覆土は4層に区分され、1層暗褐色土・2層黒褐色土(炭化粒子を若干含む)・3層褐色土(焼土ブロックや炭化粒子が混り軟らかい)・4層暗褐色土(小礫などが軟らかい)。

時期は、123・124・130号住居跡より新しく、出土土器片からみて縄文時代中期大木8～9式期の所産と考えられる。

130号住居跡 住居跡全体が124・127・129号住居跡に切られているため、平面形・大きさなどは不明である。壁は東南側の一部分のみで傾斜している。床面は平坦で軟弱である。柱穴は5本確認され、径46～85cm・深さ10～30cmである。

時期は、124号住居跡の重複関係からみて縄文時代大木8式期に比定されると考えられる。

131・132・133号住居跡 (第13図)

調査区の南側平坦面、01・02・18～21グリッド内に位置し、131号住居跡は北側でEL25と132号住居跡東側で125・126号住居跡と132・133号住居跡とそれぞれ重複しており、132号住居跡上面にEL18が在る。確認面は131号住居跡でEL25・125号住居跡の壁を精査中に確認され、133号住居跡は132号住居跡床面を精査する際に検出され、いずれの住居跡も第III層を掘り込んで造られている。

131号住居跡 東側の一部分を検出し、中央部に幅35cm・長さ15cmの張り出し部がある。平面形・規模は不明である。壁は傾斜をもって掘り込み、現存高10～15cmである。床面は西側にやや傾斜し軟弱である。柱穴・周溝は確認されない。南側壁寄りに小礫や偏平な礫が在り、おそらく複式炉と考えられ大部分同時期に壊されている。覆土は黒褐色土と暗褐色土に分けられる。出土遺物はあまりみられない。

時期は、EL25より旧く土器片からみて縄文時代中期大木10式期に比定される。

132号住居跡 西側が未検出のため平面形・規模は不明で、西側の大部分が擾乱され遺存状態は悪い。壁は傾斜をもって掘り込まれ、現存高は5～10cmである。周溝は検出されない。床面はほぼ平坦で炉跡先端部が若干堅くなっている他は軟弱である。柱穴は5本認められ、EP13は径30cm・深さ25cmで主柱穴、EP14～17は径20～28cm・深さ18～25cmで支柱穴と考えられる。覆土は下層のみで暗褐色土で炭化粒子を多量に含む。遺物は出土の量が少なく、覆土中で石器が石鉋1・石匙1・凹石3が出土している。

炉跡(EL17)(第16図)は、住居跡の北側壁寄りにある複式炉である。全長1.35mで最大幅82cmで基軸方向はN-134°-Wを計り、床面からの深さは15～25cmである。構築の状態は、全体的に抜き取られ不規則であり、埋設土器部では囲りに礫の抜取痕もみられずおそらく礫はないと考えられ、底面に厚さ2～5cmで焼土が堆積している。埋設土器は、深鉢形土器の胴中半部のみで正位の状態であり、二次焼成を受けている。

時期は、133号住居跡より新しく、炉跡の埋設土器からみて縄文時代中期9～10式期と比定される。

133号住居跡 平面形は、南側と西側で未検出であるが東側がやや直線になる不整円形を呈すると考えられる。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、現存高は12~18cmである。床面は平坦で西側の中央部でやや堅くなり、壁際は軟弱である。柱穴は9本確認され、中央部に2本と壁寄りに1本あり主柱穴と考えられ、壁付近に支柱穴が6本あり、径15~35cm、深さ15~38cmである。周溝は認められない。覆土は暗褐色土で微砂質で風化礫を含む。遺物は覆土上層に多く出土し磨製石斧が1点出土している。

時期は、床面の土器片からみて縄文時代中期大木8式期と考えられる。

134・135・136号住居跡 (図版23)

調査区の中央部から南側の平坦面、03~05~11~18グリッドにかけて位置し、134・136号住居跡はいずれも西側で124・127号住居跡とまた134・135号住居跡とも、それぞれ重複している。この区域は第III次調査と重複して調査を行ない精査の結果、第III層中まで掘り下げられており、若干の床面の状態・柱穴の配列で住居跡と確認された。

134号住居跡 平面形は不整円形を呈し、長径4.80m・短径4mである。床面は南側で認められ、堅く踏みしめられている。柱穴は10本確認され、径25~60cm・深さ15~42cmである。時期は、127号住居跡より旧く、135号住居跡より新しく、若干の床面出土の土器片からみて、縄文時代中期大木9~10式期と推定される。

135号住居跡 平面形はおそらく円形を呈すると考えられ、床面の状態は不明である。柱穴は9本で、主柱穴1本・支柱穴1本・壁柱穴7本で径20~43cm・深さ20~35cmである。時期は、縄文時代中期大木8式期と考えられる。

136号住居跡 平面形は円形を呈すると考えられる。柱穴群が多く集中し配列の状態から住居跡とした。柱穴は7本確認され壁柱穴のみで径20~30cm・深さ15~20cmである。柱の覆土からみて上部に2~3軒の住居跡があったと推定される。124号住居跡より旧く、おそらく縄文時代中期大木8式期に比定されると考えられる。

(2) 炉跡 (E L)

ここで説明を加える炉跡は、住居跡が第II b層黒色土中に確認されたため、平面形・規模・柱穴の状態が不明確であるため、炉跡群として一括するものである。

E L 19 (第16図) 01-20 グリッドに位置し 132・133号住居跡の上面に在る。全体的に不規則の状態で前庭部の袖石は確認されない。長さ 1m・最大幅 85cm・確認面からの深さは 5~10cm で基軸方向は N-173°-W を計る。構築の状態は、燃焼部では底面から上部にかけ径 5~20cm の小・中疊を使用し、埋設土器部との仕切りに径 30~35cm のやや大形の疊を用いている。埋設土器部は先端部に 5~15cm の疊を若干配し、底面が良く焼けているが焼土・灰などがみられない。全体として疊は燃焼を受けていない。埋設土器は、鉢形土器の胸中半部欠損を使用し正位の状態であり、二次焼成を受けている。

時期は、132・133号住居跡より新しく、埋設土器からみて縄文時代中期大木 10 式期に比定される。

E L 20 02-8 グリッドに在り 121・122 号住居跡・E L 21 と重複している。埋設土器のみ検出され、小疊・偏平疊・柱状疊などが散在し、全体構造は不明である。埋設土器は中形の深鉢形土器で口縁部から底部を有する完形土器で正位の状態となっている。時期は E L 21・121・122 号住居跡より新しく、縄文時代中期大木 9~10 式期の所産である。

E L 21 01-8 グリッドに位置し、122 号住居跡と重複している。埋設土器・燃焼部のみ検出されたが、大半は壊され埋設土器の遺存も悪く、構築状態は不明である。時期は 122 号住居跡より新しく・E L 20 より旧く、縄文時代中期大木 9~10 式期の所産と考えられる。

E L 22 01・02-6・7 グリッドに在り E L 23 と重複している。全体的な構造不明で埋設土器部のみで、15~20cm の疊を囲りに配し不規則な状態である。おそらく燃焼部や前庭部が抜き取られ、壊わされたものと思われる。埋設土器の遺存状態も悪く、胸下半分から底部の粗製深鉢形土器を使用し正位の状態である。時期は縄文時代中期大木 9 式期である。

E L 23 E L 22 の下部にて確認され、埋設土器のみである。若干の疊の抜き取り痕がみられ、おそらく疊などは E L 23 に再利用されたと考えられる。埋設土器は、深鉢形土器の胸中半分部のみで上部は内側に流れ込んでおり正位の状態である。底面は良く焼け 2~5cm

の厚さで焼土が堆積している。

時期は、E L 22 より旧く縄文時代中期大木 9 式期の所産である。

E L 24 (第 16 図) 01・02—7 グリッドに位置し、北側で E L 28 と重複している。平面形は先端部がコ字形になり、燃焼部・前庭部で U 字形を呈している。規模は全長 1.6 m・最大幅 90 cm・確認面からの深さは 26 cm で基軸方向は N—187°—W を計る。構築の状態は、前庭部はほぼ平坦に掘り込まれ、袖石は 18~50 cm の偏平礫を横位に使用している。燃焼部では 15~20 cm の偏平礫を上部ではやや大形の偏平線を使用し、径 50 cm の礫で埋設土器部と仕切りをしている。埋設土器は上部で礫の抜き取りがみられ、底面が若干焼けている。埋設土器は深鉢形土器の胴下半部が欠損し正位の状態で、二次焼成を受けている。

時期は、E L 28 より新しく、埋設土器からみて縄文時代中期大木 10 式期の所産である。

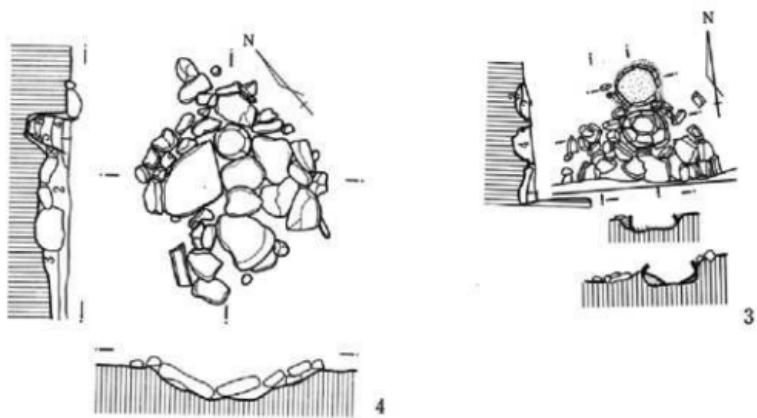
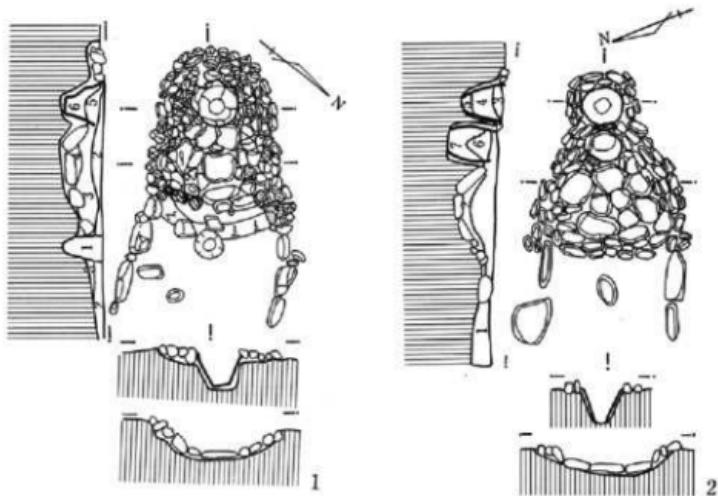
E L 25 (第 13 図) 01—17・18 グリッドに在り 127・128 号住居跡・E L 26 の上面に位置し重複している。前庭部と燃焼部の一部分のみ検出し、最大幅は 1.2 m でほぼ平坦に掘り込まれている。礫は 40~50 cm の扁平なものを横位に使用している。燃焼部では 20~25 cm の礫で仕切りをし、底面では礫が抜き取られている。時期は重複しているいずれよりも新しく、縄文時代中期大木 10 式期の所産と考えられる。

E L 26 (第 13 図) 01—17・18 グリッドに位置し、燃焼部・埋設土器部のみを検出した。燃焼部は礫が抜き取られ、25~30 cm 堀り込まれている。埋設土器部は遺存状態もよく、10~15 cm の礫を規則的に配し、底面が若干焼けている。埋設土器は深鉢形土器の胴中半部のみで口縁・底部は欠損し正位の状態で、二次焼成を受けている。時期は、E L 25 より旧く、127・128 号住居跡より新しく、縄文時代中期大木 10 式期の所産である。

E L 27 01—18 グリッドに在り、燃焼部のみで全体は不明である。北側の下部に大木 8 a 式の深鉢形土器が埋設されている。時期は縄文時代中期大木 9 式期と考えられる。

E L 28 01・02—6・7 グリッドに在り、礫が散在し規模・構築方法は不明である。

E L 30(第 11 図) 03—13 グリッドに位置し、130 号住居跡覆土下層にある。15~30 cm の角柱礫を方形に配列し、長軸 70 cm・短軸 50 cm・深さ 15 cm で底面が若干焼けている。E L 29 同様に屋外炉として使用したと考えられ、時期は縄文時代中期大木 8 式期と推定される。

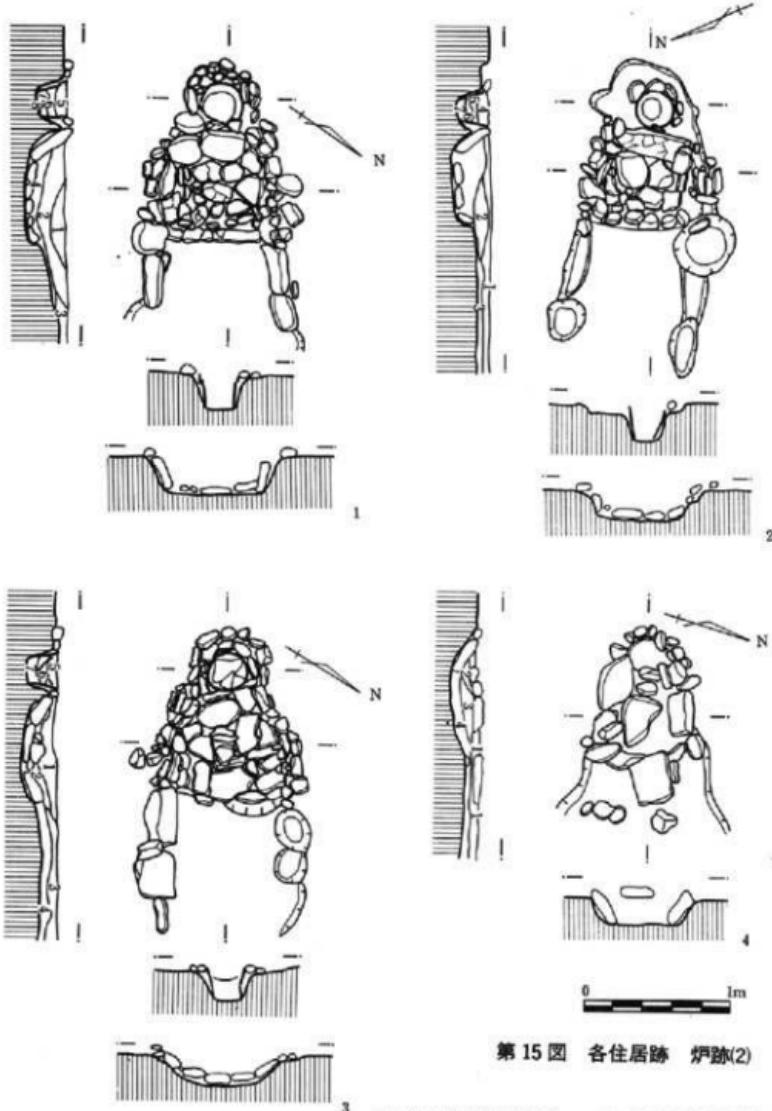


0 1m

第 14 図 各住居跡 炉跡(1)

1—103 号住居跡炉 (EL. 02) 2—106 号住居跡 (EL. 03)

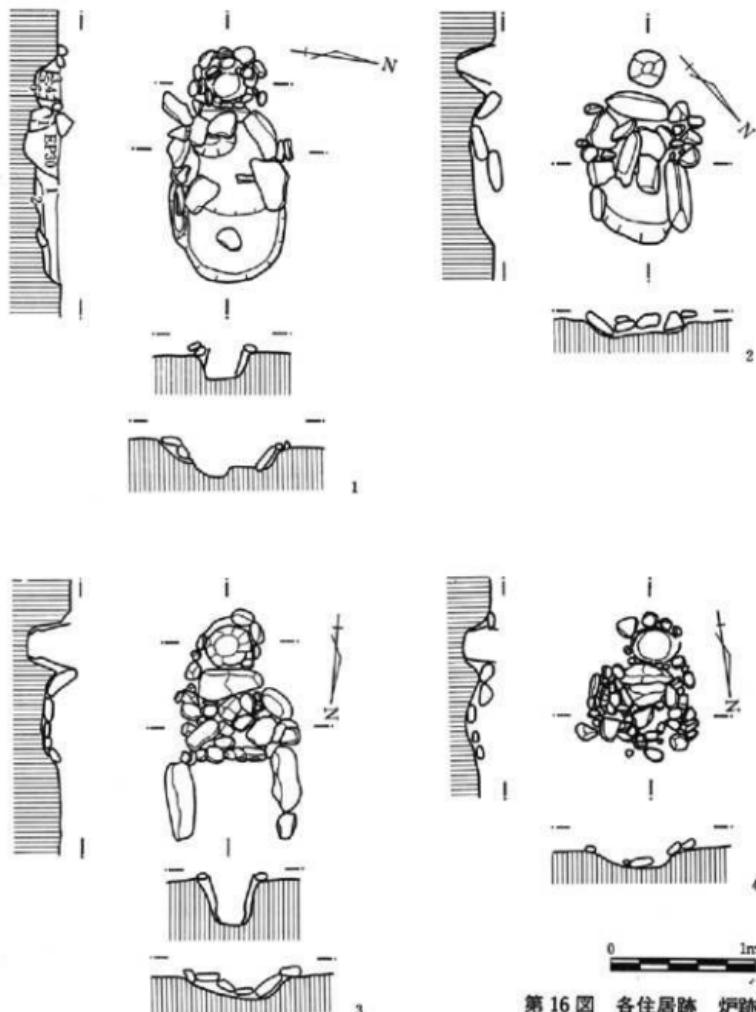
3—109 号住居跡炉 (EL. 05) 4—121 号住居跡炉 (EL. 08)



第15図 各住居跡 炉跡(2)

1-125号住居跡炉 (EL 11) 2-126号住居跡炉 (EL 12)

3-127号住居跡炉 (EL 13) 4-129号住居跡炉 (EL 15)



第16図 各住居跡 炉跡(3)

1—128号住居跡炉 (EL 14)

2—132号住居跡炉 (EL 17)

3—19号炉跡 (EL 19)

4—24号炉跡 (EL 24)

(3) 土壌・配石遺構

1号土壌 (第6図 図版11)

調査区の中央部の平坦面、2・3・9・10グリッドに位置し、北東側で103号住居跡と重複している。遺存状態はほぼ良好である。確認面は第III層上面と103号住居跡の床面を精査する際に検出され、第IV層暗褐色土の上部まで掘り込んでいる。

平面形は、北西側がやや張り出す不整橢円を呈し、長径1.56m・短径0.87m・深さ48cmで主軸方向はN-32°-Eを計る。壁の状態は、北東壁は、北東側でほぼ垂直になり他はほぼ緩やかに掘り込まれている。壙底は、北側から北東側にかけてやや傾斜をもち、他は平坦である。

覆土は、4層に分けられ全体に微砂質である。1層は暗褐色土で風化礫小粒を含む。2層は暗褐色土で1層に近似するが色調が暗い。3層は黒褐色土で粘質性が強く軟らかい。4層は黒色土で炭化粒子を含み軟らかい。出土遺物は、上層から中層にかけては少なく、壙底近くで多く出土し土器片のみである。

本土壌は、103号住居跡より旧く、時期は縄文時代中期大木8式期の所産である。

2号土壌 (第7図 図版7)

3-6・7グリッドに位置し、106号住居跡と重複している。確認面は106号住居跡の床面を精査する際に検出された。遺存状態は良くない。

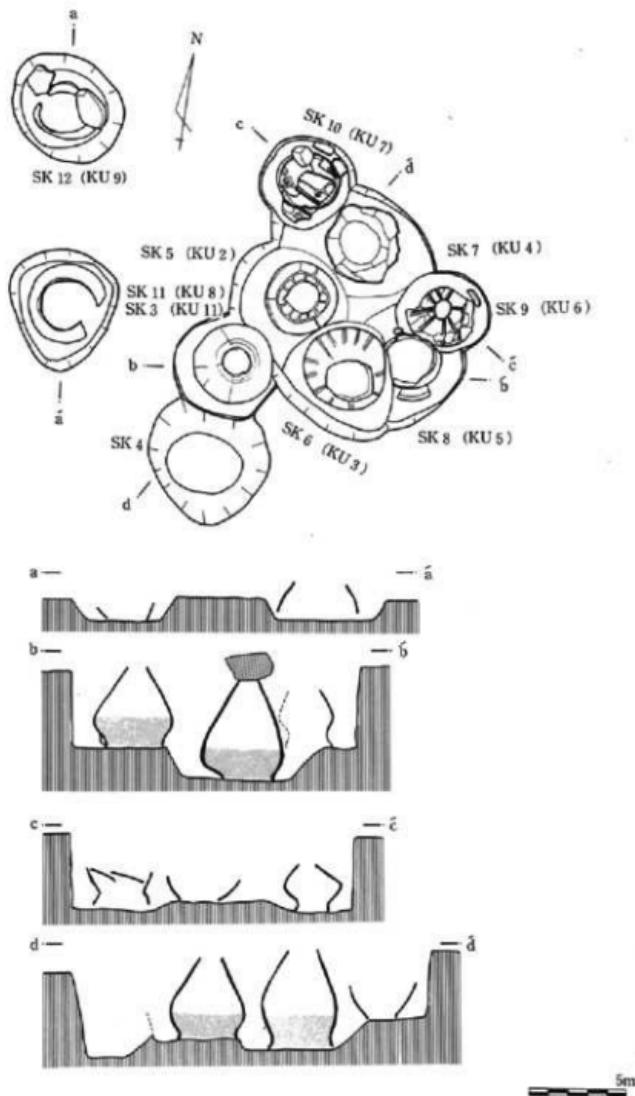
平面形は不整橢円を示し、長径1.22m・短径0.86m・深さ20cmで主軸方向N-35°-Eを計る。壁は全体に緩やかに掘り込まれている。壙底は壁付近で若干傾斜になるが、平坦であり、自然礫が中央部に集中している。出土遺物は土器片のみで覆土中に散在している。

本土壌は、106号住居跡より旧く、時期は縄文時代中期大木8式期と推定される。

4~12号土壌群 (甕棺墓) (第17図 図版28~30)

土壌群は調査区の中央部北寄りの緩斜面に位置し、3・4・4・5グリッド内に在り、105・106号住居跡の北側に近接している。3~10号土壌は重複しており、西側にある程度間隔をおき11・12号土壌がそれぞれ位置している。確認面は第II層下部で認められ、3~10号土壌は第IV層上部を掘り込み、11・12号土壌は第III層中を掘り込んでそれぞれ造られている。遺存状態はおおむね良好である。各々埋設土器を有している。

3~10号土壌 平面形は各々土壌とも円形・不整円形を呈し、規模はSK3で長・短径50cm・深さ44cm、SK4で長径65cm・短径60cm・深さ50cm、SK5で長径55cm・短径



第17図 3~12号土礫

50 cm・深さ 53 cm、SK 6 で長径 65 cm・短径 55 cm・深さ 68 cm、SK 7 で長径 50 cm・短径 45 cm・深さ 40 cm、SK 8 で推定長径 55 cm・短径 50 cm・深さ 45 cm、SK 9 で長径 45 cm・短径 40 cm・深さ 43 cm、SK 10 では長径 50 cm・短径 46 cm・深さ 45 cm である。壁の状態は、いずれもほぼ垂直に掘り込んでおり、SK 6 の南側ではやや緩やかになっている。壇底の状態は SK 5・10 で起伏が認められ、他はほぼ平坦になっている。

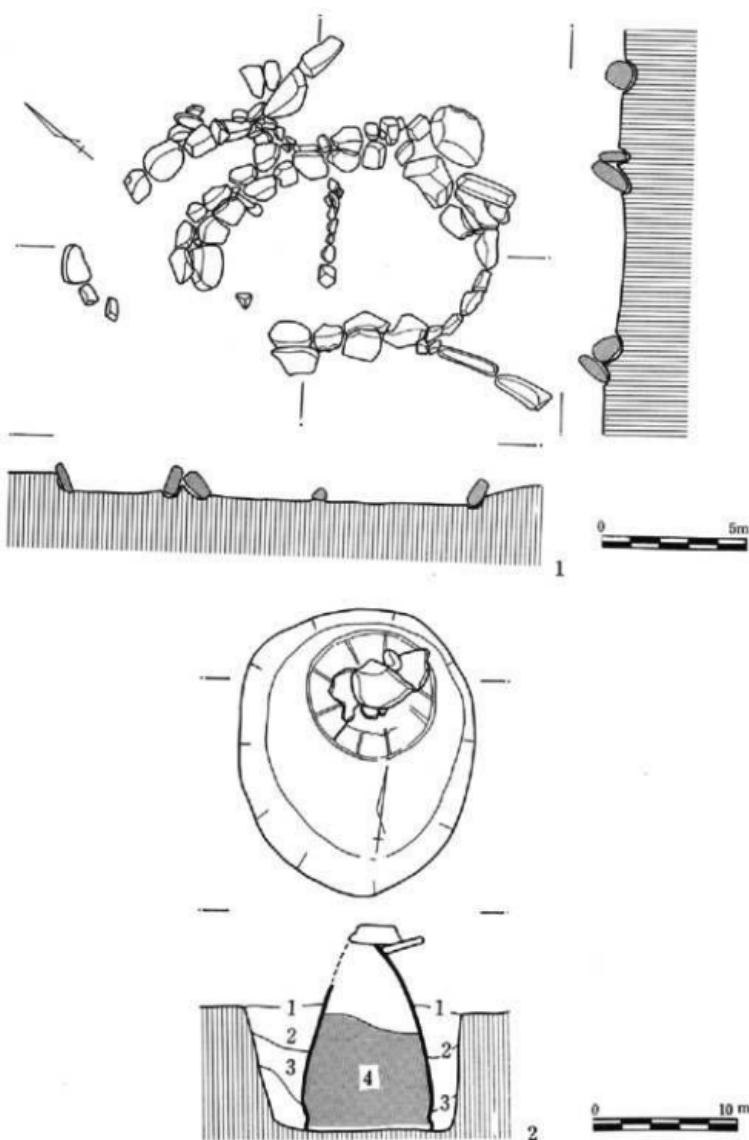
埋設土器 (KU) の状態は、SK 4 を除いて他は埋設土器を有し各々土壤のほぼ中央部に在り、EU 1・2 は中央寄りから北側にかけて位置し、KU 1~7 全て逆位の状態となっている。KU 3・5・6 は、大型の深鉢形土器 43~53 cm で底部が欠損し、KU 3 の上部に密着するように大きさ 25 cm・厚さ 13 cm の偏平な河原石を置いてある。KU 4 は大形深鉢形土器の口縁から頭部付近のもので壇底に接し、KU 5 は中形の深鉢形土器の胴下半部が欠損しており、西側の部分は KU 3 が埋設される際に抜き取られたものと考えられる。KU 6・7 は中型の深鉢形土器の胴下半部が欠損し、土圧により上部から内側へ押しつぶされた状態になっており、KU 7 では 12 cm 程の自然疊が出土しており恐らく埋設される際に上部に置いたと思われる。

覆土は、各々の土壤とも黒褐色土で、風化疊粒・小疊・若干の炭化粒子および黄褐色土ブロックなどが混り、微砂質土でやや軟らかい人為的な層位である。とくに SK 3・5・6 では黒褐色土と暗褐色土(黄褐色土ブロックが混る)が交互にみられ、壇底近くで 2~5 cm の小疊を多量に土器周辺部に敷きつめており、土器の内部は壇底から 15~21 cm の厚さで褐色土が堆積し若干の骨粉が含まれ、器面内側の色調も他と比べて明褐色に変化している。上部には黒褐色の自然層が堆積している。

土壤群の重複関係は新しいものから、SK 3・4・5・7 の関係では SK 3 → 7 で、SK 3 と 4 では SK 3 が新しく、SK 4 と 7 は不明である。SK 6・8・9 では SK 6 → 9 → 8 となり、SK 7・9・10 では SK 9・10 が SK 7 より新しく、SK 9・10 は同時期か先後関係があるとみられ、SK 5・6 では SK 6 が新しい。その他の新旧関係は不明確である。以上のように土壤群の構築時期は、SK 3・5・6 が比較的新しく、SK 7~10 はそれらに比べ若干古い段階のものと考えられる。

11 号土壤 平面形は南側が大きく張り出す不整円形を呈し、長径 62 cm・短径 56 cm・深さは確認面より 10 cm で長軸方向は N-7°-W を計る。壁は緩やかに掘り込まれ、底面はほぼ平坦である。覆土は壇底付近のみで暗褐色土で若干黄褐色土ブロックを含め軟らかい土質である。埋設土器 (KU 8) は、大型の深鉢形土器の頭部付近で正位の状態で検出された。

12 号土壤 平面形は梢円形を呈し、長径 60 cm・短径 52 cm で確認面からの深さは 10~12



第18図 14号土塙・配石造構
1—配石造構 2—14号土塙増

cmで長軸方向はN-32°-Wを計る。壁は傾斜をもって掘り込まれ、壇底はほぼ平坦である。覆土は暗褐色土で、土器内部は覆土層と同様で骨片・骨粉などはみられなかった。埋設土器（KU 9）の状態は、深鉢形土器の胴下半部・底部欠損のものを使用し、正位の状態である。東側の上部に大きさ22 cmの偏平な河原石をおき恐らく埋設する際に使用したと考えられる。

以上のように3~12号土壙は、いずれも近接した時間に造られたと思われ、時期は土器の様相からみて縄文時代中期大木8式期から大木9式期にかけての所産である。

13号土壙 (図版31)

調査区の中央部のやや平坦面、01-10・11グリット内に位置し、西側で104号住居跡と接している。確認面は第II b層の一部を掘り込んで造られている。遺存状態はほぼ良好である。

平面形は、南東側が若干張り出す不整円形を呈し、長径105 cm・短径85 cm・深さ21~23 cmでN-3°-Wを測る。壁は北側で垂直になり、南東側で緩やかに掘り込まれている。壇底は中央部で若干起伏があるが殆んど平坦である。埋設土器（KU 10）の状態は、大型の深鉢形土器の口縁部から頸部にかけての土器で、逆位の状態である。覆土は黒褐色土で小礫粒や礫などが混り微砂質でやや堅い土質であり、土器内部も同様な層位である。

14号土壙 (甕棺墓) (第18図 図版31)

調査区の中央部の平坦面、02・03-9・10グリッド内に位置し、122号住居跡の南東寄りに在り、121・122号住居跡と重複関係にある。121号住居跡の覆土中を精査している際に確認され、第III層中位から下部にかけて掘り込まれている。遺存状態は良好である。

平面形は、北西側がやや隅丸形になる不整円形を呈し、長径98 cm・短径80 cm・深さ62 cmでN-4°-Wを測る。壁は、北壁付近ではほぼ垂直になり、東・南・西壁にかけてはやや傾斜をもって掘り込んでいる。東側で若干高く中央部から西壁では平坦となっている。覆土層は3層に分けられ、1層は暗褐色土で風化礫粒・褐色土ブロックが含まれ、粘質が強くやや堅い土質で、2層は黒褐色土で小礫を含み砂質性がありやや堅い、3層は暗褐色土でやや黒味がある色調で2層より小礫を多く含み、黒褐色土のブロックが混る微砂質で軟らかい。

埋設土器（KU 11）は、土壙の北壁寄りに在り、大型の深鉢形土器で器高67 cmの底部のみ欠損し逆位の状態で出土している。上部には17 cmと12 cmの偏平な河原石が重り合い、その間に5~7 cmの礫が認められ、西側の底部付近の土器片が内部に落ち込んでいる。土

器内部の覆土は、壇底から 29~31 cm の厚さで褐色土（4 層）の小礫・風化礫粒・若干の炭化粒子が混る微砂質土が堆積し、その上部は空間になっている。土器數十片・石器の剝片が出土し、骨片などは認められない。おそらく後で自然屑が流れ込み人骨などと混り合い堆積したものと考えられる。

本土壙墓は、121・122 号住居跡よりも新旧関係は新しく、時期は埋設土器からみて縄文時代中期大木 9 式期の所産である。

配石造構（SM1）（第 18 図 図版 32）

調査区の中央北側寄りの緩傾斜地、1・2-6・7 グリッド内に位置し、101・102・107 号住居跡と重複している。101 号住居跡の下部で認められ、102 号住居跡の床面・柱穴を精査しているさいに確認され、第 IV 層上部まで掘り込んでいる。遺存状態は 101・102 号住居跡の床面直下にあり、上面は不明で全体的にやや落ち込んだ部分に造られ、多少礫が動かされているが、一応良く遺存している。

平面形は、北側でやや直線的になる不整の小判形を呈している。規模は長軸 2.2 cm・短軸 1.6 cm で礫の上面からの深さは 20 cm で長軸方向 N-62°-W を計る。構築の状態は、15~30 cm 大の偏平な河原石を用いて構築され、とくに北側から東側および西側の一部で石を縦に二重にめぐらしている。中央部には 5~10 cm の自然礫を使用して仕切りをしている。覆土層は、灰黒褐色土の粘質シルトで炭化粒子を若干含み、焼土は殆んどみられず、石も焼けていない。土器片や石器の剝片が多量に出土している。

配石造構の新旧関係は、101・102・107 号住居跡よりも古い。時期は出土遺物からみて縄文時代中期大木 8 式期の所産と推定される。

2 遺 物

(1) 土器の分類

出土した遺物は、整理箱に約170箱を数えうち土器110箱である。土器片は水田の耕作その他によりその半数以上が二次的に磨耗が激しく、判別しにくい状態である。今回は住居跡から出土したものを中心にして示し、第I群土器から第IV群土器に大別しそれぞれの表出された技法および文様別に類別化した。包含層からの土器片は口縁部と底部を選び、口縁部は渦巻文様の装飾的な変化を示し、底辺部の立ち上がりと器形の関係について分類を行なった。完形土器は表出された技法に表わされた文様を構成別に類別し、文様構成の模式図を載せた。なお縄文の原体については、施された方向で書き表わすことにした。

a 土器片の分類 (第19~38図 図版33~39)

第I群土器 大半が単節縄文を地文とし、2~4mmの粘土紐の貼り付けを施し、直線的な文様や渦巻文・S字状文などを描き、貼付の状態は単に押圧するもの、粘土紐の間を調整するもの、貼付したあと両縁に沈線を施すものとに分けられる。

a 1類 (7・2・117・118・238・242・258・259・263・349・356・441)

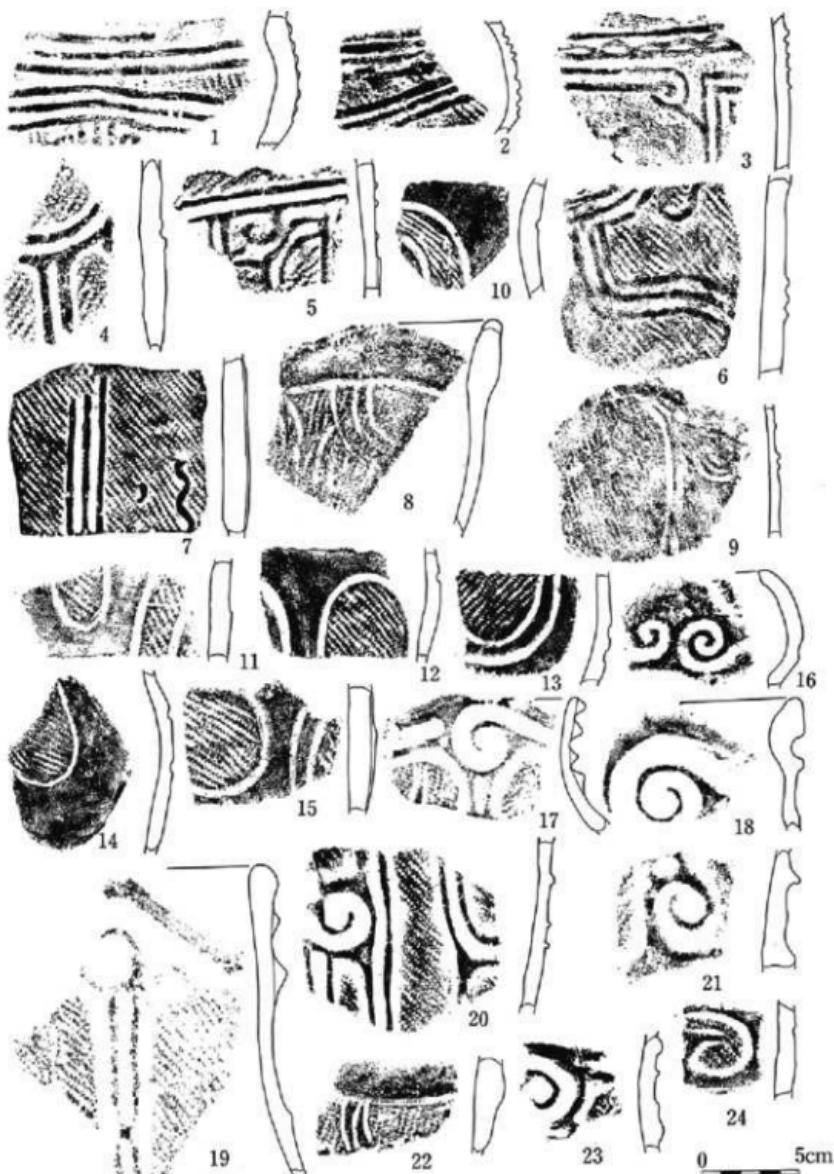
粘土紐の貼付が主流であり、とくに波状に施され平行な粘土紐の間にみられ、深鉢形の口縁部から頸部にかけて横走し(2・258・259)、胸中半部から直線の区画内に真下に垂るように底辺部付近までみられる(7)。口唇部には把手状にS字状につけられ、粘土紐との間に半截竹管による仮形・刺突・鋸歯状文(238)で押さえつけている。本類はIII a 2類などにもその種法がみられる。

a 2類 (1・3・5・59・119~126・183・195~198・201・257・260・261・264・266~268・271・273・275~278・287・304・305・314~318・340・344・345・358・442)

粘土紐の間を調整するもので、口縁部から胸部にかけて施され、口縁部では口唇にS字状が横走し区画された中に撚糸压痕が施され(33)たり、平行・波状・渦巻などの文様を描き、口唇部には円形の刺突・刻目(267・266)などが施され、胸部から底辺部までは直線的に区画された中に、渦巻・波状・S字状などの文様の連続がみられる。区画された部分にヘラ先で櫛目状に施し羽状になるものもある(33・345・442)。粘土紐間を調整したのち縄文を施すものなどもある(276・278)。a 1類などと共通する文様構成を描き出している。

b 類 (60・63・90・91・125・173・187・192・200・204・269・270・274・279・280・287・288・290・291・308・312・336・349・445)

粘土紐の貼付から引き継れた技法と考えられ、貼付したあと粘土紐の両縁に沈線でもつて調整を施し押しつけている。器形はキャリバー形の深鉢形土器がより発展し、その特徴



第19図 101号住居跡出土土器(1)
墨土

が口縁部に顕著にみられ（60・349・445）るが、文様の構成が本群 a 1・a 2 類と同様な構成を示し、口縁部には口唇付近で S 字状文や下部に渦巻・波状・平行線文などがみられる。口縁部と胸部の文様帶が沈線などによって区別されるようで、胸部の文様は直交文に区画された渦巻文などがよくみられ全体的に曲線に描かれている。区画内をヘラ状工具の先端で櫛目状になるもの（90）や口唇部付近に半截竹管による瓜形で押さえつけているもの（192）などがある。色調は明褐色・褐色を呈し、胎土には石英粒などが含まれる。

第II群土器 沈線を主体とし、渦巻・懸垂・波状・梢円・S字・C字状文を描き、a 1・b 1・b 2 類に分類され、b 1・b 2 類は文様構成で区別した。

a 類 （8・9・128～131・185・191・202・203・245・246・281・289・316・337・326）

器形はキャリバー形の深鉢形土器によくみられ、口縁部文様帶よりも体部文様帶に渦巻 S 字・の字状・フ字状・直線文などが描かれ、工具の先端が丸味のあるやや太い沈線と先端が鋭角的なものでシャープになる沈線の 2 つに分けられる。やや太い沈線で描き出される（185・188・247・362）は真下する 2 本の沈線が底辺部まで垂れ区画をなし、渦巻の字状・直線文の組合せによる連続する単位文様で描かれている。シャープな沈線は、頸部に 2～3 本の平行線が施され口縁部文様帶と区別している（128・289）。胸部には渦巻文（129～131）・フ字状文（9）・の字状文（202・203）など横の変化へ文様構成が連続している。

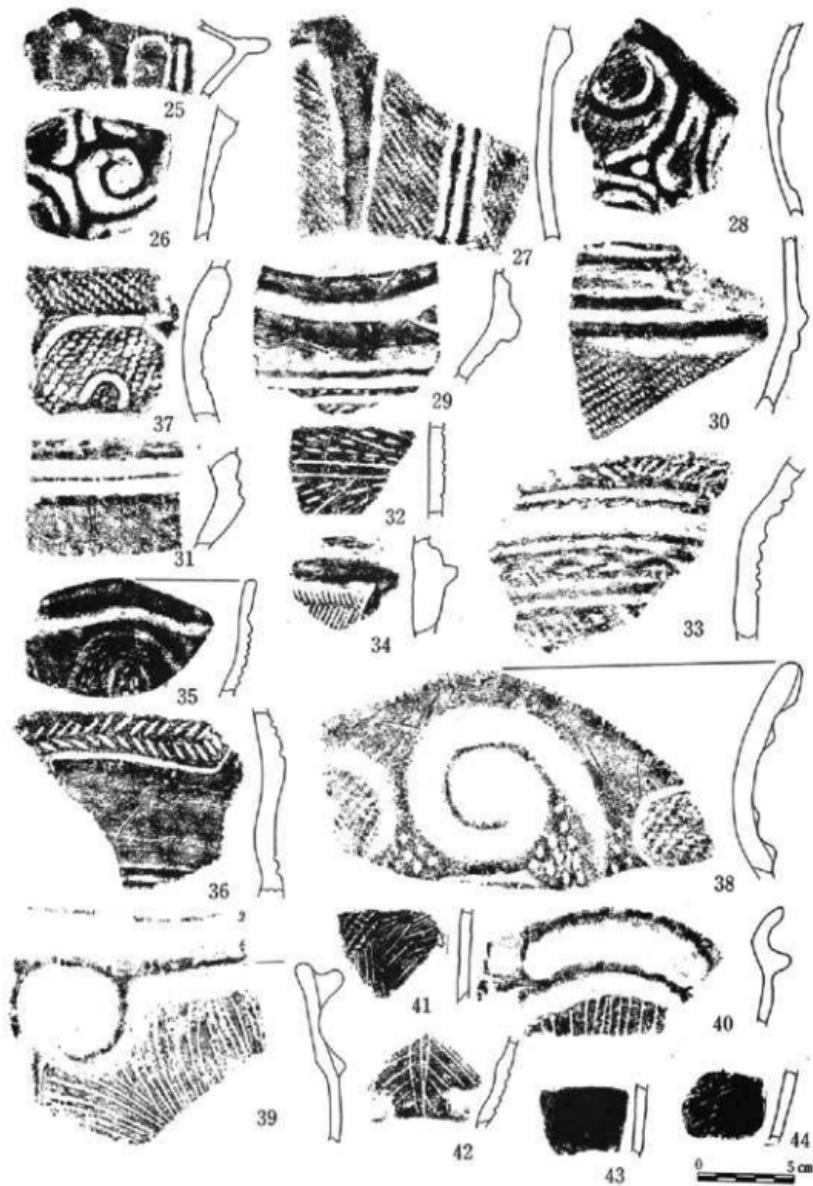
b 1 類 （10～15・35・62・65・68・80・81・92・113・116・137～139・146・147・149・

150・189・190・206・214・249・295・296・320・323・330・366・373・415・
425・443・445～448）

沈線によって区画され、磨消繩文を主体とし梢円・直線などの文様を描き、器形は頭部がややくびれ、胴上半にふくらみをもつ深鉢形のキャリバーを呈する。文様は縦位に真下し底辺部までみられる。口唇部が外反（35）するものと内弯するもの（113）があり、（35）は梢円で区画された中に列点が施され、（113）は渦巻状になり垂線として真下する。胸部文様は 2～4 本で梢円が重複し、胴下半部が垂線として真下する。（92）のように梢円文を描き区画外に 3 本の弧線がみられ列点などを施している。（320・443）は口縁が内弯し「く」字形を示し、横位に梢円を描き 2 本の沈線が垂り、（443）では区画内に列点が施されている。（62・80）は胴下半部でみられ、シャープな沈線でよく磨消がみられIII群 a 2 類土器の底辺部の文様構成の一部である。器面は良く整えられ、焼成も固い。

b 2 類 （140・145・148・321・363・365・396・398・401・413・433・436）

沈線によって梢円文・C字・S字文が横・縦位に描き出され、文様構成は胴中半部までみられ、下半部で大半が单節繩文を地文としている。器形は胴中下半部にふくらみをもち



第20図 101号住居跡出土土器(2)

覆土

底部が狭くなっている。区画し施された縄文は充填縄文が主体となっている。(363) 口縁部はやや外反し、頸部から胴部にかけてS字状文となるものは(140・145・363)でC状文は(365・396・401)で、(398)は胴中半部で波状になる沈線で文様帯を区画している。

第三群土器 隆起文を主体とするグループで、a類を隆線文、b類を隆帶文としさらにそれぞれ細分した。

a 1類 (29・30・34・36・89・244・309・331～335・338・339・341・342・348・350～355・357・359～361・440・456・459)

I群 b類から引き続く技法で、粘土紐を貼付したものを沈線で縁を調整し、隆起帯上面を丁寧に研磨している。器形は、口縁部が内弯するキャリバー形の深鉢形土器に多くみられ、とくに口縁部に顯著で渦巻文や横位のS字文などが描き出されている(29・30・331・332・351)。頸部には無文帯がみられ(333・338)、2～3本の沈線で文様帯を区別している。胴部においてもみられ太めの隆起帯になり渦巻文の「フ」字状などが施されている。

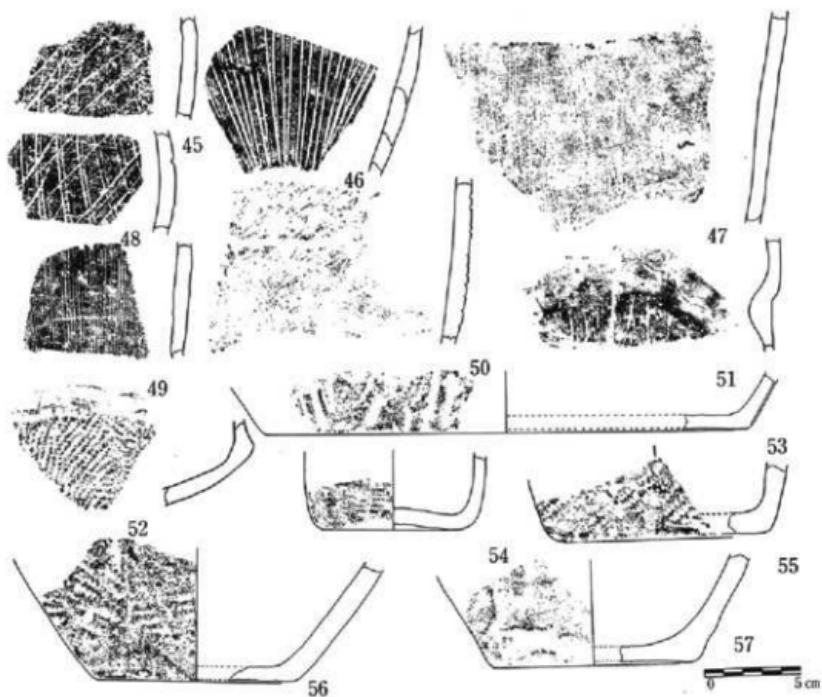
(34)は区画された中にヘラ先で羽状になるように櫛目描が施され、(440)は口唇下に円形の刺突がみられ、(341)は浅鉢形になる。焼成は全般に良く、器面全体も調整されている。

a 2類 (16～18・19～24・25～28・31・38～40・51・58・71～79・151・152・169～171・207～211・215～219・293・294・326・391～394・418・450・457・458)

隆起線全体を研磨・調整を行ない断面をみると三角形状になり、両縁を沈線で施している。キャリバー形を呈する深鉢形土器に多くみられ、口縁部から胴中半までは渦巻文を主体とし描かれている。口縁はその大半が波状口縁となり(16・18・17・71～73・152)、波状になる口唇部付近から3～5cmの渦巻文がみられ、2本の隆起線が真下し胴中半部まで施されている。胴部は太い沈線で隆起線が区画され円文や稍円文として描かれ、隆起線そのものに円形の刺突がみられる(38・72・207・391)。胴下半部では隆起線がみられず2～3の沈線で縱位に区画し、底辺部でも同様に沈線は斜行(58)しており、0.5～1cmの幅で多少の隆起がみられるが、そのほとんどは磨消の手法が施されている。胎土はあまり砂粒が含まれず、表裏器面は良く整形され、焼成も良く固くしまっている。色調は黒褐色・暗褐色を呈している。

b 1類 (37・64・67・69・87・168・174・177・212・250～252・385・384・375・449)

器形は深鉢形土器にみられ、粘土帯を貼り付け上面を良く研磨し、断面をみると三角形状のえぐりこんだもの、半円形状になるものがある。さらに縄文・列点・刺突などを施しているものなどある。文様は曲線・直線・渦巻など大きく描き表わしている。(64・67・177)は渦巻が連続的に重複し、隆帶がえぐり込むように研磨され、中心が沈線で区画され円・



第21図 101号住居跡出土土器(3)
覆土

梢円文となっている。(37・449)は隆帯も含め網文が廻転され、(449)は浅鉢形土器である。(168・375)は直交するように区画され刺突・列点などが施されており、(385・384)は円形の刺突がみられる。

b 2類 (83~86・110・141・143・144・153・155~160・163~167・279・289・325・
327・369・372・376・386・389・390・395・399・403・405・416・421~428・
432・434・437)

2~5cmの隆帯を良く研磨し両縁が隆起しており、器形は深鉢形土器の最大径が胴下半部にみとめられ、文様構成は隆帯が曲線的に縦走・横走し、文様帶は胴中半までみられ、胴下半部は網文帶となり、充填網文を主体とするグループである。口縁部の大半はやや外反し、(144)はやや内弯している。文様はC字・S字状文などが描かれ、口唇部付近は1~2cmの無文帶がみられ、(153・155・156)はやや縦走するように始まり横走し描かれ、

胸部（158～160・163～167）は横走しC字状文となっている。（369・376）は口唇部からみられ0.5cmの幅で隆帯が盛り上げられ、曲線的に施される。（327・395・416）は浅鉢形になり縦位に橿円状に描かれている。

第IV群 撮糸の圧痕・刺突・列点・細線・単節繩文・複節繩文を施し、地文にするものや装飾的に描き出し、第I群土器から第III群土器の類別した土器にみられる。

a類（260・262・283・285・310）

撮糸圧痕を主体に地文とし、第I群土器a1・2類によくみられ、深鉢形土器の口縁部や頸部にみられ、貼付文で区画された中に縦位に施され（260・262・285）ている。口唇部にも（310）みられ、貼付した粘土紐の上に圧痕している（310）。

b類（93～95・221～227・301・302）

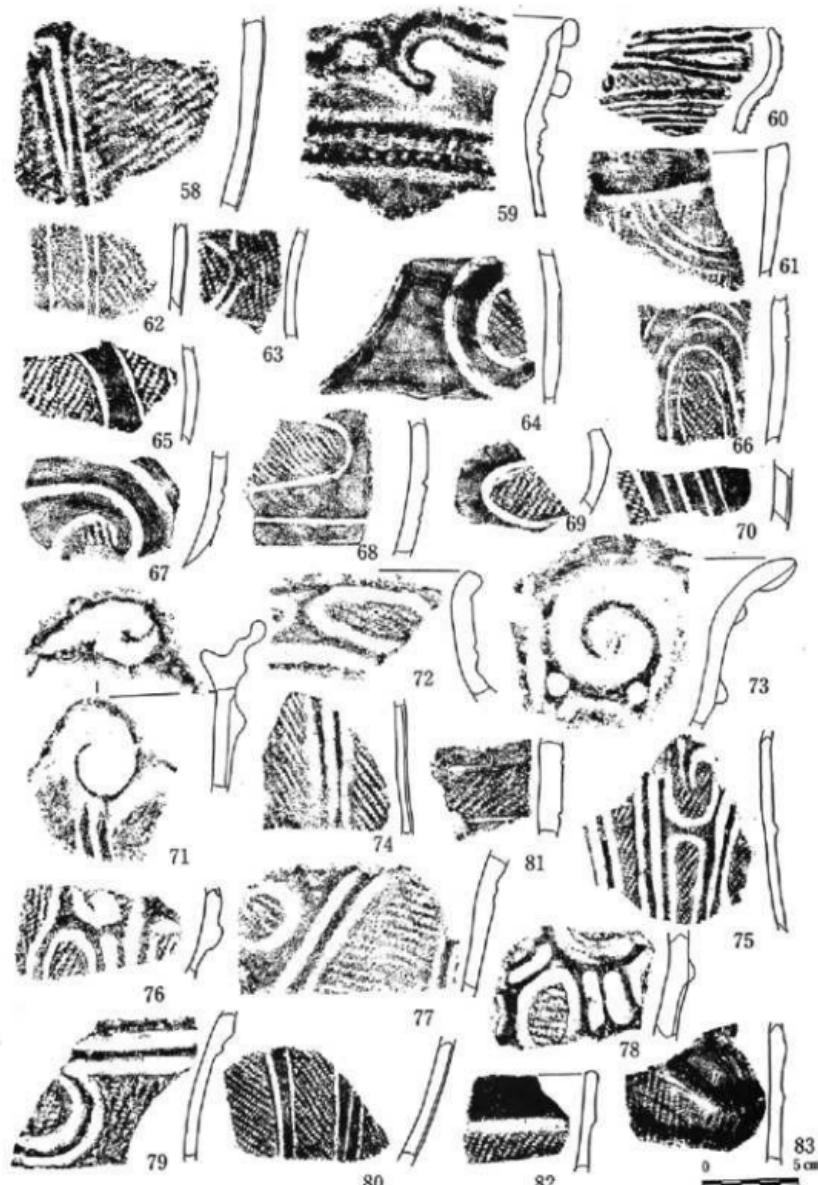
刺突・列点を施すグループである。本類は描出された技法・文様構成は、第III群土器a1類に共通している。沈線で区画された外側の磨消部分にみられ、（93～97）は刺突を施し装飾的に描き、（224）は磨消がみられず列点を施した後、細線を施している。区画内に施すものは地文とし描き、2～3本の沈線で橿円状に区画し、列点を器面の下方から施している（221～227）。（302）は刺突がみられる。

c類（41～42・45～48・98～103・178～180・228～230・234・243・266・284・299・300・311・313・324・329・419・430・452・453）

ヘラ状工具の先端を用い、条線・細線の集合体を描き直線・綾杉・格子目状文を有している。本類は、第I群土器・第II群土器・第III群a類土器によくみられ、器面全面に施しているものは浅鉢形土器に多く（99）、貼付文・沈線文・隆起線文などに区画された中に地文として施している深鉢形土器にみられる。第I群土器は貼付された粘土紐の区画内にヘラ先で羽状に描く（311）や条線のように間隔のある（243）や突き刺す（284）などがあり、第II群a類土器は櫛目状に施している（266）。第II群b1類や第III群a2類などに最も多くみられ、ヘラ先で条線的に描き集合するもの（46・102・311・323）・綾杉状になるもの（41・42・99・324）・格子目状になるものは（45・48）で、刷毛目状になるものは（329）などがある。底辺部では放射状に集合している（100）。

d類（107～112・114・176・182・326・237・253・254・370・377～379・406～408・253・254・452）

地文を単節・複節繩文を施し、第II群b1・2類土器・第III群土器に伴う粗製深鉢形土器と考えられる。口縁部はやや外反するものが多く（107～109・370）、折り返し口縁は（253・254）などがあり、口唇下に無文帶をもつものもあり（109・182・283・370）不規則な斜状文となり、（452）は波状口縁になっている。（107・454・406）は口唇から施しL R・R L



第22図 102号住居跡出土土器(1)
■土

の斜行縄文となる。胴部は（111・112・114・407・408）で施文がL Rの単節縄文となり、（176）は複節でR Lとなっている。

b 土器口縁部の分類 (第39図460~479)

本類は渦巻文・横位の状態になるS字状文の装飾的な変化を、土器片の分類に従って第I群土器a類にみられる貼付文、第II群土器a類の沈線文、第III群a1類の貼付したものと沈線で調整し研磨するもの、同a2類の隆起線全体を研磨しているものに類別し、その変遷を示した。なお分類は土器分類に従うこととする。

II a類 (460~466)

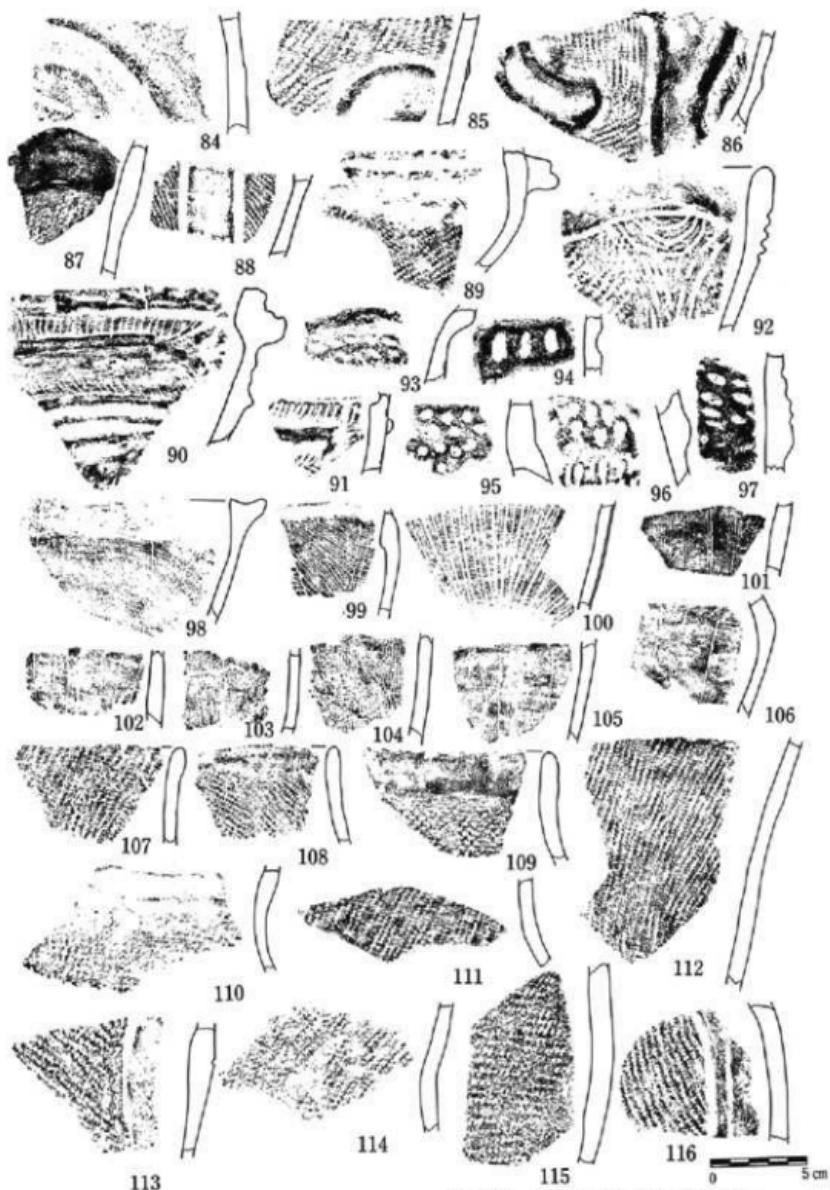
(460~462・464)は、粘土帯を器面斜上方向に盛りあげ、粘土紐を貼付し調整を加え、3~5cmの基本的な渦巻文様を正面または上方に位置させ、S字状文や変形するS字文を複雑に連結し1区画の文様帶をなし、装飾立体的になっている構造把手である。口唇部や粘土紐区画線に半截竹管による刻目や縄文原体の押圧がみられ、粘土紐を押さえつける手法とは異なり、把手を固定させるとみられ、把手の真下では「ハ」字状や波状に粘土紐を飾り一層装飾的に描き表わしている。これらはある程度のキャリバー形を呈する深鉢形になり、口縁部がやや内弯し波状になり、2・4単位の把手を有し、他では(466)のようにS字状文のくり返しとなり、口唇部から下方へ垂れてくる。

(463・465)では、口縁部がやや外反しており、前者と異なり文様帶も口唇部にはば直交するように施文し、S字状文や渦巻変形文なども装飾的変化が簡略化され、(465)はとくに顕著にみられ、横位のS字文とのくり返しと考えられる。

III a1類 (467~474)

粘土紐などを貼付したものを沈線で調整し、上面を丁寧に研磨している。器形は深鉢形のキャリバー形に多くみられ、口縁部文様帶と体部文様帶の区別が明確になり、頸部に無文帶をもつものがほとんどである。文様はII a類に比較し、隆起する把手などがみられず装飾・立体的な構成が退化し、平面的な構成となり、とくに渦巻文が明確に文様構成の上で基調となってくる。

(467)は渦巻文から派生し横走する曲線的な隆起線が口唇付近から始まり、調整された区画がみられ、(469)で「の」字状になる渦巻文が口縁と平行し横走する。(470・471)では渦巻文が変形し独自の文様構成の単位としてくり返している。(468)になると渦巻文がみられるがさらに梢円状に横位に区画されるものとの構成になり、区画内に縄文が主体に施されるが、時には櫛目状文などが施文される場合もある。II a類などにみられる口唇部などへの刻目の技法はなくなるようである。



第 23 図 102 号住居跡出土土器(2)
覆土

(472～473) は本類に供伴すると考えられ、口縁部が顯著に内弯し頸部付近で極端に括れ、内面が段状になっており、外面に貼付状の把手 (473・474) がみられよく整形されている。口唇部下 0.5～1.5 cm に外面から施すように斜状方向から有孔があり、(472) は器面を全周し、(473・474) は 2 対づつ 4 単位の構成と考えられる。

III a 2 類 (475～479)

本類は、II a・III a 1 類にみられた渦巻文様の主流が横走し変化しており、波状口縁を示す器形の深鉢形土器波状部に 4～6 cm の渦巻文が施され、2 本の隆起線が真下に垂り懸垂文となり区画単位の構成が明確に描かれ、渦巻文様が縱走ときには斜走してみられ、隆起状の装飾的な変遷がみられる。2 本の隆起線で区画された単位の中は、渦巻・S 字状文が複雑に組合され、一区画文様帯を構成している。

(475・476) はとくに文様表現が上記のように顯著にみられ、(479) は渦巻の真下が把手状に施されており、渦巻文から派生する部分はある程度の区画幅があり、円文や楕円文が横位・斜位に描かれ、地文に単節繩文を施し、次に隆起線で文様を描出し器面を整形し、さらに繩文を充填し文様を区画し調整しており、胴中半部までこの手法が認められ、胴下半部は沈線を主とする地文を繩文とする簡単な描出とみられる。

(477・478) になると、口唇部付近にみられる渦巻文様が最少化していく傾向にあり、楕円・円文などの区画される文様が主流をしめてくると考えられる。

以上のように第 I 群土器から第 III 群土器 a 類の口縁部文様帯は渦巻文様を基調とし、その装飾的な変遷および巨視的な変遷がみられる。第 I 群土器は文様が複雑に連結し合い抽象的に描かれているようであるが、渦巻文様が文様帯の正面に位置付けられ、第 II 群 a 類および第 III 群 a 1 類にいたっては、抽象的な描出が洗練され渦巻文が強調されている。第 III 群 a 2 類では縱走し、口縁の波状部にみられるものはより強調されている。

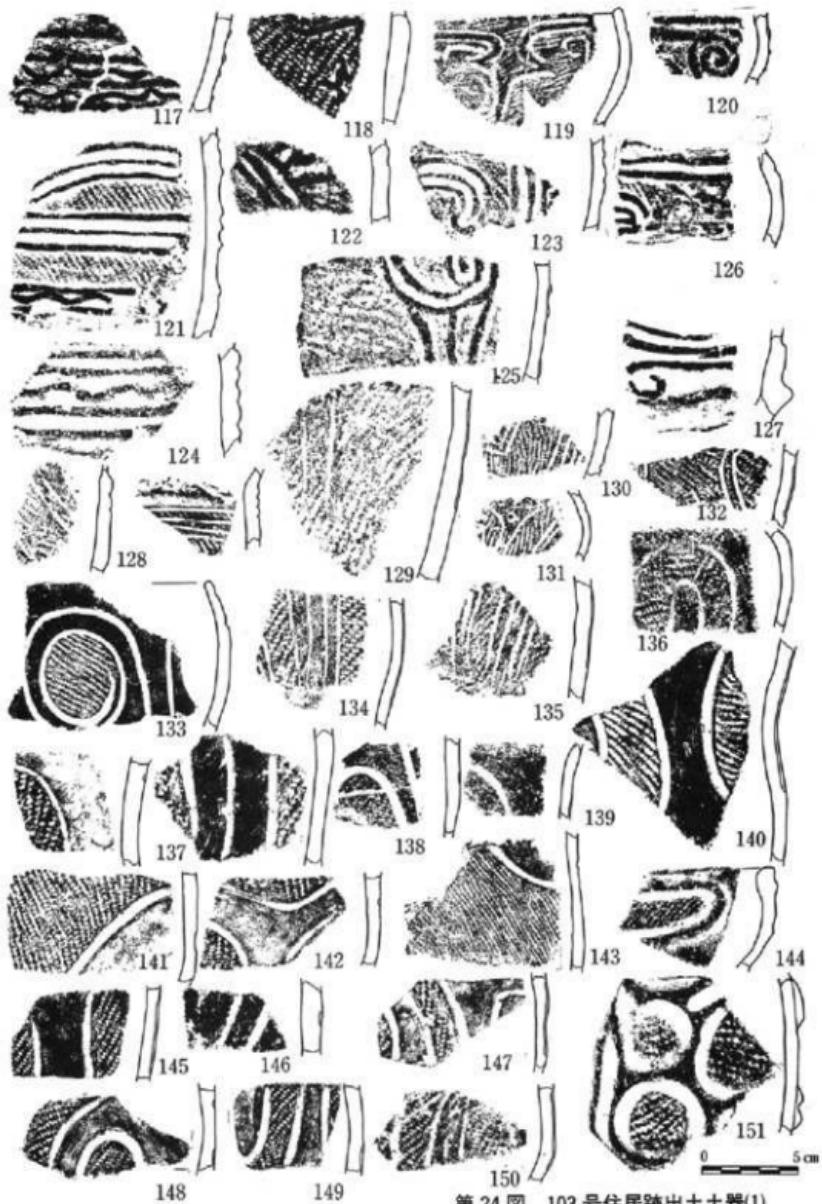
文様描出技法は、貼付文→貼付文調整→隆起線研磨の順で手法がなされ、口縁部文様帯にその基本的主体がみられ、第 III 群 a 2 類にいたって口唇部に施される渦巻文様が伝統的に引き継がれ、口縁部文様帯からの残存形態とみられ、胴下半部では磨消の手法が施され、おそらく磨消繩文を主体とする移行への過渡期の段階といえる。

C 土器底辺部の分類 (第 40～42 図 図版 39・40)

分類は底辺部に施す文様と立ち上りの器形とに分け、土器片の分類基準に従って記載することにする。

底辺部の文様について

I a 類 (483・493・494)



第24図 103号住居跡出土土器(1)

215~218 覆土
219~214 底面

底辺部まで、単節縄文を器面全面に縦走し施しており、(483・493)は施文法がRLで、(494)はLRとなっている。貼付および貼付調整された粘土紐が底面近くまで真下し施されている。調整などは加えられていない。

I b 類 (第26図239・484・485・487・493・495)

I a 類と同様なことがみられ、貼付された両縁を沈線で調整された2～3本の隆線が底面近くまでみられる。地文を単節縄文とし縦走・斜状するように施文され、RLになるものは(485・495)でLRは(484・487・488)である。底面付近が約1cmの幅で調整している。

II a 類 (500・510・517～522・525)

1～3本の沈線で直線に真下するものや「の」字状に描かれるものが底辺部近くまでみられ、底辺で1～2cmの幅で縄文帯を調整している。

II b・III a 2 類 (511・512・514・524・525)

真下する1～3本の沈線が底辺部近くで集合するようにみられ、底辺部は完全に磨消されている。III a 2 類になるものは(512・514・525)などで、II b 類は(511・524)である。

III b 2 類 (第37図437)

浅鉢形土器の台付部と考えられ、隆帯の両縁が隆起する隆起文を横走するように施している。

底面 (第34図374 532～536)

(374)は木葉痕になり、(532～536)は網代底となっている。

底辺部の立ち上りと器形について

第I群土器に属するものは、底面が多少上げ底の状態となり、器形は口縁部に最大径をもち底辺部まで簡形にほぼ直立するのが特徴であり、とくに(486)などは顕著にみられ、やや外反しているものは(483・491・487)である。(485・489・493)は底辺部が丸味を持ち、底面もほぼ水平であり、器形が底辺部上部がやや脹らみがみられる。

第II群a 類に属するものは、底面の中央部が窪むような上げ底で、深鉢形土器のキャリバー形が顕著にみられないグループは、口縁部が「く」字状にくびれており(497・500～502)などで、(504～507・509)は底辺部が丸味をもち内弯するような脹らみがあり、最も顕著となるものは(510)で小型壺形の土器とみられる。他方頸部にくびれをもちキャリバー形がみられるグループは、底面が狭く中央部が最も窪むようになり、外反しているものは(500・510・517～521・524)などである。

II b 類は、器形の最大径が胴上半にみられる深鉢形の土器で、底面がほぼ水平の状態になってしまっており、底辺部は大きく外反している(511・524)。



第25図 103号住居跡出土土器(2)

覆土

III a 2 類になると、器形の最大径が頸部付近から胴中半部にかけてみられ、やや脹らみをもちながら底辺部までたっし、底辺部付近がやや内弯している（512・514）。

（499・530・531）は、器形の最大径が胴中下半部にあり、上部が文様帶となり下部がやや斜行する L R の単節纏文を施す纏文帶となり、底面が水平で最大径をもつ部分と比較すると約 2 分の 1 の比で狭く、底辺部が 3 ~ 5 cm の幅で調整され無文帶となり、直立し、さらに内弯するように脹らみをもっている。これは第 III 群 b 1 · 2 類に共伴する粗精深鉢形土器とみられる。

このように底辺部の変化は、第 I 群土器から第 II 群 a 類・第 III 群 a 1 類までの段階で、中形・大形の深鉢形土器の差異は余り認められず、直立ないしやや外反し、多少の上げ底を呈し共通性が認められるが、第 II 群 a 類土器において頸部が極端にくびれ無文帶をもつキャリバー形の土器は、底辺部が狭く中央部が窪み外反する一群が現れ、さらに底辺部は第 II 群 b 類・第 III 群 a 2 類において外反化の傾向をもち、第 II 群 b 2 類・第 III 群 b 2 類にいたっては、底辺部の径が最少となり直線的に外反している。

（2）土 製 品

a 土偶（第 43 図 図版 41）

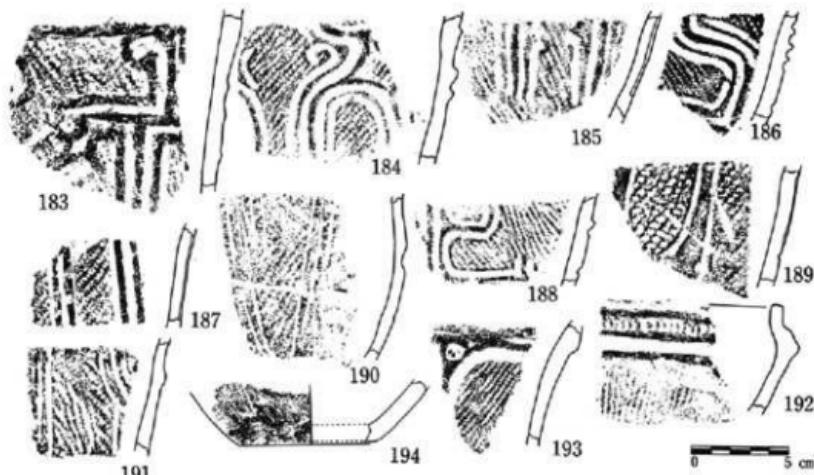
今回の調査で出土した土偶は、頭部 1・胴部 14・脚部 4 の 19 点出土している。土偶はほぼ形態的みて 4 類に区分される。（図版 41-15）は 125 号住居跡・（1・9）では 123 号住居跡覆土より検出され、その他は包含層より出土している。

a 類（図版 41-1・17）

板状になる土偶で、肩部から胸部にかけて扇状に広がり、中央部に粘土紐を貼付しその両縁が沈線で調整し、上面を丁寧に研かれ外辺に沈線で「の」状を示す渦巻文のくり返し文様が描かれている。背面は中央部に 1 本太い沈線が引かれている。（17）は頭部が欠損し腕部がみられず肩部の先端が丸く調整されている。（1）は腰の部分に近く、上・下半部が欠損している。土器分類の第 II 群 a 類・第 III 群 a 1 類に共通する技法である。

b 類（第 43 図 1 図版 41-8・9・15・16）

胴部が 0.5 ~ 1 cm の厚みをもち、腕部がなく首が長くなっている。（第 43 図 1）は顔面であり鑑形を呈し、頭部の部分に上方に向か 2 つの有孔がみられ、右側の突出部にも有孔がみられる。（8・9・16）はヘラ工具の先端が鋭利なものを使い、渦巻文様を主体に描かれ、とくに（8・9）は両面中央部に一直線の沈線を施している。（15）は顔面文様を沈線で描いている。背面全体的に平らだくなっている。第 II 群土器 a 類に属する。



第26図 105号住居出土土器

183~188 覆土
189~192 床面

c類 (第43図2 図版41-4・5・11・12)

いずれも胸部で頭部が欠損し、(2・4・5)は腕部がなく肩部で丸く調整し、腰の部分が靴笠状になっている。(2)は乳房の部分が貼付により丁寧に研かれた隆起線によって連結されている。(4・5)は中央部に一本の沈線がみられ、腰部が背面に突出し、沈線などによって平行・縦走し区画され、(4)は渦巻の連絡がみられる。(11・12)は腰部の靴笠状になる部分のみで上半部が欠損している。これらのグループは脚部がみられないのが特徴的である。これらも第II群a類・第III群a1類に共通する技法である。

d類 (第43図5 図版41-10)

本類は十字状を呈し厚さが一定し偏平になっている。ヘラ状工具の先端の鋭利なものを使用し、表・側・背面全体に胴上半部で横走するように、胴下半部で縦走するように細線を施している。(10)は頭部および腰部が欠損し、頭部真下に円形状の突起がみられおそらく装身具をかたどっていると考えられる。(5)は腰部で丸味をもつように調整を施し、やや斜行するように有孔が認められる。土器片分類の第IV群c類の手法がとられ、第II群b1類・第III群a2類などに供伴すると考えられる。なお形態は別としても、(第43図6・7)もこれらのグループになると考えられる。

e類 (第43図6・7 図版41-13・14)

脚部を一括して含めた。描出技法からみて2つに分けられ、(13・14)はやや太めの沈線

を施し(13)では側面に渦巻文を描き出している。両者とも第II群a類の手法がみられる。(6・7)は全面を縱走し細線が施されている。

以上のように土偶のほとんどは、縄文時代中葉期のものでその技法的なものや形態からみて、第I群・第II群a類・第III群a1類土器に共通する手法がみられ、大木8式期に伴う時期とみられ、また、(図版41-6・7・10)はその技法は第IV群c類の手法が認められ、おそらく第II群b類・第III群a2類に伴い、時期は大木9式期の所産と考えられる。

b 円盤状土製品 (第44図 図版41)

円盤状土製品の中に三角状になる土製品4点を含め58点出土し、縄文時代中期中葉から後葉末まで含め一括した。分類は円形・橢円・方形・三角形の形状により類別し4類に分けた。

円盤状土製品の出土分布状況は、その大半が第IIb層の包含層より出土し、(1~6・31~33・51)は101~103・107号住居跡および123・125号住居跡の覆土より13点出土し、分布する大半は101・103・106号住居跡の付近、調査区中央部のやや西側よりおよびさらに西側の地区と121号住居跡の南側付近に集中し偏在してみられる。

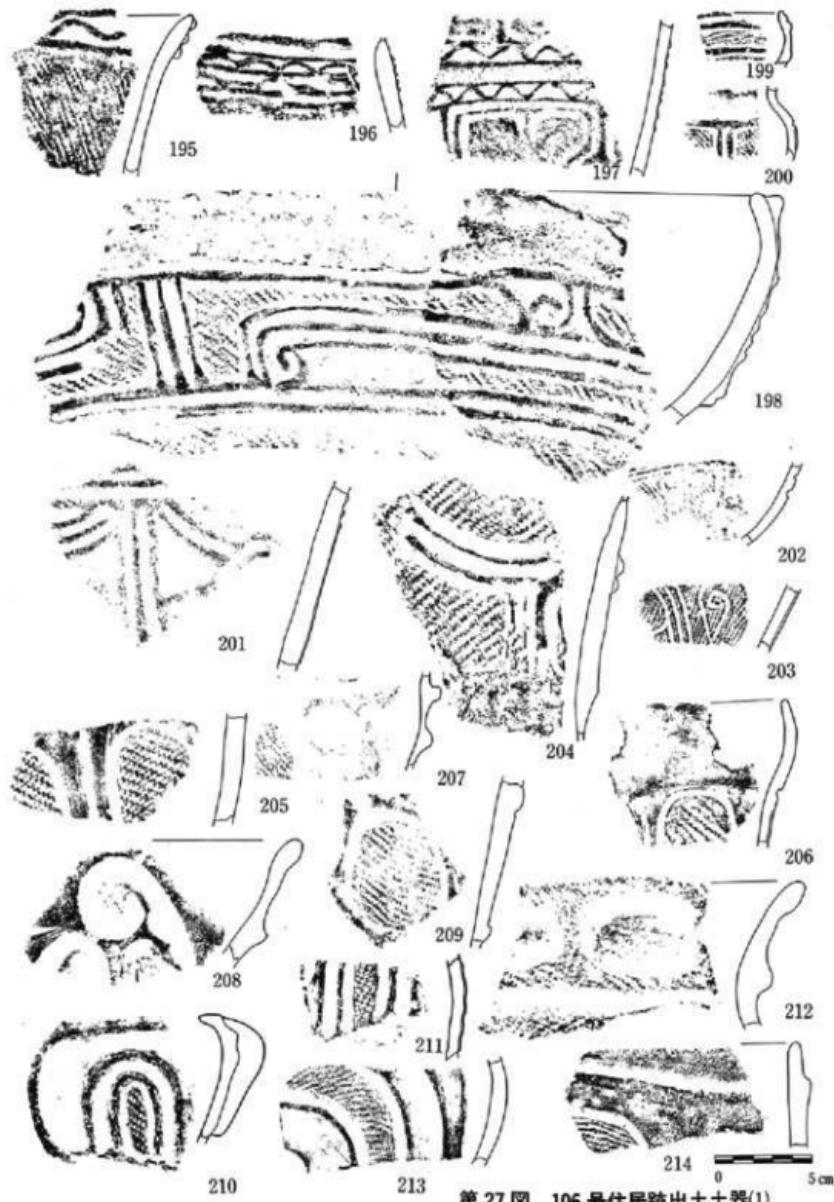
円盤状土製品は、大半が胴部片を利用しておらず、底辺部は(9~11)の3点で、口縁部を使用しているものはみられない。

a類 (1・2・4~30)

円形を呈しているグループである。やや大形になるものは(6・9・11・14・25・26)で最大径が約5~9cmで重さが41~62gを計る。小形になるものは(28~30)で径が2.5~3.3cmで重さは1gもなく0.5~0.7gを計る。その他は中形で径3~4cmで重さ10~30gになっている。文様がみられるものは(12・13・15・17・19・22・24)であり、土器片分類でみると、第I群a2類になるものは(13・17)で、第I群b類では(19)となり、(24)は沈線で施す渦巻文がみられる第II群a類となり、第III群a1類は(12・15)である。他は地文を縄文として施す縄文帶で、縄文原体は(7)で堅く細く燃り、(14)は太く燃っている。(4・5・8・11・20・21・25・30)は無文帶の部分を使用している。(16)は半円形状になり、側辺を良く調整している。

b類 (31~41)

形状がやや隅が丸くなる橢円形を示すグループである。橢円形状を示すものは(32・33・35・40・41)で、その他は不整の橢円形になっている。(31・35・37・38)は側辺部をよく調整し、焼成の良い土器を使用している。中形のものは径が5cm程度で重さが19~26gを計り、(33・35・36)である。他は3.3~4.6cmで重さは0.7~1gを計る。文様帶を使用して



第 27 図 106 号住居跡出土土器(1)

195~206 覆土
207~214 床面

いるものは、(36) で粘土紐の両縁を沈線で調整し施す第 I 群 b 類、(39) は列点を施す第 IV 群 b 類の手法がそれぞれみられる。(31・37・41) は無文帯をもつものを利用している。

c 類 (42~50)

方形の形状を呈しているグループである。大形になるものは(47~49)で、径が 5.7~6.1 cm で 25~31 g を計り、中形は(41・44・45)で径が 4.1~4.5 cm で重さは 13~16 g であり、小形は(43・46・50)で径が 3.0~3.5 cm で 1 g 程度を計る。文様がみられるものは(42・43・49)で第 I 群 a 2 類にみられる手法である。(44・46) は無文帯があるものを使用している。他は地文が繩文を施しているものを利用している。

d 類 (3・51~54)

三角状の土製品を一括して類別した。全体的に丸味をもつがほぼ正三角形になり、側辺部は良く調整されている。文様が描出されており、(3) は第 III 群 a 1 類・(51・52) は第 III 群 a 2 類・(54) は第 III 群 b 2 類・(53) は第 IV 群 c 類の手法がみられる。

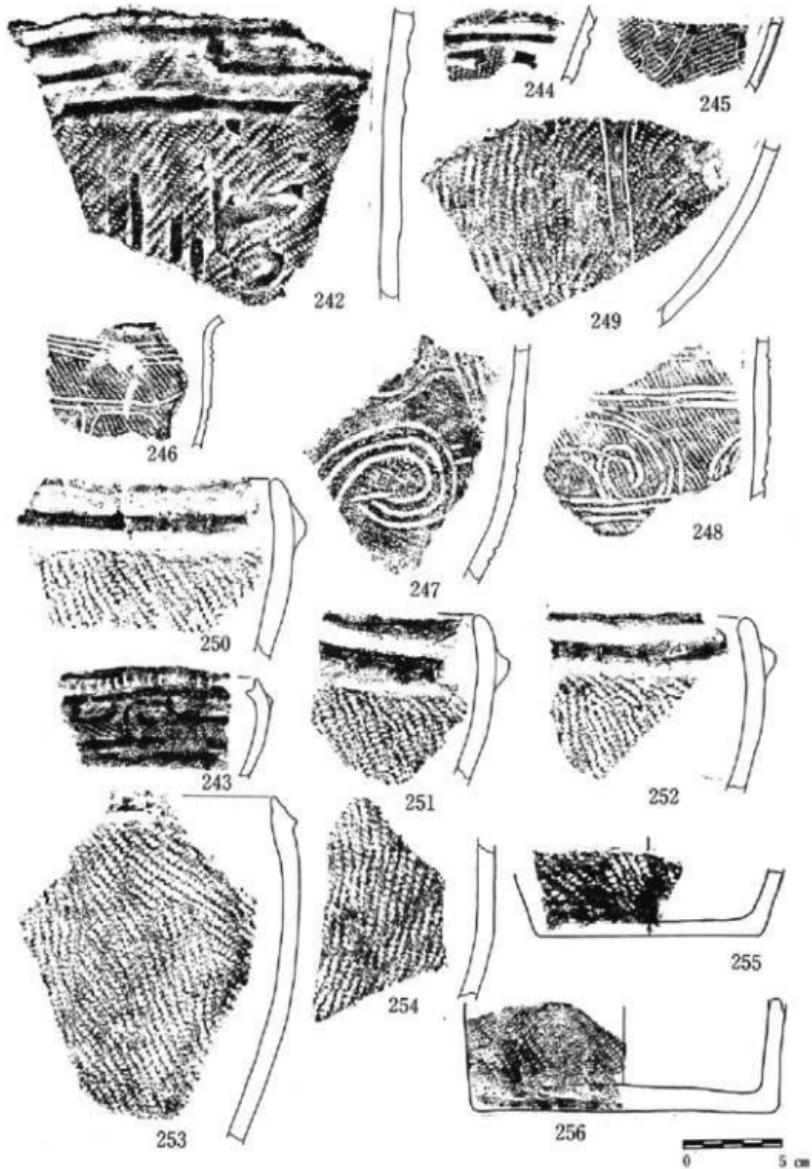
以上のように円盤状土製品は、形状の他に共通する点は、小形のものは径 1~3 cm で重量が 1~20 g で、中形は径 4~5 cm・重量 10~40 g、大形は径 5~10 cm・重量 50~100 g がそれぞれの平均値になっている。時期は大半が第 I 群・第 II 群 a 類・第 III 群 a 1 類に相当し、繩文時代中期大木 8 式期の所産と考えられ、(51・52・53) は大木 9 式期・(54) は大木 10 式期と考えられる。なお、二次利用や再使用などを考慮すると、使用された時期などについては不明であるが、調査区中央部北・西側に集中することは住居跡構築と関連され、廃棄されたものとみられ、おそらく時期は大木 9 式期の前後に使用されたと考えられる。

C その他の土製品 (第 44 図 8・9 図版 41)

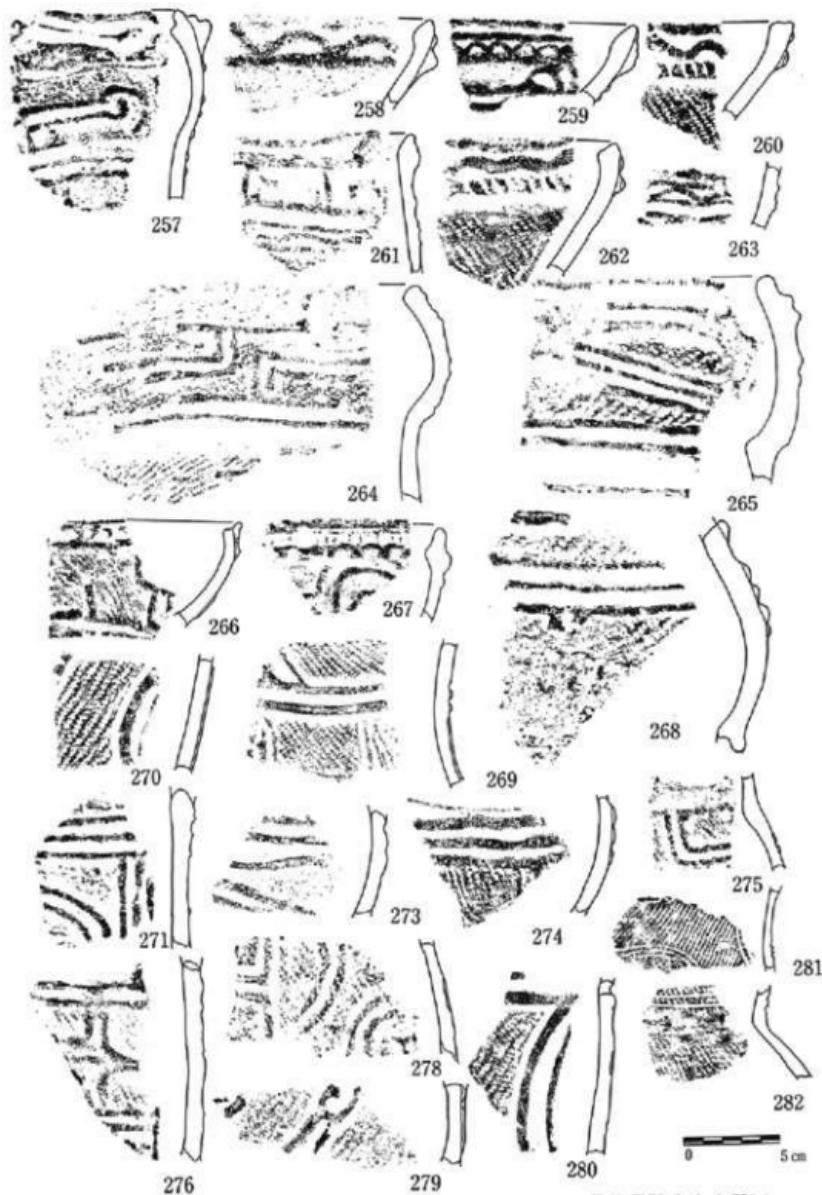
用途不明なものを一括し、棒状土製品とした。(8) は全体的に丸味をもち、長径 5 cm 幅 1.5 cm で、不規則な凸凹が全体にみられる。(9) は断面が円形になり、やや表面が起伏があるが調整などの技法がみられない。これら棒状土製品は、土器製作時の粘土帯かあるいは、把手などに飾る粘土紐とみられ、焼成の段階の焼け損じと考えられる。



第28図 106号住居跡出土土器(2)



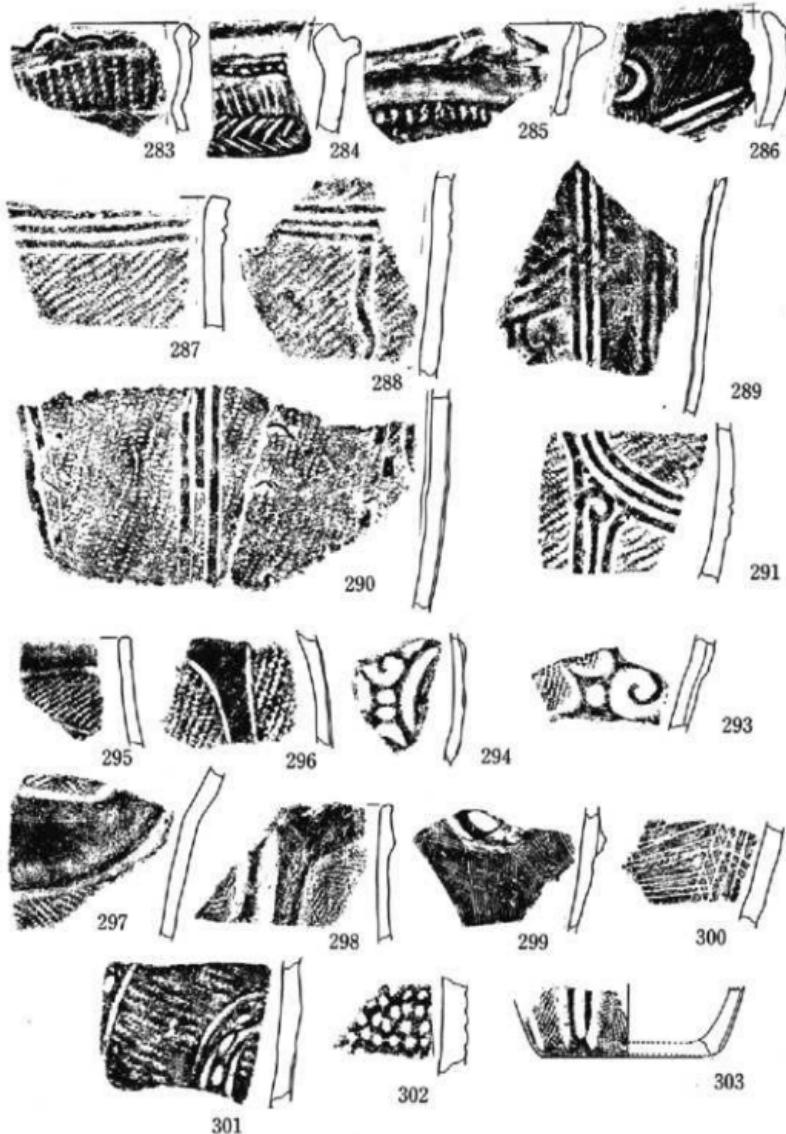
第29図 107号住居跡出土土器
覆土



第30図 108号住居跡出土土器(1)

257~263 覆土

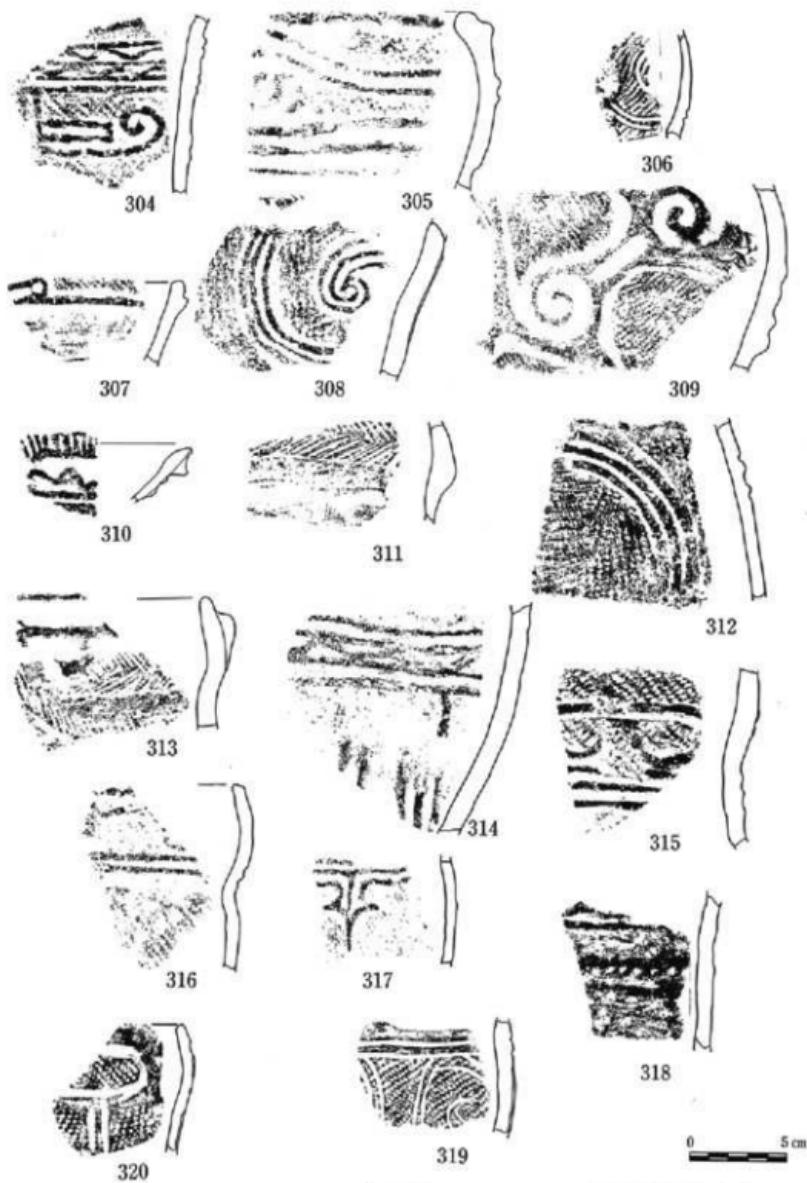
264~282 床面



0 5 cm

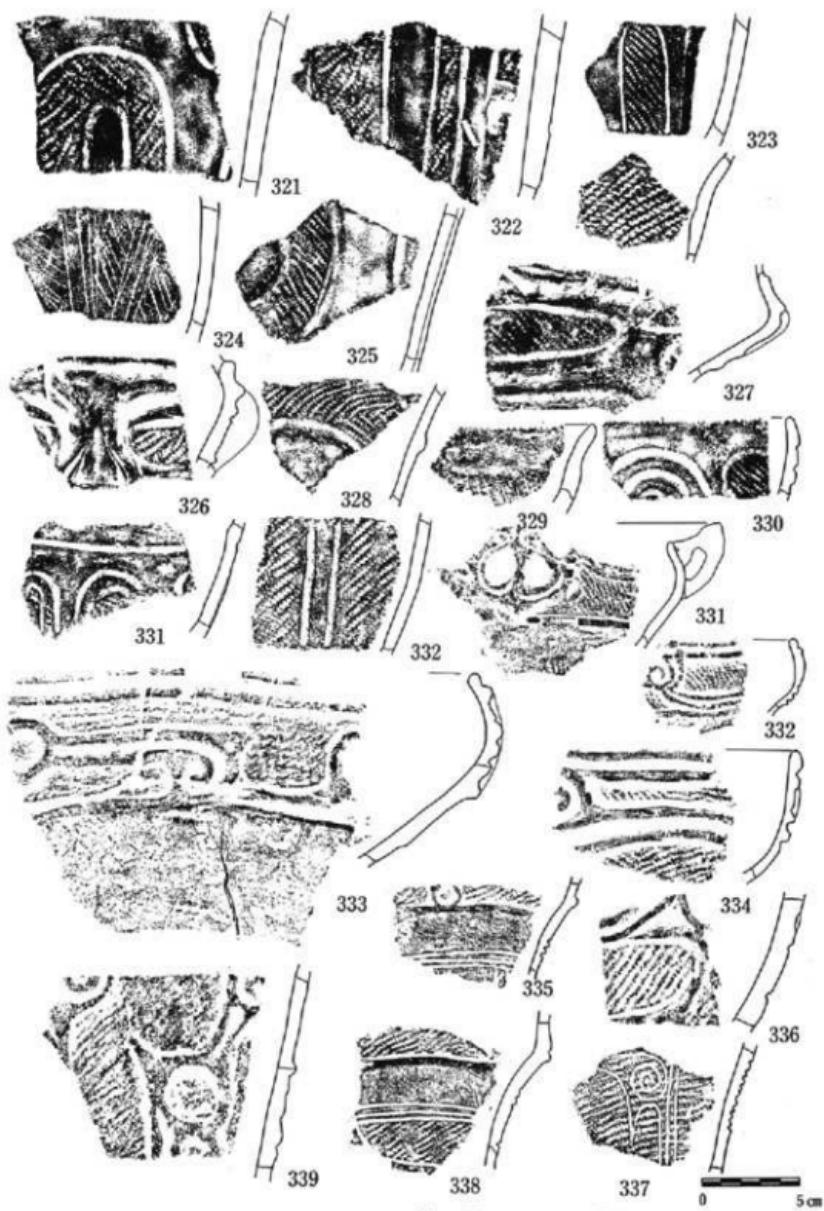
第31図 108・109号住居跡出土土器

283~286 108号住居跡覆土



第32図 110・111・112号住居跡出土土器

304~309 110号住居跡覆土
 310~313 111号住居跡覆土
 314~318 112号住居跡覆土

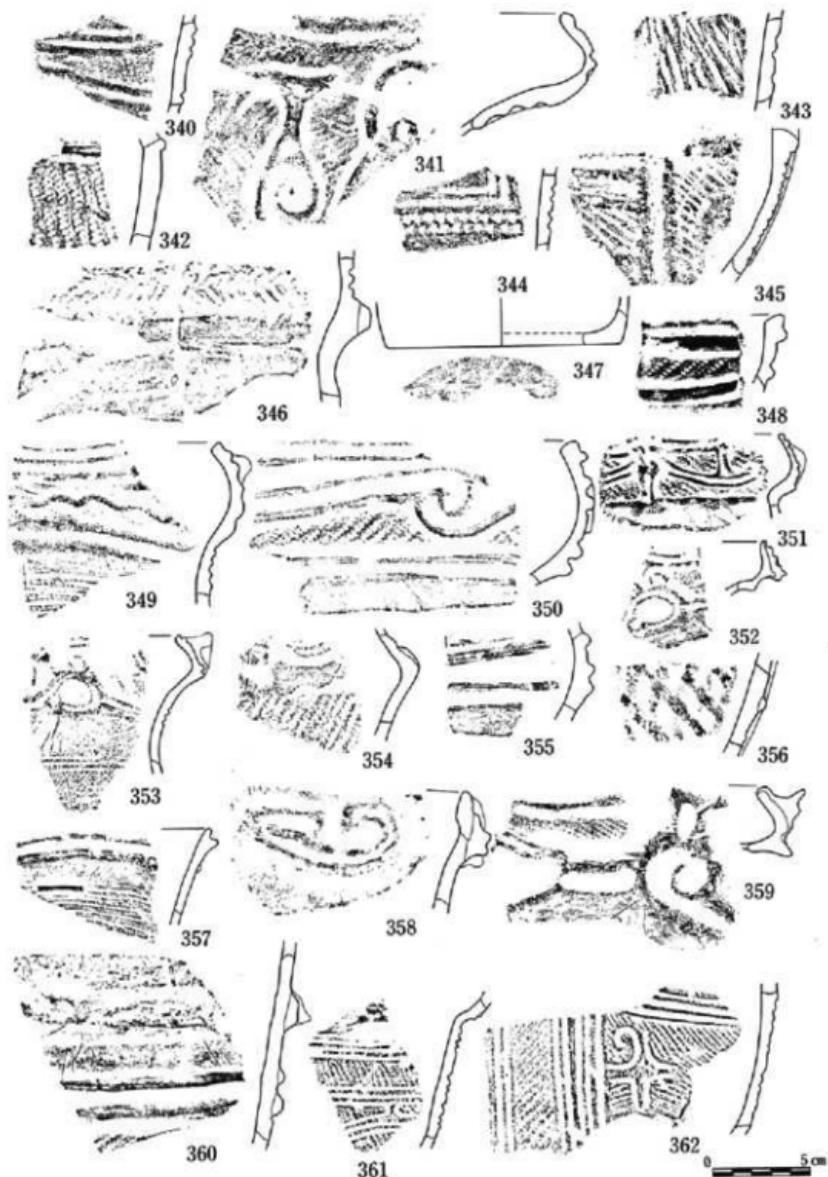


第33図 121・122号住居跡出土土器

321~327 121号住居跡覆土

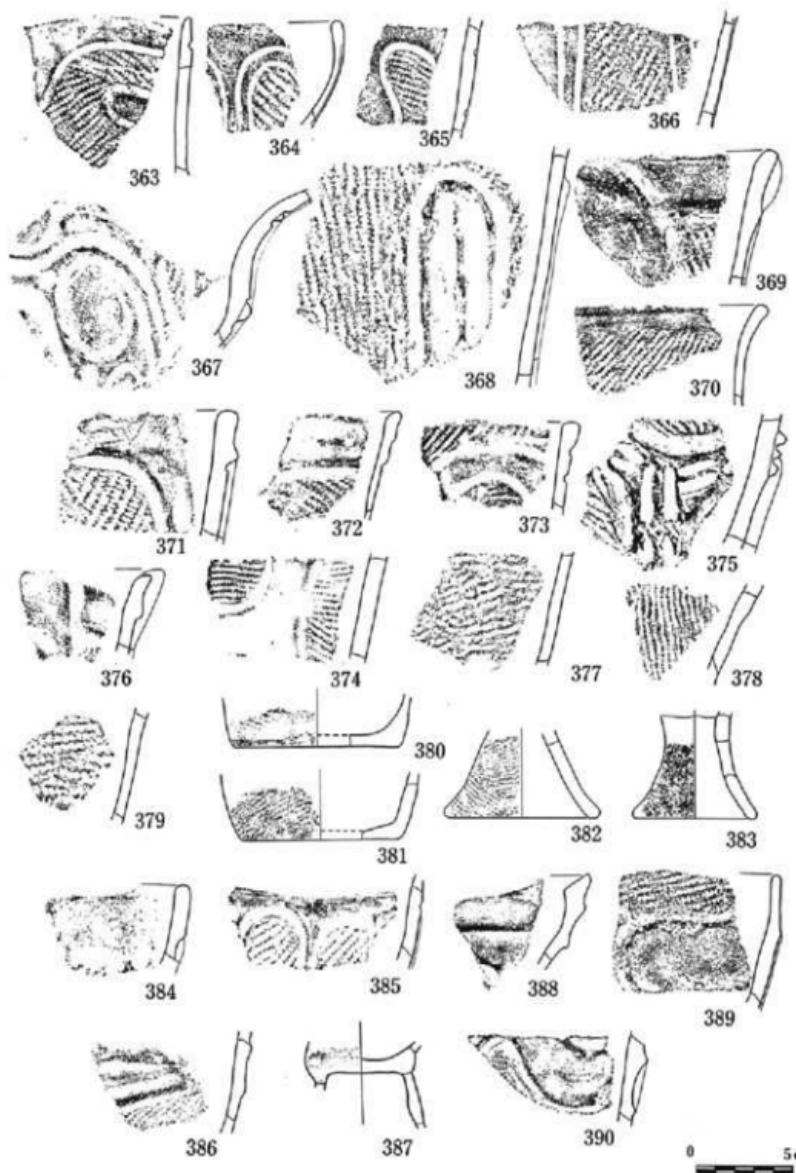
327~332 121号住居跡床面

331~337 122号住居跡覆土



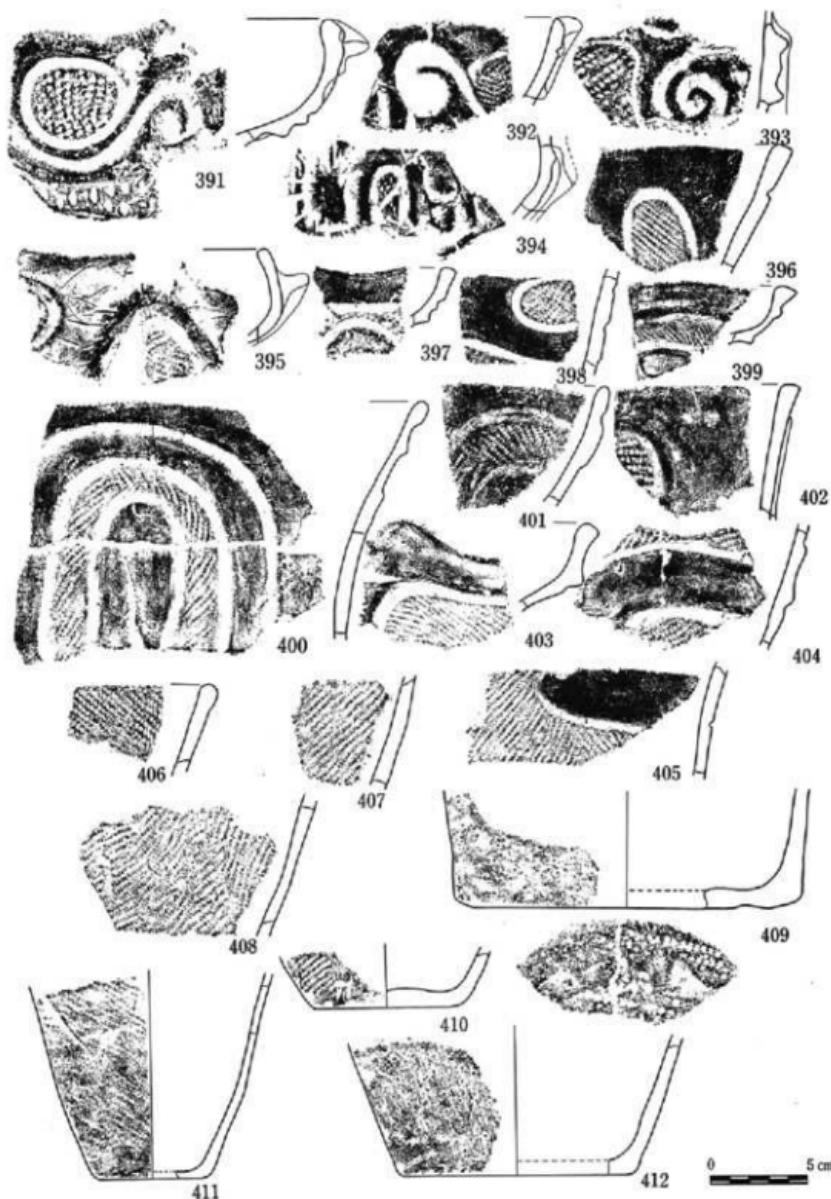
第34図 123・124号住居跡出土土器

304~347 123号住居跡覆土
348~356 124号住居跡覆土
357~362 124号住居跡床面



第35図 125・130・131号住居跡出土土器

363~370 125号住居跡覆土 384~387 130号住居跡覆土
371~383 125号住居跡床面 388~390 131号住居跡覆土

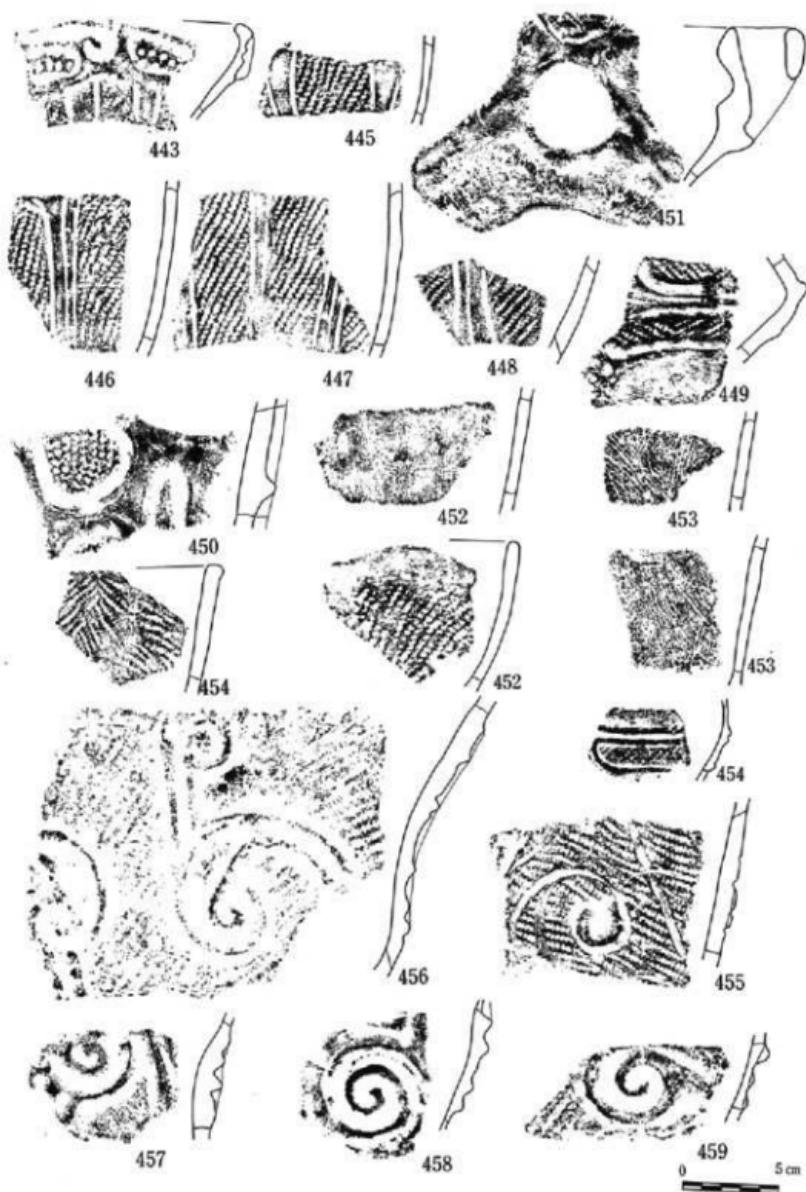


第36図 127号住居跡出土土器
覆土



第37図 127・128・132・133号住居跡出土土器

413~418 127号住居跡床面 434~438 132号住居跡床面
-80- 419~430 128号住居跡覆土 440~442 133号住居跡覆土
431~433 132号住居跡覆土

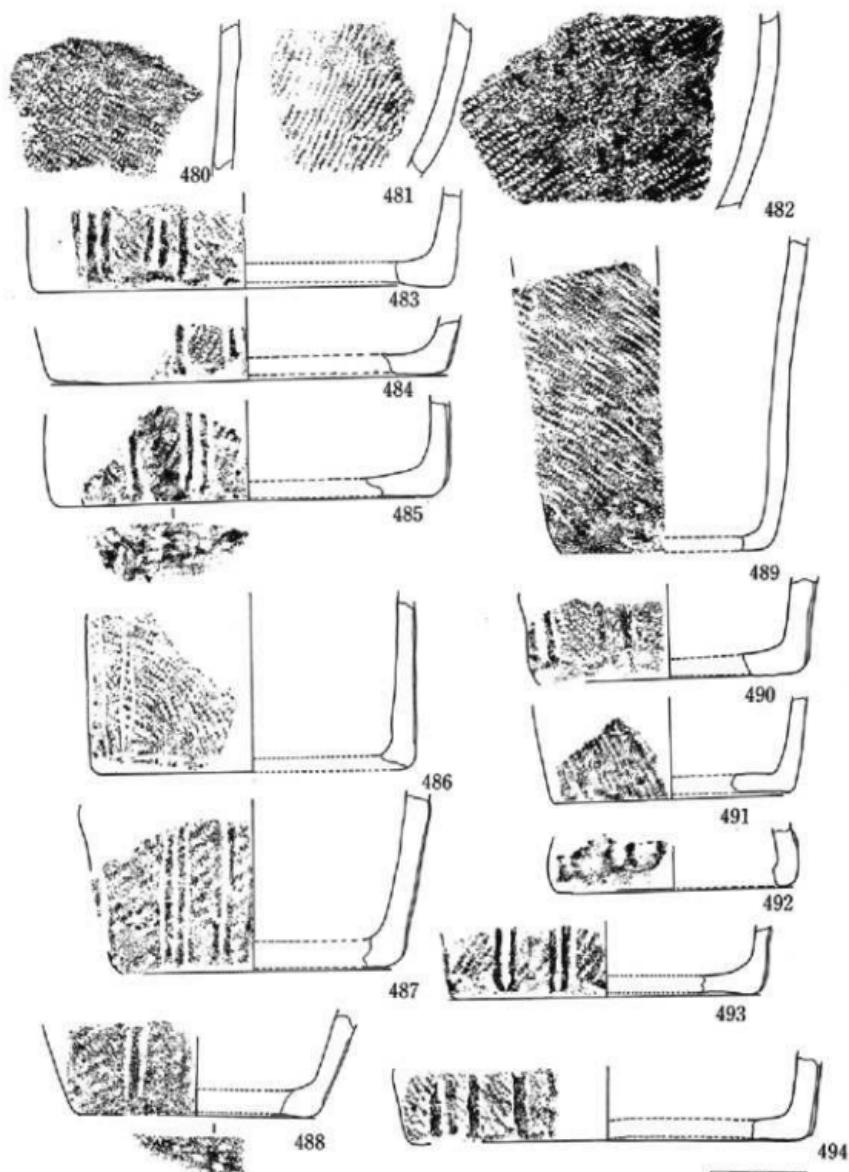


第38図 129号住居跡出土土器

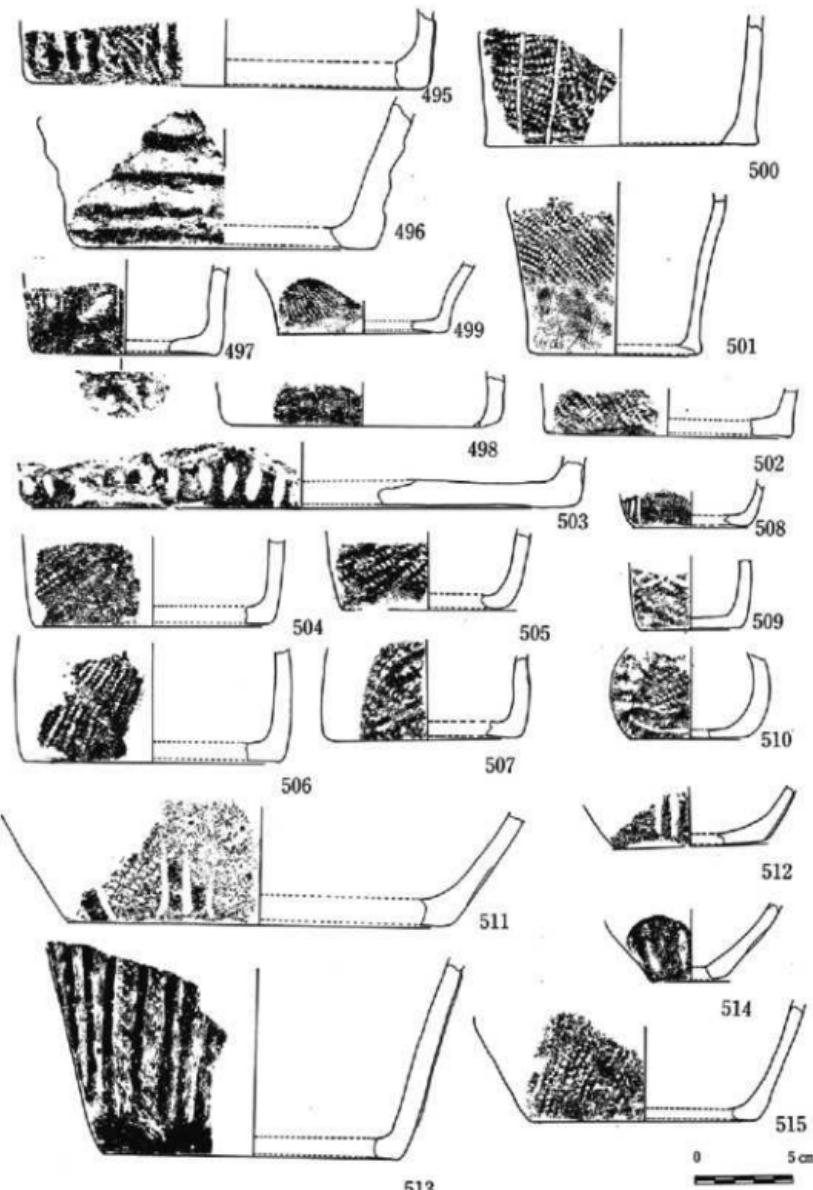
443~453 覆土
454~459 床面



第39図 口縁部実測図
包含層出土

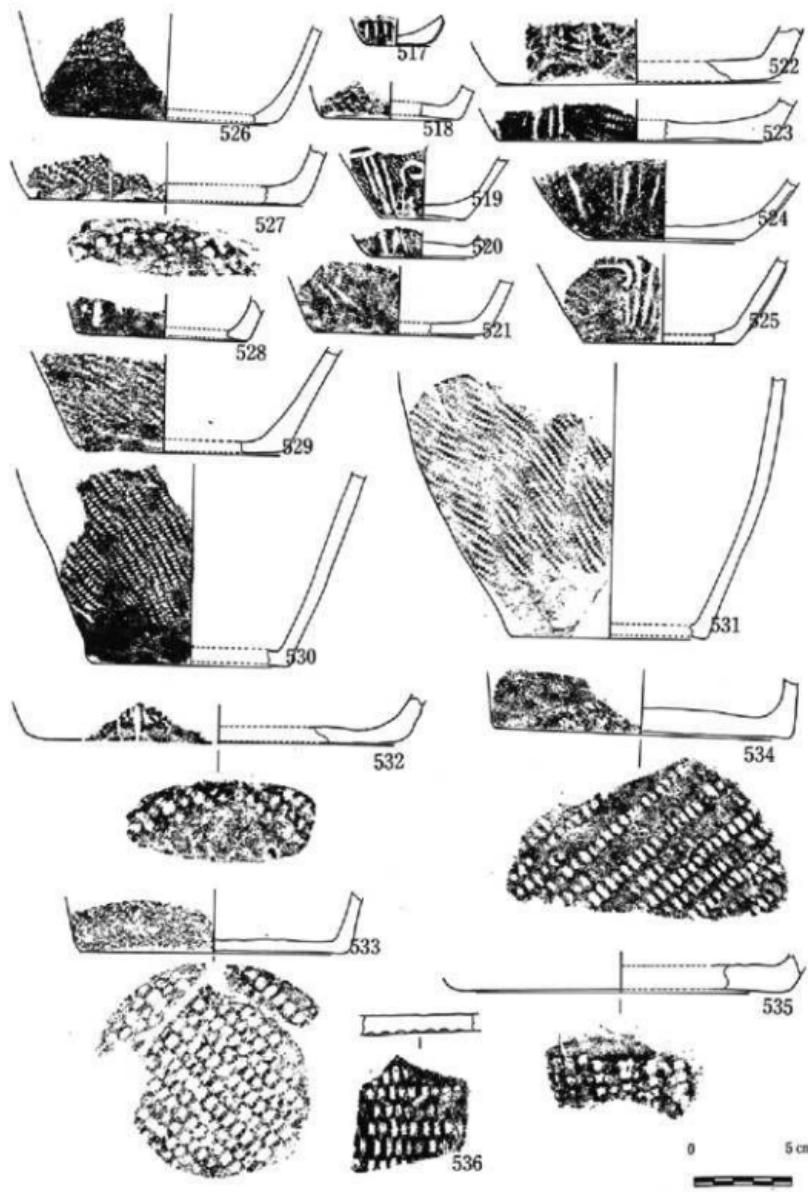


第40図 底部拓影図(1)
含包層出土

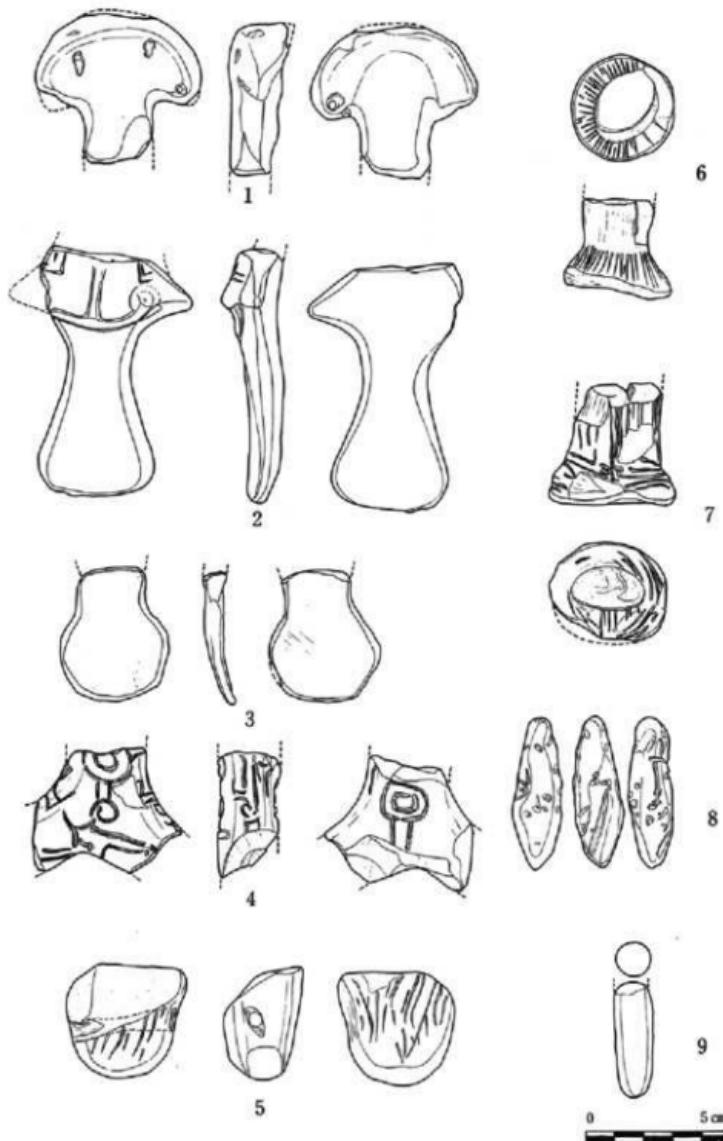


第41図 底部拓影図(2)

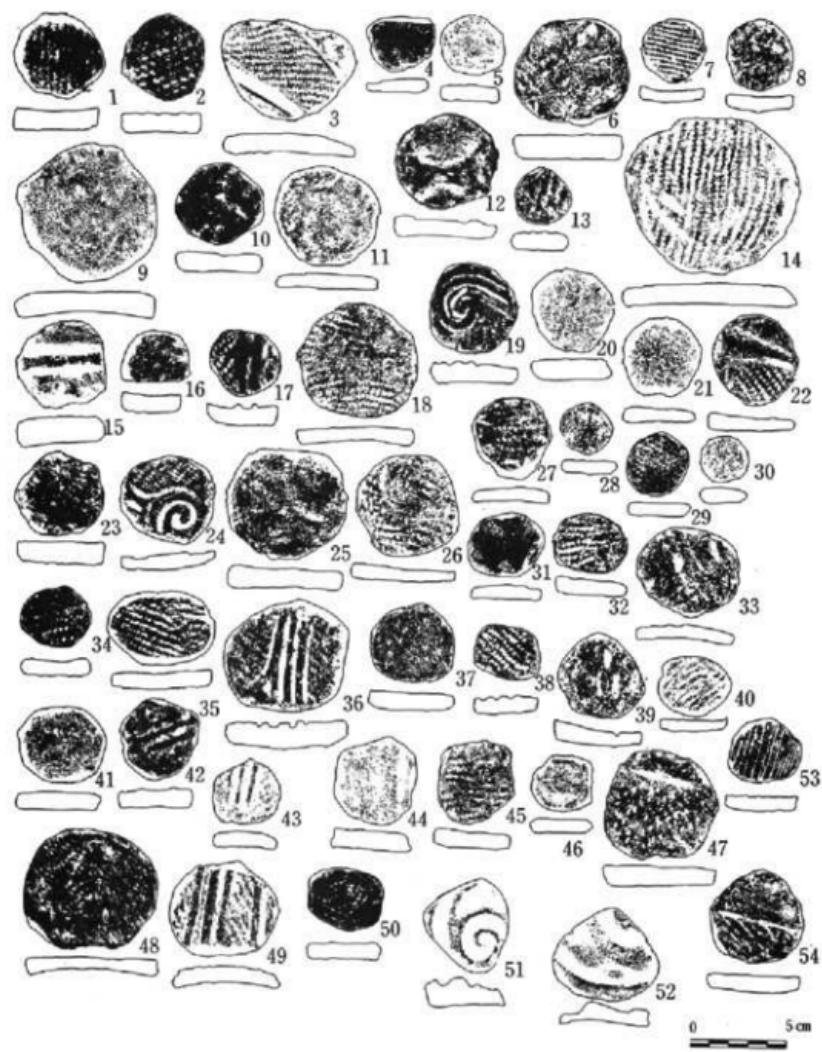
含包層出土



第42図 底部拓影図(3)
包含層出土



第43図 土製品実測図 土偶・その他
1~7 包含層出土
8・9 101 住居跡覆土



第44図 円盤状土製品拓影図

(3) 完形土器

1 a類 (第45図05・08 第53図2 第54図1 図版42)

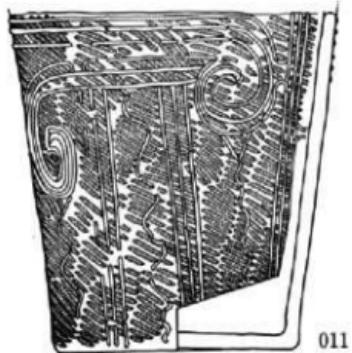
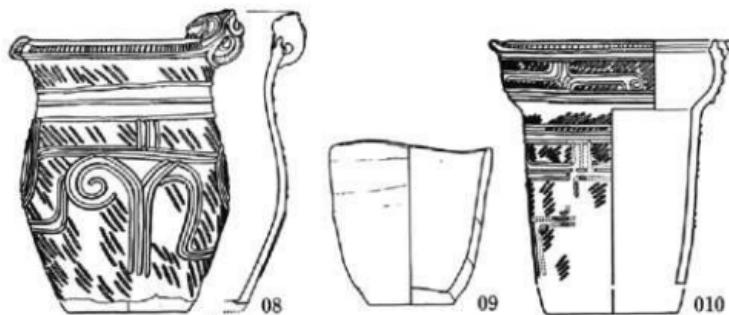
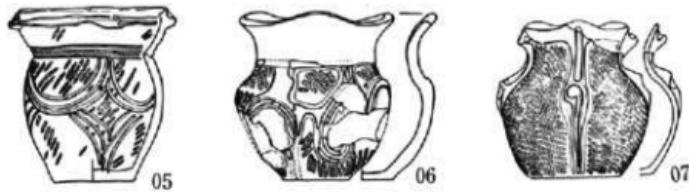
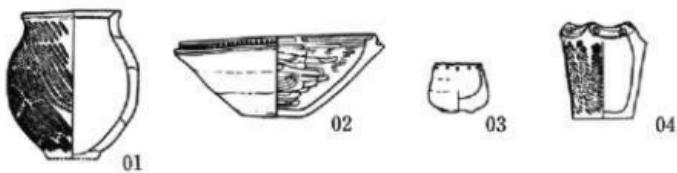
キャリバー形を呈する深鉢形土器で、(05)は口径10cm・器高11.8cm・胸部最大径を中央に置き9.5cm、底部5.5cmを計る。(08)は前者と比較して、口縁の曲度が弱く、内部口縁でキャリバーを有する程度である。両者とも横走する主要線文が特徴で円弧文、渦巻文、「S」字状文それに「Y」字状文が加わって文様を構成する。施文技法は前者は沈線文、後者は調整を有する粘土紐貼付線文で、二本ないし三本を基本とする。単位文様は「Y」字状文を中心に4単位で構成されている。口縁部は0.4~0.6cmの粘土紐を用い、それを調製する沈線が口唇部内外面に一条有する。そのほか(08)は沈線内にヘラ状工具によるキザミを有し、S状貼付による突起一体をもつ。地文は横ないし斜によるLR単節繩文である。胎土には細石英粒を含み、器面裏は口縁部付近で横位に調整、胸部から底面にかけて斜状の調整を施し、色調は(05)が明褐色、(08)は暗赤茶褐色で焼成は堅く、比較的良好である。

1 b類 (第46図014 図版42)

明瞭に内弯するキャリバー形を示すもので、上半部位のみが存在する。口径25cm、現高22.5cmを測る。文様構成は基本的に口縁部文様と胸部文様に大別される。口縁は4単位で構成され、舌状の突起を基準に縦位の沈線、渦巻文を置き区画文様にし、その間を埋める横長変形「S」字状文、逆「S」字状文で構成される。胸部は横位の変形「S」字状文、逆「S」字状文を主に縦位の沈線、渦巻文によって構成する。さらに全面に鋭利なヘラ状工具で斜位に調整している。胎土は多量の石英砂を含み、焼成は良い。色調は明褐色を有する。

1 c類 (第45図010 第46図013 第53図1 図版42)

両者とも底部ならびに胸部の欠損したキャリバー形を呈するもので、(010)は口径16cm・現高(最大高)15.5cm・(013)は口径35cm・現高19cmの深鉢形土器である。横位に走る沈線ないし、粘土紐貼付文が特徴で、口縁部文様はクランク状貼付文、変形「S」字状文、それを区画する「X」字状、縦位の貼付文、一部変形「S」字状文から渦巻を有するもの等(010)が加わって構成され、胸部は口縁部と同様に横走する貼付文を縦位の貼付文様で区画した文様が連続するものとみられる。ただし、(013)の場合は区画した中でも若干変形的要素を示すことを付け加えておく。口唇部は沈線を施し、内部にヘラ状工具でキザミを入れ、外に張り出す舌状突起を有する。突起は(010)で2単位、(013)で6単位を有する。他に(013)の頸部文様として、単節による圧痕を施してある。地文はLRによる単節斜繩文を施す。焼成は(013)が比較的悪く、(010)は良い。胎土は細石英砂粒、微砂粒を



0 10 cm

- 01—101 号住居跡覆土
- 02—109 号住居跡覆土
- 03—109 号住居跡覆土
- 04—103 号住居跡覆土
- 05—109 号住居跡覆土
- 06—108 号住居跡床面
- 07—127 号住居跡覆土
- 08—1 号土壤覆土
- 09—108 号住居跡床面
- 010—103 号住居跡覆土
- 011—110 号住居跡床面
- 012—112 号住居跡埋設土器

含み、色調は(93)は暗黄褐色、(010)は黒褐色である。

1 d類 (第45図011・012 第53図3・4 図版42)

いずれも胸部のみで、(011)は現高23cm・現口径22cm、(012)は現高12.5cm・現口径19.5cmを計る。

いずれも胸部のみで、(011)は現高23cm・現口径22cm、(012)は現高12.5cm・現口径19.5cmを計る。縦方向に施するLR単節繩文、後に三本線を基本とする粘土紐貼付文、沈線文によって文様を構成する。これらは、胸部および胴下半部なので全体の文様構成は明確に出来ないが、本類のみで説明を加えると胸部文様構成の中において胴上部文様と胴下部文様と区分することができ、前者は横方向に後者は縦方向に転回する特徴をもつ。主となる単位文様は沈線および貼付文となる平行線、垂線で、その間に山形文・渦巻文が加わる。

1 e類 (第46図015 図版42)

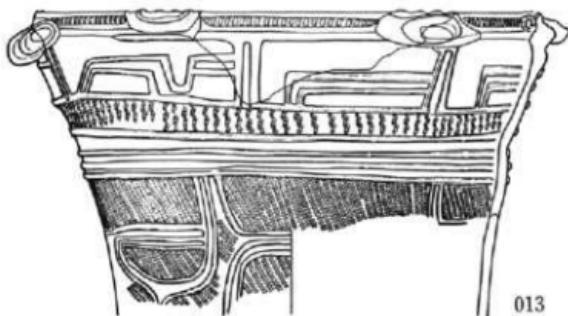
口唇部付近のみに横走する沈線および粘土紐による貼り付文を施し、口縁部から胸部はLR・RL等の繩文のみで構成する。(015)は口唇に二条の貼付文を有するキャリバー形の深鉢形土器で全面にLRの斜繩文を施す。口径20cm、胸部最大径20.5cm、現高17cmを計り、胎土は石英砂を小量含み、焼成は良い。色調はやや茶色っぽい黒褐色を呈す。

1 f類 (第45図06・07 第54図2 図版42)

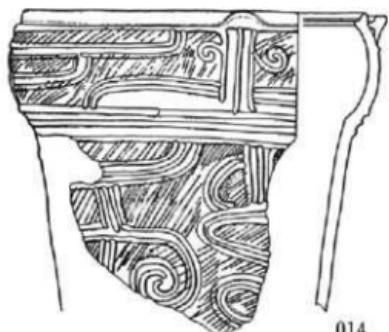
3つの波状口縁を有する小形の壺形土器で、調整貼付文を主要文様技法として用い、さらに側面に沈線を付加する方法がとられる。主となる単位数は4で(06)は渦巻文・変則円文を呈し、(07)は縦位の変形渦巻垂文を単位文様とする。焼成は(06)が部分的に剥離面を残すほかは良好で、胎土は微砂粒を含み、色調は明黄褐色を呈する。器形計測は(06)が口径11.6cm・頸部(くびれ部)8cm・胸部径10.5cm・器高11.3cm・底部径4.6cmを計り、(07)は口径7.5cm、頸部(くびれ部)6.5cm、胸部径10.5cm、器高10.7cm、底部径5.5cmをなす。地文はRLによる地文繩文である。

1 g類 (第45図01~04・06 図版42)

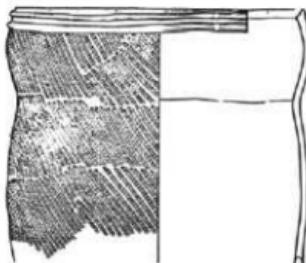
小形土器群を一括したもので、(01)は口唇部が幾分外反する壺形土器であり、口径6.8cm、器高10cm、胸部最大径9cm、底部径3.5cmを計り、器体全面に横転するLR単節繩文を施す。(02)は浅鉢形を呈するもので、口唇部に施される棒状工具による刺突文を特徴とし、他を無文で構成する。また唇部の内部ないし外面にも一条の貼付文によって張り部を施してあり、沈線によって調整する。口径13.5cm、器高5.3cm、底部径4cmを計る。(03)は口縁部に2~2.5mmの有孔をもつ無文の小形土器で、胴下部に最大径を有し、そのまま口縁に内傾する特異な器形を示す。口唇部は、微弱な波状を呈し、口径3.2cm、胸部は最大



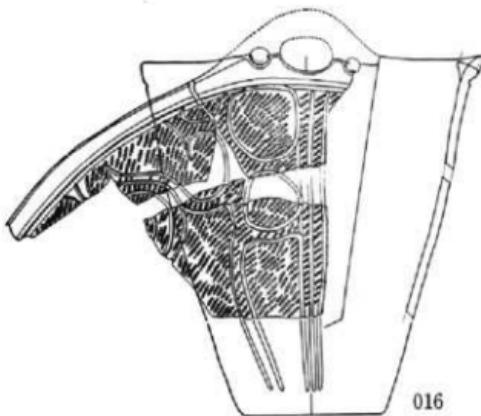
013



014



015



0
10 cm

第46圖 実形土器実測図(2)
 013・014—106号住居跡床面
 015—103号住居跡覆土
 016—1号土壤覆土堆

径部分で4.2cmを計り、底部は幾分上げ底を示し、径2cmである。(04)も内傾する小形土器で、口唇から口縁にかけて4単位の有孔突起をもつ。体部は縦に施文するLR単節縄文を明瞭に残す。口径5cm・器高5.5cm(各突起部を含む)・底部4cmである。(09)はゆるやかな三つの波状口縁を示す無文鉢形土器で、口径は波状部を含めて11cm、胴部は中央部で10.5cm、器高は頂部を含め10.3cm、底部4.8cmを計る。焼成はすべて良好であり、胎土に石英微粒・砂粒を含み色調は(02・03・06)が明黄灰褐色、(01・06)は黒褐色を示す。内部調整は何れも細調で良く、(02)のみに横位の明瞭なヘラミガキを残す。

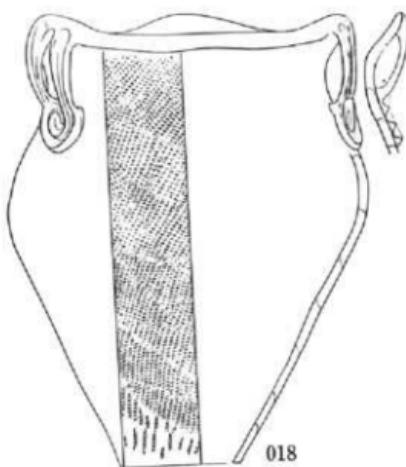
2a類 (第47図017・019 第55図3・4 第54図3 図版43)

外反する波状口縁を有する大形深鉢形土器で、(017)は三つの波状を呈し、口径(波状口縁を含め)30.5cm、器高(頂部を含め)現高32.5cm、胴部最大径30.5cmを有する。(019)は4つの波状口縁部をなし、口径は波状口縁部で37.2cm、平縁部で34.5cm、器高は波状頂部で50cm、胴部最大径37cmを計る。底部は両者とも欠損しており不明である。文様構成区分の中では胴部文様の範溝に属し、(019)はその中でも二区分の単位をもつ。基本となる主要単位(文様構成を区画する基本的文様)は波状口縁部下位に存在する渦巻文で、懸垂文によって単位区画を示し、他に存在する同類土器においても同様なメルクマールを示すことを付け加える。

文様表出技法は、断面が半円形を呈する隆起が主で、他に断面が方形や広面レンズ状を呈するのもあり、側面をめぐる沈線とともに明瞭なミガキを示す。文様構成は主要単位文を中心に縦位に構成し、(017)は単位構成の中で2区画に大別され、主要区画AとBに分けることが出来る。A区画は中央に位置する渦巻文を中心に、梢円刺突文を置き、それに逆「U」字状文を中心として内部に「の」字状垂文の渦巻文、懸垂文が加わり、渦巻文の縁をなす「フ」字状刺突文がのびて三角状円文を発達させる。さらに「U」字状文の両側には縦に転回する「S」字状文が間を埋め、渦巻文、「フ」字状刺突文・懸垂体・刺突文で構成する。一方B区画は基本的にみてAと同様な構成を有するが全体的に簡略化し、「U」字状文内の文様は、「フ」字状刺突文の縁をなす渦巻文のみで構成するに至っている。また両側に埋めた縦に転回する「S」字状文も渦巻文と合体し、フジ状文と変化し、右側の「S」字状文のみが変形した「U」字状文を発達させ、渦巻文・刺突文が組み合せてB区画文様を構成する。地文はLR単節の充填縄文で、基本的には縦位に施文するが規則的でない。さらにその上にRLRによる複節をさらに部分的に充填させているが、その基本的統一性はない。胎土は良質な粗地を選出し、小量の微砂と石英砂を含む。焼成は非常に良好で、暗黄褐色ないし暗茶褐色を呈する。(019)は胴部文様構成の中でも、胴中央にてその上部と下部に文様帯をもつ。胴上部は中核となる渦巻文と垂下する懸垂文によって主要単位とし、



017



018



019



020

017—10号土壤 (KU 7) 右堆填
018—3号土壤 (KU 1)
019—5号土壤 (KU 2)
020—6号土壤 (KU 3)

0 10 cm

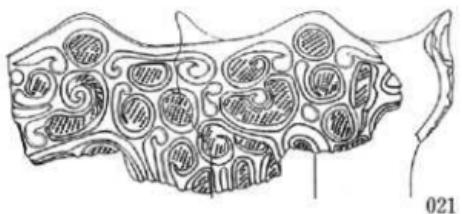
第47図 完形土器実測図(3)

3区画で構成する。主要区画はA₁に有し、中央部に位置するクランク状渦巻文に、「フ」字状文・渦巻文・棒状刺突文・それに渦巻文の縁をなす「フ」字状文が張り出して区画文を呈するもの等で文様を構成し、縦位に転回する。A₂区画は、A₁と比較して、若干基本的な文様構成が崩れ、クランク状渦巻文はクランク状文に変化し、「フ」字状が発達した区画とフジツル文的要素を強める。さらにB区画はA₂と同じクランク状文を主体に「フ」字状をもつ渦巻文・懸垂文、それに発達したフジツル文の集合にて構成する。従って本器における文様構成は、A₁を理想的文様構成区画として、A₁→A₂→Bの経路をたどるものと考えられる。一方、胴下部は1.5~2.3cm位の粘土帯を基本上部への文様区画となる横帯にはほぼ垂下する粘土帯によって構成し、外壁面に沈線を施文し、逆「U」字状文を呈する。小單位数は11である。地文はL R単節の充填繩文で、胴上部は縦位に、胴下部は斜位方向に施文し、一部、胴上部の隆起線は不規則に、口縁部と胴部横帯は横位に施文されている。

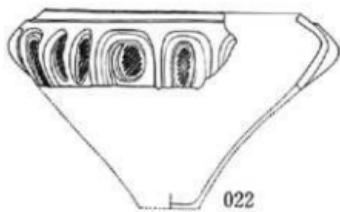
焼成は良好で、胎土には多量の石英砂を含み、色調は明茶褐色で部分的に赤褐色を呈する。

2 b 類 (第47図020・第48図021・第55図2 図版43)

沈線を主体に文様を構成するもので、(020)、(021)が本類に含まれる。何れも一部欠損しており、(020)は頭部から上部を破壊され、(021)は口縁部から頭部までを残す。器形は両者とも破損しているので明確に出来ないが、(021)は口縁が外反するキャリバー形、(020)は胸部最大径を胴上部にもつことから(017・018)と同様な器形を示すもので、(021)とともに波状口縁を有する可能性をもつ。文様構成は、縦に転開する要素を示しながらも全体的には横位に流れる文様帶を有し、2a類でみられた主要単位区画は消え、中心的単位文となる渦巻文も(021)の中では円文へと退化しており、器形においても2a類と比較すれば胴部最大径が中央から胴上部に置くことも注目される。さらに地文もL R Lの複節斜繩文を充填しており、2a類との相異を把握することが出来る。また中核的単位文様を埋める小単位文も本類では渦巻文から円文、「S」字状文・「の」字状文と変り、区画をもつ「フ」字状文や区画の持たない「フ」字状文もここでは「の」字状垂文・円形頭部をもつ懸垂文・懸垂文へと変化する特徴を示す。(021)は4つの波状口縁を有し、同位に残す円文を主要単位文として横位の「c」字状文・「の」字状文と円文を集結し、それに「の」字状垂文・円形頭部をもつ懸垂文によって4単位で文様を構成するものがみられる。(020)は単位構成の中で、A区画とB区画に分けられ、施文の構成区画上からA区画が主要区画とみられる。A区画は頭部最大径位置に横長に転回する「S」字状を施し、その端が渦巻状に内転するのを主体文様とし、円文・渦巻文、それに不整の区画横円で組み合わせる。一方頭部は垂下する「の」字状垂文・横円文・刺突文等で埋め、胴中央から胴下部にかけては逆「U」字状文・頂部が内曲する逆「U」字状文・懸垂文の組合せで縦位に転回する。B区画はほ



021



022



023

0 10 cm

021—103 号住居跡覆土
022—105 号住居跡覆土
023—121 号住居跡炉 (EL. 06)

第 48 図 完形土器実測図(4)

とんどA区画文と同様の構成を有するが、一部「S」字状渦巻文内の小単位において、A区画の渦巻文が「C」字状文に変化する特徴がある。(020)は現高51.2cm・現口径32.5cm・胸部最大径41.5cm・底部10.2cm、胎土は多量の石粒と石英粒を含み焼成は良くない。色調は赤褐色で部分的に暗茶褐色を呈する。(021)は口径(波状口縁頂部)28.2cm・同現高18.5cmで胎土は良質な粗地を選出し、小量の微砂を含み、焼成は良好である。色調は明褐色を呈する。

2 c類 (第41図018 第54図2 図版43)

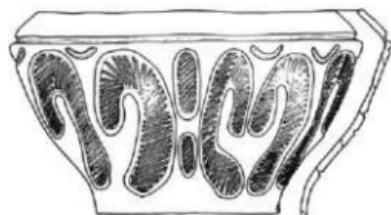
外反する三つの波状口縁を特徴とする深鉢形土器で、胸部最大径を頸部下位に置き、2b類(020)に類似する器形を呈し、基本的には同類とみられる。主要単位は3単位で、頸部に押圧する渦巻文に波状頂部からのびる二本の粘土帯をブリッヂ状に配し、口唇部に沿って1.5cm位の粘土帯を貼付する。地文はLRLの複節斜縄文である。原体は比較的明瞭に施文され、原体の長さは3~4.5cm、節の太さは0.3cmである。色調は淡い黄褐色を呈し、胎土は荒地を用い、焼成も良くない。器壁は口縁付近で1cm、胸部0.9cmで、3.5cm~5cmの間隔で輪積痕を残す。口径(波状口縁を含め)、胸部最大径37.2cm・器高(波状頂部)46.5cm・底部径12.5cmを計る。

2 d類 (第46図016)

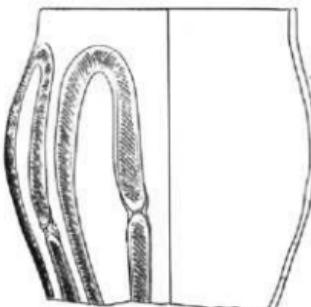
口縁が幾分外反するもので、口縁突起の部分が欠けて明確に出来ないが、現存部分から推測すれば3孔をもつ山形突起を示すものとみられる。文様構成は、突起部と同下に垂下する三本の懸垂文を(主要単位)文として、円文・渦巻文、それに変形「の」字状文・逆「U」字状文等が加わり、縦位の転回をなす。主要区画数は破片なので明確に出来ないが、口径計測からみて3区画と考えるのが妥当であろう。地文は斜位のLRL単節である。口径(推定)23.5cm・現高18cm、色調は暗黄褐色で胎土は小量の石英砂を含み、焼成は良好である。

2 e類 (第48図022)

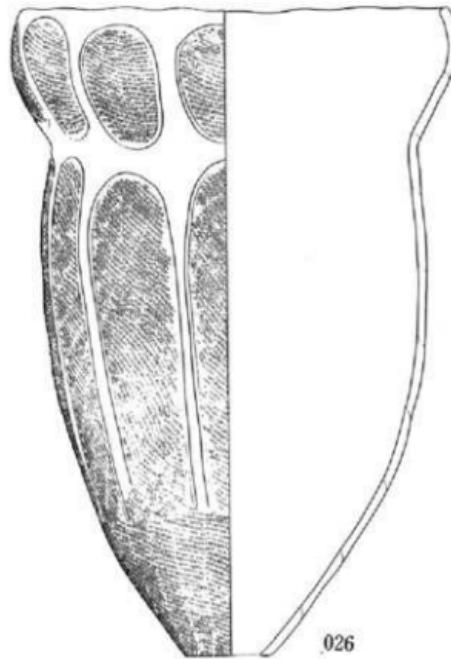
口縁部のみが存在するもので、推定口径26.5cm・現高8.2cmの内反する浅鉢形土器である。断面が四角形をなす隆線を主要文様表出技法として、口縁部から胴上部位置に主要文様を施文する。隆線は、口縁上部より押圧し、内曲した最径部を1.5cm程舌状に張り出して、胴部にかけてゆるやかに描き逆「U」字状に配する。文様構成は区画した「U」字状内を「の」字状文と懸垂文で構成し、全体に縦位に転回する。一方口唇部は「く」字状に曲するのを特徴として、口縁部付近に一段低い無文帯を呈するのも本類土器の特色で、他に一条の沈線を横走するのもある。色調は黄灰褐色で固く、焼成は良い。胎土は微砂粒を含み、器壁は0.7~0.85cmである。



024



025



026

0 10 cm

024-109号住居跡炉 (EL 19)
025-106号住居跡炉 (EL 03)
026-14号土壤 (KU 11)

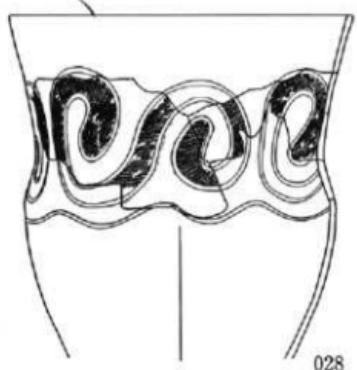
第49図 完形土器実測図(5)

2 f 類 (第 48 図 023・第 55 図 1 図版 44)

ゆるやかに外反し、張りの少ない胴部曲線を呈し、そのまま底部に向う球形状の器形をもつ。文様構成区画内では三要素を占め、①口縁部文様区画で、沈線を主要文とし、胴部文様区画となる一条の横線に継ぐ逆「Y」字状文を置き、4 単位で構成する。②としては、胴中央に位置する文様帯で、断面形状が三角形を呈する隆起線で施し、中核となる渦巻文は三単位で、両者が同じ方向に渦まく主要文と左転回に渦まく小單がそのまま全体を囲んで、大渦巻を形成し、その端が次の単位区画間上で逆位（右巻）の小單にして、上記の逆「Y」字下部に配し横の転回をなす。この基準施文法は、前述の口縁部文様施文と同様の 5 単位を示し、主要区画文は A₁ を主要単位文としてみることができ、A 1 → B 2 → A 2 → B 1 → C と施文した可能性をもつ。また A 1 ~ C 単位の分類基準はあくまでも文様区画の相異と類似点で便宜的に細別したもので、同心方向に渦まく小単位を基準として、A 1、A 2 は上部位置に存し、B 2 は左側、C は右側位置と横位に転回する中の相異がみられる。③は胴部中央から下胴部にかけて施文するもので、凸状隆帯と沈線をもって逆「U」字状文が継ぐ転回する。主となる単位は②の渦巻下部に位置し、両側に無文「U」字、同区画を示す継長の「U」字状文を集結して、5 単位で構成する。①～③の文様区分はそのメルクマールを胴中央において構成しており、全体的には胴部文様の範囲に加わるものと言える。他類の土器においても同様な結果を得ることが出来た。器径 45.2 cm、器高 50.3 cm、底部 10.1 cm をなし、胎土は多量の石英粒と砂粒を含み、焼成は悪く、色調は全体的に灰褐色を示す。地文は R L 単節繩文を用い渦巻部と逆「U」字状文（無文部を除く）内に充填する。

3 a 類 (第 49 図 026 第 57 図 3 図版 45)

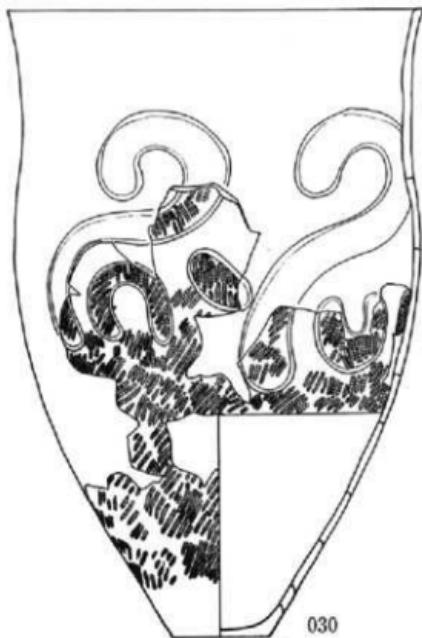
熊ノ前遺跡出土完形土器の中で最も大形の土器であり、口縁部が若干の波状口縁を有し口径 44.3 cm、器高 67.2 cm、口縁部最大径 45.8 cm、胴部最大径 38.8 cm をなすキャリバー形土器である。底部は欠損し不明であるが現口径として 8.8 cm をなす。色調は暗黄褐色ないし、黄灰褐色を呈し、部分的に黒炭化した所もみられる。胎土は石英粒と微砂をほぼ等しく含み、焼成は良く、器壁厚さは 1 cm 位で、5 ~ 7 cm の間隔をもって輪積の痕跡を残す。文様構成は、口縁部文様と胴部文様に分けることができ、前者の口縁部文様としては円文を単位文様として、後者の胴部文様は逆「U」字状文を単位文様として継方向に転回する。前者の文様として、後者の文様区画は頭部の無文帶で分けられるが、基本的には「U」字状文の間に円文を配置するものと言える。但し、円文は 14 単位、「U」字状文は 13 単位であり、かならずしも規則的な組み合せとしては至っていない。地文は口縁部は L R 単節、胴部は R L 単節斜繩文で、単位文外は磨消繩文手法を施す。さらに胴下部から底部にかけ



028



029



030



031



032

0 10 cm

028—109 号住居跡炉 (EL 19) 031—127 a号住居跡 (EL 13)
 029—103 号住居跡覆土 032—20 号炉跡 (EL 20)
 030—102 号住居跡覆土

第 50 図 完形土器実測図(6)

ては縦位地文によるR L単節斜繩文で構成する。また単位文区画外の無文部分は明瞭な磨きと調整を加え、光沢を発する。原体の長さは約3cm位で、節の太さは3.5mmを有し比較的ゆるい捻りを原体としている。

3 b類 (第49図024 第56図1 図版44)

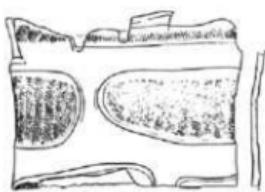
口縁部が「く」に強曲するのを特徴として、そのまま曲下する2e類に似た器形をもつ。但し、欠損した部分において外曲する要素も含み、一部沈線による単位文が転回することも吟味すると2e類的な浅鉢形を示すよりも、むしろキャリバー形を呈するものとみみたい。文様表出技法としては先端が丸味を有する棒状工具で施文したもので、単位文としては、平行沈線、「U」文、「C」字状文、逆「C」字状文、それに円形が加わる。文様構成は「C」字状文、逆「C」字状文を組み合わせたものを主要単位として、その頂部間に「U」文を配して縦位の転回をなす。単位数は7単位でA→B→C→E→F→Gの経路を示すがG単位で基本的転回が崩れ、逆「C」状文と円文で構成される。またB単位内でも主要単位内に円文を施している。さらに口縁部には横走する沈線を配し、基準線的要素をもつ。また欠損部付近のB単位およびE単位とF単位の間には下方(胴部)より、巣位文の一部が現われているが、文様構成等は不明である。色調は明黄褐色を呈し、胎土に多量の石英砂を含み焼成は良い。口径30.6cm、口縁部最大径36.5cm、現高21cmをなす。地文はR L単節繩文で「C」字状文、円文内に縦位を基本として充填し、一部「C」字状文頂部においては横に施文するものもある。

3 c類 (第49図025 第56図2)

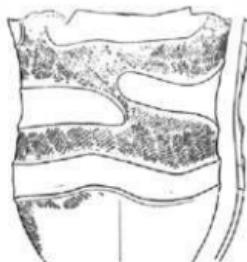
最大径を胴大部にもち口縁部に沿ってゆるやかに内曲し、口縁部で幾分外反する器形を呈する。文様は0.3cm位の棒状工具をもって施文し、胴下半位が破損して明瞭ではないが、縦長の「C」字状文を描くものとみられる。単位文となる「C」字状文の接点部は0.5~0.8cmの隆起部を形成し、8単位をもって縦方向に転回するのを特徴とする。地文はR L単節繩文を充填し、「C」字状文頂を一部横転するものの主として縦位施文が基本的な構成と考えられる。粘土に石英砂を含み、焼成は悪く全体がザラザラとした感じである。色調は、明黄赤褐色・明黄褐色を呈し、部分的に黒炭化がみられる。口径26.2cm、胴部最大径32.6cm、器高30.2cmをなし、器壁の厚さは0.5~0.6cmで3~3.5cmの間隔をもって明瞭な輪積痕が認められた。

4 a類 (第50図030・032 第52図038 第57図2 図版44)

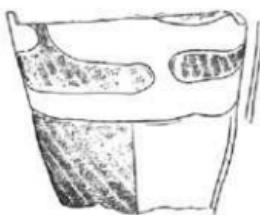
「C」字状文、「S」字状文を単位文として施文するもので、沈線による単位区画に磨消手法を加えて文様を構成する。(030)は縦長の「S」字状文と「C」字状文、それに円文を組み合わせて縦に転回するもので、胴中央から口縁にかけて磨消繩文を発達させる。



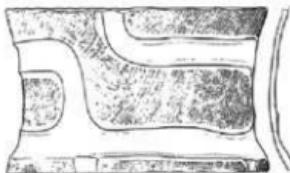
033



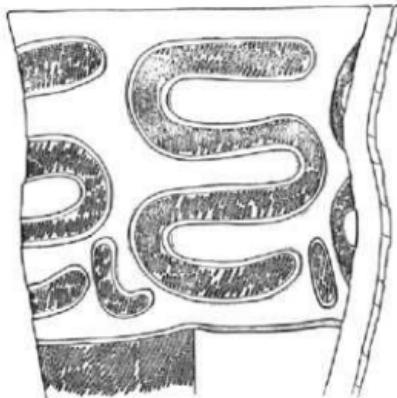
034



035



036



037

- 033—109号炉跡 (EL 19)
034—24号炉跡 (EL 24)
035—25号炉跡 (EL 25)
036—1225号住居跡炉 (EL 11)
037—120号住居跡炉 (EL 07)

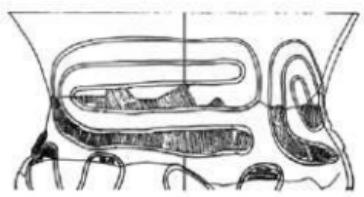
0 10 cm

第51図 完形土器実測図(7)

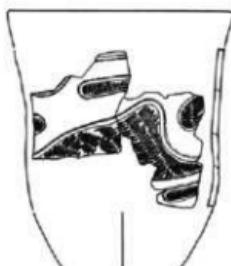
(038) は口縁付近に渦巻状の「C」字状文を横転させ、胴部は「C」字小単位文を縱に施文し、単位区画外面は頗著な磨消繩文である。(032) 口縁から胴部に渡って施される縱位の「C」字状文と、胴部下に転回する一段気味の「C」字状文と円文を間に位置して、全体の構成をなす。地文は何れも L R 単節斜文で、基本的な斜位方向の転回を示す中で、部分的に縱位および横の施文も呈すのもある。施文法は地文が繩文と思われるが、(032)においては充填後に磨消している可能性もある。器壁の厚さは平均 0.4~0.65 cm 位で、(030) が 5~7 cm、(032) が 3 cm 位である。胎土は石英微粒ないし砂粒を小量含み、焼成は(030) を除く他は良い。色調は(032) が暗茶褐色、(030) が明黄灰褐色、(038) は全体に赤褐色・黄褐色を呈する。器形計測は(030) 残高 46.5 cm 推定器高 64.5 cm、胴部最大径 41.3 cm を計り底部 10.1 cm である。(038) は破片なので明確な計測は難しいので現高のみを付記する。約 7 cm をなす。(032) 器高 22.5 cm、口径 21.6 cm、胴部最大径を胴下部にもち 24.2 cm、底部 7 cm を計る。器形は口縁部が外反する深鉢形土器が主で、(032) は器高よりも口径の比が大きく、(030) は対象的に器高の比が大きな器形を有し、(038) も(032) に似た器形を示すものと考えられる。

4 b 類 (第 51 図 033・034・036 第 52 図 039 第 58 図 2~4 図版 44 図版 45)

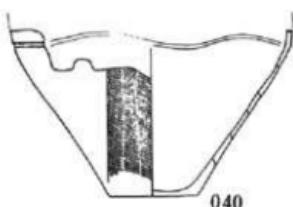
すべて胴部のみが存在する欠損品で、隆帶を主要文様表出技法とするグループであり、基本的な横流するゆるやかな文様帯をもち、隆帶の両端部が三角状に隆起して、隆起に沿って沈線が施文する。文様構成はほとんどが胴部のみしか残存しない状況であり、詳細な文様区分を述べることは難しく、その点も吟味して述べると(033)は横位の楕円区画を基本文様として、波状文が加わってその外周を隆帶が区画するものとみられる。一方(036)は波状区画文もしくは口縁付近で逆波状をなす「クランク」状区画文を主要単位文様として横長に転回するものとみられる。(039)は(036)の変形的要素を強め、不規則な波状文が横走する。(034)は上記に述べた全要素を含んでおり、横長の波状文と円文と「クランク」状文が集結し、同様の構成を呈す隆帶が加わるものとみられる。地文は充填繩文を基本として、(033)は R L を縦に、(034)は L R を斜位方向ないし逆斜位に施文して、(036)は L R を主に一部 R L 原体を用いて斜位方向に転回する。(039)は充填繩文後に沈線の調整によって消されているが、磨消繩文手法を施した可能性もある。器形は完形土器として存在するものがないので、明確な形状を把握できないが、ゆるやかに外反するものと直立する口縁をもつものの二者が共存するものとみられ、胴部はゆるやかな曲面を呈しながら底部に向う深鉢形と思われる。器壁の厚さは平均 0.4~0.5 cm で 3 cm 位間隔での輪積痕を残す。色調は(033・036)が暗黄褐色、(034・039)は暗褐色ないし暗灰褐色を呈す。胎土は(033・034)が多量の石英砂を含み、(036・039)は小量の石英粒と砂粒を含む。焼成は(033・



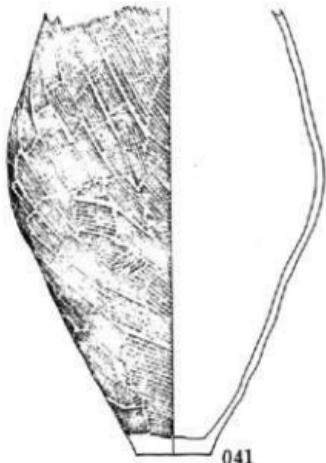
038



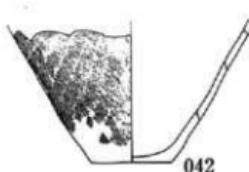
039



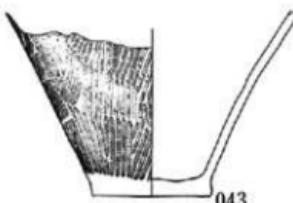
040



041



042



043

- 038—109号住居跡炉 (EL. 05)
039—109号住居跡覆土
040—109号住居跡覆土
041・042—120号住居跡炉 (EL. 07)
043—103号住居跡炉 (EL. 02)



第52図 完形土器実測図(8)

(036) が良質な粗地を選出して良く、(034・039) は比較的荒地で悪い。器形計測は (033) が現口径 24.2 cm、胸部最大 23.2 cm、現高 17.8 cm、(034) は現口径 22.9 cm、胸部最大径 21.5 cm、器高 25.7 cm、(036) 胸部最大径 27.1 cm、現高 16.9 cm、現口径 27.1 cm、(039) は現口径 21.5 cm、胸部最大径 19.9 cm、現高 16.1 cm をなす。

4 c 類 (第 50 図 029)

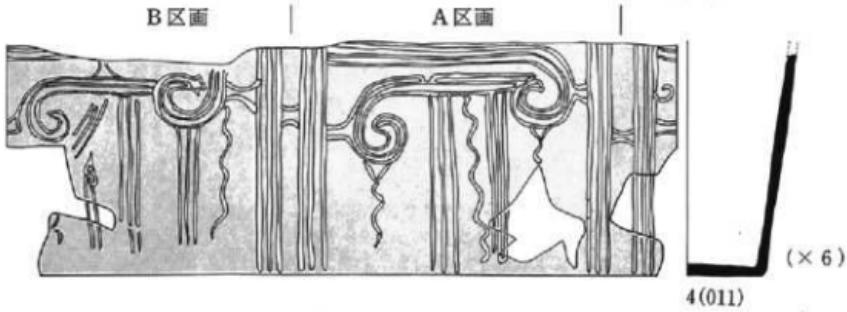
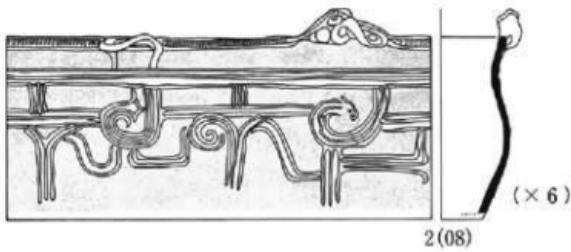
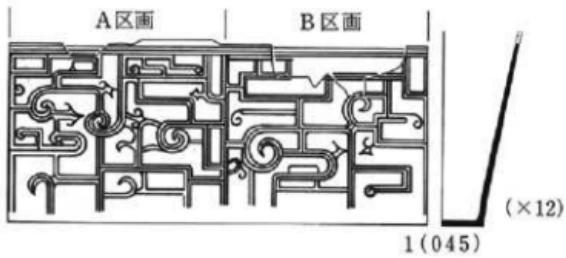
胸部のみが存在するもので、4 b 類と同様の両端が隆起する隆帶によって文様を転開するもので全体に縦の文様をもつ。単位文としては、縦長の「S」字状文と「C」字状文があり、「S」字状文を主要単位文として「C」字状文、焦文「C」字状文が間を埋めて縦に文様を構成するが、単位文を囲む隆帶を胴下部で波状線で区画し、横の流れを示すものと思われる。地文は L R 単節繩文を基本に、単位文内を充填繩文、胴部下半を縦方向に転回する地文繩文を施文し、単位文内をさらに施文後に沈線で消している。器壁は比較的薄く 0.4~0.5 cm で隆帶部分で 0.6 cm をなし、胎土は石英微砂を含み、色調は赤黄褐色ないし暗黃褐色を呈し、焼成は良好である。推定口径 34.8 cm、現高 36.5 cm、胸部径 32.5 cm を計る。

4 d 類 (第 50 図 028・031 第 51 図 035・037 第 52 図 041 第 56 図 3・4 第 56 図 3・4 第 57 図 1 第 58 図 1 図版 44 図版 45)

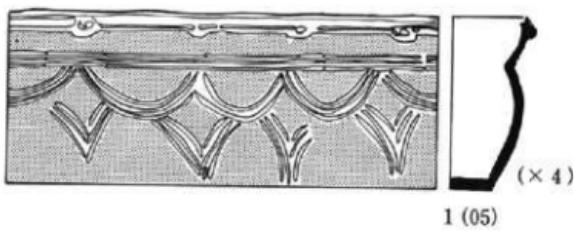
胸部上半に主要単位文を描き、波線をもって区画するのを特徴とするグループであり、単位文の構成状況で二者に大別することができる。前者は横長の「C」字状文、「S」字状文を単位文様として横位に転開するもので (028・035) が含まれる。後者のグループは主な構成は横の転開を示すものの、単位文様のみが縦位の「C」字状文と「S」字状文が合体した単位文様や横位の「C」字状文どうしが集結した様な文様、同心円文、円文を配して構成する (031・037) がある。前者のグループは明瞭な単位文様を描く一方、後者のグループは流動的文様を単位文様として構成する特質がある。地文は L R 単節繩文を基本に (028・031) は充填繩文を施文し、(035・037) は磨消繩文手法を転回する。胸部下半は地文繩文による L R 単節を斜状ないし、縦に施文に転回して構成する。胎土は石英砂と砂粒を多に含む (037) と小量含み焼成の良好な (028・031・035) が有り、色調は明灰褐色ないし部分的に黒炭化を示す (037) と明黄褐色および黄赤褐色を呈する (028・031・035) がある。器形計測は (028) が推定口径 35.5 cm、現高 13 cm、現残最大径 31.5 cm (031) は現口径 27.1 cm、現高 18.8 cm、胸部径 20.5 cm、(035) 現口径 24.5 cm、胸部径 21.3 cm、現高 20.5 cm を有し、(037) は口径 37.2 cm、現高 38.8 cm、胸部最大径 34.7 cm を計り、(040) は胸部下半位が存在するもので、胸部径 29.3 cm、現高 17.5 cm、底部径 9.6 cm をなす。

5 類 (第 52 図 041~043 図版 461~8)

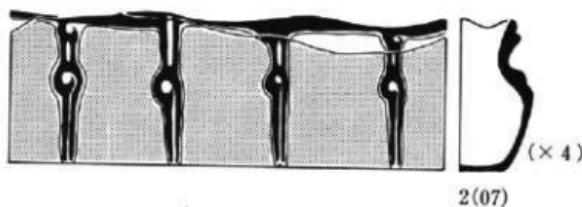
粗製土器を一括したもので、ほとんどが底部および胸部のみが存在する欠損品が多く、



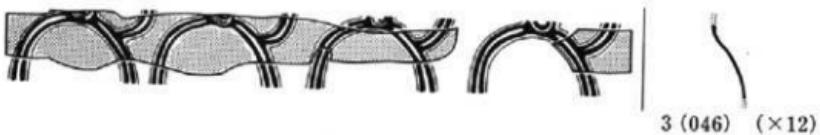
第53図 土器文様成図(1)



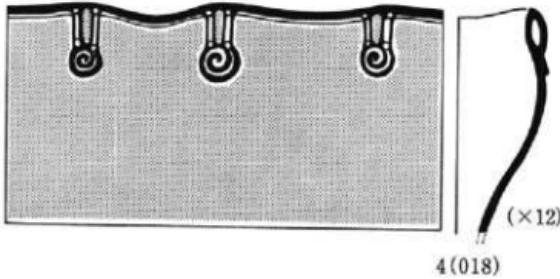
1 (05)



2 (07)

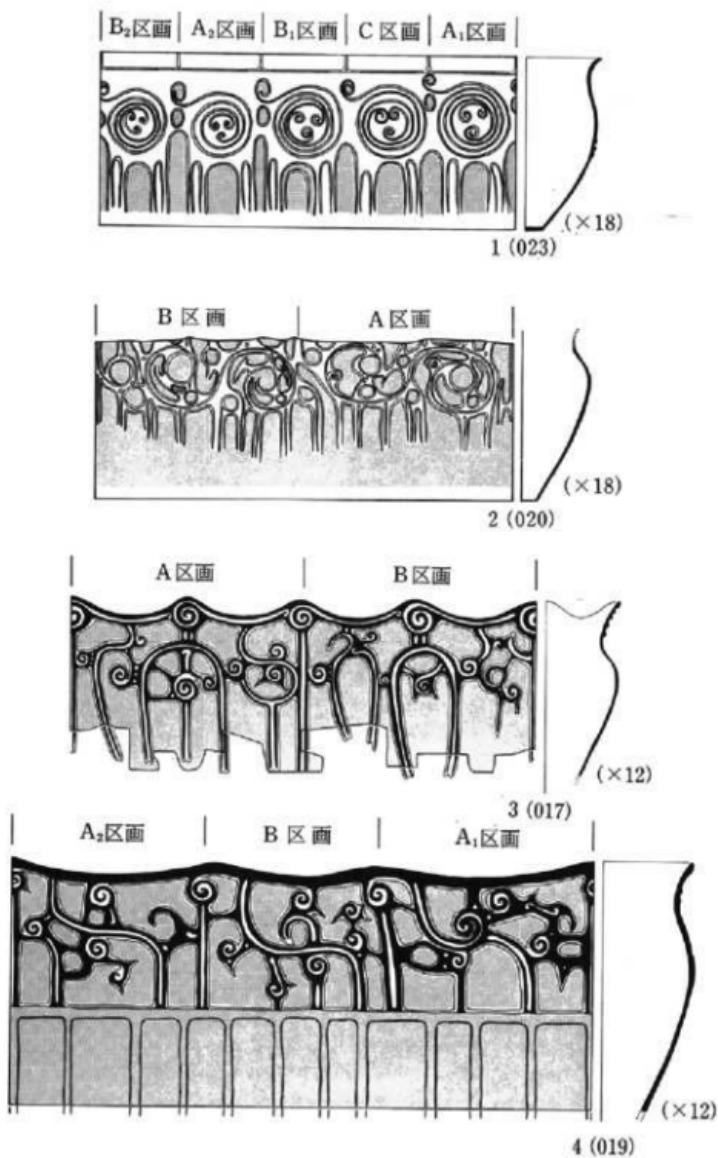


3 (046) ($\times 12$)



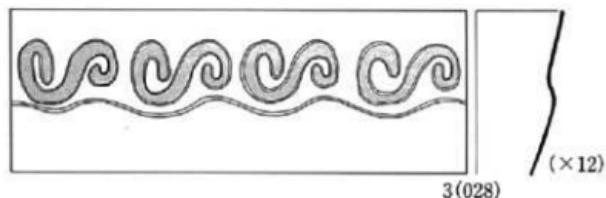
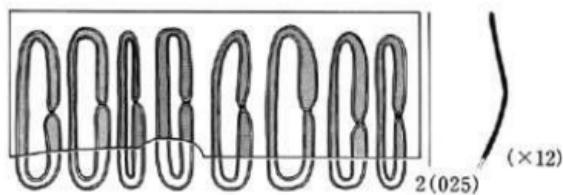
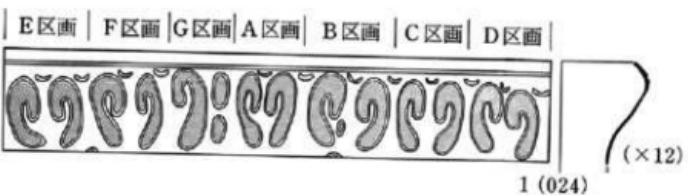
4 (018)

第 54 図 土器文様構成図(2)

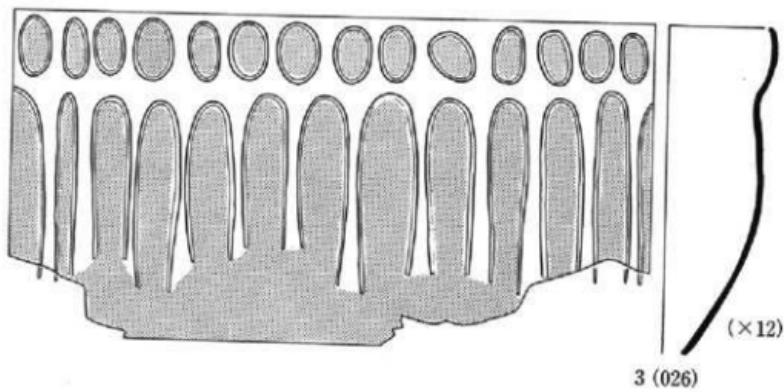
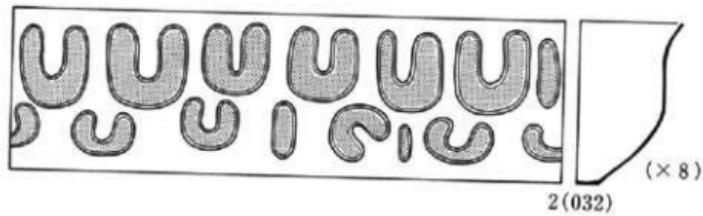
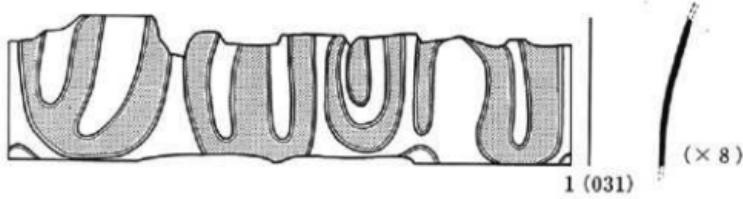


第 55 図 土器文様構成図(3)

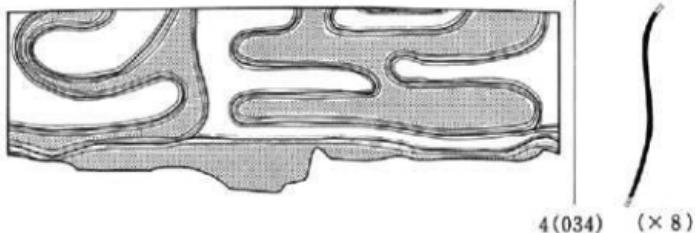
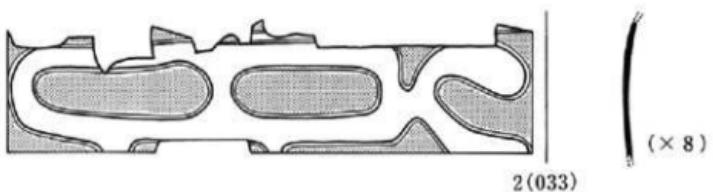
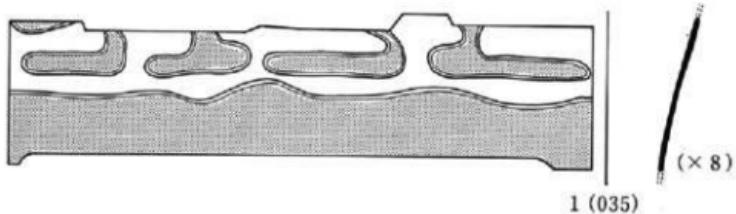
完形土器としては(5)1点にとどまる。またこの類内には、4d類の特徴である胴部下位を縄文のみで施文する欠損品が含まれて考慮する必要がある。この点も吟味して器形を推測すれば、次の四の器形が代表化される。①の器形が代表化される。①の器形としては底部が比較的小き気味の底径をもつもので、ゆるやかに胴部へ向かって立ち上がり、胴部から口縁部にかけてもゆるやかに内曲する。口縁部は存在しないので明確にできないが幾分外反もししくは、直立する大形の器形を呈す。地文はLRないしRL単節縄文を不規則に施文する(041・1)。②の器形は口縁部で若干外反するのが特徴で頸部下に最大径をもち、そのまま底部に直下して、底部でさらに外に幾分張り出す(034・5)。地文は1つの器形と同様で不規則なLR、RL単節地文を転回する。③器形は①の器形と同様に底部が小さき気味に保ち、細長い器形を有するもので、胴部もゆるやかに曲して口縁もかるく外反する程度と思われる。この中には(2・3・7・8)が含むものとみられる。地文は縦位の転回を有するものを基本としてLR単節縄文が施文する。最後の4の器形としては、胴部から底部にかけて球形を呈しながら曲下するもので、胴部最大径を胴部中央に置き、口縁部で外反する4a類的器形を呈するものとみられる。このグループには(042・1)が存在する。地文はLR単節斜状文が転回する。色調は暗黄灰褐色ならびに黄灰褐色を示すもの(041・1~3・6・8)暗茶褐色ないし明褐色を呈すもの(042・043・4・5・7)で胎土は、多量の石英砂を含むもの(041~043・1・3・5・6・8)小量の石英粒と微砂ないし砂粒を含むもの(2・4・7)があり、焼成は(041~043・1・6・8)が悪く、器文の文様が崩れて施文状況を把握するのが困難なものもある。一方(3~4・7)は比較的良好で、微細な粗地をもって成作されるのが判る。器形計測は、現高46.2cm、胴部最大径32.6cm、底部径7.8cm、を計る(041)が最も大きく、(042)は現口径24.5cm、現高13.6cm、底部径8.5cm、(043)は現口径30.2cm、現高18.5cm、底部径12cmをなす。(2)は現口径11cm、現高8cm、底部5.8cm、(3)は現口径23.2cm、現高15.4cm、胴部最大径20.5cmを計る。(4)は底面に2cm位の有孔があり、現口径を胴部最大径に有し30.8cm、現高33.9cm、底部径10cmを呈する。(5)は一部底径が欠損するもので、口径28.9cm、器高26.2cm、現底口径14.6cmを有し、(07)は現口径27.8cm、器高18.5cm、(8)は現口径を胴部最大径にもち28.4cm、現高23.1cm、現底口径12.4cmを計る。器壁の厚さは(4)を最小として、(2・5・8)が4.5~5mm内に(041~043・3・5・8)が5.2~6mm内の器厚を呈し、(7)が最大の厚さを有し、7.2mmを計る。輪積痕は最小値3.2cm、最大値5cm、平均値4cmを計る。器面内における調整痕は、口縁部付近を横位に、胴部を斜位に底部付近を縦に近い斜位方向がほとんどである。但し、内部が磨消するのも存在し、一様の観察には至っていない。



第56図 土器文様構成図(4)



第 57 図 土器文様構成図(5)



第 58 図 土器文様構成図(6)

(4) 石器の分類

熊ノ前遺跡は、第IV次にわたる発掘調査の結果、多量の石器および石片を得た。第I次・第III次調査時における石器・剝片・碎片の総点数は明確に示されていないが恐らく2千点前後と考えられる。

県教育委員会による第II次・第IV次調査の総点数は、約3千点であり、器種別にすると次のとおりである。石鎌 73点内完形 53点、石錐 59点内完形 35点、石匙 60点内完形 38点、削器 82点内完形 71点、搔器 45点内完形 40点、箇状石器 19点内完形 9点、石斧 19点内完形 2点、凹石 99点、磨石 27点、石皿 31点内完形 0点、石棒 7点内完形 2点、その他 10点であり、各石器ごとの分類は次のとおりである。

1 石 鎌 (第59図1~37 図版17)

石鎌は全部で71点出土しており、材質は頁岩が圧倒的に多く玉髓・黒曜石が若干見られる。大半が完形であり、その数は、73点中53点である。又、欠損するものについての内訳は次のとおりである。

先端部を欠損するもの5点、いづれかの脚部を欠損するもの9点、全体的に欠損するもの4点、先端及び脚を欠き、胸部のみのもの1点、茎部を欠損するもの1点である。本遺跡の編年的位置は、縄文時代中葉から後葉末であり、別期の遺物の混入は現在のところ考えられない。ある程度時間的に非常に近い位置に集中している。

完形石鎌51点の平均値は2.4cm×1.3cm×0.5cmで、重さは1.25gである。又、アスファルト状接着物の付着するものは73点中8点が見られる。(11・21・22)

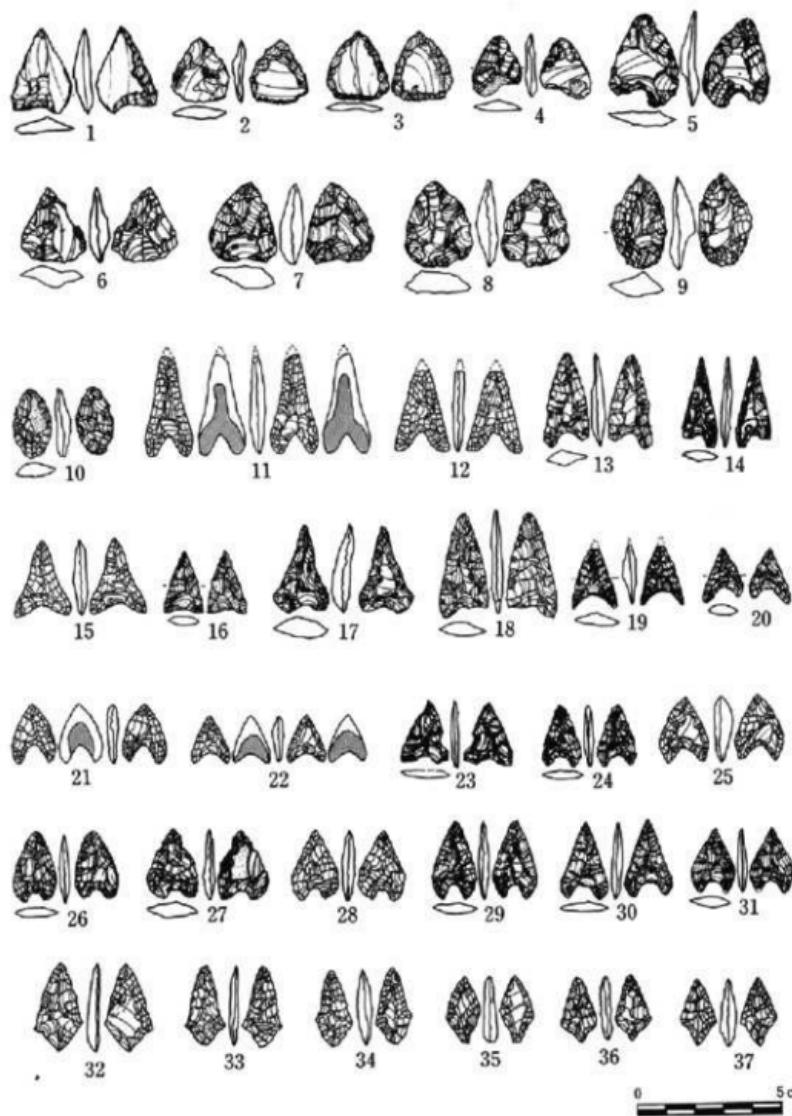
石鎌の製作技法から観察すると、縦長の剝片・横長の剝片を素材としており、それぞれ4cm×3cmの大きさのものと考えられる。51点中未完成のものも少ない。えぐり込みのあるものは、素材として横長の剝片を使用している。形態から分類すると4群9類になり、以下次のとおりである。

a群 石鎌未完成品 (第59図1~10 図版47)

a群は10点を数え、材質の内訳は、頁岩8点、玉髓2点である。大半は素材時の剝離面を残しており、打瘤は基部の左右どちらかにある。一見小形の搔器か削器に考えられるが刃部形成が不規則であり、むしろ石鎌の未完成品と考えられる。

b群 無茎石鎌

本遺跡出土石鎌中最も多く23点、全体の32%を占める。縄文時代においては最も普遍的な形態のものであり、熊ノ前遺跡においては、えぐりの深浅の程度によって3つに分けることができる。



第59図 石鏃実測図

b 1 類 (第 59 図 11~20 図版 47)

全体に二等辺三角形を呈し、先端から基部にかけての両縁が直線的で、えぐりが比較的浅いもの。

b 2 類 (第 60 図 1~14・29 図版 47)

正三角形を呈し、えぐりが身に対し比較的深く、脚の部分、いわゆる逆刺が明瞭なもの、全体に小型のものが多く、特に逆刺の部分が弯曲している。

b 3 類 (第 59 図 23~31 図版 47)

二等辺三角形を呈し、えぐりが身に対し比較的浅く、b 2 類と同様逆刺の部分が弯曲するもの。

特に b 2・b 3 類については、石鎚の製作技法上共通する 2 つの点が観察される。第一点は、逆刺の部分が弯曲すること、第二点は、えぐりの部分が左右どちらかに片寄ることである。これは、素材の段階においてすでに製作者が意図的に肉厚の打面の部分を基部の中心に置かないで左右どちらかの側縁に置くことである。よって、えぐりを作出す場合どうしても左右の厚さが違う関係で、えぐりの位置が中心よりやや片寄ってくる。これは製作者が不細工なのではなく、横長剣片利用の素材から生まれる必然的な形と考えられる。

本類は、大木 9~10 式期に盛行するもので、伴出する土器、住居跡などの関係から推考できる。

c 類 有茎石鎚 (第 59 図 32~37 図版 47)

無茎石鎚以外の石鎚、すなわち茎の有するものを c 群とした。

c 1 類 (第 59 図 32~34 図版 47)

身と茎の区別がはっきりしないもので 9 点ある。いづれも縦長の小剣片を使用し、打面を基部にしている。側縁は粗雑であり、茎部は舌状に張りだしているもの。全体に薄く、最厚部は茎部の付根にある。

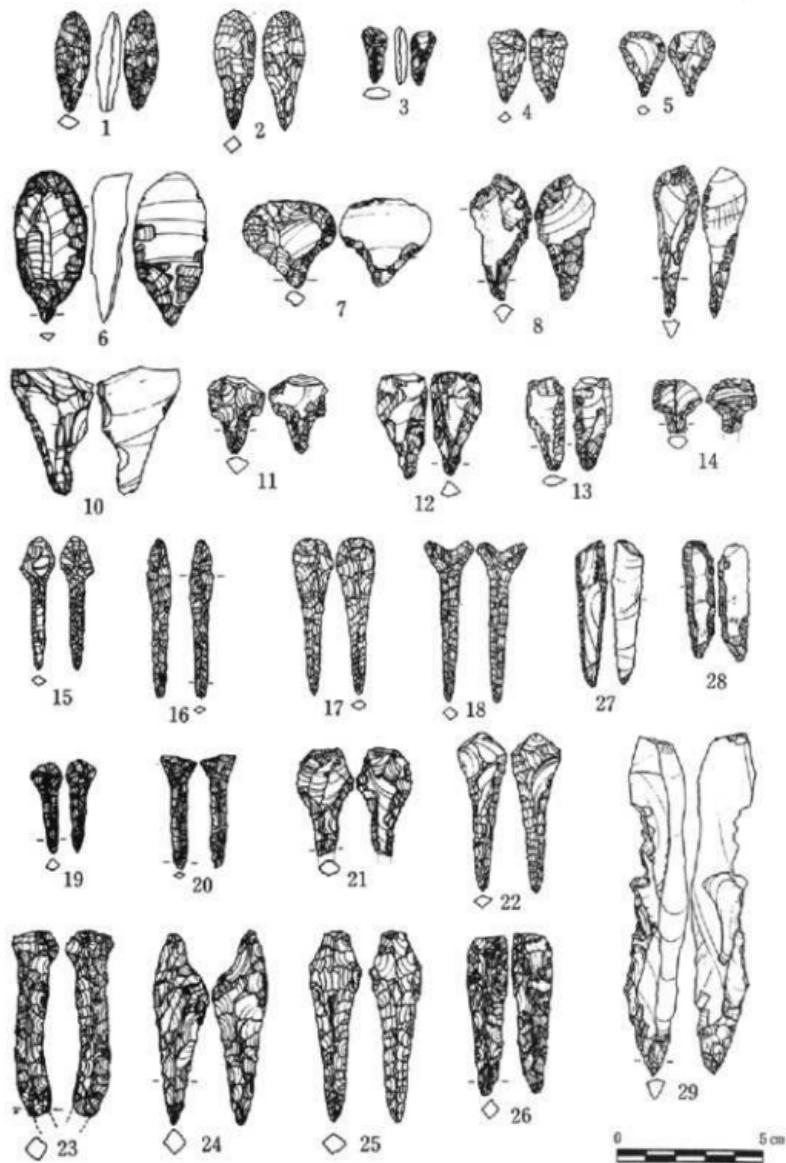
c 2 類

茎が比較的細く、最厚部が茎部の付根にある。4 点あり、最も数の少ない石鎚である。繩文時代後期・晩期に盛行する有茎石鎚の最も古い型のものと考えられる。

2 石 鎚 (第 60 図 1~29 図版 47)

孔を穿つのに用いる打製の石器である。従来この種の石器は、形態・機能の面から二大区分されている。1 つは、直接手に持ち穿孔するいわゆる drill・石器のつまみの部分に着柄をして穿孔する awl の 2 つがある。

本遺跡において、完形・欠損品を入れて総数 59 点出土した。その内訳は、drill が 26 点 awl は 30 点である。材質は頁岩は最も多く、玉髓は稀である。59 点の内完形は 34 点と全体の



第 60 図 石錐実測図

58%と多い。59点中2点は整理中に接合した。接合された錐は、awlで、長さ7.6cm、身部中央部より折れており、約9m離れた地点より出土している。(図版47)

a群 drill (第60図1~14・29 図版47)

いわゆる手錐のものをa群とし、中でも錐専用のものをa1類、兼用のものをa2類とした。

a1類 59点中22点を占め、材質は全て頁岩である。錐の部分は非常に短かく、反対につまみである握りは、打瘤の部分を利用しているために極めて大きい。錐身は太く、短いため欠損しているものは少ない。素材は、肉厚の打瘤を有する縦長の剥片が主に用いられている。

又、ひときわ大きな、スパールを利用したものもある。(第60図29 図版47)恐らく本類の機能としては、対象物が堅いものであり、先端の磨滅の状況から錐としては勿論であるが、彫刻刀的な機能をも兼ね備えたものと考えられる。

a2類 4点を数え、全て材質は頁岩製である。a1類のつまみの部分は粗雑なのにに対し、a2類は兼用のため、極めて形・姿といい優美である。摺器兼用2点、削器兼用2点であり、いづれも完形である。(第60図1・2・6・7・9・10 図版47)

b群 awl (第60図15~26 図版47)

錐の身が長く、断面が四角あるいは三角であり、27点出土。欠損しているものは、本類が一番多い。磨滅の部分は先端よりは、むしろ身の中間に多くみられ、回転によるものと考えられる。対象物は柔らかいものであろう。

b1類 18点を数える。つまみの部分が非常に小さく、石縫の逆刺に近似しているものと、良く調整されていない粗雑なもの2つがある。

身部は、断面四角又は三角であり、身の長さは平均4cm前後である。一見棒状を呈している。製作技法は、両側縁より押圧剝離によって他の2稜が作り出されている。特に身中間部の稜は磨滅し丸くなっている。(15~22)

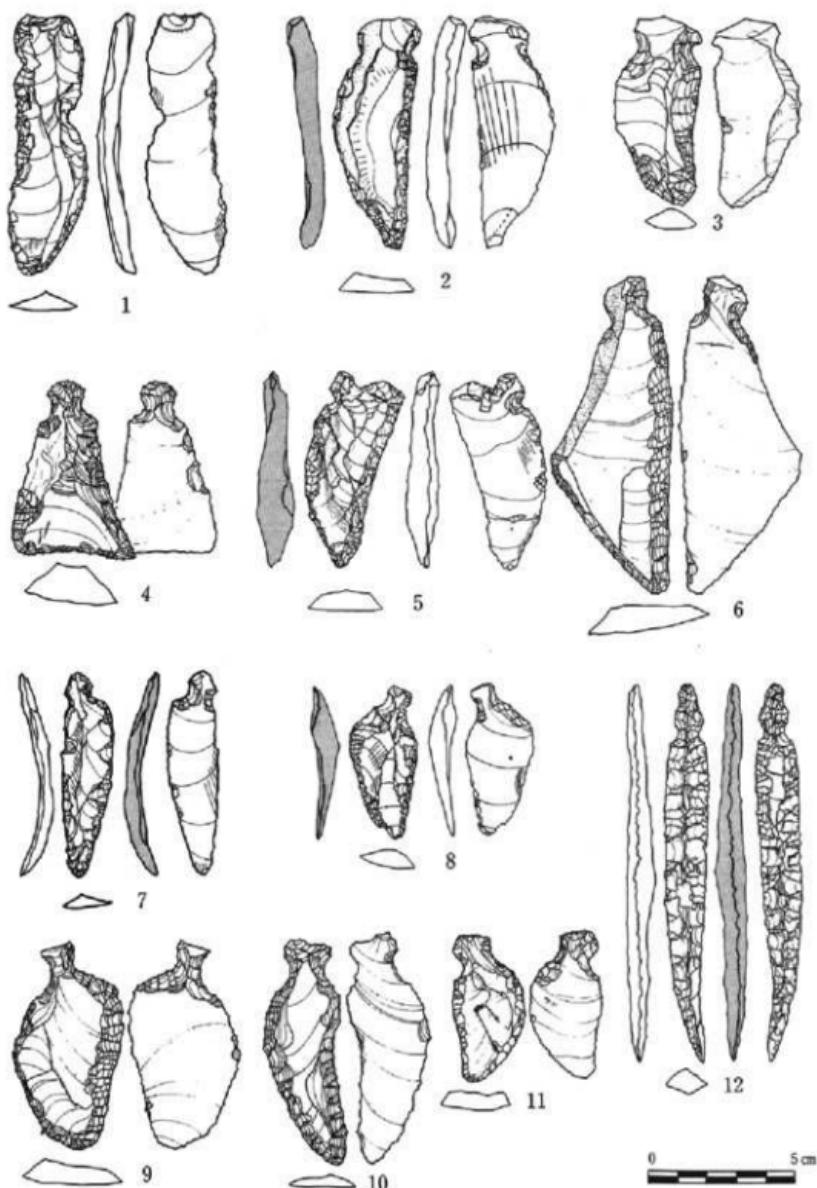
b2類 9点出土、一見石槍に見えるものである。

6cm前後の大きさで、材質は頁岩からなる。断面四角・三角形を呈し、先端および身部中間の稜が特に磨滅している。多くは肉厚の縦長の剥片を用い押圧による交互剝離をくりかえし、エッヂは鋸歯状になる。(24~26)

c群 縦長剥片を使用、頁岩製であり6点出土、特に先端部に磨滅の痕が認められる。機能的には、b群よりa群に近いものと考えられる。(27・28)

3 石匙 (第61・62図1~24 図版48)

本遺跡出土石器群の中で数量的に多く、代表する石器の1つである。いわゆる基部にえ



第61図 石匙実測図(1)

りぐりの施されたつまみを有する「石サジ」と呼ばれている一群の石器であり、總点数 60 点。材質は、頁岩が大半で玉髓が若干見られる。完形は 38 点、一部欠損するもの 22 点である。特に欠損品を観察すると、石匙のつまみ部より多少下部、あるいは刃部先端に破損しているものが見られ、中心より欠損しているものは極く稀である。次に完形品を技法別、形態別に区分すると以下 3 群 2 類である。

a 群 縱形石匙 (第 61・62 図 1~12・16~21 図版 48)

一般に、刃部がつまみに対し軸に平行する縦形石匙の仲間であるが、一部の刃部が斜行するものもこの仲間に入れた。本群の石匙は、製作技法から考えると主に縦長の剥片を用い打瘤をつまみの部分に置いているのを基本としているが一部先端をつまみ部に置いているものもある。(2・9)

器周縁に調整加工が施されているが、刃部は全周ではなく、先端部又は片側にあり、他はプランディングとなっている。(2・5・7・8・12・17・19) 又、a 群を刃部の位置から、側縁にあるもの a 1 類、先端にあるもの a 2 類と分類できる。

a 1 類 (2・3・6・12)

つまみのくびれの作出は、背面よりは主要剥離面に綿密に施され、刃部側縁にあるものでナイフ形のものである。刃部に対し峰にあたる部分は、素材の表皮（自然面）か剥離面をそのまま利用している。

第 61 図 12 の資料は、本類中最も典型的な石匙である。長さ 13.1 cm、巾 1.4 cm、厚さ 0.9 cm で重さは 18.9 g の頁岩製である。

a 2 類 (16~22)

刃部は先端にあり、搔器状を呈するものを a 2 類とした。a 1 類とほぼ同率の割合である。

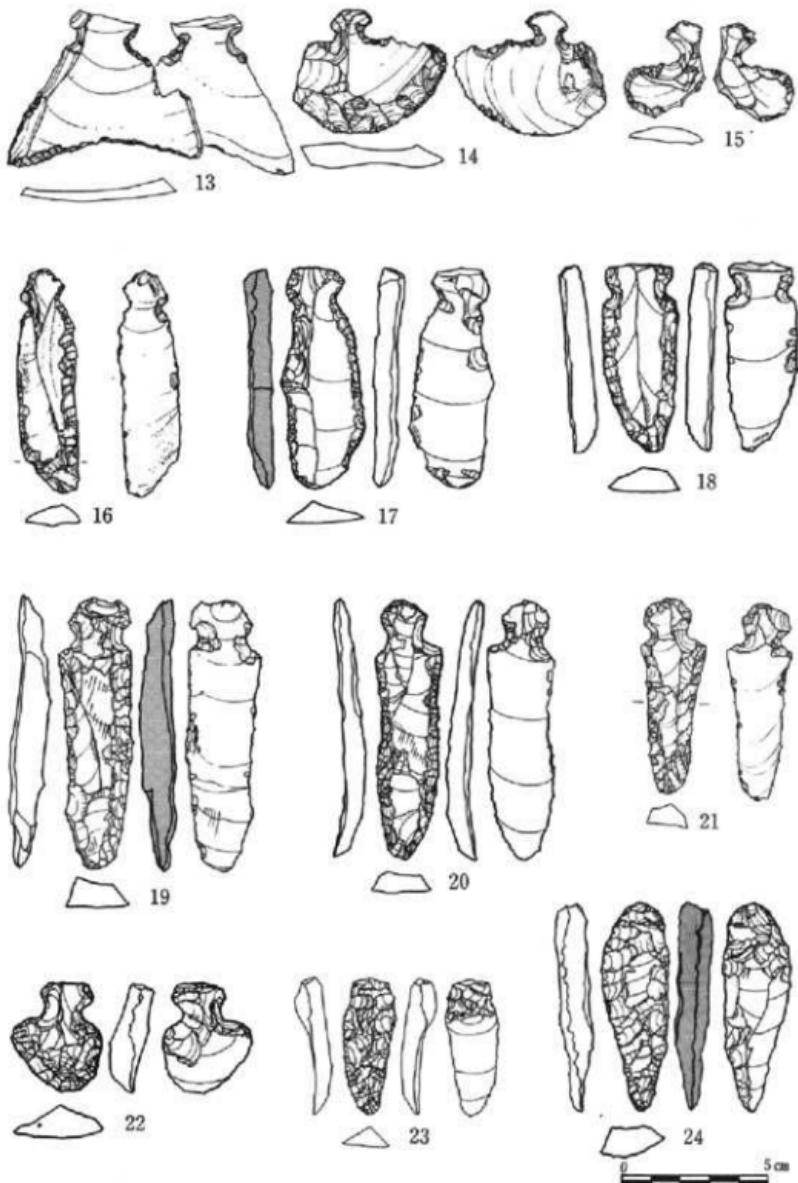
素材は、頁岩の縦長剥片を主に用いているが、中には (22) のような扇形のものも若干見られる。

b 群 橫形石匙 (第 62 図 13~15 図版 48)

刃部がつまみの軸に対して直交するもの。本類は 8 点あり、全体の 13% にすぎない。つまみ部えぐりの調整は a 群に比較して雑であり、その位置も一定でなく、素材として横長の剥片を利用している。頁岩製。

c 群 (第 62 図 23・24 図版 48)

最も数量的に少ない石匙の一群であり、2 点出土している。頁岩製で共に打瘤を基部であるつまみ部においてある。b 群よりは、a 群に近似しており、つまみ部のえぐりは明瞭でなく、むしろ退化している。しかし、主要剥離面・背面から丁寧な押圧剥離が施される。



第 62 図 石匙実測図(2)

4 削器 (第 63 図 1~17 図版 49)

削器は遺跡全域から出土している。熊ノ前遺跡中最も数量的に多く 82 点を数える。材質は頁岩が圧倒的に多く、他に玉髓が若干ある。素材は、原石から大割された主に横長の剝片である。形状並びに大きさはまちまちで一定の型は見られない。

刃部の位置は、剝片の全縁に不規則に作り出されたもの、一部押圧剝離によるものなどさまざまである。

以上の点から大局的に分類すれば、比較的小形のものでつまみ部を欠いた石匙状のものと、大型剝片を用い不定形の 2 群に分けられる。

a 群 (1~8)

刃部は片側にあり、他はプランティングされている (3・4) もの、又刃部に対して峰の部分が平坦な剝離面を残し、全然調整加工が施されていないものがある。いずれにしても素材は、ステップフレーキングによる剝片のため、ほとんどの主要剝離面先端は弯曲している。

b 群 (9~17)

a 群よりやや大きめの剝片を用い、刃部の作出は粗雑である。8 cm × 5 cm 前後のものが多く、素材は特に選択されたとは考えられなく、形にバラツキが見られる。

5 挖器 (第 64 図 1~17 図版 50)

end scraper に相当する石器である。総点数 45 点、全て頁岩製からなる。出土した挖器のほとんどが完形である。

素材は主に、ステップフレーキングにより作り出された横長剝片を利用した削器に対し、フリーフレーキングによる縦長剝片を利用している。大きさは 3 cm 前後、6 cm 前後、9 cm 前後の 3 類になる。いずれも打面を基部に残し先端以外はプランティングが施されている。刃部は、45 度前後にフルーティングされ、搔くのに都合よく、主要剝離面からこするとひっかかりと感触がある。

a 群 (1~3)

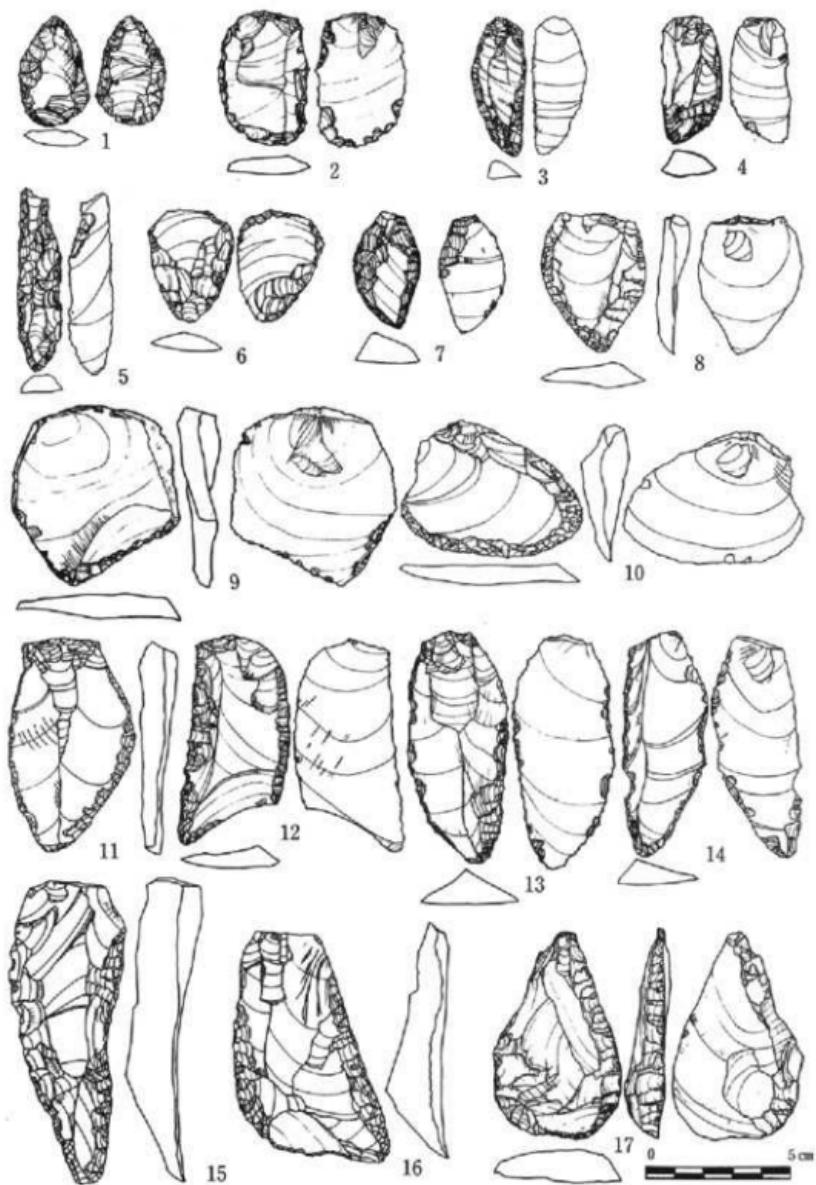
いわゆる拇指状搔器の仲間であり 7 点ある。頁岩製で平均 3 cm 前後、刃部が極端に調整されている。刃角 90 度に近いものもある。

b 群 (4~8・12~14)

6 cm 前後で頁岩製、形状は基部・先端が丸くなった舟底状を呈している。背面に刃部、プランティングが施され、主要剝離面は、調整加工がなく平坦である。

c 群

9 cm 前後の大きさのも、頁岩製である。a 群・b 群の主要剝離面が平坦なのに対して、



第63図 削器実測図

本群は長身のためか、全体に弯曲を呈している。基部は打瘤に置き、先端部分 180 度にかけてフルーティングが施されている。

5 篓状石器 (第 65 図 1~10 図版 51)

通称「石ベラ」と呼ばれているものを一括して籠状石器として扱った。石ベラ、籠状石器とは、機能的名称からの器名ではなく、形状からの名称・呼称であり、大きさ、製作技法、刃部の位置関係から大きく次の 4 群に分類した。

出土点数は完形・欠損品を含めて 19 点、内完形は 9 点、一部欠損は 10 点である。石鎌・石錐・石匙・削器・搔器などと比較して数は非常に少なく、又完形、欠損品の割合は半々である。

a 群 (1・2)

主要剥離面の部分調整、刃部正面が「アヒルの口バシ」状を呈するもの (1) で頁岩製である。刃部は先端にあり、両側縁はプランティング調整が施されている。(2) は玉髓製であり (1) と同じ形態を示す。一見小形ではあるが丸ノミ形の石器である。

b 群 (3~5)

断面が凸レンズ状を呈し、主要剥離面、背面の両面から交互に剥離調整が施されている一群を b 群とした。長さ、先端部の整形及び重量にバラツキがあり、それぞれ異なった機能を有するものと考えられる。(4・5) は全く同形のものであり、完形である。刃部は身の片端にありバラレルな押圧剥離が施され、一見始刃状を呈している。

c 群 (6~8)

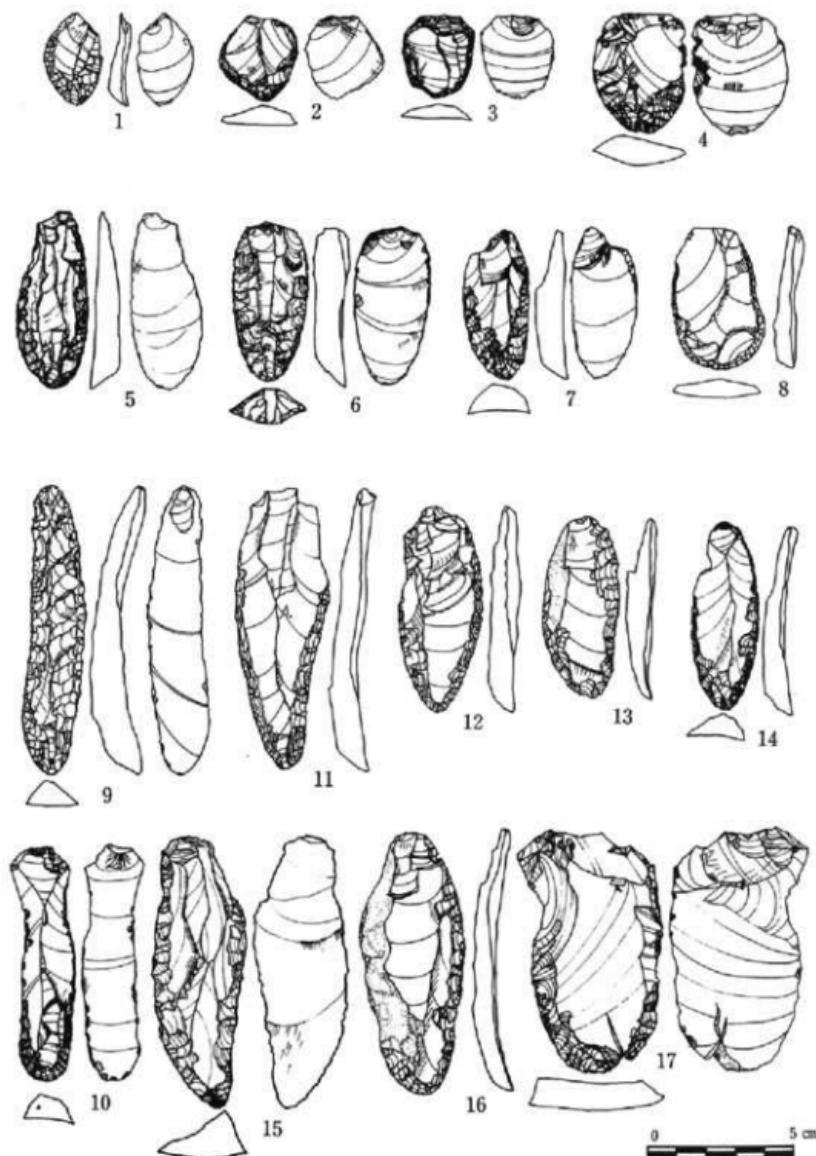
b 群と同様、断面が凸レンズ状を呈し、両端が比較的尖頭状になっている一群を c 群と類別した。製作技法も b 群と比較して身の中間部は雑である。しかし (8) のように先端が一部欠損しているが、全体が柳葉形を成していることから、石槍的な機能を備えるものと考えられる。

d 群 (9・10)

いわゆる打製石斧を小型にしたような一群である。全体的に剥離調整は粗雑であるが、先端部から基部にかけてのエッヂは極めて堅牢にできている。

以上、籠状石器について各々 4 群に分けて記述してきたが、刃部、形態、製作技法などから考えると、a・b・d の各群は、打製石斧的な機能、c 群は石槍的な機能を有するものと推考される。

先に記述した如く、欠損の多いことは、比較的大形の石器であることから、相当力量の大きい、又対象物の大形のものと想定される。本報告書において、確たる打製石斧・石槍の典型的なものがないところから、広義に籠状石器群の中で扱った。



第64図 挿器実測図

6 磨製石斧 (第 66 図 1~13 図版 52)

熊ノ前遺跡の住居跡検出数から考えると、磨製石斧の出土数は 19 点と極めて少ない。完形・欠損の内訳は 2 対 17 と完形は少なく、他の全ては、刃部のみが 5 点、基部 9 点、刃部基部の一部欠損は 3 点である。

材質は、蛇文岩の 7 点と一番多く、次いで緑泥片岩、閃綠岩、砂岩が用いられている。破損原因は、破損口から推定すると、製作段階時においての破損は考えられなく、むしろ使用時に破損したものと考えられる。

又製作技法の面から考えると次の二通りが確認される。

a 群 (1~7・12・13)

あらかじめ石斧の大体の形を打ち欠きによってトリミングし、全面を磨きあげた磨製石斧である。

b 群 (8~11)

磨きあげられた板状の素材の表裏から石ノコと呼ばれる擦切具によって放射状に擦り切り、刃部及び背面を磨きあげて作られた擦切磨製石斧の一群である。

いずれも定角式の磨製石斧であり、11 cm × 3 cm 前後の形が多い。中に 3 点小型石斧がある。又刃部一部欠損のもの、両利用として「ハンマー」として使われたものもある。

7 凹石 (第 67 図 1~12 図版 53)

凹石は本遺跡において、遺跡全城から出土している。その数は 99 点を数える。特に、発掘区中央部、南側に多く見られ、その大半は覆土中である。他に炉の石組から 1 点、住居跡床面から 2 点出土している。

99 点の平均重量は、637 g。最も重いものは 1123 g、軽いものは 219.5 g である。おおむね片手で持てる位の大きさの河原石を用いている。形状は、いくぶん偏平な円錐や梢円である。

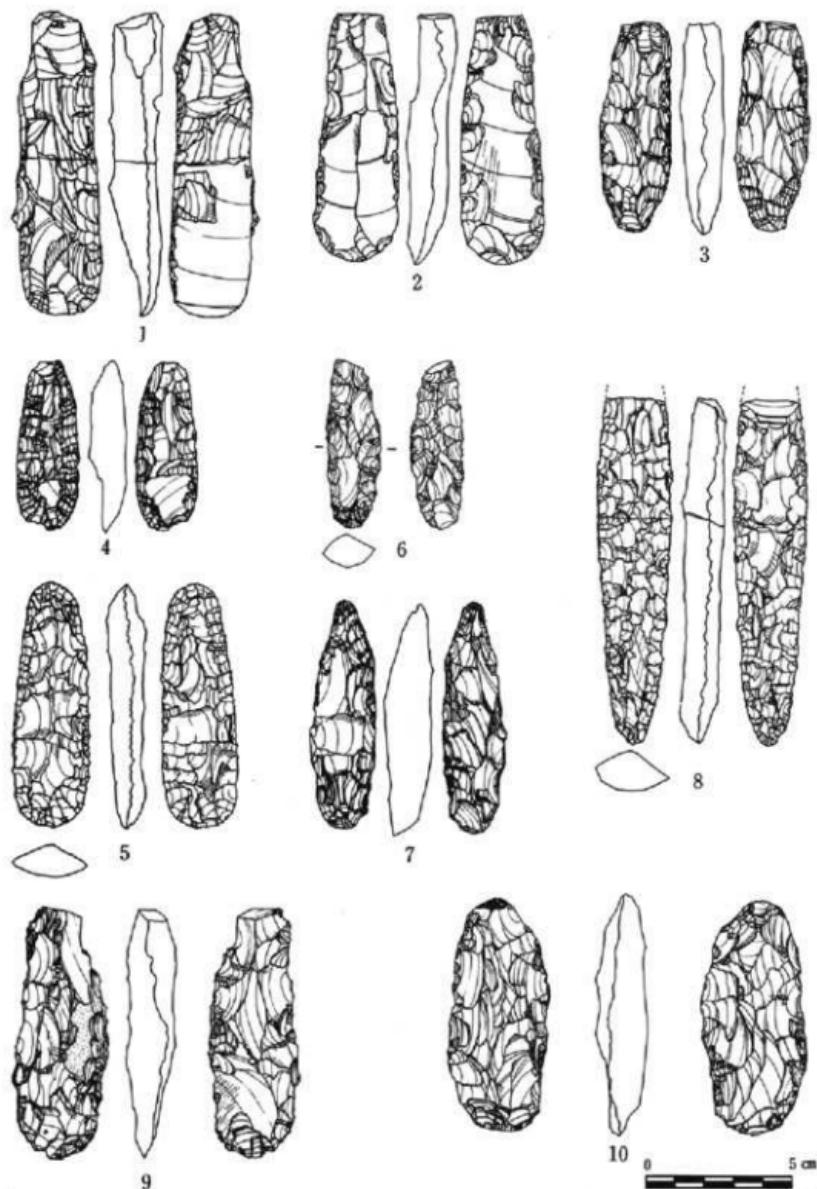
片面もしくは、両面に凹状に擦ったものや、敲きによって凹んだ跡が 1 対 1 又は 1 対 2、2 対 1、2 対 2 の如く有するものをそれぞれ 4 群 8 類に分類した。

材質は、遺跡の近くを流れる馬見ヶ崎川上流に産する安山岩・花崗岩が圧倒的に多く泥岩・砂岩・凝灰岩もみられる。

I 群 (1~4)

比較的円い偏平な錐の表裏に 1 対 1、又は 1 対 0 の割合で凹みを有するものを I 群とした。I 群は 99 点中 40 点出土、全体の 40.4% にあたる。本群について特記することは、複式炉の石組の中から 1 点出土したことである。

103 号住居跡の複式炉 (E L 02) 前庭部そでの部分から一点出土している。これは炉の



第65図 篦状石器実測図

石組の一つとして利用されており、凹みは1対1である。他に石皿の破片も利用されあらゆる手頃の石を使った炉である。尚、区分は、明瞭な凹面を表と考えて分類した。

I 1類 (3・4)

本類は、丸い偏平な自然礫の両面に1対1の凹みのあるものI 1類とした。22点出土しており、全体の22.2%を占める。これは後述するII 2類に次いで量的に多い凹石である。

I 2類 (1・2)

I 1類とほぼ同形の礫を利用した1:0の凹みを有する仲間である。20点ありI 1類と同数である。凹みは比較的きれいな逆円錐状であり、その直径は2cm前後が多い。他面は平坦であり、研磨されていることからいわゆる磨石としての機能をも兼備えたものであると考えられ、20点確認されている。

II群 (5~7)

表面に凹みを2ヶ有し、裏面に2~0凹みを施したものをII群とし、2対2をII 1類、2対1をII 2類、2対0をII 3類として扱った。II 1~II 3類の総数は41点で、全体の41.4%にあたる。I群と同じく、丸い偏平な自然礫を利用している。熊ノ前遺跡にあっては最も普遍的な凹石である。

材質は、安山岩・花崗岩・花崗閃綠岩・凝灰岩を用いている。

II 1類 (6・7)

両面に2対2の凹みを有するものである。II群の中で最も多く24点を数える。凹みは表裏シンメトリーであり、2つの凹みは近い位置にある。

II 2類 (5)

表裏2対1の凹みを有するものである。15点あり、若干ではあるが円・椭円以外の不定形の礫もある。

II 3類

片面のみに凹みが2ヶもあるもの。2点出土。I 2類と同じく凹みの有しない面は、磨かれているところから、磨石としての機能を具備していると考えられる。

III群 (8~10)

表面に3ヶの凹みがあり、裏面に3~1の凹みがあるもの。9点あり、全体の9%にあたる。形は長椭円のものが多い。凹み部は一定ではなく、逆円錐形のもの他、ただ打欠きによる刻目のような凹みが並ぶもの。

III 1類 (10)

両面に3対3の凹みを有するもの。2点あり、凹み部は1つ1つ分離するのではなく、全体的に3ヶ直線的に並び、上面は連続して凹む。



第66図 磨製石斧実測図

III 2類 (9)

表面3に対して裏面2の凹みがあるもの。5点出土しており、形状はIII 1類に近似する。

III 3類 (8)

表面3に対して裏面1の凹みのもの。2点あり、III 1類と同様数の少ない類のものである。

IV群 (11・12)

表裏面に不規則な且つ定でない凹みを有するものをIV群として扱った。7点あり全体の約7%を占める。凹み部は4以上あり、その配列も不規則である。

以上凹石について、4群8類に分けてそれぞれ述べてきたが、凹み部分の形状は逆円錐と打欠きによる刻目の二通りがある。恐らく凹みの違いは、機能の違いであると考えられる。又凹みは1対1、2対2のものが多く、全体の約46.5%を占める。熊ノ前遺跡の主体となる凹石である。

8 磨石 (第68図5~8 図版53)

凹石とほぼ同じような形状を呈し、表裏面に凹みのみられない、磨研のあるものを磨石として扱った。

出土総点数は26点、内完形は23点である。大きさ、重さは凹石と同形同量に等しく、素材は安山岩、花崗岩の河川石が大半である。

周縁部を敲打によって加工したもの、周縁部は自然面を残し上下面が平らに研磨されているものの二大別される。前者をI群、後者をII群とした。

I群 (5・6)

比較的小型のもので角丸又は梢円状を呈し、上下面是平坦である。厚さは、II群より薄く、軽い。表面はザラザラしている。5点出土。安山岩製が多い。

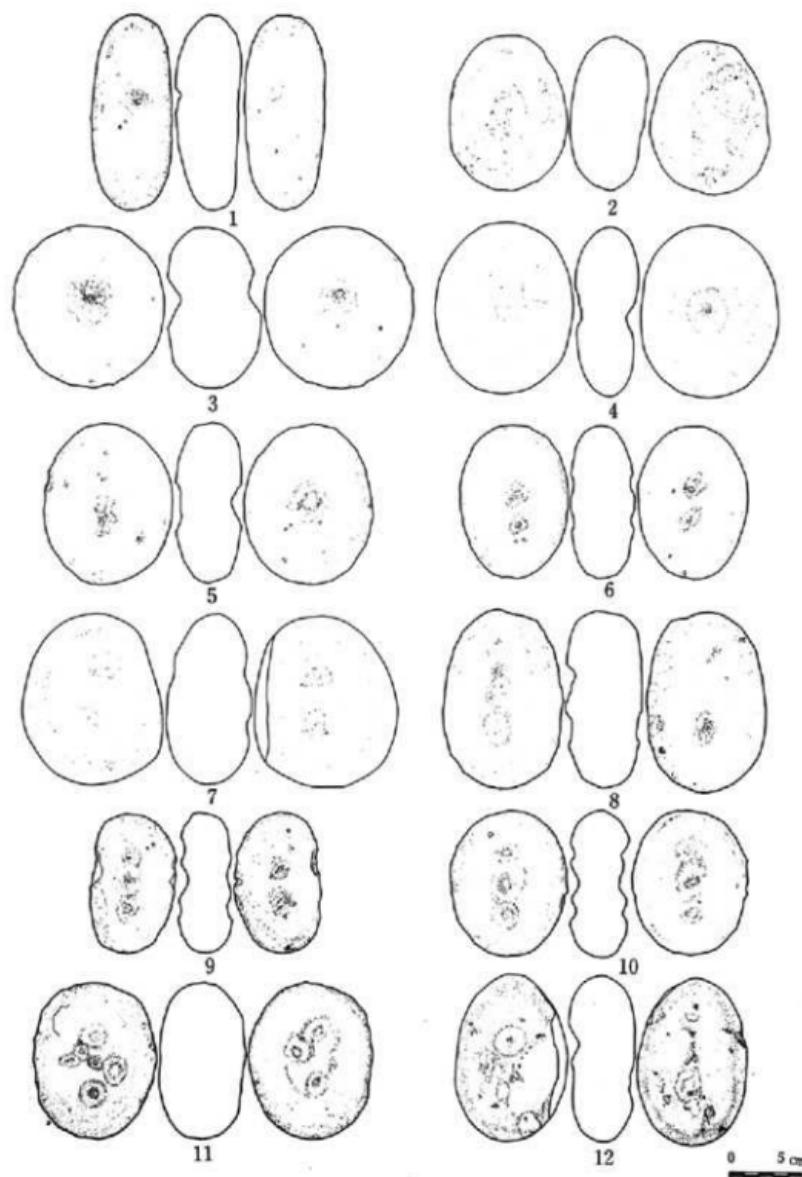
II群 (7・8)

手頃な円又は梢円状の自然石を用い、主に片面に研磨痕がみられる仲間、研磨部はI群と異なり光沢がある。恐らく、I群とは若干機能的に対象が違う用途を示すものと考えられる。

9 石皿 (第68図11~13 図版54)

凹石・磨石の出土数に対して、石皿の出土数は少ない。出土品の全ては破損品である。安山岩・花崗岩・凝灰岩を素材としている。破損品のため、形状は明確でないが、縁どりのあるもの、底に脚を有するものなどから考えると、自然石の平坦面を利用したものの他敲打によって調整されている角丸方形か長方形と推考される。

特に103号住居跡内の複式炉石組の材料として、6分割された石皿の破片が組込まれて



第67図 凹石実測図

いる。(第14図1)割れ方から考えると、意図的に切断し、石組の各所に利用されたものであろう。他に凹石も1点組込まれている。

10 石 棒 (第69図1~6 図版54-1~3)

7点出土しており、内完形品は2点である。破損は胴部以下欠損するもの4点、頭部を欠損するもの1点である。全て単頭石棒の類と考えられる。

(第69図4)は、本遺跡出土石棒中最も大きなもので、長さ約45cm、胴部最巾部11.5cmである。凝灰岩製で重量は9kgある。

頭頂部は若干凹み、頭部は一部側縁を敲打によって括れ部を作り出し、頭部と体部を区別している。

頭頂部に凹みの見られるのは、他に(1・5・6)がある。又頭部側縁に凹みが見られるもの(2・3)がある。

(第69図6)は、頭部と頭頂部に彫刻が見られる。特に頭頂部中心には、母指状のわずかな凹みを有する。

(第69図4・5)の石棒は、125号住居跡内床面の西側中央部から出土している。他に、すぐ近くから長さ75cmの五角形の自然石が共伴している。出土状況から考えるに、ピットのあることから、当時は立っていたものが自然に倒壊したものであろう。極めて興味のある出土状態を示している。住居跡の時期は、大木10式期である。(第12図)

11 線 刻 碑 (第68図1~3 図版52)

いわゆる疎に線刻が施されているものを、線刻疎とした。出土点数は3点あり、内完形は1点である。凝灰岩・泥岩からなる。

(1)は、6.6cm×2.2cmで厚さ3.0cmと小型の偏平な棒状疎の両面に線刻されている。刻目は長軸に対して、縱に走向している。線は、全て直線であり、曲線は見られない。

線刻の長さは、3cm前後でそれぞれ10本前後あり、ところどころ交差している。

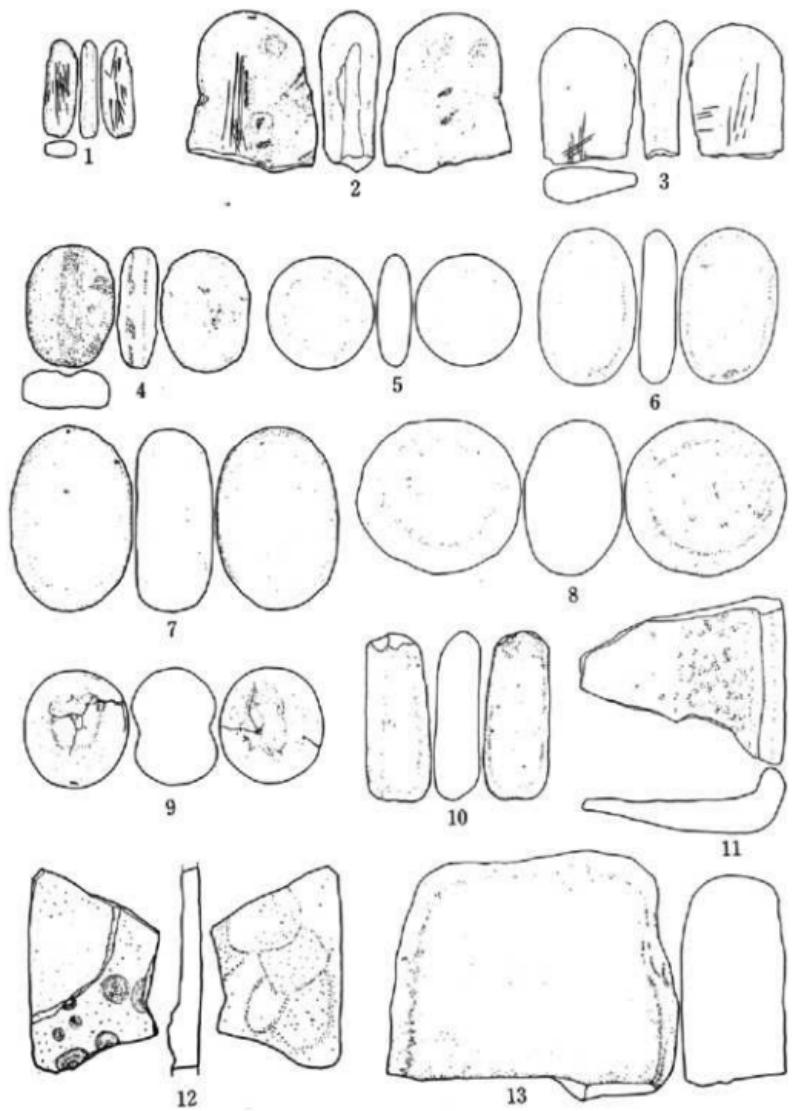
(2)は、凹石の片面凹部の側縁に線刻が見られる。(1)と同様縦に線刻され、直線である。欠損しているので明確ではないが、線刻の長さは10cm前後で5本を数える。他面は風化しているので不明である。

(3)は、長楕円状の磨石の両面に線刻が見られる。欠損しているため、全貌は解せないが前述の(1)・(2)とは趣を異にするものと考えられる。

線刻の走向は、縦横であり、直線の他強弱の曲線も若干見られる。

12 磨 石 (第68図4 図版52・54-4)

砥石と考えられるものは、2点あり、内1点は表探によるものである。他の1点は、II次調査時の出土品である。



第68図 線刻器・砥石・磨石・石皿実測図

(4)は、磨製石斧研磨用の砥石と考えられるものであり、完形である。大きさは31cm×8cmで厚さ5.3cmの長楕円形を呈する。

表裏面中央部は弯曲しており、太い溝状の磨痕が見られる。側面は、粗い打欠き調整があり、一部平坦な磨痕がある。材質は花崗岩である。

(2)は、片手で握れる位の8.3cm×6cmで厚さ2.2cmの大きさである。形状は、楕円形を呈し、片面に一条の鉛筆の太さの溝が縦に通っている。溝の断面は、半円形で深さは0.5mmである。側面は、打欠きによる調整がなされている。材質は軽石である。

13 異形石器 (図版52)

用途不明であり、他の石器分類の範疇に入らない打製石器を異形石器として扱った。1点のみである。長さ4cmの三日月状を呈し、断面は菱形である。出土地点は、22号炉跡(E L 22)の脇である。頁岩製。

14 垂玉 (図版52)

不定形で偏平な自然石の両面を研磨し、孔をうがつたものである。1点出土している。孔は、両側から石錐によって穿孔されているが、中心部で僅かにずれて貫通している。その他に、一孔あるが、途中まで未孔になっている。

全体の形状は、前述したように、全く自然の疎で周縁の加工及び整形は、施されていない。研磨されている割りには、光沢はなく、青灰色を呈している。一部破損しており、22号炉跡の側から出土している。

15 楕円状石製品 (図版52)

小型の自然疎の偏平部を研磨し、且つ側縁部を打欠き研磨によって平坦面を作出している。河砂利を利用したもの、凝灰岩の全面を打欠き研磨したもの2点出土している。

前者は、4.3cm×4.9cmで厚さ1.0cmあり、形状は、楕円よりむしろ卵形に近似する。表裏面、側面に、線刻や穿孔、絵画の痕跡は全く認められない。ただ表裏面には微細な研磨時の跡が長軸に対して、横位に見られる。完形。

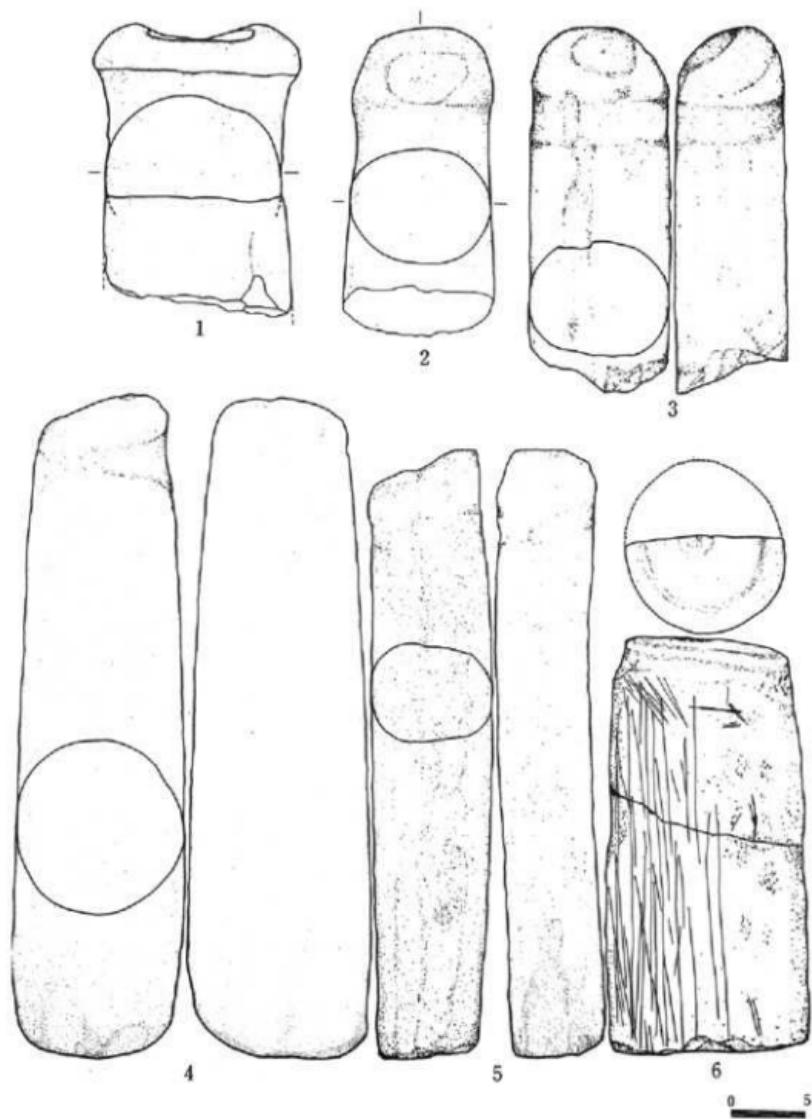
側面は、肉厚の部分に、ところどころ平坦部を作出している。全体的に光沢があり、手づれによるものと考えられる。

出土地点は、125号住居跡(大木10式期)複式炉(E L 11)の燃焼部下底面より出土している。他に伴出遺物として、石匙・磨石がある。恐らく同時期のものであろう。

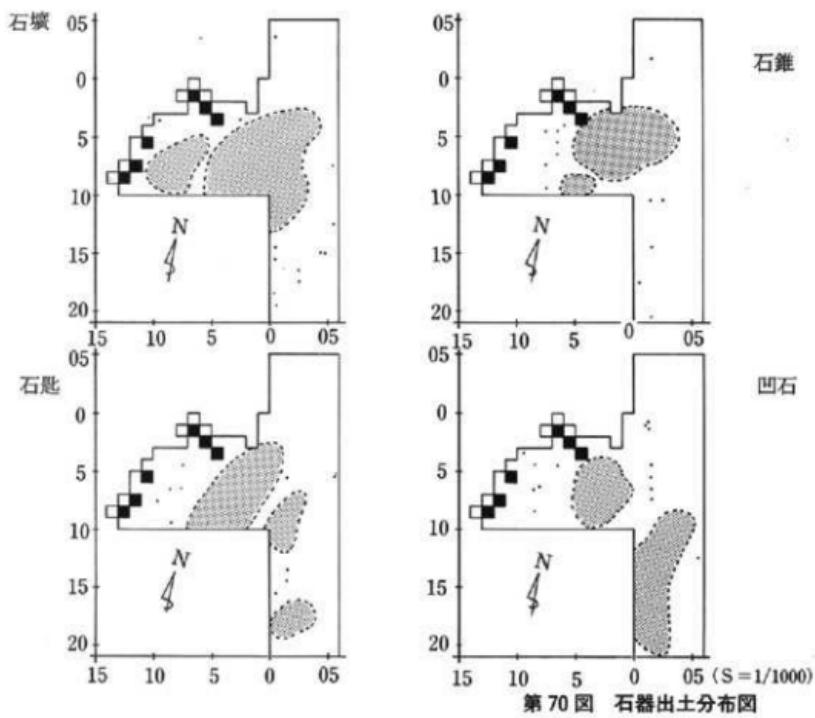
後者は、前者より一回り大きく、側面は、打欠きの後研磨されている。表裏面ともに磨痕のみであり、殆ど欠損している。形状は、長楕円であり、石ケンの形に近似する。

出土地点は、04-6グリット、22号炉跡の側で、垂玉出土地点と同地区である。

16 その他 文久永宝一枚が06-14グリット攪乱層より出土している。



第69図 石棒実測図



第70図 石器出土分布図

1 石錐計測一覧表

(記号 F-覆土 Y-床面)

No	地区名	分類	遺存状態	層位	材質	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	挿図番号
1	3-8	a	完形	II _b	頁岩	2.9	2.3	0.6	4.0	59-1
2	ST-101	a	完形	F ₁	玉髓	2.4	1.9	0.7	2.5	59-3
3	3-8	a	完形	II _b	頁岩	2.1	1.9	0.3	1.2	59-2
4	ST-103	a	完形	F ₁	頁岩	2.0	1.5	0.2	0.6	
5	9-7	a	完形	II _b	玉髓	2.4	1.2	0.6	2.0	
6	4-6	a	完形	II _b	頁岩	2.5	2.2	1.7	2.5	59-6
7	6-6	b ₁	完形	II _b	頁岩	3.6	1.7	0.4	1.9	59-18
8	9-7	b ₁	完形	II _b	頁岩	2.5	1.3	0.3	0.9	

No	地区名	分類	遺存状態	層位	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	挿図番号
9	4-8	b ₁	完形	II _b	頁岩	3.0	1.8	0.6	2.2	59-17
10	2-6	b ₁	完形	II _b	頁岩	3.2	1.5	0.5	1.8	59-13
11	05-15	b ₁	完形	I	頁岩	2.5	1.9	0.3	1.0	59-15
12	01-4	b ₁	完形	II _b	頁岩	2.7	2.0	0.2	1.0	59-12
13	ST-102	b ₁	完形	F	頁岩	2.1	1.9	0.3	0.6	59-16
14	ST-124	b ₁	完形	F	頁岩	2.0	1.1	0.4	0.8	
15	05-15	b ₁	完形	I	頁岩	1.8	1.0	0.2	0.3	
16	8-10	b ₁	完形	II _b	頁岩	2.1	1.5	0.3	0.9	
17	X-0	b ₁	完形		頁岩	2.3	1.7	0.6	1.5	
18	06-8	b ₁	完形	II _b	頁岩	2.7	1.7	0.5	1.7	
19	2-9	b ₁	完形	I	頁岩	2.2	1.1	0.3	0.7	59-23
20	ST-103	b ₁	完形		頁岩	1.6	1.3	0.3	0.4	
21	9-10	b ₁	完形	II _b	頁岩	2.0	1.5	0.4	0.9	59-19
22	6-10	b ₂	完形	II _b	頁岩	2.9	2.0	0.5	2.0	59-1
23	2-6	b ₂	完形	II _b	頁岩	2.7	2.3	0.7	4.0	59-7
24	4-10	b ₂	完形	II _b	頁岩	3.2	2.3	0.5	2.8	59-5
25	ST-112	b ₂	完形	F	頁岩	2.4	1.7	0.5	1.5	59-27
26	6-10	b ₂	完形	I	頁岩	1.7	1.7	0.3	0.9	
27	9-7	b ₂	完形	II _b	頁岩	2.1	1.7	0.4	1.1	59-4
28	ST-210	b ₂	完形	F	黒曜岩	2.4	1.6	0.3	0.8	59-28
29	ST-131	b ₂	完形	F	頁岩	2.6	1.5	0.3	0.7	
30	2-9	b ₂	完形	I	玉髓	2.6	1.6	0.3	0.9	59-30
31	ST-128	b ₂	完形	F	玉髓	1.7	0.9	0.2	0.3	
32	4-8	b ₂	完形	II _b	頁岩	2.7	1.4	0.3	1.0	59-29
33	9-7	b ₂	完形	II _b	玉髓	2.4	1.4	0.3	1.1	59-26
34	ST-121	b ₂	完形	F	頁岩	2.2	1.7	0.5	1.4	59-25
35	5-8	b ₂	完形	II _b	頁岩	2.1	1.4	0.3	0.8	59-31
36	X-0	b ₂	完形		頁岩	2.0	1.4	0.3	0.6	59-21
37	7-7	b ₂	完形	II _b	頁岩	1.7	1.2	0.3	0.5	
38	ST-122	b ₂	完形	F	頁岩	1.9	1.4	0.2	0.5	59-22
39	ST-128	c ₁	完形	F	頁岩	2.7	1.5	0.5	2.0	
40	ST-122	c ₁	完形	F	頁岩	2.5	1.1	0.3	0.8	

No	地区名	分類	遺存状態	層位	材質	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	押図番号
41	02-5	c ₁	完形	II _b	頁岩	2.2	0.8	0.4	0.7	
42	01-6	c ₁	完形	II _b	頁岩	2.9	1.5	0.3	1.2	59-32
43	ST-121	c ₁	完形	F	頁岩	2.5	1.3	0.5	1.1	
44	9-10	c ₁	完形	II _b	頁岩	2.6	1.2	0.3	0.9	
45	ST-121	c ₁	完形	F	頁岩	2.6	0.9	0.2	0.5	59-33
46	ST-121	c ₁	完形	F	頁岩	2.5	1.2	0.3	0.9	59-34
47	ST-121	c ₂	完形	F	頁岩	2.1	1.2	0.3	0.7	59-36
48	01-4	c ₂	完形	II _b	頁岩	2.2	1.2	0.5	1.8	59-37
49	SK-13	c ₂	完形	F	頁岩	2.2	1.1	0.4	0.9	59-35
50	03-4	c ₂	完形	II _b	頁岩	2.5	1.1	0.4	0.8	
51	ST-106	a	完形	F	頁岩	1.9	1.8	0.5	1.1	
52	4-6	c ₁	完形	II _b	頁岩	3.2	1.9	0.7	3.8	59-9
53	X-0	c ₁	完形		頁岩	2.3	1.3	0.5	1.4	59-10

(X-O:表面採集)

2 凹石計測一覧表

(記号 F-覆土 Y-床面)

No	地区名	分類	遺存状態	層位	材質	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	押図番号
1	ST-121	I-2	完形	F	安山岩	13.3	5.6	4.4	436.6	67-1
2	4-10	I-2	完形	II _b	安山岩	11.5	9.3	5.1	646.9	67-2
3	04-10	I-1	完形	II _b	安山岩	11.1	10.4	6.3	789.8	67-3
4	EL-02	I-1	完形	石組	安山岩	11.8	9.3	5.3	758.7	67-4
5	04-10	II-2	完形	II _b	安山岩	11.0	8.9	4.5	488.6	67-5
6	ST-106	II-1	完形	F	安山岩	10.6	7.5	4.3	478.9	67-6
7	ST-103	II-1	一部欠損	Y	安山岩	11.4	10.0	6.1	825.5	67-7
8	01-02-1-2	III-3	完形	II _b	安山岩	12.5	8.1	5.1	523.7	67-8
9	ST-212	III-2	完形	F	安山岩	9.6	5.9	3.6	219.5	67-9
10	X-0	III-1	完形		安山岩	9.9	7.9	4.3	414.0	67-10
11	ST-124	IV	完形	F	安山岩	10.7	8.5	5.7	674.9	67-11
12	X-0	IV	一部欠損		花崗岩	11.4	7.4	4.3	468.2	67-12
13	01-02-1-2	I-1	完形	II _b	安山岩	9.4	9.2	4.9	517.3	
14	9-7	I-1	完形	II _b	安山岩	13.7	11.7	5.9	1039.7	
15	4-7	I-1	完形	II _b	安山岩	10.7	9.3	6.1	670.0	

No	地区名	分類	遺存状態	層位	材質	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	插図番号
16	7-5	I-1	完形	II _b	安山岩	10.3	9.9	5.4	670.4	
17	ST-102	I-1	完形	F	安山岩	12.0	10.9	7.5	1123.3	
18	ST-125	I-1	完形	F	安山岩	10.3	7.7	4.1	562.9	
19	X-0	I-1	完形		花崗岩	11.0	9.8	5.5	813.6	
20	ST-129	I-1	完形	F	花崗岩	9.3	8.1	4.8	506.4	
21	01-02-1・2	I-1	一部欠損	II _b	花崗閃綠岩	10.4	8.7	4.3	395.3	
22	06-13	I-1	完形	II _b	安山岩	8.0	7.8	5.6	369.4	
23	02-5	I-1	完形	II _b	泥岩	8.4	5.9	3.4	228.0	
24	X-0	I-2	完形		安山岩	18.0	11.7	5.6	1930.6	
25	ST-124	I-2	完形	Y	安山岩	15.9	9.3	5.0	1039.3	
26	05-9	I-2	完形	I	安山岩	12.6	8.4	5.5	763.9	
27	9-9	I-2	完形	II _b	安山岩	12.0	8.7	6.5	871.7	
28	04-9	I-2	完形	I	安山岩	12.5	10.7	5.9	835.5	
29	X-0	I-2	完形		安山岩	10.6	10.1	5.3	770.9	
30	ST-103	I-2	完形	F	花崗岩	13.4	5.6	4.0	428.8	
31	9-7	I-2	完形	II _b	安山岩	9.4	8.5	6.5	560.8	
32	ST-132	I-2	完形	F	安山岩	8.9	8.2	5.0	425.0	
33	ST-125	II-1	完形	F	安山岩	11.2	9.7	6.1	879.0	
34	ST-127	II-1	完形	F	凝灰岩	10.9	7.6	4.8	451.5	
35	4-5	II-1	完形	II _b	安山岩	9.4	8.1	4.8	406.3	
36	4-9	II-1	完形	II _b	凝灰岩	9.3	8.6	5.4	643.6	
37	ST-124	II-1	完形	F	安山岩	10.0	8.4	4.7	546.9	
38	03-21	II-1	完形	II _b	花崗岩	9.2	9.0	6.2	734.6	
39	01-13	II-1	完形	II _b	砂岩	10.9	8.0	5.2	556.7	
40	ST-124	II-1	完形	F	泥岩	11.5	8.0	3.8	425.5	
41	02-17	II-1	完形	II _b	花崗岩	9.7	8.0	5.3	581.0	
42	ST-112	II-1	完形	F	安山岩	9.3	8.0	4.5	420.5	
43	X-0	II-1	完形		花崗岩	9.5	7.7	5.3	484.9	
44	02-6	II-1	完形	II _b	花崗閃綠岩	9.3	7.0	4.3	377.0	
45	10-4	II-2	一部欠損	II _b	凝灰岩	10.4	8.2	3.4	309.1	
46	4-10	II-2	完形	II _b	安山岩	10.4	8.8	5.5	606.7	
47	ST-127	II-2	完形	Y	安山岩	10.2	7.7	5.2	556.8	

No	地区名	分類	遺存状態	層位	材質	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	挿図番号
48	ST-124	II-2	完形	F	安山岩	12.0	9.6	7.1	976.5	
49	ST-108	II-3	完形	F	安山岩	11.6	9.6	5.2	734.4	
50	SK-4	II-3	完形	F	安山岩	11.8	8.5	4.8	653.4	
51	X-0	III-2	完形		花崗岩	15.6	7.3	3.4	475.3	
52	02-14	III-2	完形	II _b	安山岩	13.0	10.2	5.2	847.6	
53	02-7	III-2	完形	II _b	花崗閃綠岩	12.2	9.4	5.2	709.0	
54	ST-124	IV	完形	F	安山岩	16.5	10.4	4.4	1006.3	
55	ST-125	IV	完形	F	安山岩	9.7	7.2	6.8	548.6	
56	X-0	IV	完形		花崗岩	12.6	7.6	6.0	818.1	
57	X-0	IV	完形		花崗岩	11.4	7.2	3.8	458.5	
58	ST-127	IV	完形	Y	安山岩	11.1	8.8	4.3	498.0	

(X-O:表面採集)

3 篓状石器計測一覧表

(記号 F-覆土 Y-床面)

No	地区名	分類	遺存状態	層位	材質	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	挿図番号
1	ST-123	a	完形	F	頁岩	10.3	2.8	1.3	52.0	65-1
2	ST-123	a	完形	F	チャート	8.5	2.6	1.3	34.1	65-2
3	7-8	b	完形	II _b	頁岩	7.2	2.5	1.4	28.0	65-3
4	9-7	b	完形	II _b	頁岩	5.8	2.2	1.1	15.6	65-4
5	04-11	b	完形	II _b	頁岩	8.4	2.5	1.1	14.0	65-5
6	4-6	c	完形	II _b	頁岩	7.8	2.1	1.5	30.1	65-7
7	10-5	d	完形	I	頁岩	8.6	3.1	1.5	45.5	65-9
8	8-5	d	完形	II _b	頁岩	8.0	3.4	1.5	44.0	65-10
9	ST-125	d	完形	F	頁岩	4.9	2.7	1.2	16.5	

4 石錐計測一覧表

(記号 F-覆土 Y-床面)

No	地区名	分類	遺存状態	層位	材質	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	軸口徑(cm)	挿図番号
1	7-5	a ₂	完形	II _b	頁岩	3.4	1.1	0.7	2.7	0.5×0.7	60-1
2	01-4	a ₂	完形	II _b	頁岩	4.1	1.4	0.8	3.6	0.6×0.6	60-2
3	1-8	a ₁	完形	III	頁岩	2.0	0.9	0.4	0.7	0.5×0.6	60-3
4	X-0	a ₁	完形		頁岩	2.4	1.3	0.6	2.0	0.4×0.4	60-4

No	地区名	分類	遺存状態	層位	材質	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	軸口径	採集番号
5	04-5	a ₁	完形	II _b	頁岩	2.2	1.5	0.4	1.2	0.4×0.4	60-5
6	3-8	a ₂	完形	I	頁岩	3.6	2.5	1.2	11.6	0.5×0.3	60-6
7	4-6	a ₂	完形	II _b	頁岩	3.0	3.2	0.8	6.9	0.7×0.5	60-7
8	1-6	a ₁	完形	II _b	頁岩	4.2	2.0	0.8	6.4	0.6×0.6	60-8
9	6-10	a ₁	完形	II _b	頁岩	5.1	2.0	0.7	4.0	0.6×0.5	60-9
10	X-0	a ₁	完形		頁岩	4.3	2.8	0.8	9.5	0.8×0.5	60-10
11	3-9	a ₁	完形	I	頁岩	2.6	1.9	0.8	3.4	0.8×0.6	60-11
12	8-8	a ₁	完形	II _b	頁岩	3.5	1.8	0.9	5.6	0.6×0.6	60-12
13	3-5	a ₁	完形	II _b	頁岩	3.2	1.3	0.9	3.6	0.8×0.4	60-13
14	ST-124	b ₁	完形	F	頁岩	3.0	1.1	0.4	1.2	0.4×0.3	60-15
15	ST-101	b ₁	完形	Y	頁岩	5.4	0.8	0.4	1.5	0.2×0.4	60-16
16	ST-129	b ₁	完形	F	頁岩	5.3	1.3	0.9	3.3	0.4×0.3	60-17
17	02-02	b ₁	完形	II _b	頁岩	5.5	1.6	0.5	1.9	0.4×0.4	60-18
18	4-7	b ₁	完形	II _b	頁岩	1.5	1.0	0.5	0.9	0.4×0.4	60-19
19	2-6	b ₁	完形	II _b	頁岩	1.5	1.3	0.5	3.8	0.3×0.2	60-20
20	ST-133	b ₁	完形	F	頁岩	5.4	1.6	0.8	3.9	0.6×0.4	60-22
21	6-10	b ₂	完形	II _b	頁岩	6.6	1.9	1.2	11.4	0.8×0.8	60-24
22	ST-131	b ₂	完形	F	頁岩	6.5	1.7	0.9	7.8	0.8×0.6	60-25
23	ST-101	c	完形	F	頁岩	5.0	1.0	0.5	2.7	0.5×0.6	60-27
24	2-7	c	完形	II _b	頁岩	11.6	1.9	2.0	38.1	0.6×0.7	60-29
25	ST-101	b ₁	完形	F	頁岩	5.7	1.8	0.6	3.2	0.3×0.4	
26	03-6	b ₂	完形	II _b	チャート	4.4	1.5	1.0	5.2	0.7×0.6	
27	6-9	a ₁	完形	II _b	頁岩	4.1	1.3	1.0	3.6	0.5×0.5	
28	01-5	a ₁	完形	II _b	頁岩	2.9	1.4	0.5	1.7	0.5×0.2	
29	ST-123	b ₂	完形	F	頁岩	2.0	1.2	0.4	1.4	0.5×0.2	
30	1-4	c	完形	I	頁岩	3.4	0.9	0.3	0.8	0.4×0.3	
31	7-6	a ₁	完形	II _b	頁岩	2.5	1.1	0.4	1.0	0.4×0.4	
32	8-10	a ₁	完形	II _b	頁岩	2.1	1.7	0.5	1.5	0.5×0.3	
33	ST-105	c	完形	F	頁岩	2.2	1.0	0.4	0.7	0.4×0.2	
34	2-6	b ₂	完形	II _b	頁岩	2.2	0.7	0.3	0.6	0.3×0.5	
35	4-8	a ₁	完形	II _b	頁岩	2.0	1.0	0.3	0.5	0.3×0.7	

(X-O:表面採集)

5 石匙計測一覧表

(記号 F-覆土 Y-床面)

No.	地区名	分類	遺存状態	層位	材質	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	挿図番号
1	01-10	a	完形	II _b	頁岩	8.9	2.4	0.6	17.8	61-1
2	ST-121	a	完形	F	頁岩	7.9	2.6	0.7	18.5	61-2
3	7-9	a	完形	I	頁岩	6.3	2.8	0.9	19.4	61-3
4	ST-101	a	完形	Y	頁岩	5.9	2.9	1.2	21.2	61-4
5	3-4	a	完形	II _b	頁岩	6.8	2.4	0.7	17.1	61-5
6	4-9	a	完形	II _b	頁岩	10.9	4.0	0.7	33.8	61-6
7	ST-121	a	完形	F	頁岩	7.1	1.7	0.4	5.9	61-7
8	ST-127	a	完形	F	頁岩	5.3	2.3	0.7	6.8	61-8
9	ST-106	a	完形	F	頁岩	7.1	3.7	0.7	19.7	61-9
10	5-10	a	完形	I	頁岩	7.7	2.4	0.5	12.9	61-10
11	ST-101	a	完形	F	頁岩	5.1	2.4	0.5	7.5	61-11
12	ST-121	a	完形	F	頁岩	13.1	1.4	0.9	18.9	61-12
13	4-8	b	完形	II _b	頁岩	4.3	6.0	0.5	12.5	62-13
14	ST-101	b	完形	F	頁岩	4.2	5.0	1.0	17.0	62-14
15	6-10	b	完形	II _b	頁岩	3.0	2.7	0.6	4.7	62-15
16	1-7	a	完形	II _b	頁岩	7.6	1.9	0.9	18.7	62-16
17	ST-125	a	完形	F	頁岩	7.6	2.7	0.7	15.3	62-17
18	ST-129	a	完形	F	頁岩	6.4	2.6	0.9	17.5	62-18
19	ST-121	a	完形	F	頁岩	9.3	2.3	1.1	25.8	62-19
20	ST-125	a	完形	EL11	頁岩	9.0	2.0	0.7	18.4	62-20
21	9-10	a	完形	II _b	頁岩	6.7	1.6	0.8	11.8	62-21
22	ST-121	b	完形	F	頁岩	3.7	3.1	1.2	12.0	62-22
23	ST-127	c	完形	F	頁岩	3.7	1.5	1.1	6.3	62-23
24	ST-128	c	完形	Y	頁岩	7.2	2.2	1.0	18.3	62-24
25	3-5	a	完形	II _b	頁岩	6.7	4.5	1.3	18.7	
26	3-8	a	完形	I	頁岩	6.3	4.5	1.2	33.2	
27	4-10	a	完形	I	頁岩	8.7	3.4	1.2	33.0	
28	ST-123	a	完形	F	頁岩	7.2	2.8	0.8	16.3	
29	ST-129	a	完形	F	頁岩	7.9	2.3	0.9	13.0	

No	地区名	分類	遺存状態	層位	材質	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	挿図番号
30	01-5	a	完形	II _b	頁岩	6.7	2.8	0.7	11.6	
31	06-6	a	完形	F	頁岩	6.2	2.2	0.8	10.5	
32	4-9	a	完形	II _b	頁岩	6.2	3.3	1.2	23.4	
33	10-8	b	完形	II _b	頁岩	5.2	3.8	0.9	14.0	
34	06-6	a	完形	II _b	頁岩	4.9	2.5	0.8	7.9	
35	6-10	b	完形	II _b	頁岩	3.6	3.2	0.9	9.0	
36	03-6	b	完形	II _b	頁岩	5.1	3.5	0.5	7.3	
37	ST-111	b	完形	F	玉髓	4.0	3.5	0.9	8.0	
38	ST-121	a	完形	F	頁岩	4.7	1.0	0.4	2.3	

6 振器計測一覧表

(記号 F-覆土 Y-床面)

No	地区名	分類	遺存状態	層位	材質	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	挿図番号
1	ST-125	a	完形	F	頁岩	3.1	2.0	0.6	2.9	64-1
2	2-5	a	完形	II _b	頁岩	3.0	2.7	0.7	4.8	64-2
3	X-0	a	完形		頁岩	2.8	2.4	0.4	3.2	64-3
4	8-7	b	完形	II _b	頁岩	4.1	3.2	1.0	12.4	64-4
5	5-10	b	完形	I	頁岩	6.0	2.4	1.0	13.4	64-5
6	7-10	b	完形	II _b	頁岩	5.4	2.6	1.1	16.0	64-6
7	2-8	b	完形	II _b	頁岩	5.0	2.3	0.9	10.1	64-7
8	ST-124	c	完形	F	頁岩	4.7	3.0	0.8	13.0	64-8
9	05-6	c	完形	I	頁岩	9.8	1.9	1.1	24.0	64-9
10	3-6	c	完形	I	頁岩	8.0	1.8	1.0	14.5	64-10
11	ST-125	c	完形	F	頁岩	9.5	3.3	0.9	25.2	64-11
12	ST-121	b	完形	F	頁岩	7.0	2.6	0.9	18.5	64-12
13	01-5	b	完形	II _b	頁岩	6.2	2.6	0.9	14.3	64-13
14	1-7	b	完形	II _b	頁岩	6.4	2.4	0.8	10.1	64-14
15	3-7	c	完形	II _b	頁岩	9.4	3.1	1.4	35.6	64-15
16	ST-127	c	完形	F	頁岩	8.9	3.5	0.7	25.7	64-16
17	5-7	c	完形	II _b	頁岩	8.7	4.6	1.1	60.0	64-17

(X-O:表面採集)

7 削器計測一覧表

(記号 F-覆土 Y-床面)

No	地区名	分類	遺存状態	層位	材質	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	採図番号
1	ST102	a	完形	F	頁岩	3.7	2.3	0.6	5.8	63-1
2	ST102	a	完形	F	頁岩	4.5	3.0	0.9	14.4	63-2
3	3-7	a	完形	II _b	頁岩	4.7	1.9	0.7	4.8	63-3
4	2-5	a	完形	II _b	頁岩	4.3	2.0	0.8	7.8	63-4
5	ST-101	a	完形	F	頁岩	6.2	1.0	0.6	7.6	63-5
6	ST-101	a	完形	F	頁岩	3.8	2.9	0.5	6.0	63-6
7	2-10	a	完形	II _b	頁岩	4.0	2.3	0.9	8.1	63-7
8	04-9	a	完形	II _b	頁岩	4.8	3.5	0.8	14.2	63-8
9	1-2	b	完形	II _b	頁岩	6.0	5.7	1.2	35.5	63-9
10	ST-121	b	完形	F	頁岩	6.1	4.5	1.0	28.0	63-10
11	X-0	b	完形		頁岩	7.3	4.3	1.1	33.0	63-11
12	ST-101	b	完形	F	頁岩	7.2	3.6	0.8	20.5	63-12
13	4-10	b	完形	I	頁岩	7.9	3.5	1.3	28.1	63-13
14	ST-110	b	完形	F	頁岩	7.8	2.9	0.9	16.7	63-14
15	ST-122	b	完形	F	頁岩	10.3	3.9	1.7	70.0	63-15
16	ST-123	b	完形	F	頁岩	7.7	4.5	1.7	61.0	63-16
17	6-5	b	完形	II _b	頁岩	7.2	4.4	1.1	38.6	63-17

(X-O:表面探集)

V 総括

1 遺跡について

今回調査を実施した区域は、約 40,000 m²あると推定される遺跡全体の一部で、調査対象面積は 600 m²である。第Ⅰ次～第Ⅳ次調査までの実施総面積をあわせると、約 2,300 m²になる。全体的にみると 19 分の 1 程度を調査したにすぎない。

熊ノ前遺跡から発見された遺物や竪穴住居跡・土壙等の遺構は、縄文中期大木 8 式期・9 式期・10 式期の 3 期にわたる物で、そのうちの大部分が大木 9 式期にあたるものと考えられる。したがって今回の調査によって発見された遺構と、これまでの数次に亘る調査によって発見された遺構等から、おおよその集落跡の姿がかなり明確になったものと言える。

周辺部の地形環境からみると熊ノ前遺跡は、背後に山嶺を控えた一部分が舌状にやや張り出した微高地上に立地している。住居は主に微高地平坦部の周縁部に営なまれ、それと近接して土壙群（土壙墓）がみられる。住居跡群は著しい重複関係が認められるため、時期において同時存在した集落のあり方とみる事はできない。

集落構成・家屋個数や配置の状態・また別に遺物の廃棄の場や、いわゆる広場等の関係については明確にする事ができなかった。

熊ノ前遺跡については、今回の調査等によって分った主な事柄や課題について簡単にまとめるところとなる。

1 熊ノ前遺跡は馬見ヶ崎川によって形成された扇状地の扇頂部に位置し、その中の微高地上に立地している。海拔にして 230 m～280 m の等高線上に遺跡がのっている。

2 今回調査を実施した区は遺跡全体の西端部にあたり、ほぼ同時期の遺跡の発掘類例や、遺物の散布状況から考えあわせると、微高地の縁辺部を中心とした環状の集落を形成していたと推測され、一時期に 5～10 軒を一つの単位とし、集落が連絡として営まれていたと思われる。

3 第Ⅰ次調査から第Ⅳ次調査は工事等にかかる限定された地区を調査したのみで、集落の構成・住居跡域群・土壙群・中央広場・土器・石器等の製作所などが不明確であり、重要な検討課題である。

2 遺構各説

(1) 住居跡

今回の調査で検出された住居跡は47軒で、調査区の北側および中央部付近が空間地帯になっている他は、いずれも重複し連続している状態であり、推定しうるならば調査区外の西側で分布がある程度みられると考えられ、第III次調査(山形市教育委員会編・昭和53年)の結果からみると、集落跡の構成がほぼ東側・南東側かけて広がると推定される。

a 住居跡群の分布 (第5図)

住居跡群の構成は、包含層(第II b層)から出土している土器群の分布状況・型式分類を考え合せると第I期から第IV期にかけて住居跡が構築され、住居跡群が構成されている。

第I期 (縄文時代中期大木8式期を主体とする住居跡群)

この時期は土器の分布状況が、西側から東南側にかけて帶状に広範囲にわたり、住居跡群もそれにつれ、西側・中央部に偏在するが、広範囲な地域に住居跡を構成している。住居跡内の遺物投棄現象が顕著に認められる。

第II期 (縄文時代中期大木8~9式期・9式期)

8~9式期では、この期の住居跡と土器出土分布状況が一致し、9式期の土器が129号住居跡の覆土土層からも多く出土している。9式期の土器は1・2-10グリッド周辺に限定され集中してみられ、住居跡群や土壤群が北側に偏在し、第I期と比較すると減少する傾向がみられる。

第III期 (縄文時代中期大木9~10式期にかけての住居跡群)

住居跡群は、中央部北側に最も多く集中し偏在し、南側でもみられる。土器の分布状況は大きく2ブロックに分けられ、住居跡の構成と一致し、これら住居跡群の覆土上層からも多く出土している。

第IV期 (縄文時代中期大木10式期を主体とする住居跡群)

住居跡群は、中央部北側に炉跡群も含めて1ブロックがみられ、さらに南側に1ブロックが構成され2ブロックに分けられる。土器の分布状況は住居跡群と一致する2ブロックと、調査区の北西側に2つの小ブロックがみられ、南東側にも1ブロックがありこれらは住居群の構成と一致していない。これら住居跡群からの土器出土状況は、覆土層および床面からは少なく、第I期でみられる遺物の投棄現象はまったく認められない。

このように遺物とくに土器の分布状況と住居跡群の相関関係は、住居跡群と土器の分布が一致している点と、一致しない部分があり、また住居跡群とかけ離れた地点にその分布がみられる三点があり、集落内での空間的な領域“場”という問題が提示され、特に第IV期

において顕著にみられ、北西側の2ブロックにこの期の石器が多いことは留意され、おそらく、特定の“場”における遺物投棄現象もしくは石器の工房跡とも考えられる。

b 住居跡群の構成と配置について

構成・配置は、第Ⅰ期においては調査区全体にみられるが、型式の新古を考慮するなら、大木8古式は北西側一帯にみられ、8新式は中央部から東側に多く分布し、住居跡群は北西側から東側にかけ移行していくと考えられる。第Ⅱ期になると中央部に偏在し大きな推移がみられず、一定の間隔をおいて住居跡が存在し、明確な集落形態を示していない。第Ⅲ期は中央部に3ブロックの形態がみられ、集約された地区に半円形状をなすように集落構成がみられる。第Ⅳ期は第Ⅲ期にみられる構成よりブロック間がさらに広りをもち集落の構成単位が大きく推移している。各期の住居跡についての微視的な推移については、今後の課題としておきたい。

c 住居跡の構造について

第Ⅰ期は、平面形は円形ないし不整円形を呈し、主柱穴が炉跡周辺部に位置し壁に沿って支柱穴が位置され、112号住居跡で顕著にみられ支柱穴が北側に3本と南側に3本づつ対になっている。第Ⅱ期の8式期から9式期に移行する時期は、129号住居跡にみられるようにならぬ形態・構造が類似し、規模が縮少し径3.70mになり少なくなつておらず、住居跡内の炉跡の占る割合が多くなってくる。9式期は不整円形または不整隅丸方形を呈すると考えられ121号住居跡では主柱穴が6本で住居跡の中心部より壁際近くになり、複式炉の先端部(E L 08)を中心に半弧を描く状態になり、この時期に複式炉がみられることから住居跡内における炉の占める面積比が大きくなる。第Ⅲ期では、103号住居跡が顕著にみられ、隅丸方形を呈し径4mを計り、複式炉の占る面積の割合が9式期に比べさらに大きくなり、主柱穴が4本みられ複式炉の埋設土器部を中心にして置くように主柱穴をほぼ1.5~2mの等距離を置いて配置している。第Ⅳ期は住居跡の平面形が隅丸方形を呈していると考えられるが、125号住居跡の場合は不整隅丸方形を呈している。125号住居跡は径4.67mで、主柱穴の位置は121号住居跡と同様な配列がみられるが、さらに主柱穴の囲い壁寄りに明確に支柱穴の位置が壁柱穴の位置と分けられ、位置しており、複式炉(E L 11)の占る面積の比率は第Ⅲ期に比べると減少する傾向にある。

このように住居跡の構造は、平面形態が円形から隅丸方形へと変遷し、同様に構造上も変化し、複式炉の出現により構造的に第Ⅰ期・第Ⅱ期(8~9式期)に比べると大きく相異がみられ、複式炉の出現は構造上・平面形態に影響を与えたと考えられる。

(2) 炉 跡

今回の調査において検出された炉跡は30基で、第I期に伴う炉はE L 06・09・10でいずれも石囲炉であり、第II期（大木8～9式期）では複式炉の粗形に近い石囲炉であり、9式期から10式期にかけては複式炉になっている。また炉跡E L 29・30は石囲炉であるが127・130号住居跡の覆土中で検出され、第II期において住居跡の埋没過程での窪地を利用して、屋外炉として使用したものである。今回は複式炉の検出例が多いため、これらを中心に概括して述べることにする。

複式炉について

構築方法は、①外形の掘り方を掘る②土器を埋設し③燃焼部底面の配列を行ない上部へ積上げる④埋設土器部の礫の配列を行う順序で基本的な構築法がとられ、E L 03・11・12・13などは最も良い例とし上げられ、E L 02の場合は③から④へ行く過程で燃焼部底面を構築すると同時に埋設土器部を含めて内側から外側へ外周するように配列している。他方住居跡の拡張補替・重複などの関係から、二次使用さらに再使用といった事例により、構築法も変化しており、E L 14・17・24などがみられ、また以前の住居跡を壊して新たに住居跡が造られる場合は、E L 11・13のようにE L 12・14の礫を再使用している。

形状的な変遷は、第II期の129号住居跡に伴うE L 15は構築方法が複式炉の場合と類似しており、推らく複式炉の粗形と考えられ、大木9式期においては121号住居跡E L 08がみられた全体的に大形の礫を使用し、埋設土器部と燃焼部の機能的分化がみられず、不定形になっている。第IV期9～10式期では形状が定形化され、長軸方向に対しU字形になる炉はE L 03で、E L 11・12・13は埋設土器部が“コ”字状に燃焼部から前庭部にかけてU字状になりこれこれは一層定形化され、複式炉の隆生期と考えられる。第IV期大木10式期の好資料はみれないが、E L 24になると長軸方向に対し前庭部の幅が狭くなるようである。

住居跡と複式炉の関連は、住居跡が円形から隅丸方形に変化する段階と密接に相関し合い、複式炉の構造的な変化はみられないにしても、住居跡の面積に対し複式炉が占める割合は、第II期9式期と第III期において大きく、第IV期で少なくなる。このことは住居跡の構築法と関連性があるとみられる。

このように複式炉の変化の過程は住居跡の形態的変遷と有機的な結合と密接に関連をもち変遷していくと推察できる。

(3) 土 壤・配石遺構

a 土 壤

土壤の分布状態は、調査区の中央部から北側にかけ遍在している。1・2号土壤は平面

形態はいずれも橢円形を呈し、時期は第Ⅰ期の所産であり性格は不明である。

甕棺墓について

3号土壙から14号土壙内で発見され逆位の状態になる埋設土器である。従来、中期から後期にかけて甕棺を伴う遺構は多数確認されているが、人骨が遺存していた事例は調査されたものが少ない。良好な資料として青森県天狗岱遺跡(坂詰秀一・銅鐸14号・昭和44年)千葉県寒風遺跡(桜井清彦他・考古学雑誌54-2・昭和43年)・埼玉県坂東山遺跡(谷井彰他・埼玉県教育委員会編・昭和48年)などの遺跡が知られている。いずれも成人骨埋葬棺や小児骨埋葬棺とみている。本遺跡の土壙群は第Ⅱ期に相当し、土器の状態からみても2形態に分けられる。3・5・16・14号土壙では、埋設土器の器高は43~53cm計り、特に14号土壙埋設土器は67cmを計る大形の深鉢形土器であり、人骨が検出されていないがおそらく成人骨埋葬甕棺と推定される。他方11~13号土壙出土の埋設土器は口縁部・胴部の一部分を使用し、さらに部分的に打ち壊されているのが特徴であり、おそらく成人骨ないし小児骨のある部分だけを埋葬したものと考えられる。

b 配石遺構

平面形が不整の小判形を示し、ほぼ全周するように偏平な自然礫を使用している。時期は第Ⅰ期大木8式期の所産である。配石遺構は中期後葉からもみられ、山形県の小林遺跡(山形県教育委員会編・昭和51年)では焼土などが確認され呪術的な遺構として考えられている。本遺跡の場合は中央部に小礫でもって仕切りがあり特徴的になっており、おそらく小林遺跡でみられるような粗形と考えられ、今後の類例を持って課題としたい。

3 遺物各説

(1) 繩文式土器

本遺跡から出土した土器は、縄文時代中期大木8式・9式・10式がみられその大半が大8式に属するものが多く、大木9式・10式と順次減少する傾向がみられ、住居跡出土器は大木8式に比定されたものに多く認められ、大木9式・10式の住居跡では少なくなっている。今回の調査で明らかにされたことは、第Ⅱ期の大木8式から大木9式に移行する段階での完形土器が得られたことは大きな成果といえる。

渦巻文様帯から磨消縄文への推移 (第55図)

渦巻文様は、第Ⅰ群土器・第Ⅱ群a類・第Ⅲ群a1・2類の主体的文様構成の基調であり、第Ⅰ群土器では渦巻文の描出された技法は、a1類・a2類とは同一型式とみられ、粘土紐の貼付で調整がなく単に押圧し施し、a2類では粘土紐の間を調整しており、口唇

部や脣部において両者が共存している。渦巻文の主たる構成は口縁部であり、装飾的な変化があり立体的なものから平面的な推移がみられ、時にはS状文などがみられる。脣部文様は(第53図)でみられるように、真下される粘土紐帶に2ないし3単位に区画帯がみられ渦巻文の変化が複雑に施されている。

第II群a類・第III群a1類の段階は、口縁部文様帶に第IIIa1類の貼付した粘土紐を沈線で丁寧に調整し上面を研磨する隆起線が施され、渦巻文様は突起状に4単位みられ、渦巻文から派生する隆起線はS字状に描出されている。脣部文様帶との区別が顕著となり2~3条の沈線で区画されたり、無文帶をもつものなどみられ、第II群a類の沈線で渦巻文などが連結され曲線的に横走している。この段階で頬部にくびれのあるキャリバー形がよく供出している。

第III群a2類(第53図3・4)では、第III群a1類でみられる隆起線で施される渦巻文様帶および派生するS字状が、立体的な手法で(4)の波状する口縁部の口唇下に施されさらに懸垂文として真下に垂り、3区画帶に分けられ、同様に口唇部からS字文様が描出されている。(3)は2本の隆起線による懸垂文が2つの区画帶があり、S字文様がU字状に変化し同時に渦巻文が逆に口唇部へ上がるような傾向がある。(3・4)いずれも文様帶が脣上半部の最大径の部分に施されている。このように第III群a1類でみられる渦巻文様が横走してみられ、本類の段階で口縁部に渦巻文様がみられS字文様とともに縦走するのが特徴で、第III群a1類の残存形態とみられる。

第II群b1類(第53図1・2)の段階では、(2)が(第53図3・4)でみられた渦巻A区画、B区画の2単位区画の中に横走するS字文様帶に集約され、渦巻文が退化しC字状や梢円文となっている。第II群a1類でみられたU字状文は分離され、個別な文様として梢円文に変化し、A、B区画の境で曲線的に突出している。(1)はさらにS字文様が切り離され、大きく描出する渦巻となり、渦巻から派生しているものが梢円文を描き出し、脣下半部から上方するU字文と結びつきを示し、渦巻文を区画している。第II群b1類にみられる沈線で区画し梢円文様を主体とする粗形が(1)でみとめられる。本類はいずれも磨消繩文系を基張とするグループである。

このように渦巻文様帶から磨消し繩文への推移は、粘土紐を貼付し押圧し→調整が施され→沈線で粘土紐の両縁調整し→上面を研磨し→立体的な隆起線を全面研磨・調整→磨消繩文へと推移し、これと期を同じくし口縁部文様帶の渦巻文様・S字文様が、繩文時代中期大木8b式から大木9a式の過渡期に脣部文様帶へ移行し、磨消繩文が主体とする時期に梢円文様が特徴的にみられ、梢円文が渦巻文などと融合・離反のくり返し、C字・S字文などが描出され、充填繩文の手法がみられてくる。

分類した土器の時期

第I群土器 粘土紐の貼付を主体とするグループである。

a 1・a 2類 これらは粘土紐を貼付け、単に押圧するものと調整しているものがあり、口縁部文様帯と胴部文様帯が明確に分離されておらず、口縁部から胴部にかけて文様がみられ、(第45図-08~012・第46図-013・014)などが含まれており、大木8・9式に比定されている。

b類 粘土紐が貼付され、沈線で両縁を施している。大木8 b式に比定され、(第45図-01~04)などと共に伴する土器である。

第II群土器 沈線文を施すグループである。

a類 ヘラ状工具の先端が鋭利なもの使用し、渦巻文様を描き胴部文様帯によくみられる。(第45図05・第46図016)などが含まれ、大木8 b式に比定される。

b 1類 やや太めの沈線を施し、胴下半部まで文様が施され、横円文様を主体として描き出されている。(第48図023・第49図024・026)などが含まれ、大木9 b式に比定される。いわゆる磨消繩文の手法がみられるグループである。

b 2類 器形の最大径が胴下半部にみられ、この付近に文様帯と繩文帯が分離され、沈線で区画されているものがある。C字状・S字状が横走・斜走したりしている。充填繩文の手法がみられるグループで大木9 b式に比定される。(第49図025・第50図028~032・第51図037・第52図8などが含まれる。(図版3・5)は粗製土器である。

第III群土器 隆起線・隆蒂文を施している。

a 1類 貼付したものを丁寧に沈線で調整し、上面を研磨している。大木8 b式に比定される。

a 2類 隆起帶全面を研磨し断面が三角形状になる。(第47図017~020・第48図021・022)などが含まれ、大木8式から9式にかけa時期と考えられる。

b 1類 隆蒂文で両縁が隆起しないもので、縦位にC字・S字・渦巻が重複してみられ隆蒂の幅がややせまい。若干充填繩文がみられる。大木9 b式に比定される。

b 2類 隆蒂の両縁端が隆起し微隆起状になり、文様帯が胴上半部のみにみられ、胴下半部は繩文帯となり、いわゆるC字状文が横走し曲線的に施され、充填繩文の一群である。

(第51図033~036・第52図039・040)などが含まれ、これらの粗製土器(第41図041~043・図版46-2・4・8)なども含まれている。

なお第IV群土器については、土器片分類の項目にて詳細述しており、口縁部の分類・底辺部類なども、その項目にて説明を加えた。

(2) 石 器

第Ⅰ次～第Ⅳ次の発掘調査において、石器・石片・碎片を含めて約5000点出土している。その内、第Ⅱ次・第Ⅳ次調査では、約3000点を数える。

この数量は、縄文時代中期の集落跡にあっては、多い方であり、完形は約350点と極めて多い。中でも熊ノ前遺跡出土石器に関する特徴は、石鎌・削器・凹石が多く、次いで石匙・石錐・搔器の順である。

その反面、明確な打製石斧は、皆無に等しく磨製石斧は19点と決して多い方ではない。以下、特徴ある石器群について述べ、まとめとしたい。

1 石器の分布は、挿図70に示した如く、特定区に密集している。調査区の面積は1000m² (II次400m²・IV次600m²) で約3m² (約1坪) に1点の割合で出土したことになる。

特に調査区中央部より、北・東側は、重複する住居跡群の地域であり、遺跡全体からみて最も中心的な位置と考えられる。

石鎌は、遺跡全体に分布し、石錐・石匙・凹石は主に住居跡群の存する地区に密集して出土している。

2 熊ノ前遺跡の時期は、出土土器、遺構などから、縄文時代中期、大木8式期～大木10式期に相当する。

石器自体、それぞれの明確な時期別分類は困難であるが、本遺跡出土の石鎌の内、明らかに大木9式～10式期に伴う型の石鎌が把握できた。

石錐の分類で記述したb群の仲間の内b3類に属するものである。

3 凹石は、99点出土・内完形は82点である。凹みの数により、4群8類に分類した。大きさ並びに形態のバラツキはそうないが、凹みの数、凹みの形状については、明らかに相違がある。

このことは、直接機能に関するものであり、丸く逆円錐状の凹みは、磨痕のあとが見られ、刻み状の凹みが連続する凹石は、打欠き痕が残る。すなわち、それぞれ違った用途をもつものであろう。他遺跡に比して、完形品の多いことが特徴である。

4 石皿の破片が多いことは、自然破損というより、むしろ複式炉の石組に一個体分の接合する石皿片利用の事実から、自然破損と考えるより、意識的に打割ったと考えられる。

5 125号住居跡内から、2点の完形品が床面より、自然石と共にセットとして出土した。側にピットがあることから、当然立っていたことが推考される。

熊ノ前遺跡は、縄文時代中期の集落跡として、実に質的に整った石器群の様相を示している。又、石器の素材は頁岩が大半であり、他に花崗岩、安山岩を多く用いている。素材の産地が近くにあるゆえんであろう。

図 版



遺跡全景（第IV次調査時）



遺跡近景（第IV次調査時）

図版 2



遺跡近景（第Ⅱ次調査）



発掘区全景（第Ⅱ次調査）



発掘風景（第IV次調査住居跡検出作業）



発掘風景（第I次調査 106号住居跡）

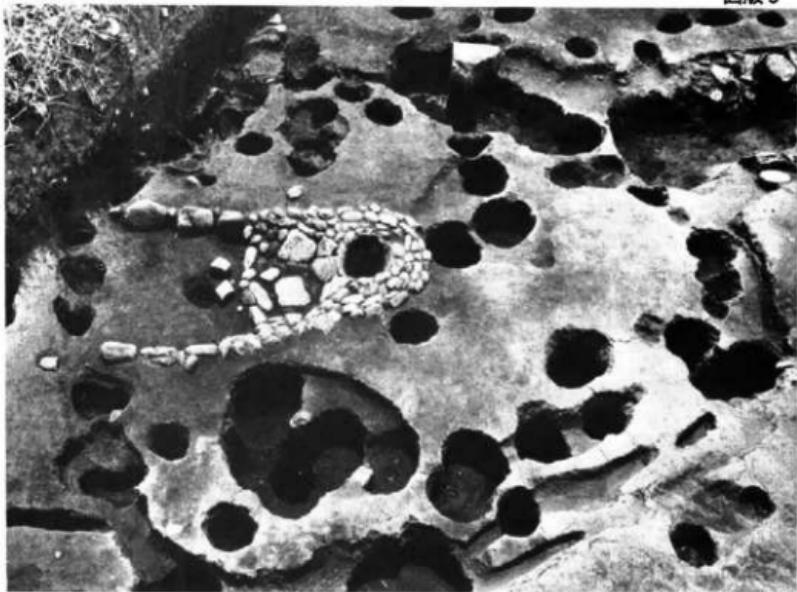
図版 4



発掘区全景（第IV次調査・南側より撮影）



発掘区全景（第II次調査・北側より撮影）



103 号住居跡全景



E L 02 近景

図版 6



103・120号住居跡全景



E.L. 07 近接



106号住居跡近接



E L 03 近接

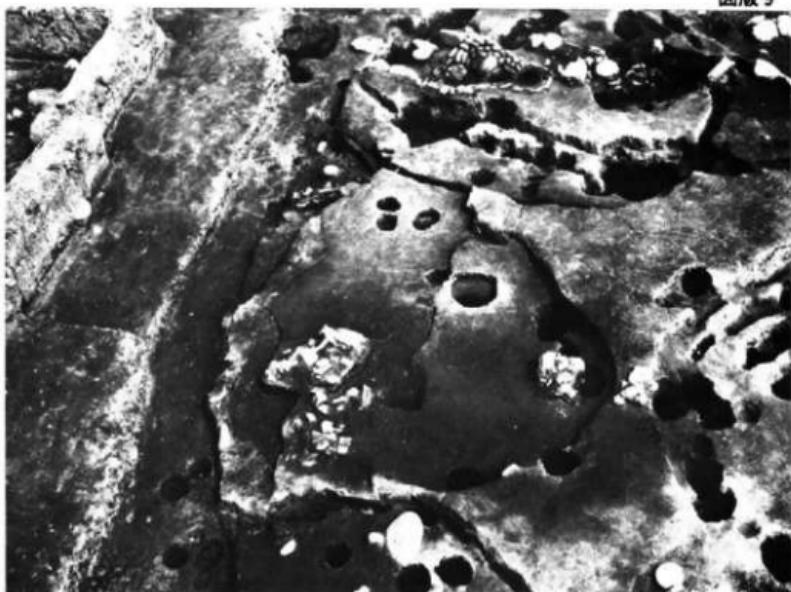
図版 8



E L 03 近景



106号住居跡・2号土坑全景



108 号住居跡全景



108 号住居跡近景

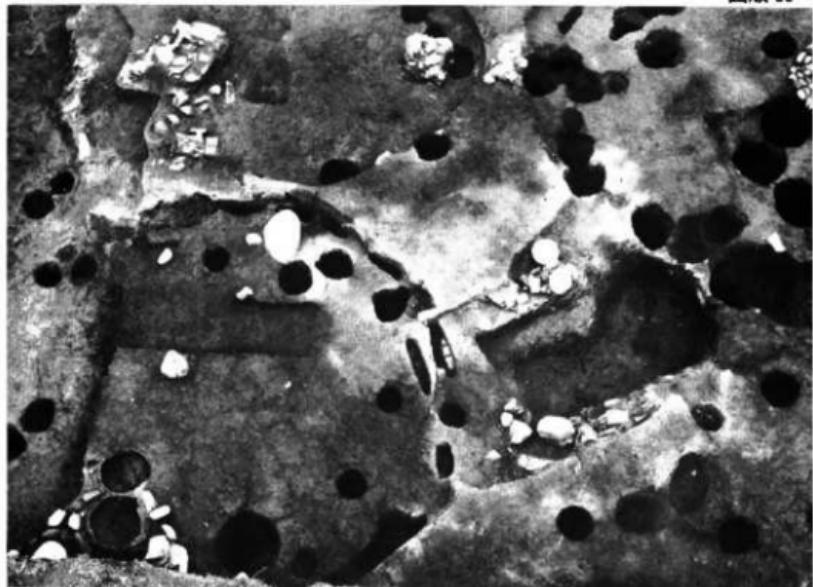


109・111号住居跡全景



E.L. 05 近接

図版 11



109号住居跡・1号土壤全景



112号住居全景



121・122号住居跡・14号土坑全景



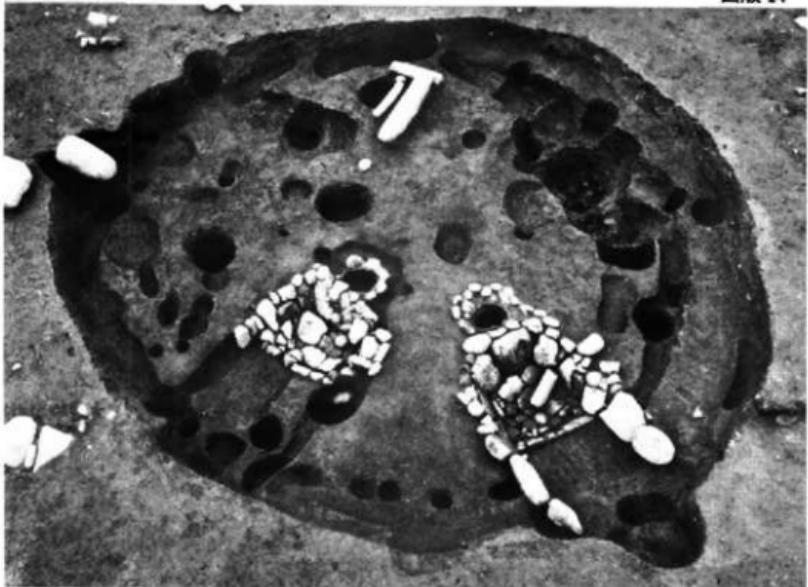
E L 08 近接



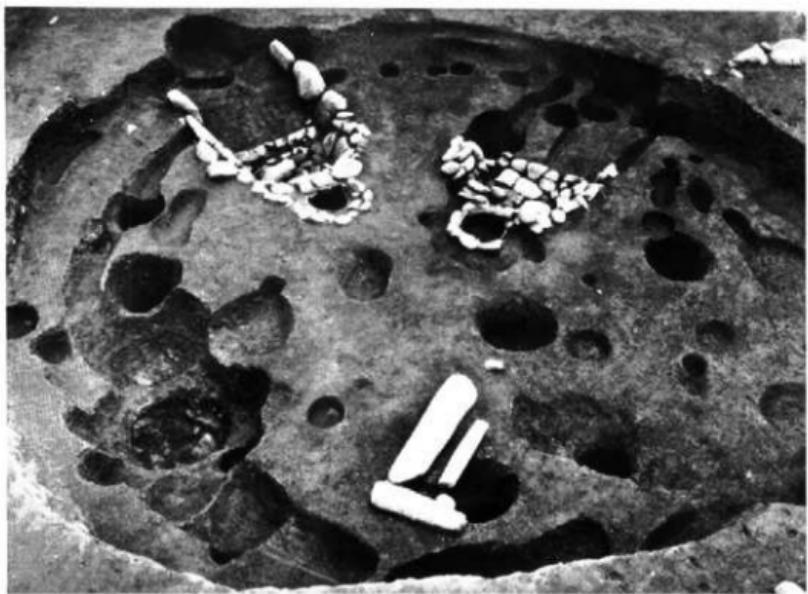
123・124号住居跡全景



E L 09・10近景



125・126号住跡全景



125・126号住跡近接

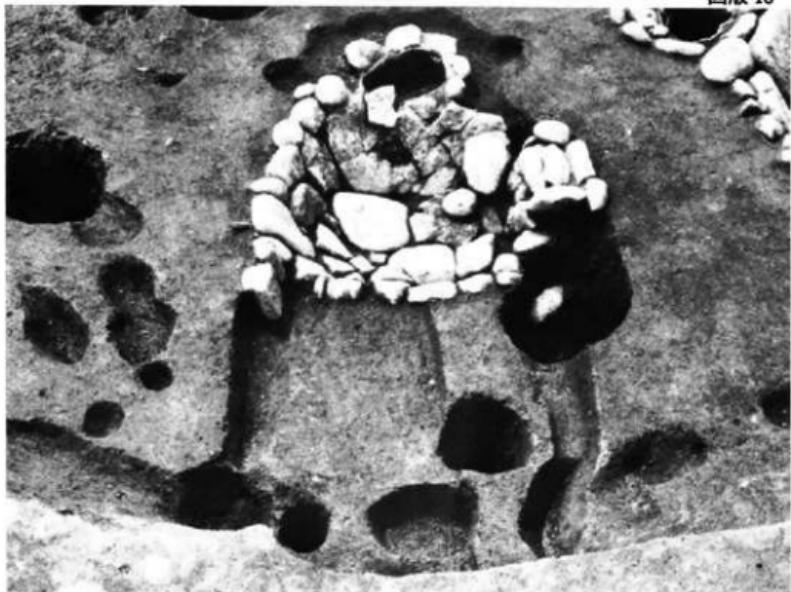


E L 11 近接



E L 11 石器出土状態

圖版 16



E L 12 近接



E L 12 墓腔土器



125・126号住居跡土層セクション



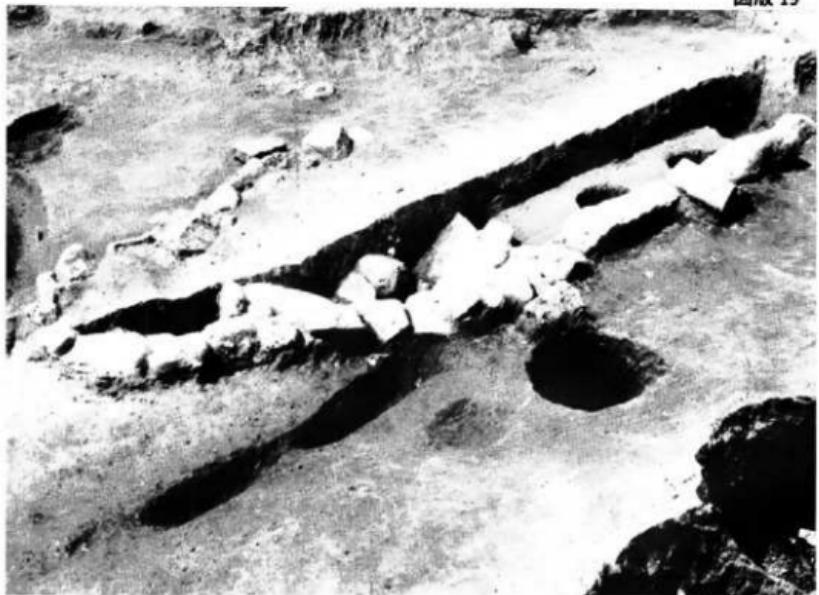
同上 立石・石棒・磨石出土状態



127·128号住居跡全景



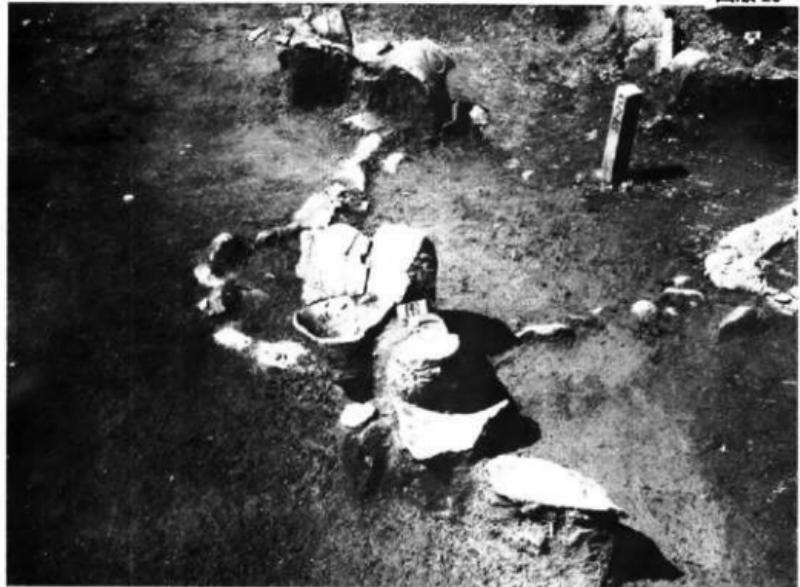
E.L. 13近接



E L 13 土層セクション



E L 13 塔殿土器



127号住居跡土器出土状態



E L 14 近接



EL 14 土層セクション



EL 14 烧設土器



129号住居跡全景



E L 15 近接



E L 15 検出状況



135・136 号住居跡全景



E L 17・19 全景



E L 27 近接



E L 26 近接



E L 20・21・24 全景

図版 26



E L 24・28 近接



E L 22・23 近接



E L 29 近接



E L 30 近接



3～12号土壤全景



3～10号土壤近様



要棺出土狀態 (SK 3・5~9)



要棺出土狀態 (SK 3・5・6)



11号土塘近接



12号土塘近接



13号土壤近接



14号土壤 (麦桔出土状态)

図版 32



配石造橋全景



配石造橋近接



住居跡出土土器 (1)



住居跡出土土器 (2)



住居跡出土土器（3）



住居跡出土土器（4）



住居跡出土土器（5）



住居跡出土土器（6）

図版 36



住居跡出土土器（7）



住居跡出土土器（8）



住居跡出土土器 (9)



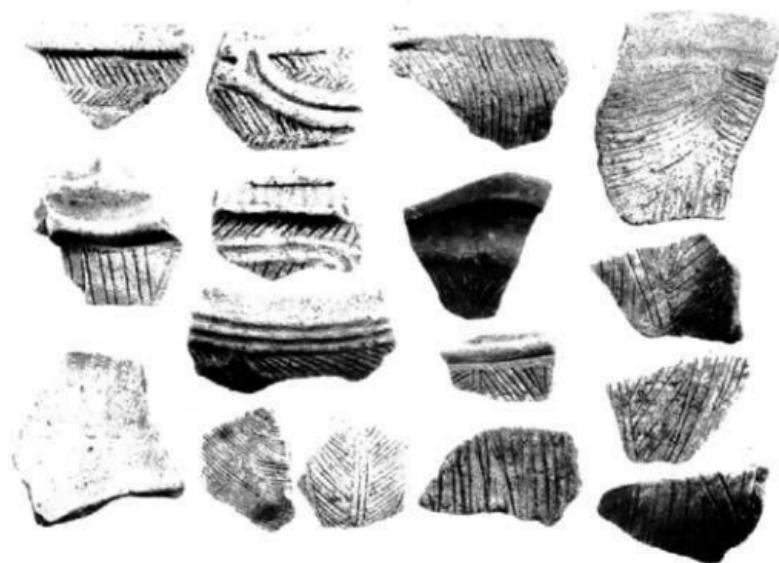
住居跡出土土器 (10)



住居跡出土土器 (11)



住居跡出土土器 (12)



住居跡出土土器 (13)



包含層出土土器



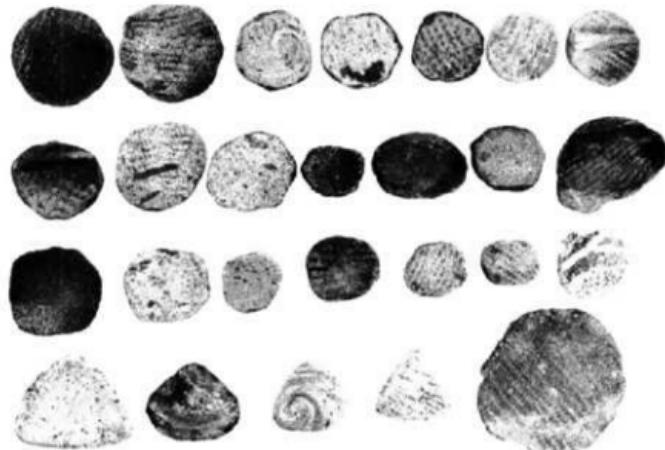
包含層出土底邊部



包含層出土底邊部



土 偶



円盤状土製品



完形土器（1）



完形土器（2）



完形土器（3）



完形土器（4）





石 鏽



石 鑿



石 钺 (表)



石 钺 (底)



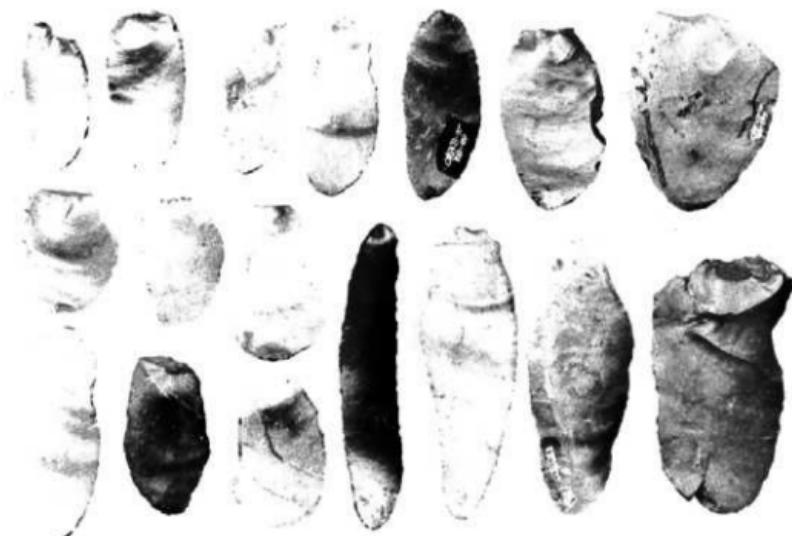
用 器 (表)



用 器 (裏)



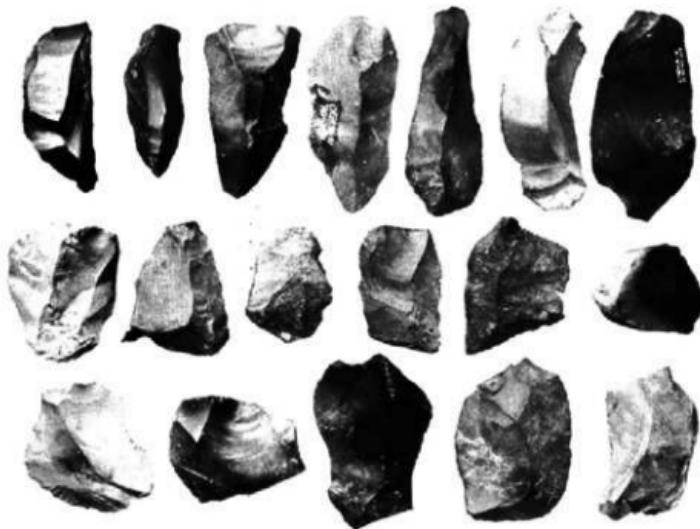
猿 器 (表)



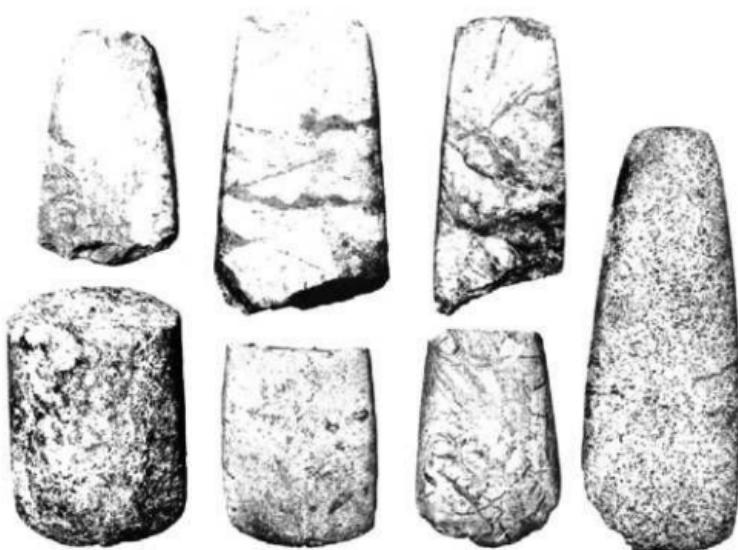
猿 器 (裏)



範状石器



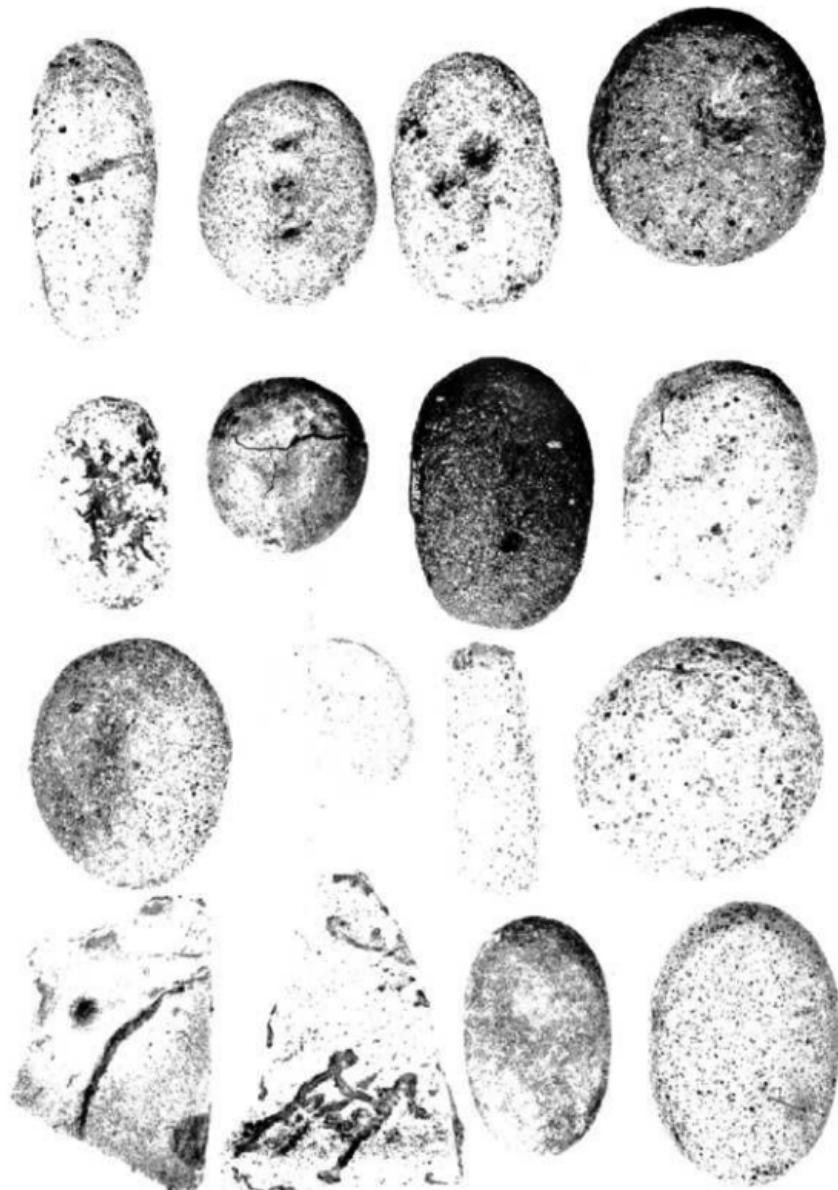
使用痕のある剥片



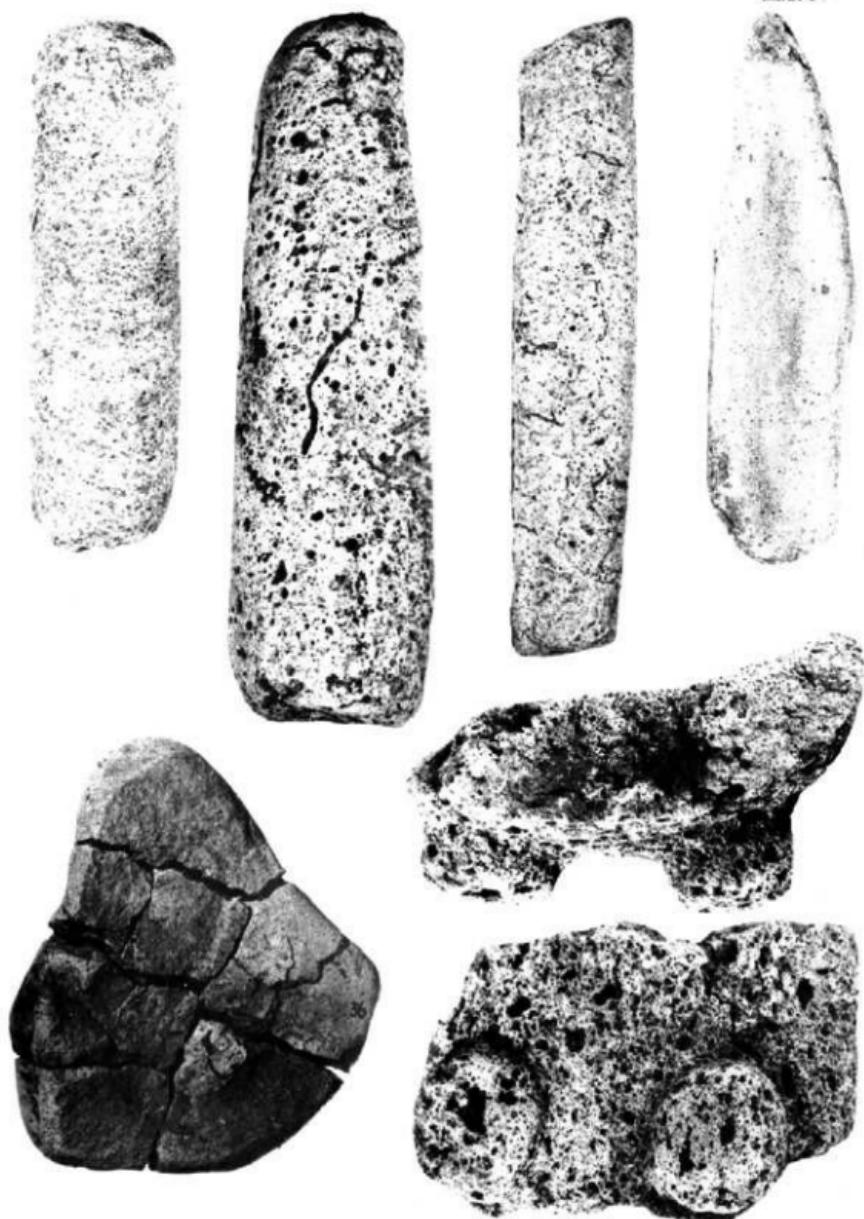
磨製石斧



小型磨製石斧・縫刻器・砾石・その他



四石・磨石・石皿



石棒・砾石・石皿

山形県埋蔵文化財調査報告書第16集

くま の ベ
熊ノ前遺跡

発掘調査報告書

昭和54年3月28日 印刷

昭和54年3月31日 発行

発行 山形県教育委員会
印刷 株式会社大風印刷
山形市あこや町1-4-3 TEL31-5575#0
